箱庭の異過者

wing

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
箱庭の異過者

【Ｎコード】
Ｎ８６８３Ｒ

【作者名】
ｗｉｎｇ

【あらすじ】
俺は誰よりも異常で
俺は誰よりも過負荷だった。

異常と過負荷を二つとも持っている榛原翼斗（はいばらよくと）が箱庭学園で色々奮闘するお話。

プロローグ

突然、そう突然だ。黒服の男たちが現れて俺をどこかへ連れ去ろうとする。

「・・・・・・・くそ！や、やめろ！離せよ！！！！！」

俺は捕まってたまるかと必死にもがく。

（なんで俺たちがこんな目に会わなきゃいけねぇんだ！！！！俺には・・・・・まだ・・・・・やることが！！！！）

「離せっていってんだろ！！！！大体なんだよお前！！！！誰だよ！！！！！何しに来たんだ！！！！」

「・・・・・・・おい。おとなしくしろ。榛原翼斗（はいばらよくと）」

「や、やめてよ・・・・・・翼斗君に触らないでよ！！！！」

男の行動をとめるため、近くにいた少女が服を掴む。

「どけ！！」

（やばい・・・・・・・『あいつ』に怪我はさせられねぇ！）

「俺は大丈夫だ！！大丈夫だから・・・・・・こっちくんな！！！！」

俺は黒袋にいれられた。

「必ず戻ってくるから・・・・・・待っててくれ！！」

その言葉を最後に、俺は黒袋をしめられ、意識を失った。

（まってろよ・・・・必ずまた会いに行くからな・・・・・）

設定

榛原翼斗（はいばらよくと）

服装・特徴

銀髪

身長１７５ｃｍ　体重７０ｋｇ

いつも胸元を露出している

負けず嫌い。大雑把。

異常（アブノーマル）

『絶対言語』

都城王土の「言葉の重み」の強化版。回避法はない。

入切ができる。

『仲間戦闘（チームロワイヤル）』

詳しいことは不明。

『完璧限定（オールオーバー）』

全ての異常、過負荷をコピーし、２００％使える。

過負荷（マイナス）

『？？？』

翼斗があるところで開花した過負荷。

口癖

めんどうくせぇ。

第一話　『新生徒会長』

『ん・・・・・・・・』

目を開けると光が差し込む。

『嫌な夢だ・・・・・・』

あの時のことを思い出してしまった・・・・・・

「あいつ」は元気だろうか・・・・・・

『やけに外が明るいな・・・・・・今何時だ？』

ふと時計を確認・・・・・・

『や、やべ・・・・・・・詰んだ！！！』

もう１０時じゃねぇか！！

・・・・・・もう１００％間にあわねぇな・・・・・・

はぁ。なぜあんなのが全員参加なんだか・・・

『とりあえず行かねぇとな・・・・・・めんどくせぇ。』

俺は鞄を取り学校へ向かった。

ちなみに俺を「あそこ」へ入れたやつらはもういねぇ。

なぜなら・・・・・・

全員死んだからだ。

☆★☆★☆★

走り始めてから数分後、箱庭学園前到着。

『・・・・ついた・・・・ってなんだよこのめんどくせぇ広さは！』

そこには学校とはいえがたい大きな建物があった。
ちなみに、今更言うのもなんだが此処来るの始めて。

え？入学式に一回来ただろ！って？

・・・バックれてたんだよ。めんどくて。

ついに先生もキレたのか「明日来なかったら退学だ！」とかいいだしちまってな。

そして現在に至る。

『こんなのに金使うんだったら一人暮らしの俺に金よこせ！！！』

俺は空に向かってそう叫ぶ。

空に俺の声がこだました。

『・・・・・』

・・・・・まぁとにかく中に入らなければ。

☆★☆★☆★

中に入ると、人一人の声も聞こえないくらい静まり返っていた。

『誰もいねぇ・・・・・何故だ？』

まだ新生徒会長発表してんのかと思い体育館へのドアを開ける。

俺はなるべく音をたてないようにして扉を開ける。

体育館の中は、ちょうど新生徒会長さんがなんか言っている所だっ

た。

≪世界は平凡か？≫

平凡だな。たぶん。

≪未来は退屈か？≫

退屈だな。たぶん。

≪現実は適当か？≫

適当だとどんなに楽だか・・・だが適当に生きてるね俺は。

≪安心しろ、それでも生きることは劇的だ！≫

そのとおり！生きることはすばらしい！！エクセレ～ント！！！・・・・とでも言うと思ったか？

だがすばらしいというほどでもないがいいね。楽しいことがあるしな。

≪そんなわけで本日よりこの私が・≫『

・・・

俺はどうでも良くなったのでなるべく音をたてるようにして扉を閉める。

『長くなりそうだし、屋上で寝るか。』

学校の見取り図に移動しようとした俺だが、何故か後ろから誰か走ってくる音が聞こえた為、一度止まる。

「まて貴様。私の演説を全て聞いてみようとは思わんのか？」

そこには、さっき演説をしていた新生徒会長が居た。

・・・何故来たのか全くわからない。

『これはこれは生徒会長様。演説を途中で投げ出してよいのですか？』

「人が演説しているときに理不尽な奴がみえたのでな。過ちを正しに来た！！」

うん。こいつ馬鹿だ。正しいこと言ってるけど馬鹿だ。

そんなことしたら他の奴に迷惑だろうに、まぁ俺のせいだが。

『すいませんでした。私が間違ってました。喜んで聞かせていただきます！』

我ながらこのしゃべり方きもいな・・・・・・

「そうか。では体育館に戻るぞ。」

そして俺と生徒会長は扉を開け体育館に入る。

生徒会長は何喰わん顔で再び演説を始めた。

≪そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ！学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付け

る！！≫

生徒達（俺以外だね。）より大きな拍手があがる。

そして再び俺は体育館の扉を閉めた。

え？なに？俺なんか悪いことした？

だって全部聴いたじゃん。

だから屋上行っても大丈夫でしょ？

そして俺は目的地：屋上。と頭の中で変更する。

歩き始めてから数秒後に後ろから怒号が聞こえたので、俺は高速ダッシュで屋上へ逃亡した。

第二話　『出会い』

『ＺＺＺ・・・・・ンッ』

みなさんどうも。今日も元気な翼斗です・・・・

気持ちのいい朝・・・・・あ、間違った昼ですね・・・・

『～～～はぁ、よく寝た～！』

これなら授業もがんばれる気がする。

『さて、そろそろ本気でやばい気がするんで教室行くか。』

そして、俺は教室へ向かった。

☆★☆★☆★

ちなみに俺は１組らしい。

異常者は１３組らしいけど・・・・・俺は異常者とは思われてないらしいな。

俺静かに扉を開ける。

そこには、いつかのテレビで見た、学園の風景。

にぎやかで、楽しそうな、風景。

この風景を見ると、昔あった『出来事』を忘れられる。

全く、平和だ。

『ともかく席に座るか。えーっと俺の席は・・・』

するとある一角で、ひときわ大きな声で話している女子が居た。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるっつうかさー」

その女子の言葉に、そばにいた男は反論する。

「カッ！あれは人の前に立つのに慣れてるんじゃねーよ！人の上に立つのに慣れてんだ！」

・・・・・あの生徒会長の話か。

・・・・・・・ていうか俺の席あの「カッ！」って言ってた奴の隣じゃん！

ていうかカッ！ってなに！？

全く意味がわからないんだけど！？

と、とにかく自然に席に座らねえと・・・

『よっ！』

俺は自分でもびっくりするような明るい声で男に言った。

「ん？誰だお前？」

まぁそう返すよな・・・・・

『お前と同じく1組の榛原翼斗（はいばらよくと）だ！あ、ちなみにお前の席の隣な。これから一年間、夜露死苦な！』

おい作者！ヨロシクの字が違う！！！！！

「俺の名前は人吉善吉だ！よろしくな！」

「私は不知火半袖だよ～♪」

『夜炉死苦な！善吉！不知火！』

・・・・・よし。普通に成功した・・・・・字また変わってるし！！

よしそれじゃぁ第2ステップだ。

うまい具合に話しに入りこむ！

『なぁ善吉。さっき生徒会長の話してたけど、やけに知っていたな。知り合いなのか？』

「まぁな」

『どういう関係？ま、まさか恋ｂ「ただの幼馴染だ！！！！！！」

どうやら普通の関係？らしい。

『・・まぁいいや、で、その幼馴染の事手伝ったりするためにお前も生徒会入ったりすんのか？』

「カッ！なわけねぇだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるかっての！」

善吉がそう否定する。

「ふーん、じゃぁ生徒会入らないんだ♪」

「もちろんだ！」「「俺は絶対！生徒会には入らない！」」

指を前に出し括弧つけて言った善吉だが、

後ろに誰かいる。

いや、誰かじゃなく生徒会長がいる。

「まぁ、そうつれないことをいうものではないぞ、善吉よ。」

そう言って生徒会長は善吉の頭を掴む。

「！！やめろ！！お前は何しに来た！」

「もちろん善吉を迎えに来た。さぁ、一緒に生徒会室へ行こう！そして生徒会に入ろうじゃないか！」

「や、やめろ～～！！！」

生徒会長さんが抜けだそうとしている善吉を抑えながら俺と目が合う。

「ん？お前は演説の途中でぬけだした無礼者Aじゃないか」

やっときづいたか・・・・・・・・・って無礼者A！？

『その名前やめてもらえませんか？なんかBもいそうで怖いんすよ。あと、抜け出してない。出ただけ。』

「ふむそうか。だが名前がわからん以上、変えれないだろう。」

それもそうだ。

『どうも初めまして。榛原翼斗と申します。これから仲良くしてくださいね、生徒会長さん。』

「ふむ・・・翼斗か・・・・・・あと何故敬語を使う？」

いや知らん。こっちが聴きたい。

お前からなんかオーラ感じるから自然と敬語使ってたんだよ。

『あんたの名前は？生徒会長さん。』

「黒神めだかだ。めだかちゃんと呼ぶがｙ『よばねぇよ。』ふむ、残念だな。」

読んだらプライドとかプライドとかプライドが崩れ去るよ、たぶん。

「さぁ善吉！またせてすまなかったな！さぁ行こう！」

「ぎゃぁぁぁぁ！！！！！待ってねぇ～～！！！！！」

そして善吉は、めだかにヘッドロックされたまま、教室を出て行ったーーー

「あ～あ、連れてかれちゃった。」

『南無三。』

善吉、生きて帰ってこいよ・・・・・・ｗｗｗ

第三話　『好奇心にはご注意を』

はい、こちら現場の榛原です。

只ここでは大変なことが起こっております。

え？なんでリポーター風なのかって？

「な、なんだこいつ！強ぇ！！」

「はい拳破、拳破、拳拳破ァァァァ！！！」

こういう状況だからです。

「げふっ！」

何故こういう状況になったのかは理由がある。

深そうで全く深くない理由がな。

それじゃぁ遡ろう。

☆★☆★☆★

そう、それは黒神めだかと挨拶をかわした日・・・・

『帰りどっかよってくか。』

全ての授業を省略！でやいすごした俺は学園を出て歩いていたんだーーー

すると路地から、

「なんだこいつ！俺たちにたてつこうなんて何者だ！？」

「・・・・・・・・元英雄だ。」

っていう声が聞こえたんですよ、はい。

そして俺の中で討論。

1　見に行く

２　帰る

３　生徒会長を呼ぶ

４　１１０番

５　『通りすがりの、キャメラマンさ！』と言いながらさっそう登場。

のどれか、さぁ、討論の開始だ。

『それじゃぁ、第一回、脳内討論会を始める。さっそくだが、どれがよいと思う？』

軍服を着たオレが言う。

「はいっ！４番がいいと思います！」

『却下だ！こんなことで警察呼んだら、警察が可哀想だろ！』

メガネをかけた俺の意見は却下。

「もちろん！５番だろ！！」

『却下！インパクトはすばらしいが、キャの部分が気に入らん！』

チャラい俺も却下。

「はい！やっぱり米はコシヒカリだと思います！」

『その通りだ！』

～討論終了～

結果。

役立たず。

結局、好奇心に負け、俺はそこへ行くことにした。

☆★☆★☆★

っーことだ。

だが、

すげえ後悔してる。

「くそ・・・・・貴様覚えていろよ！！怪我が治ったら真っ先にお前を潰しに来てやる！！！」

殴られていた方が、負け惜しみっぽくそう言う。

「・・・・・無理だな。なぜならもうすぐお前は俺のことを忘れるからだ。」

「はっ？それどういう意ガハッ！」

男が言い終わる前に、パンチを喰らわせられ沈んだ。

・・・ふう、終わった。

さぁ俺も早く立ち去ろう・・・・

なんかこれ以上居たら面倒くさいことになりそう。

「・・・・・・・・・・・」

なんだ？あの人がこっち見てる！

なぜだ！家政婦は見た！みたいな感じで壁からちょびっとだけしか顔だしてないのに！

やばいやばいとにかく早く逃げよう。

☆★☆★☆★

全力疾走後、３０秒

『ふぅ～危なかったな・・・・・もう少しでバレるとこだったＺＥ☆』

「もう手遅れだがな。」

「お～！そうかそうか・・・・・ってなんで居るの！？」

ちくしょ～！！！！

盛大にばれてたようだ・・・・・

「貴様。なぜ『俺のことを覚えている』？」

はぁ？

なにいってるんだこの人？

拳拳破のやりすぎで頭おかしくなったか？

『どなたか存じませんがなんのことをおっしゃってるのでしょう？』

「俺は箱庭学園第９７代生徒会長の日之影空洞だ。」

ほぉ～！

めだかの前の生徒会長さんか～！

『前生徒会長さんですか！それで、覚えているとはなんのことでしょう？』

「だから俺を覚えていれないはずなんだよ普通(ノーマル)は。」

？覚えていれない？どういうことか全くさっぱり。

『みんな覚えているでしょう？こんな大きな生徒会長は。』

「異常(アブノーマル)って知ってるか？」

「はい。一応。」

もちろん。俺が異常(アブノーマル)だから知らないはずはないさ。

「俺の異常(アブノーマル)はな『知られざる英雄(ミスターアンノウン)』て言ってな。誰も俺を認識、覚えていることができないんだよ。普通(ノーマル)はな。」

あ、まずっ。

『つまりなにを言いたいのですか？』

「お前普通（ノーマル）じゃないだろ。」

第四話　『ＶＳ？日之影』（前書き）

今回から前回のあらすじ？をつけさせていただきます。
注　前回のあらすじ？は１００％グダグダにしますｗｗ

第四話　『VS？日之影』

前回のあらすじ？

翼斗「デデデーン！！（運命みたいな）

☆★☆★☆★

「お前普通（ノーマル）じゃないだろ。」

やばい！バレた！！

こっ、ここはなんとかごまかさねえと・・・

『ハァ？ナニヲイッテル「いまさらとぼけても無駄だぞ。」

ガハァ！！

退路をふさがれたぁぁぁぁ！！

『・・・・・普通（ノーマル）じゃなかったらどうするんです？』

俺の言葉に日之影は首を傾け、

「お前確か1組だよな？」

『はい』

「なぜ異常（アブノーマル）なお前が1組に居るんだ？」

・・・いやこっちが訊きたい。

『さぁ？Ｇｏｏｇｌｅでググればわかるんじゃないですか？』

「・・・本当の理由は？」

俺のふざけた態度に日之影はちょっと語尾を少し強くして再び訊いた。

いや、二回目だけどさ、

こっちが訊きたいわ！！！！

まぁ面倒くさいので適当に、

『家庭の事情ですよ。そこまで踏み込む理由が貴方にはないでしょう？』

「嘘だな。」

・・・このセリフを聴いてひぐ〇し思いだした。

そういうこと言うのはＫ１だけで充分だよ！！

『嘘じゃないですよ・・・』

「仕方ないな。力づくで訊かせていただくか。」

そう言って日之影は構える。

・・・いやなにこのバトルするよ！見たいな雰囲気。

こんなむさ苦しい大男とのバトル誰が見たいんだよ。

エスケープだよ、エスケープ。

『仕方ないですね。それじゃあ・・・』

「やっと話す気になったか。」

喰らえ！榛原流最終奥義！！

日之影が構えをといたときにーーー

俺はバックステップ→高速反転の流れでそこから逃亡した。

『逃げる！！！！！』

「ッ！くそ！待ちやがれ！！！」

日之影が俺を追おうとする。

無策でこれをやったわけじゃない。

相手はあの大きさだ、おそらく相当な速度は出ない。これが俺の考え。

フハハハ！！

これが完璧に逃げ切れる榛原様の作戦さ！！

だが、この作戦は意外な方法で破られることとなる。

「うおりゃあああ！！！」

日之影が、俺との距離は５ｍは離れているはずなのにパンチをくりだしてきたのだ。

『なに！？』

届くはずが無い！！

だがーーー

「ガハァ！！」

俺の顔を鈍い衝撃が襲った。

馬鹿な！？この距離から当たるなんて！！

「逃がさねーよ。」

そしてその隙に俺との距離を詰める。

『クッ！！！』

どうやら簡単には逃げられそうにないな・・・・・・

仕方ない、

『あれ』をつかうか。

『仕方ねぇな・・・・・・』

「ほお？やる気になったか。」

俺が雰囲気を変えたことに驚きながらも構える日之影。

そんな日之影を俺は嘲笑した。

『まさか。俺は意味ある戦いしかしませんよ。』

「じゃぁどうするんだ？助けでも呼ぶのか？」

生憎。俺今友達そんなにいないんだよね・・・

『『あれ』は使いたくなかったが・・・・・』

「『あれ』？」

相手がその言葉に首を傾けている間、俺はさっきの要領で再び逃走した。

よし！相手は油断してたから逃げれるかも！

「逃がさねぇよ！」

なぁーに。

追っても無駄だ。

『『止まれ』』

「っ！！がぁ！」

俺がそう呟くと疾走しようとした日之影の身体は止まり、動けなくなった。

そう、これが俺の異常（アブノーマル）『絶対言語』だ。

これは俺の命令に逆らえなくなるという極悪非道の技だ。

だからあまり使いたくなかったんだよ・・・・

それに、『嫌な思い出』もあるしな。

「これが貴様の異常（アブノーマル）か・・・・！」

『さぁどうだか。とにかくさようなら～もう会わないでくださいね～」

そう言いながら俺は走りだし、その場を後にした。

「・・・・・・クソッ！」

そんな俺を、日之影は悔しそうな顔でみていた。

☆★☆★☆★

『さて、明日どうなるかな・・・』

やっと着いた家の前で、俺は明日の事を考えながらため息を吐いた。

第五話　『力加減はしっかりと』

前回のあらすじ？

翼斗「・・・・・・ほえっ？」

注　翼斗は本を読んでいたそうです。

☆★☆★☆★

『ＺＺＺ・・・・・ＺＺ・・・・Ｚ・・・・ンッ』

おはようございます。榛原翼斗（はいばらよくと）です。

今日は正直学校へ行きたくありません。

なぜなら・・・・・昨日・・・・・

「拳拳破ァァァァ！！！！！！！」

な出来事があったからです。

・・・まぁでも行かなきゃいけないんだけどね。

『だ～れもいないけど行ってきまーす

そう言って家のカギを閉め、俺は家をあとにした。

☆★☆★☆★

『なんか怖え・・・』

俺は教室の扉の前で立ち止まっていた。

だって怖くて開けれないんだもの！！

わかるか！この恐怖感が！？

もしかしたら俺の席に大男が座ってて「よお、また会ったな」という展開があるのかも知れないのだぞ！

俺はちょっと不安を抱きながら扉を開けた。

そして開けたと同時に俺の席を確認。

よかった・・・なにもいない。

『全く。朝から世にも奇妙な物語みたいにならなくてよかったぜ。』

「何の話しー♪」

不知火が机に鞄を置いてため息を吐いた俺に話しかけてくる。

『いや、それがよ・・・っていうか善吉は？今日は遅刻なのか？』

優等生っぽあいつが遅刻とは・・・

「いーんや、来てるよー♪今頃は会長さんにしばかれてるんじゃないかなー♪」

『あいつも大変だな。変わってやる気はないけど。』

俺と不知火でうんうんと頷く。

『しゃあない。暇だし救出してやるか。』

「二の舞にならないでねー。」

『なぁーるかばぁーか。』

そして俺は席を立ち、善吉を探しに出かけた。

☆★☆★☆★

さて、俺は超常現象に遭遇しております。

そう、それは善吉を探すため剣道場を通りかかった時の事です。

私は、気付いてしまったんです。

そう、

『昨日剣道場ってこんなにきれいだったっけ！？』

ということを。

昨日廃屋同然のたぶん不良のたまり場だろう的な場所は、
なんということでしょう～♪
タラターン♪タタタターン♪タタタタターターターン♪
という音楽とともにまるでビフォーア〇ター並みのきれいさになっていたのだ！

『こりゃーすげーってあれ？』

隅々まで見てると奥の廊下に善吉が歩いているのを見つけた。
さて、からかいにでも行くか。
そう思いながら一歩踏み出したのだがーー

突如、善吉が鈍い音ともに床へ沈んだ。

『！！』

その後ろには、

「雑草育ててどうするんだよ、アホが！！」

木刀を持ちながら、いらついているような顔を浮かべている日向がいた。

説明しよう！日向とはメガネかけた物体である！その他の情報はただいま調査中！

説明終わり！！！

気付くと日向は既にその場に居なく、善吉だけが転がっていた。

とりあえず俺はめだかへ伝えるためその場をあとにした。

☆★☆★☆★

結局、見つからん。

諦めた俺はさっき善吉が倒れていた場所へ向かう。

だが、そこには善吉は居ず、代わりにぼろぼろの日向が居た。

「ちくしょ～！人吉善吉、できるじゃねぇかよ！！」

そう言いながら日向は頭をわしゃわしゃとする。

『なるほど、つまり反撃されたのか。自業自得だな。』

「ん？お前榛原か！？」

俺の声で日向が俺に気付く。

『おお日向。そんなにぼろぼろでどうした・・・・・』

俺が言い終わる前に、日向は木刀を振り上げ、俺に襲いかかってき

た。

『うおっと！！』

俺はそれを紙一重で避ける。

『なんだよいきなり！！危ねぇじゃねぇか！！！』

今あたりそうだったんだぞ！

「あー俺は今すんげえいらついてんだよ！！だから黙ってーーーー俺のサンドバックになってくれや！」

そして再び日向は俺との距離を詰め、

「オラッ！！！！」

木刀を振り回す。

『ちょっ、まっ、』

コラコラ竹刀を振り上げんな！！そのための道具じゃねぇぞ！！！

そう言いながら俺は全ての攻撃を避ける。

『まて日向一回落ちつゲフッ！！！！！』

だが、ついに俺の腹に一発当たった。

「はい１ＨＩＴ！！！！！」

あーなんかキレた。

なんか手加減とかいろいろすっとんだ。

「『平伏せ』」

とりあえず『絶対言語』を使い、日向にそう言う。

「のあっ！！」

日向が地面に顔を叩きつけられる。

まだだ、まだまだ終わらんよ！！

「榛原・・・・・・何者だお前！！！！！」

日向が焦りながら俺にそう言う。

『・・・・・・ただの人間だ。それ以上でもそれ以下でもねえ。』

さて、話は変わるが俺心の中に一つ決めてることがあるんだ。

『なぁ日向。「倍返し」ってしってるか？」

「ちょ・・・・・・ま・・・・・・」

やられた分は倍にして返す。

『待たねえよ！！！』

そして俺は渾身の力で拳を振り上げた。

第六話　『逃亡はすばやく計画的に』

前回のあらすじ？

翼斗「孤独バンザイ！！」

☆★☆★☆★

『待たねぇわ！！』

俺は渾身の力で拳を振り下ろした。

「ガハッ！！」

俺の一撃を腹に喰らい、日向は床に沈む。

よし。すっきりした～～～！！！

ついでにストレス発散完了！！！！

さぁ次はどうしようかな・・・・・・（＊^＿^＊）

「・・・・・・・・・」

今のでのびてるな・・・・・

まぁこれくらいで勘弁してやるか・・・・・

『今回はこれくらいにしてやろう。最後にこれだけは言わせろ！！』

ここでためてためて・・・

『寿司はやっぱりいなり寿司に限る！以上！！（ドヤッ』

そしてビシッと指をさす。

決まった・・・・・

『じゃな！あと今度なんかおごれ！』

そして俺はそそくさと退散した。

よし。帰ってパワプロやろ～！！

☆★☆★☆★

次の日・・・・・

なんか日向が改心してた。

『どうした日向！なにがあった！！』

俺は日向の肩を掴み、がんがんと揺らす。

「ああ？どうもこーもねぇよ！」

『どうもこうもあるわ！昨日ヤンキーだった奴がきちんと椅子に座ってんだぞ！？ビフォー〇フターよりすげえぞ！！』

「いつも椅子にはきちんと座っているよ！！」

ダヨネー。

まぁ改心させた奴は一人しか浮かばん。

「それより榛原、昨日の能力はなんだ？」

『ヘブシッ！！』

ここでくるかその質問・・・

まぁここかうまくごまかそう。

『ナニノウリョクッテ？ソンナノ「なんの話だ日向同級生。詳しく聞こうじゃないか。』

そこに生徒会長登場。

タイミング悪すぎだろ！！
破滅フラグぴんぴんするんですけど！！
と、とりあえず日向を黙らせよう。

『ひ、日向。ちょっとこっｔ「逃げようたってそうはさせんぞ翼斗よ。」ぐおおおお！！』

（。ｏ。）ヤッベェーコレマジヤベェー

まずい！すごくまずい！！
杏仁豆腐に納豆かけるくらいまずい！！（どんな味かは知りません）
この女にばれたらやっかいなことになる！！！
＼（。ロ＼）（／ロ。）／どうしよどうしよ～
こうなったら唯一無二の親友日向様に頼むしか・・・

『日向く～ん！僕たち友達だよね～？』

「あぁすまん榛原。お前がぼーっとしてるうちに全部話しちまった。」

神は死んだ・・・・・・
と、とにかくこの場から逃げ出さなきゃ！！！！

『虫唾ダッシュ！！』

そういい走りだそうとするが、

ガシッ！

めだかに掴まれてしまった。

『！！』

「詳しく聞こうか・・・・・・翼斗よ。」

やべーーーー！

「GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！」

そして俺はこのまま生徒会室に連行された。

俺はこの間考えた。

どうやって秘密を死守しようかと・・・・・・

第七話　『抱きつきとラリアットは紙一重』

前回のあらすじ？

翼斗「虫唾ダッシュ！！」

☆★☆★☆★

やぁみんな！今日も元気にプロテイン飲んでるかい？みんな大好き榛原翼斗（はいばらよくと）だよ！！

え？なんでこんな明るいのかって？

『・・・・・・・・・』

「さぁ、教えてもらおうか・・・・・・」

この状況、ポジティブになる以外回避法がねえだろうがぁ！！

さぁ、ここでルート分岐。

1　しゃべる

2　断固拒否！！

3　妖怪大戦争

4　汚物は消毒だべぇ～！！

4個選択できるけど実際には2つしか選択できねぇ！！！！

3番？突っ込んだら負けだよ・・・

ここはやっぱり・・・・・これしかねぇ！！

2　断固拒否！！！

『絶対無理・・・・・これは俺の選手生命に関わる？ほど重大な秘密だ！例えるならば実は俺死んでるんだ、みたいな感じの！！』

「そうか・・・・・・」

めだかが残念そうな声を洩らす。

うし！作戦成功だな！！

「善吉。ちょっと鞭持ってきてくれ。」

「ハァ？なんで！？」

気のせいでした。

めだかさんご乱神。

こうなれば話す以外の道はないな。

さもないと俺のｌｉｆｅは・・・明日は・・・ない！！

『しゃぁないな。教えてやってもいいぜ。ただしぃ・・・』

「ただし？」

めだかが俺にそう訊く。

せめて善吉だけには！！

『善吉をこの部屋から退出させろ！！』

「#その要求は丸めてゴミに捨てられました#」

『ひでぶっ！！』

あっけなく却下。

全く意味わからん。

「だって俺も翼斗の秘密知りたいし。」

『心を読まれた！！こいつ何者だ！？』

オワタ～（T＿T）

・・・こうなればすべて言うか。

こうして俺はすべて打ち明けた・・・・・

だが『あそこ』の話は抜いた。

あと異常（アブノーマル）は『絶対言語』の一つだけという話にした。

「翼斗！お前も異常だったのか！！」

善吉が驚きを隠せずそう言う。

『あぁ。家庭の事情というか個人の事情というか地球は回っているというかそんな感じで・・・』

そこでめだかがポン、と手を叩いた。

ぶっちゃけ嫌な予感しかしない。

「よし。じゃぁ翼斗には生徒会に入ってもらおう。」

結論。

こいつ馬鹿でした。

『全く意味わかんねぇ！！それに入る気全くないからあきらめろ馬鹿！！』

そこでめだかがむー、と言って沈む。

「翼斗は入ってくれないのか？」

「うう・・・・・・なんだよその目は・・・・・・」

十上目ずかい。

ぶっちゃけやばい。

破壊力が核くらいある。

『っ・・・・・ああもうわかったよ！！入ればいいんだろ入れば！！！』

その言葉を訊くとめだかはいつもの表情に戻り、

「よし！これで生徒会は3人になったな！！」

満面の笑みでそう言った。

「ちょっと待て。残りの一人は誰だ。」

「善吉以外に誰が居る？」

めだかは善吉の問いに即答した。

「俺の意見聞かねーのかよ！！俺は入っていねーよ！！！」

そう善吉が言うと、再び上目ずかい。

「え？善吉入ってくれないのか？」

「うっ・・・ああ。」

ここで涙目追加で～す。

善吉もう無理だ。あきらめろ。

「善吉～（ウルウル」

「ぐぁ・・・・ぐぅ、うあああああわかったよ！！やってやるよ！！！」

めだかの上目ずかい&涙目に善吉屈服。

実際あれはすごい。

屈服しないやつはホモだ。ゲイだ。ＢＬだ。

「善吉、翼斗、二人とも私の為に・・・・」

そうしてめだかは満面の笑みを浮かべ、

「ありがとう！！」

「むぐっ！！」

『ガハァ！！』

俺と善吉に抱きついてきた。

おい、これ他から見れば「リア充爆発しろ」的な絵だが、勘違いするな。

「・・・・・（ポー」

『っ・・・・・・』

俺、首入ってるから。

まぁ、とりあえず今日、俺と善吉は生徒会に加入した。

ちなみに役職は、

善吉　庶務

俺　副会長　　だ。

なんで俺の方が役職が高いのか、という質問は受け付けん。

なぜかって？

俺も知らないから。

第八話　『突然の行動には気をつけよう』

前回のあらすじ？

翼斗「マゾに目覚めた。」

翼斗「ちょっと待てぇぇぇぇぃ！！」

作者「なんだよ。なんか文句あるのか？あん？」

翼斗「いや毎回この『前回のあらすじ？』がグダグダなのはわかってる。そして今更何を言っても無駄だということもな。」

作者「じゃぁ文句ねぇじゃねぇか。」

翼斗「でもさすがにさぁ！開始早々主人公が『マゾに目覚めた』って衝撃告白されるのはちょっと・・・」

作者「ちょっと・・・・・なんだ？」

翼斗「気付けよ！！誰がそんな小説見たいんだよ！！って話。」

作者「言われてみれば確かにな・・・・・」

翼斗「だろ？ということで直せ！」

作者「直してください。だろ！？」

翼斗「はぁ？なんでお前に敬語で頼まなきゃいけねぇんだよ。」

作者「いいのか？俺は作者だぞ？その気になればお前をこれから女装された状態でｔ「すいませんでした！！」

作者「よし。じゃぁ改めて前回のあらすじ？だ。」

前回のあらすじ？（ｔａｋｅ２）

翼斗「何かに目覚める気がしたぜ・・・」

☆★☆★☆★

『それも違う気がするよぉ！！』

そう言って俺は跳び起きる。

はいどうも。作者に女装させるぞオラ。と脅しをかけられている榛（は）原翼斗（いばらよくと）です。

こんな俺はめでたく先日、生徒会入りしました。

しかも副会長というめんどくさい地味に上な役職！

『ハァ・・・・・・・・今日から波乱万丈になるなこれ・・・』

悩んでてもしょうがねぇ！！

過ぎたことでは悔やまねぇ！！

ということで逝ってきまぁぁぁぁす！！！

☆★☆★☆★

『さて、教室についたが・・・・・』

今生徒会室に逝くべきだろうか・・・・・

俺は扉の前で頭を抱える。

いや、善吉もまだ教室に居るし善吉が逝くと同時に俺も逝こう。ストーキングみたいな感じで後ろをこそーっと。蛇男さんのやっていた通りに、自然に。

「翼斗じゃん♪生徒会に入ったってホント？しかも副会長！」

不知火が突っ立っている俺の前に来て、ニヤニヤしながら言う。

それにしてもその笑顔。・・・むかつく。

『だれがそんなこと言ったんだ？』

「玄関に紙で張り出されてあったよー♪」

なん・・・・だと・・・

「で♪ホントなのー？」

『善吉にでも聞いてくれ。』

今は語りたくない、いや語ってたまるか。

ということで善吉に言ってもらおう。

「ねぇ生徒会庶務の善吉くーん♪翼斗ってｓ「翼斗に聞いてくれ。」

駄目だった♪」

気のせいか善吉の声に覇気がない。

まぁ不知火が庶務の所を強調してたからか。

『不知火。さっきの話の真相は・・・・・』

「真相は・・・・・」

地味にシリアスな雰囲気になる。
ていうかクラスの人も俺等みてないで話してろよ。言いずらいんだよこの雰囲気。

『ホントの反対の反対の反対の反対だ。』

「つまり本当ってことだね♪」

考えるのが早い！！
こいつは食べる速さも早いが考えるのも早いのか！？

一人で驚いている俺であった。

☆★☆★☆★

さて時は流れて今に至る。うん？今っていうのは放課後だゾ♪
今俺は生徒会室の前にいる。
めだかも一緒だ。

いや、一緒という表現は好ましくない。

なぜなら今の俺は・・・・・・・

『おろしてくんね？』

「嫌だ。」

『おろしてください』

「嫌だ。」

めだかに担がれてる。

まぐろを担ぐような感じで。

ぶっちゃけ周りの人の視線が痛い。

なぜこうなったかというと・・・・・・・

『さて帰るか。』

俺はカバンを持ち静かに教室を出、玄関から外へ・・・・

「逃がさんぞ。」

後ろに修羅がいますた。

という訳（＾Ｏ＾）／

と、とりあえずここからおろしてもらわんと・・・・・

この視線、耐えられん。

『おいめだか。俺はもう逃げない。ていうかここまで来たらもう逃げられない。そして精神的ダメージがやばい。だからおろしてくれ。』

「うむ。断る！と言いたいところだがいいだろう。」

めだかは残念な表情をしながらも俺を地におろした。

何故残念な表情をしたのかは俺も知らん。ていうか、知ったらやばくなりそう。

ということで歩くことの大切さを改めて実感した俺は生徒会室に入る。

そこでは、善吉が黒い制服を着、鏡とにらめっこをしていた。

「くっそーやっぱ様になんねーなー、大体俺には黒い制服似合わね

ーよ。だから制服白いこの学校に来たってのに、これじゃぁ全く意味ねぇじゃねえか。」

「いやそんなことはない。善吉には黒が良く似合う。」

突然後ろからめだかの声が聞こえた為、善吉は驚き「うお！」と声を上げる。

「だから何でお前はいつも後ろに居んだよ！」

「似合っているが気になるなら内側にジャージでも来てみたらどうだ？」

善吉のつっこみを華麗に無視し、めだかは服のアドバイスをした。

『おいおいめだか、さすがにそれはない。こんなの見てかっこいいなんて思う馬鹿なんているわけないだｒ「なんだこれ！？デビルカッケェ！！」・・・居たよここに。馬鹿中の馬鹿が。』

善吉は目を輝かせている。

はたから見ればトランペットを眺めている少年、と言った風だろう。

そんなことよりも、果てしなくセンスがない善吉くんに教えて上げねば。

『善吉。美的センスなさすぎ。』

「なんだと翼斗！！それをいうならお前の着こなし方だろうが！！」

？胸元開けてなにが悪いんだ？

『ハァ？少なくとも俺はお前よりはおしゃれに着こなしていると思うけどな。』

「私もそう思うぞ。」

・・・なんだかこいつに共感されると服装変えたくなる・・・

『何でお前はそんなに俺の着こなしが気に入らないんだ？』

「なんか寒そうなんだよ！！！」

・・・何この美的センス全くない高校生。

『よしわかった。お前の言いたいことはよおく分かった。つまりあれだな。お前はこれから俺を見なければ済む話だなそれ。よし、解決。」

「何も解決してねぇ！！」

「そんなことより二人とも、目安箱に投書があったぞ。」

めだかが俺達の言いあいを妨げるようにして言う。

『うん？どれどれ・・・・・』

依頼を見てみると、どうにも退屈そうな依頼。

ということでばっくれます。

今日セールもあるし。

『あのさぁめだか。俺今日用事あるから帰っていいか？それ二人でも達成できるだろ？』

「うん？どんな用事だ？」

『いや今日セールやってんだわ。だから晩飯買いに行こうかと』

めだかは少しだけ頭を抱え、「問題ないな」と言った。

「そういえば翼斗は一人暮らしだったな。・・・・仕方ない、今日だけ許そう。」

『ありがとうございます！！』

よし、早速セールに直行なのだぜ！！

☆★☆★☆★

俺は高速で靴を履き替え、学園を出る。

だが、校庭に居た男の前を高速で通りすぎようとすると、不意に、

『っ！うおっと！！』

襟を掴まれ、豪快に転んだ。

「貴様。王である俺の目の前を横切って走ってよいと思っているのか？」

『・・・・・誰？』

そこには、おそらく先輩であろう人が、腕を組みご乱神な様子で立っていた。

第九話　『面倒くさい人は無視するに限る』

前回のあらすじ？

翼斗「俺は急に止まれない！！」

☆★☆★☆★

「貴様、王である俺の前を走って通り過ぎてよいと思っているのか？」

そこには、誰かいた。

いやだって名前わからんもの。

『あのすいません。どちらさまでしょうか？』

その言葉を聴くと、眼の前にいる人は頭にしわを寄せた。

「ほぉ、俺に名前を聞くとはいい度胸だな。」

そして不機嫌をあらわにする。

いや、名前聞いただけで！？

どんだけ短気なんだよこの人！！

「・・・・・よかろう。俺の名前は都城王土（みやこのじょうおうど）。３年１３組だ。」

１３組・・・

ってことはこの人も異常（アブノーマル）か・・・・・

『俺の名前は・・・・・「ああ、言わなくていい。』

名乗らせてよ・・・

なんかずっとお前呼ばわりはやだもの・・・

「愚民の名前など聞くだけ無駄だ。」

その言葉を聴いた俺は、ちょっと頭に血が登った。

何だこいつ・・・先輩だからといって調子のりすぎじゃねぇか？

そう思いながら頭にしわをよせ、王土を睨む。

「貴様。なんだその態度は？」

俺の表情に気がついたのか、「ますます気に入らない」と言葉を吐き、王土も俺を睨む。

「ふむ、なにか言いたそうな顔だな。それじゃぁとりあえず・・・・・」

王土は冷徹にこう言い放った。

「『跪け』」

王土がそう言うと同時に俺の身体が言うことをきかなくなる。

「っ！！」

そして、まるで王の前に跪くように、眼の前にいる王土の前に跪いた。

「ふむ、生意気だがなかなかいい跪きだ。」

なに！？
こいつも俺と同じ能力（アブノーマル）を！？

・・・・・・いや違うな・・・・別の能力（アブノーマル）を感じる。

そして首を上げた俺に学園の時計が目に入る。

『や、やばっ！！』

「ん？」

よくよく時計見ればもうすぐタイムセール終わるじゃねーか！！！！
やばいどうにかしてここを抜けださねーと・・・・

選択肢１　逃げる

どうやって？相手は自分を王だと思っている面倒くさい野郎だぞ？

選択肢２　倒す

めんどくせー！なんか強そうな雰囲気だしてるし！！

選択肢３　買収

・・・・今金５０００円しかねーわ！！

選択肢４　めだかを呼ぶ

逆にめんどくさいことになりそう・・・・・

やっぱ使うしかねーか・・・・

『いやすいません王様（棒）。僕これからとても大切な用事がある

ので失礼いたします。』

「ふむそうか。残念だ。」

そう言いながら王士は顔を歪ませる。

あの笑いは何かするきだな。

まぁ災害は未然に防ぐに限る。

ということで、

『王様。何かやられたら困るんで・・・・・『動くな』』

俺のその言葉を聴くと、王士は驚きながらも身体を硬直させる。

「ぐっ！！」

・・・・・・よし、これでオールＯＫ。

『それじゃぁ失礼いたします。』

「！待て！」

そしてそそくさと退散しようとすると王土に声をかけられる。

「名前を聞こうじゃないか。」

さっき名乗らなくていいっていったじゃん＞（、＾、）＜

『1年1組の榛原翼斗（はいばらよくと）です。以後お見知りおきを。』

「！？　1年・・・・・・1組！？」

1組、という言葉をきくと王土は顔を驚愕の色に染めた。

そしてその場から退散。

『なんとめんどくさい人だ。もう会いたくないな。』

学園から離れた後、走りながら俺はそう呟いた。

☆★☆★☆★

～スーパーにて～

『くそぉぉぉぉ！！まにぁぁぁぁぁぁぁぇぇぇぇぇぇ！！！！』

スーパーの中を全力疾走しながら角を曲がる。

そこには、全滅している惣菜コーナーがあった。

ギャァァァァァ！！！

なんだと！！！！

惣菜セール終わってる！！！！！

晩飯どうするんだよ・・・

そして俺は、スーパーの冷たい床に沈むのだった。

第十話　『本能には従おう』

前回のあらすじ？

翼斗「跪きたい。」

☆★☆★☆★

『・・・・・・・腹減った・・・・・・・』

空腹で目が覚めた。

おはようございます。みなさんの榛原翼斗（はいばらよくと）です。

ちなみに昨日は

「跪こうぜＢｏｙ！！」

だったので結局食べてないです・・・

ということで朝飯&晩飯を買う&食べる為早く起きたんだヨー。

・・・というのは建前で空腹で起きた。

『・・・セブン行くか。』

ということで飯の調達に逝ってきまぁぁぁぁぁす!!

☆★☆★☆★

『早く来すぎたか。』

飯を食い終えて学校に行ったらまだ1時間も早ぇじゃねぇか!!

まだ学校開いてねぇし!!

『どーしましょう?どーしましょう?』

ホーチキつけたいところだが、寝る。

就寝する。

「ん？翼斗じゃないか。」

すると校門の前で寝っ転がった俺の後方から知っている声が聞こえた。

（何処で寝っ転がってんだという質問は受け付けない。）

『黒神めだかさんじゃないですか！来るのお早いですね！！』

「それはおたがいさまだろう。そして何故敬語・・・」

後ろに居たのは、我らが生徒会長、完璧超人のめだかだった。

何故敬語になったのかは、・・・やっと孤独から解放されたからかな。

『そんなに早く来てどうするんだ？土いじりをするにも校庭に行かないとできんぞ。』

「教室に入って勉強をする。」

めだかは当然だというようにしれっと言った。

『ハァ？開いてないじゃん。飛び越えるのはおすすめせんぞ。』

みんなの模範となるべき生徒会長がそんなことしたら駄目だろう、と俺は付け加える。

めだかはそんな俺の言葉を無視し、道路を見る。

「・・・・・そろそろだな。」

『（＝＿＝）？何がだ？』

まさか・・・・

ガンダm「先生が来る時間。」

じゃありませんでした（＾Ｏ＾）／

それにしても先生の来る時間を把握しているとは・・・・

こいつ・・・・デキる！！

まぁとりあえず鍵を先生に開けてもらった。

カチャッ

『うおぉぉ！早弁ならぬ早寝〜〜〜！！』

自分でも何言ってるかわからんが、とりあえず開くと同時に猛烈ダッシュで教室を目指した。

『ＫＯＫＯだぁぁぁ！！』

そして速攻で自分の教室に入り自分の席に座り、

『・・・毛布が欲しい。』

眠りについた。

☆★☆★☆★

『いや～睡眠ってすばらしいですね～不知火くん。』

1時間も追加で寝ることができた俺は上機嫌で不知火に言う。

そんな俺の言葉を聴くと不知火はニコッと満面の笑みを浮かべて、

「しゃべりかたきもいよ翼斗♪♪」

『ヘブシィ！！』

場外ホームランをかました。

「気をつけろ翼斗、不知火は言いたいことをストレートに言う。」

そして友人からの遅い忠告。

もうちょっと早く言えよ・・・・

☆★☆★☆★

・・・・・・・まぁキングクリムゾン！で時間は過ぎた・・・・・

そして放課後。

『さ～て帰るｋ・・・ぬおっ！！なんだこの殺気はぁ！！』

帰ろうとしたが所在不明＆ａｍｐ；差出人不明の殺気が送られてきたため、俺は生徒会室に向かうことにする。

さぁ、行こうか！！

１００Ｍ　５秒の４倍の半分の２倍の１００倍の１００分の１の速さでな！！！

ん？遠まわりに言わないと１００ｍ２０秒。

ボルトよりは遅い。

☆★☆★☆★

生徒会室への扉を開けると、鏡と善吉がにらめっこしていた。

・・・あれデジャブ？

『うい～す。』

「くっそー！このカッコよさがどうして伝わんねーかな・・・翼斗はありえないって言うしよ・・・絶対かっこいいってこれ！わかんない奴のほうがおかしいっての！！」

中に来ているジャージを掴み、しわを寄せる善吉。

お前、謝れ。

全世界の高一の男子生徒に全力で土下座で謝れ。

「あの人吉君、カッコイイよそれも、個性的で。」

『ＤＯＧＥＺＡ！ＤＯＧＥＺＡ！ＤＥＯＧＥＺＡァァァ！！！』

「っ！！翼斗いつから居やがった！？あとその気持ち悪いコールやめろ！！」

『ＤＯＧＥＺＡ！ＤＯＧＥＺ・・・いやちゃんと挨拶した。』

気持ち悪いコール？

違うさコレは全世界の高一男子全員の総意によるＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡコールだよ。

「あの～どちらさまですか？」

ジャージを着た女の人が俺に訊く。

『申し遅れました。私生徒会副会長の榛原翼斗と申します。覚えてなくても別にかまいませんが一応よろしくおねがいします。』

「う、うん。よろしくね。」

この人誰？

あ、そういえば昨日依頼あったよな！それも女の人！

つまり！！

善吉の彼女！！！

「それじゃぁ私は失礼するね。じゃあね善吉君、翼斗君。」

「はい、さようなら。」

『さよなら～』

女の人が生徒会室を出る。

そして出ていくと同時に俺は善吉に掴みかかった。

『おいぜぇんきぃちぃ！！ちょっと面かぁせぇ！！』

「いてっ！離せよ！！一体何事だ！！」

何事？

お前しらばっくれるつもりか！！

『今の人お前の彼女だろ！？お前誰に断ってｋ「言わせねぇ！！それ以上は言わせねぇよ！！？？」』

鈍い音とともに善吉の怒りの拳が俺の顔に直撃した。

へぶしっ！という声を上げ俺は掴んでいた手を離す。

くそぅ善吉め！今のは痛かったぞぉォ！！

「轟音が聞こえたかと思えば・・・何をしているのだ貴様たち。」

そこへ、タイミングが微妙なめだか登場。

『訊いてくれめだか！！ついこいつ彼女ｔ「黙れ」んぐっ！むぐむぐ』

俺がめだかにしゃべろうとすると俺の口の中にパンが入れられる。

む？このパンなかなかうまい。

「・・・仲がいいなお前たち。そんなお前たちにお願いだ。」

ん？投書があったのか。

『何で俺等がやるんだ？いつも通り、お前がさくさくっと解決しちまえばいいだろうが。』

「どれどれ・・・ああなるほど。」

善吉がめだかの持っている紙を覗きこむと納得したような声を上げる。

「今回の投書は迷子の犬を見つけてほしい、だ。私が行かない理由

はな翼斗、」

めだかは息を大きく吸い込みそしてため息をし、

「動物が、苦手なんだよ。」

何とも言えない笑顔を浮かべ、そう言った。

☆★☆★☆★

というわけで俺は犬を探してる。なぜか不知火とな。

それにしてもめだかが動物苦手とはな、意外。

『不知火・・・・・そろそろお「やなこった♪」さいですか・・・』

ちなみに俺は不知火をおんぶしてる、なぜかな。

『なぁ善吉。犬どこにいるんだ？』

「え～と確か庭で見たっていう目撃者が・・・・・」

善吉はそこまで言うとん？と言う声を上げる。

『どうした善吉。見つけたk・・・・』

善吉が見ている方向を俺も見ると、

ナニカイル！！

確かに犬には見えなくもないが・・・・あれは違う。本能が違うと告げている。

そして本能が逃げろと言っている・・・・

「あの犬だね♪」

そこには犬なんて居なかった。あきらかに凶暴な犬（モンスター）がいた・・・・・

第十一話　『絶対強者』

前回のあらすじ？

翼斗「はっ！ついに俺の目と頭は狂っちまったらしいな！！・・・だってあれが犬に見えないんだもの！！（正常です）」

☆★☆★☆★

「あれ！？あれじゃない！？」

不知火が指さした先には犬≠怪物がいた。

・・・信じたくねえ。

「いやいやあれは犬じゃないよ。もっと大都会にいる金持ちが手放した、なにかの条約で保護されているなにかだよ！」

『ぜ、善吉の言うとおりだよ！全く・・・不知火は何を言っているんだか・・・』

頼む！！あれが犬でありませんように！！

「残念でしたー♪あれはボルゾイという犬だよー♪別名ロシアンウルフバウンド♪」

「『ほらウルフって入ってんじゃん！！』」

俺の願いも虚しく、あれが投書に書かれてあった犬であった。

そして俺と善吉のシンクロ。

遊んでいるような俺等にしびれを切らしたのか、凶暴な犬・・・いや怪物って呼ぼう。

怪物がグルル！！と声を上げる。

まぁ、この時点で犬である確率はほぼ０。

「ほら『こっちにおいでよお兄ちゃん！一緒に遊ぼうよ！』って言ってるよ♪」

「いや俺には『人間ども！今度俺の眠りを妨げたら噛み殺すぞ！！』って聞こえるね！！」

『善吉。俺には「僕は善吉くんと楽しい殺(あそ)びがしたいな♪」って聞こえるぜ。』

「ほら『遊び』の字違うじゃん！どう見たってその字じゃ殺し合いじゃん！！」

さすがに俺は行きたくない。

だって、人間だもの。　みつを

おそらくあいつと遊びたい人～って全世界に語りかけても一人もいないだろうぜ。

「ウソだろ！本当にあいつ捕まえんのか？あきらかに死亡フラグたってんだけど！不知火手伝ってくれるんだよな！！」

善吉の言葉を、不知火は逆に驚いた顔で首を横に振り、否定する。

「え！？あたしが！？やだよ！？あたしは親友のあんたが酷い目にあうのを笑いながら見ていたいだけの人間なんだから！」

「お前本当に友達か！？も、もちろん翼斗は手伝ってくれるんだろうな！！なんたって同じ生徒会だし！！」

善吉・・・・・すまん。

『副会長より命令。善吉庶務、あの犬を捕獲・・・間違った保護せよ。』

「こ、この裏切り者ども！！！」

善吉ががあー！と声を上げる。

「ほら、早くしないと犬？がにげちゃうよ♪」

『安心しろ。お前が死んだらお前の骨を日本海に投げてやるから。もちろん火葬して。』

「そういう心配はしてねー！！・・・・・・あーもう！！分かったよ！行けばいいんだろ行けば！！」

俺と不知火の追いうちが訊いたのか、善吉が超しぶしぶ承諾する。

善吉、認めてやろう。お前は男の中の漢だ。

「あ！待って善吉！行くんだったらこれをもっていって！！」

丸腰で捕獲しに行こうとする善吉を不知火が止める。

その手には、ソーセージが握られていた。

なるほど！不知火ＧＪ！！もしかしたら死なずに済むかもしれん！！

「なるほど！こいつを餌付けに使うわけだな！！」

『さすが不知火！いい作戦だ！！』

「んーん全然ちっがーう！！私が考えた作戦わね、「ぎゃあああぁぁ！内臓喰われたぁぁぁーーー！！・・・・と見せかけて実はソーセージでした♪　テヘペロ♪」ってやってほしいの♪」

「・・・そのギャグさぁ、やった2秒後にマジで内臓食われるよな？おそらく内臓どころか跡形もなくなるきがするんだが・・・」

『そんな作戦訊きたくなかった・・・善吉、お前の葬式はひっそりとしてやるから、心配すんな。』

「だからそういう心配はしてねーっつーの！！」

善吉はしゃがみ頭を抱え、そして考えた末決心がついたように立ちあがった。

「・・・・・くそっ！逝くしかねぇか！！不知火！ソーセージかせ！！！」

「ほい♪」

善吉は不知火からソーセージを受け取り、勇敢に化物へ突っ込んでいった。

「うおおおおおおおおお！！！」

そして、跳びかかる。

だが、善吉が捕まえるより先に、化物の牙が善吉の腹へ突き刺さった。

「ぎゃぁぁぁぁ！内臓喰われたーー！！と見せかけて実はソーセーZってマジでぎゃぁぁぁぁ！！！」

『たいちょおおおおおおおおう！！！』

「ああステキ！人吉ってば超ステキ！！！」

そして、南無三。

そんな善吉の勇士を、不知火は笑いながら携帯に保存。

そしてその後、俺の方をキラキラした目で見てくる。

『・・・なんだその目は。俺に行けと言うのか！！あの戦場へ！！？あの太平洋戦争よりも勝率低いかもしれない死地へと！！？？』

「はい♪ソーセージ♪今回は『お○かなのソーセージ』だから成功

するかもよ？」

・・・わかってるさ、ソーセージの品名が変わったって、勝率は変わらないということを。

だが、俺と善吉は・・・・・・親友だ！！！

そんな親友のピンチを見逃せるか！！（さっき見逃したけど）

『わかったよ！行ってやらぁぁぁぁぁぁ！！！』

俺は不知火からソーセージを受け取り、怪物へ全力疾走。

『かかってこいくそ犬！！お前如き俺が一撃で葬ってやるぜぇぇぇぇ！！』

そして、標的を善吉から俺に変える為、挑発。

見事に俺の挑発にかかり、俺に跳びかかってくる怪物。

『・・・見切った！』

俺は怪物の動きを見切り、横に避ける。

そして後ろから手を回し、捕獲するーーーー

だが、怪物の牙が俺の腕へ深く突き刺さった。

はっ！はずれだ！！

『ハッ！そいつは俺の腕に仕込んでおいたソーセージさ！！さぁこれで終わr・・・ちょ、ま、ま、ぎゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

「ああ二人ともステキ！！とってもステキ！！！」

☆★☆★☆★

あの事件から数時間後、俺と善吉はぎりぎり生還し、めだかへ報告しに来ていた。

「・・・というわけで犬を発見したが捕まえられませんでした。」

『善吉違う。捕獲できませんでした、だ。まずあれはもう犬じゃねえよ。なんというか進化のおそろしさを思い知った。』

善吉の報告間違いを俺が訂正する。

「要するに行方知らずになっていた半年間に子犬は成犬になってしまったというわけか。」

成犬じゃないだろ！！あきらかに獣化（ビーストアウト）てきな感じだろ！！

「でもこのままじゃまずいだろ。近いうちに保健所が動き出すぞ。」

「保健所だと？」

善吉の言葉に、めだかの耳がぴくんと動く。

『いや、自衛隊が動き出すね。あれは常人には捕獲できんよ。』

「自衛隊だと？」

再び、俺の言葉にめだかの耳がぴくんと動く。

「ふむ。かわいい犬が保健所や自衛隊によって囚われてしまうとはかわいそうだ。やはりこの件は私が動こう。」

「いいのかよめだかちゃん。相手は動物だぜ？」

『無理はいけんぞ。』

「仕方あるまい。だが私にかかればこんな仕事、すぐに終わる！！」

そして、めだかは立ちあがり、ぶつぶつと何やら言いだした。

なんか頼もしいな。

今なら犬どころか、ターミ〇ーターにも勝てるきがする。

☆★☆★☆★

『で、なんだその格好は？』

めだかに犬の居る所に集合、と言われて来てみれば、めだかは犬のきぐるみを着て立っていた。

「ターゲットに仲間だと思ってもらう作戦だ！動物と触れ合うにはまずこちらが動物の立場にたって考えてみることが大切だからな。」

ああ、もしかして、

『・・・・・なぁ不知火。このお嬢様ってもしかして・・・・』

「気づいちゃった？このお嬢様一周回ってバカだよ♪」

『やっぱりな。』

普通に捕獲用麻酔玉とかシビレ罠とか持ってくればいいんじゃないか？（こいつも馬鹿だ）

「しかし、あれがこんかいのターゲットか。」

俺達は再び結集し、またあの怪物の前に来ていた。

『どうだかぁいいだろ？』

「うむ、かぁいいな。」

冗談で言ってみたらまさかの同意。こいつ何者？

誰が怪物をかわいいって言うんだよ。

そしてめだかがゆっくりと犬へ近づいていく。

そして犬はだんだんと後ろへ下がっていく。

ん？下がっていく？

「さぁ怖くないぞ！！一緒に帰ろうじゃないか！！」

「！！」

めだかがそう言って犬を抱えようとすると、犬はめだかのとこをすっと通り抜け、俺の後ろへと隠れてしまった。

・・・何故？

「ハァ、やっぱりか。」

善吉がそう言って頭をかき、犬をそっとなでる。

『どういうことだ？』

全く納得がいかない俺は、善吉に尋ねる。

「あのな。めだかちゃんが動物を苦手なんじゃなく、動物がめだかちゃんを苦手なんだよ。」

あぁなるほど。

だからめだかは最初から自分でやらなかったのか。

自分が捕まえようとすると、動物が逃げるから。

・・・うん、なんかめだかの後ろ姿がすごく悲しそうに見えるのは、俺の目が悪いわけじゃないんだな。

☆★☆★☆★

「・・・・というわけでポルゾイ君は無事飼い主の元に帰りました。まぁとりあえずは一件落着かなと。」

『え～と大丈夫かめだか～生きてるか～』

めだかはぷるぷる震え、机に伏せている。

「私はあんな可愛いわんちゃんにもなついてもらえないなんて、私はどうしようもなくダメな人間だ・・・・」

なんかかわいそうなので、俺はそっと頭に手を置き、なでる。

『めだか、明日があるさ。また明日から依頼がんばろう。な？』

「うううう・・・・・・翼斗～！！！！」

俺の言葉をきくとめだかは涙をぽろぽろ流し、俺に抱きついてくる。

・・・いつもなら離れろ！っていうとこだが、今回はやめてやるか。

『善吉、頭なでてやってくれ。』

「ホイホイ・・・・・」

第十二話　『そうだ、柔道部へ行こう』

前回のあらすじ？

翼斗「世の中は弱肉強食・・・」

☆★☆★☆★

『・・・周りの同情の視線が痛い。』

今日、私は包帯ぐるぐるでございます。

なぜなら昨日色々と・・・絶対強者と遭遇したからです。

「おう翼斗！お前もやっぱり包帯多いな！」

声がした方を見ると、俺と同じく包帯グルグルな善吉。

『当たり前だ。あんなことで怪我しない奴がいたら連れてこいってもんだ。』

「ああ、実を言うと昨日のあの出来事が夢に出てきてうなされた。」

『俺も。』

二人で昨日の出来事を思い出し、身震い。

「そんなことより翼斗。学食喰いに行こうぜ。」

いい忘れたが、今は昼休みだ。

登校したのはついさっき。理由は・・・・・出てくるんだよ・・・・

あの牙が・・・・

まぁ、その辺は聞かないでくれ。傷が疼く。

『行くか。・・・そうときまればさっさと行くぞ。』

「なぜだ!?」

俺がひそひそ声に変えた理由を訊いてくる。

『あいつがいるだろう。胃袋がブラックホールの俺たちの親友がよ。そいつに聞かれたらおごらされるだろう。いや、ろうじゃなく言いきる。おごらされる。』

「・・・納得。」

二人でうんうんと頷く。

『・・よしじゃぁ急いで食堂h「二人とも～～～！今食堂行くって話してなかったー？」なに！！この距離で訊き分けるとは！！あいつの耳は地獄耳か！！？』

「やばい！・・・いやなんでもない。不知火、今日は弁当だぞ俺等。行くなら一人で行ってくれ。」

善吉が不知火が近くに来たためさっきの話を断る。

「ふーんそっか、じゃぁ仕方ないね♪」

『そうだろうそうだろう、それじゃぁ弁当食べるんd・・・』

・・・・動かない。

この黒穴(しらぬい)微動だにしねえ！！

「おいおいなにやってんだよ不知火。早くしねえと学食無くなっちまうぞ？（汗」

「んーん♪これはちゃんと理由があるのー♪」

『ほう、それはどんな理由かね不知火くん。』

嫌な予感・・・・・

「二人が弁当出した瞬間に弁当喰い漁って食堂行くしかない状況を作ろうと思って♪」

「・・・・（汗」

『・・・・（汗』

こいつ・・・・・鬼か。

☆★☆★☆★

『カーーッ！うめ～～！！やっぱり食堂のカツカレーは美味だＺＥ☆』

「お前よくそんなの毎日食えるよな。お前はカツカレーを極めたのか？」

結局、バレたため食堂にきますた。

俺は毎日頼んでいるカツカレーを一心不乱に食べ、善吉はそんな俺を奇妙な目で見る。

『・・・じゃぁ質問だ善吉。・・・あいつは何を極めた？』

俺が隣でラーメンの５杯目をむさぼり食ってる不知火を指さす。

「・・・あいつはもう人間じゃねえよ。」

ちなみに、なんとか奢りだけは逃れることができた。

・・・次からは対策を立てなければ。

『ん？善吉なんだその紙？』

善吉は既に食べ終え、なにやらいっぱい書いたメモを出して見ていた。

「ん？これはこの学園の全部活のリストだよ。え～と昨日はボクシング部に行ったから、格闘技系はこれでコンプリートだな。じゃぁ次は格闘球技系攻めてみるか。」

そう、善吉は毎日仕事の合間を縫っては部活に仮入部し、そして結局入らないを繰り返しているのだ。

『なぁ善吉。なんでお前は色んな部活に仮入部してんだ？戦闘民族の血が騒ぐのか？それだったらめだかとデスマッチでもしてくればいいだろ。』

「俺はドラ○ンボールに出てくるサイ○人じゃねぇよ！それにめだかちゃんと戦ったら1分も持たねえわ！！・・・特に理由はない。ただ俺の中のルールで一日に5リットルの汗をかくって決めてんだ。」

普通だったらかっちょいいセリフなんだが・・・隣でラーメンをすすっている音のせいで全然しまらない。

そして隣の不知火はラーメンの汁に顔を突っ込み、ズズズズと飲み干していく。

飲み終えて上げた顔は、すごくニッコリしていた。

「あー♪わかるわかる♪あたしも1日に5リットルのラーメンを飲むって決めてるしね♪」

「不知火。ラーメンは飲み物じゃない。」

『お前はもうちょっと行儀よく食えねえのか。』

俺と善吉がすかさず突っ込みを入れる。

「シーザーサラダって野菜ジュースだと思うんだよねー♪」

『お前はインターネットで食べ物と飲み物の違いについて調べてこい。』

「えー？でも『カレーは飲み物』っていう噂を聞いたんだけど？」

・・・確かに訊いたことある。

だが・・・断じて許さん！！

なぜなら！俺はカレーよりもカツカレーが好きだからだ（キリッ

カツカレーを喰わない者は、日本男児にあらず！！！

『カレーなんて邪道だ。やっぱりカツカレー。つまりその噂の結論、どうでもいい。』

「私はどっちも好きだけどなー♪」

「・・・結局結論は出ねえのか。」

☆★☆★☆★

生徒会室の扉を開けると、下着のめだか。

「善吉、翼斗、今日は柔道部に行くぞ。」

そんなめだかを見て善吉は赤面した後、高速の速さで窓を閉め、カーテンをしめ、ドアを閉じカギを閉めた。

はっ、はやい・・・・全く見えなかった・・・

「カギをかけろ！カーテンを閉めろ！人目をはばかれ！何遍言ったらわかるんだ！！」

「？何を言っておるのだ善吉？」

『無駄だ善吉。日本にはこんな言葉がある。「馬の耳に念仏」今がまさにその状態。』

そう、こいつは善吉に何度も注意されているのに全くやめないのだ。

それどころか、

「この肉体を衆目にさらすことに一体何を躊躇う必要があるのだ？」

『こいつは露出狂か。』

なんかおかしい。

そろそろ変態の部類に入るぜ。

『それにしても何故突然柔道部へ？』

「うむ。柔道部部長の鍋島3年生は知ってるな？彼女から目安箱に投書があったのだ。」

「鍋島ってあの特待生の鍋島猫美さんか！？」

善吉が驚くように声を上げる。

ん、俺？

全く知らん人。

『すんまそーん！鍋島って誰？』

「翼斗知らないのか？柔道界反則王と呼ばれた人だ。」

『・・・うわー、異名がせぇーーー』

反則って。

それで勝って何がいいんだよって話。

「部長とは言えもうすぐ引退だからな。そこで私たちに後継者選びを手伝ってほしいそうだ。」

「なるほど。」

『それで俺たちは具体的にどうすればいいんだ？どうやって後継者を決めるんだ？』

「うむ、それは柔道部についてから鍋島3年生に聞こう。」

はい、詳細は不明のようです。

「そういえば善吉、柔道部といえば『あいつ』に会えるんじゃないか？」

「・・・・ゲッ！！」

善吉が嫌そうな顔をする。

まさかっ！！

今度は！！

善吉の元カノか！？

注　翼斗はバカです。

「よし、とりあえず行こうじゃないか！」

楽しみだ。

善吉の元カノ。

注　何度も言いますが翼斗はバカです。

第十三話　『男の口論は醜い』

前回のあらすじ？

翼斗「・・・そうだ、カツカレーを食べよう。」

☆★☆★☆★

「やーやー！ようこそいらっしゃいました！ウチが差出人の鍋島猫美でっす！本日はどーぞよろしく！」

柔道場に入るととたんに女の人に歓迎される。

あれが部長の鍋島さんとやらか。

どちらかというと弱そうなんだよな。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらおう！」

そしてめだかは上級生なのに敬語を使わず、応える。

・・・ていうか一応敬意は払えよ。

「うんうん。頼りにしてるで生徒会長！」

そう言って二人は固い握手を交わす。

いや固いかはわからんが。

「あれが反則王と呼ばれた鍋島さんか、優しそうな人だな。」

『確かに。俺の予想では『何しに来たワレ！？死にたいかゴラァァ！』みたいな感じだと思ったんだが。入った瞬間襲われるんじゃないかとひやひやしたぜ。』

俺の考えを率直に言うと、善吉がなんかこう・・・・憐れむような視線で見てくる。

なんだ？俺なんかまずい解答でもしたか。

「・・・翼斗、さすがにそれはないわ。そのしゃべりかただと男だしそいつ。それに昔のヤンキーっぽいし。」

『それであいつって誰だ？善吉の元ｋ「し・つ・こ・い！！！」げろしゃぁ！！』

俺は善吉がくりだしたパンチを避けられず、顔面に直撃。

なに・・・？この前よりも威力が上がっているだと！？

『いつつ・・・じゃぁ誰なんだよ？』

「う～んとまぁすぐわかる。」

俺は痛む顔をさすりながら善吉にきくが、もったいぶって話してくれん。

「あ、そういやジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。阿久根！阿久根クン！」

そう鍋島先輩が呼ぶと、さっきまで練習していた人がこっちに来る。

「・・・・・あいつだよ。」

『ほーあいつが・・・・・』

善吉がいやいやそう言う。

顔を見ると・・・・イケメンだった。

イケメンだった！

イッケェメェンだったぁぁぁぁぁぁ！！！

死ね！！！

イケメソは全員死ね！！！

・・・ふう、とりみだしてすまん。

「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にあなたに会いに行くのは迷惑になると控えておりましたが、あなたとの再会を心待ちにしておりました。」

「硬苦しい真似は止せ阿久根2年生。貴様ほどの男がそのように振舞っては示しがつくまい。」

阿久根先輩がこう・・・なんか・・・王に仕える庶民（これを見て都城先輩を思い出したわ）みたいな感じで挨拶していたため、めだかがそう言う。

「いえ、このような振舞いを恥とは思いません。今の俺があるのはあなたのおかげです。めだかさんには感謝してもしきｒ「私に感謝してるのならば頭を下げるな！もっと胸を張れ！！」

「は、はい！！めだかさんの御心のままに！！」

最初はめだかに大声を出されて驚いていたが、すぐに赤くなる。

・・・なんかこの人「ありがたき幸せ！！」とか言いそうで怖いんだけど。

「おっと再会を喜んでる場合ではないな。生徒会を執行せねば。後継者、つまり新部長の選定だったな。とりあえず貴様は特別枠だ阿久根2年生。善吉との再会を楽しんでくるがよい。」

阿久根先輩はめだかに深く礼をし、ニコニコしながら移動するが、善吉を見たとたんいきなり嫌そうな顔になる。

あ、二重人格っぽい。

「久しぶりだね。えーっとキミ誰だっけ？」

「人吉善吉クンですよ。ところであなた一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出してる

ようだな。言っておくがめだかさんの支持率が１００％に達しなかったのは１００％キミのせいだぞ！」

「カッ！あんまり意地悪言わないで下さいよ！有名な柔道界のプリンスさんが下級生いじめなんてファンの子が知ったら泣いちゃいますよ？」

み・・・醜い。

男の口論ほど見苦しいほどはないよエ〇ゴリくん。

それに、いずらい。

何故かというとな・・・

構図が

善吉（越えられない壁）阿久根先輩

オレ

なんだよ。つまり俺の目の前で醜い争いが繰り広げられてる。

なにこのドロドロした昼ドラみたいなの。

「ところでキミは一体d・・・・・あぁ！新しく副会長になった人か！」

『どうも。榛原翼斗と言います。少しでも生徒会長の負担を減らすためがんばるのでよろしくおねがいします。』

最初は変な目で見ていたが、俺が話し終わる頃にはニコッと笑っていた。

「柔道部の阿久根高貴だ。こちらこそよろしく。」

『よろしくお願いします、阿久根先輩。』

そうして俺と阿久根先輩は握手を交わす。

うお手の筋肉すご。

「・・・・いやぁそれにしても翼斗クンは行儀が良くていいなぁ。キミと違って！」

「カッ！そんなことないですよ！俺も十分学園の為に努めてるし行儀m「ぎゃぁぁ！」

再び醜い争いをした二人の前に、人が降ってきた。

・・・今日の天気は晴れのち人か。

鉄パイプを買ってかなきゃな（なぜ？）

振ってきた方を見てみると、めだかに倒されたであろう人がピラミッド上に積んであった。

それにしても全滅かよ。後継者選びどうやってやるんだよ！

「さすがだなめだかさんは。中学生の頃よりさらに輝きが増している！」

阿久根先輩がその光景を見て感動したように話す。

『まぁ当然でしょう。なぁぜんき・・・・っていねぇし！』

善吉に話しかけようとしたがいなかった。

なんかあっちで部長さんと話してるし。

ちょっと参加してこようかな。

『善吉ーなんの話し～？リサイクルの事ならなんでも訊いてくれ。』

「いや誰もゴミ問題の話してねえよ・・・」

「ん？キミが新しく副会長になった翼斗クンか。」

鍋島先輩が俺をなめるような目で見る。

『はい。これからよろしくお願いします。・・・で、なに話してたんだ？』

「今俺の波乱万丈な人生について話してたんだよ。」

・・・波乱万丈？

じゃぁこいつはピーーーーされたりピーーーーされた俺よりも波乱万丈な人生だというのか！？

「それで俺が生徒会に入ったのもほぼ強制というか無理矢理なんですよ。」

「そうか無理やりとほざくか。だったら俺が変わってやろうか？」

そこへ阿久根先輩が介入。何故か語尾が強い。

「思いつきで言ってるわけじゃない。めだかさんの同情心に免じてこれまで見逃してきたがさすがに潮時だろう。それに何もできない虫とはいえキミももう高校生だ。そろそろ独り立ちするべきじゃないのかい？」

「独り立ちできてないのはどっちですか。何もできない？変な変態をめだかちゃんに近付けないことくらいはできますよ？」

罵倒、罵倒、罵倒。

・・・・醜い。

非常に醜い。

男の口論ほどｍ（ｒｙ

「まーまーケンカはやめーや二人とも。ここは神聖な柔道場やでー？」

口論をしている二人の間に、鍋島先輩が仲介に入る。

「ここは柔道場やしどーや？ここで柔道で決着つけるゆーんは？阿久根クンが勝ったら生徒会に入り代わりに人吉クンが柔道部に入って次の部長になる。」

・・・いや勝てねえだろ。

「鍋島先輩まさか最初っからそのつもりで投書したんですか！？」

「うん！人吉クンみたいながんばり屋さんはウチはめっちゃ好きなんよ！」

さて、善吉の勝つ確率はおそらく結構低い。

どう戦うのかな？

この戦い、見ものだ。

第十四話　『昨日の敵は今日の同士』

前回のあらすじ？

翼斗「最近俺がメインの話ないなぁ・・・・どういうことだ作者！！！」

作者「仕方ないじゃない原作通りに（とりあえず）いってるんだから。」

☆★☆★☆★

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式！！無制限十本勝負　対　無制限一本勝負！　阿久根クンに十本とられる前に一本でもとれたら自分の勝ちや人吉クン！」

鍋島先輩がルール説明をする。

もう善吉と阿久根先輩は柔道着に着替えて対峙している。

それにしても・・・・

これ勝てるのか？

柔道の経験者（しかもかなりできる！）と未経験者の戦いだぞ？

例えるならば大食い大会で何度も優勝したことある人と、そこらへん歩いていた「自分大食いっすよ。」って言い張っている人との戦い。

「フン！尻尾をまいて逃げなかったことだけは褒めてやろう。ああ、でも虫に尻尾はなかったか。」

相変わらず阿久根先輩が善吉を罵倒。

「なんですか、逃げるってアリだったんですか。先に言ってくださいよそういうことは。」

「逃げる？そうなものアリなわけなかろうが。」

めだかが汗一つ流さずサラッと言った。

ていうかこんだけ倒して汗一つ流さないって・・・

「誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け入れる！如何な内容でも如何な条件でも！如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会だ！！そうだよな翼斗！」

はい無茶ぶり～～～！？

『え、ちょ・・・ま・・・・ああ！！だから負けんなよ善吉！！けど負けても（俺は）責めない！！』

「人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん！しかし逃げることは許さんぞ！」

さすがにここまで言われたら逃げれんぞ善吉。

いや、逃げ切れるがたくさんの物がなくなるぞ。

プライドとか。

めだかからの信頼とか。

「・・・カッ！そんなことわかってるよ！こちとら最初っから勝つつもりだから安心しろ！！」

「それでは始め！」

柔道部の誰かの掛け声で、試合が始まる。

「先手必勝！」

先手は善吉。

一瞬のうちに近づき、阿久根先輩の襟を掴む。

「・・・・・ハッ！」

だが、掴んだ手を阿久根先輩が掴み、そのまま一本背負い。

「一本！！」

早くも一本とられたぞ。

まぁ、当然っつっちゃあ当然だね。

「・・・・・いや～それにしてもさすが阿久根クン、綺麗な一本や

なー。」

『さすが柔道界のプリンスと言われてるだけありますよね。』

「本当や。後の先取らせたら右に出るものはおらんわ。・・・・・・ホンマ天才的でつまらん柔道や。」

鍋島先輩は最後をがっかりしたように呟く。

『・・・・・随分天才が嫌いなようですね鍋島先輩。』

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんや阿久根クンのこともな。才能を努力で踏みにじりたぁてウチは柔道をやっとんのよ。」

なるほど。

才能でここまで勝ち上がってきた人を努力で勝ちあがってきた自分が、負かしたいのか。

なんと、感動。

「うむ。さすが柔道界の反則王は言うことが違う。」

「ま、黒神ちゃん天才は天才同士、凡人は凡人同士でつるもうやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんかし人吉クンくれや。」

「ふむ、ならば安心しろ鍋島3年生。天才などいない。あと善吉はやらん、かわりに翼斗を自由に持って行ってくれ。」

『なにそのよくある無料の雑誌みたいな感じ！結構傷つくんだけどこれ！！』

普通な流れで言われた。

なんか遠まわしに俺なんかいらないって言われた・・・・

じゃぁ俺なんで生徒会入ったんだろう・・・・

「う～ん・・・・ちょっと翼斗クンはいらんわ。」

『しかもめっちゃ毛嫌いされてるし！！』

しかも鍋島先輩にまで必要ない扱い。

もう心折れそう。

「ふむ。なんでいらんのだ？」

「天才には天才、凡人には凡人の匂いがあるんやけど・・・・」

『？』

「翼斗クンからは今まで嗅いだ事のない匂いがすんねん。それに微かに天才の匂いもする。」

ほぉ、なかなかやるなこの人。

初対面から少したっただけで見抜くとは・・・

確かに俺は人とは少し違う。そこらへんの天才ともな。

「ということでいらんわ。ごめんな翼斗クン。」

『気にしないでください。』

なんかそうこうしてるうちにもう善吉9本とられてるし！

善吉、お前が負けると色々困る。

お前がいなくなったら誰が不知火の奢りをするんだよ！！

だから勝てこの野郎！

「善吉！！」

ここでめだかが一際大きな声で善吉を呼ぶ。

「いつ如何なる場合においても私は貴様に負けるなとは言わん！！・・・だから勝って！！」

ここで、今までの人格を全否定するうるうる目&小動物っぽい泣きそうな顔。

「貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！困るぞ！泣いちゃうぞ！！」

・・・なんかめっちゃ目ウルウルしてるし。

でもこれはこれでかわいいなめだか・・・・・

う・・・・イカンイカン。

「う・・・・・あ～もうわかったよ！お前の泣くとこなんて見たことねえし、見たくもないしな！！」

「な、なに！？」

一瞬のうちに善吉は阿久根先輩の足を掴み、そのまま倒す。

俗に言う、双手狩り。

「一本！勝者、人吉善吉！！」

そして、善吉の勝利が告げられた。

『すげえな・・・あんな技いつ覚えたんだ？』

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝ってしもうた・・・・いやそれよりウチも双手狩りならウチもよう使うけど人吉クンはあんなにも綺麗に・・・・」

鍋島先輩は、驚愕を隠せずにいるようだ。

「綺麗も汚いもないし天才も凡人もいない。いるのはただ懸命な人間だけだ。私も貴様も何も変わらんよ。」

そこへ、善吉が戻ってきた。

さぁ、勝者を手厚く歓迎しようじゃないか。

『ぜぇんきぃちぃちぃ！！』

「おう翼斗・・・勝ったぜ。」

喰らえ（？）！！

俺がひそかに練習していた奥義！！

『ラリアットォ！！！』

「げふっ！！！」

よし、首に直撃。

それにしてもいい威力だ。

試合に勝って有頂天になっている善吉に鉄槌を下せたな。

「うちょ・・う・・て・ん・・・になって・・・ねえ・・・・」

☆★☆★☆★

「善吉がそんな目にあってたんだー♪」

次の日。今俺は善吉となぜか不知火と一緒に生徒会室に行こうとしてる。

『ああ、試合が終わった後誰かにラリアットされるとか大変だったんだぜ。』

「いやそれお前だがな。」

善吉が鋭くつっこむ。

む、もうちょっと技の改良が必要だな。

『そんなことよりさぁ、柔道部の後継者問題はどうなったんだ？、結局。めだかが全員ブッ倒したから、めだかが部長とかっていう落ちないよね？』

「あるか馬鹿。・・・めだかちゃんの推薦で城南って人が継ぐことになったようだぜ。鍋島先輩もこれで俺のことはあきらめてくれるはずだしな。」

・・・いや、あの人ならあきらめるきはないと思うんだけど・・・・

という言葉は心の中に取っておこう。

『そうだといいがなぁ。ああいう手の人はしつこいからなぁ。振り込め詐欺並みに。』

「どういう比べ方だよそれ。」

「それでさぁー♪プリンスはどうなったのー？」

どうなったってなに。

なんかあったの？

「さぁな。風の噂で柔道部やめたとか聞いたけどな。まぁ俺にはもう関係ね・・・・・」

そう言いながら善吉は生徒会室の扉を開ける。

そこでは、阿久根先輩が当然のように着替えていた。

「あー！な、なんでお前がここに居るんだ！！」

「ン？あぁ人吉クンか。キミを追い出すのはあきらめたが俺はめだかさんをあきらめたわけではないのでな。許可をもらってきた。」

なんて執念。

ん？許可？

『何の許可ですか？』

そう俺が言うと阿久根先輩は服の下から腕章を取り出し、自分の腕に通した。

「本日生徒会執行部書記職に任命された2年１１組の阿久根高貴だ。よろしくお願いします。先輩！！」

な・・・んだと・・・・

許さん！！

イケメンなど断じて許さん！！

「『ふ、ふざけんなぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』」

生徒会室に俺と善吉の声が響き渡った。

第十五話　『行く先行く先で誰かが襲われる』

前回のあらすじ？

翼斗「阿久根は仲間になりたそうにこっちを見ている・・・」

☆★☆★☆★

おうみんな。バナナはおやつだと思う榛原翼斗だ。

・・・・ちなみにスイカも超ぎりぎりおやつだと思う。

あ、ちなみに俺スイカよりメロン派。

まぁ、その話は今どうでもいいな。

さて、今の時間はちょうどお昼だ。

・・・そろそろ来るな。『あいつ』が。

「翼斗ーーーー♪一緒に食堂行こ『断る。』

そう。ブラックホールこと、不知火だ。

だが今日こそはおごらねぇ！！

なぜなら秘策を考えてきたからだ！！！

「なんで？ご飯食べないの？」

『・・・・・俺は今日弁当だからな。』

秘策その一！

・弁当をもってくる。

残念ながら前回の反省も生かし済みだ。

今回はきちんと持ってきている（キリッ

これで食堂に行く必要はない。

「弁当じゃ足りないんじゃないー？」

俺の秘策の穴場を見つけようとする不知火。

だが・・・今回の俺の作戦に穴場などない！！

『フッ残念だ不知火。俺は今日がっつり持って来てる！人から見れば「うわなにそれ多っ！」って言われるくらいな！！』

秘策その二！！

・無駄にがっつり持ってくる。

フ・・・・フハハハハ！！

完璧だ！我が秘策は完璧だ！！

見ろ！不知火が赤子のようだ！！

と一人ガッツポーズをしている俺の耳に、ある一つの物音が聞こえた。

ズルルル・・・・・

ん？なんの音だ？

俺の目の前を見てみると、

「・・・・ふー！あーおいしかったー♪」

不知火が俺の弁当を食べ・・・いや飲み干していた。

『あああ！！慣れない手つきで早起きしてまで作った俺の弁当が！！！』

「翼斗～食堂行こー♪　　ニヤリ」

ま、まさかこれが奴の作戦だというのか！！

俺が持ってきた弁当を食い、食堂に行くしか道をなくす。

く、くそ！！や、やられた！！！

な、なんとか突破口を・・・・・・

～２０秒後～

『し、不知火さん。食堂行きましょうか。』

「計画通り。」

こうして俺のお金たちが天国へと旅立った。

さらば、野口達。

☆★☆★☆★

くそが・・・・・お金がどんどん戦場へ逝っていく・・・・・

これこそ対策を考えなくては。

衛生兵（善吉。身代わりだよん♪）を投入するしかないのか・・・？

ん、あぁそれどころではない。

今日も生徒会の仕事を頑張らなくては。

俺は明日どうしよう・・・とため息を吐きながらも、生徒会室の扉を開けた。

そこは一面お花畑だった。

あ、フラワーマスターさんが居そうなほどではないよ？

注意　×お花畑　　○花瓶だらけ（花瓶だらけなだけです。向日葵とかないから。）

「う～ん、しっかしもういっぱいいっぱいな感じだな。そろそろ部屋の外に出してかねーと。」

『おう善吉。お前ガーデニングに目覚めたのか。乙女だな～』

「お前は相変わらずバカか。・・・めだかちゃんがな案件をひとつ解決するごとに花を一輪飾ろうって言ったからだ。」

・・・・・何故！？

何故なのか全くわからん！？

俺がめだかの考えに悶絶しているとき、生徒会室の扉が開いた。

「やあ人吉クン、今日も雑用雑務に精がでるね。俺は君の事を害虫だとばかり思っていたが花を育てているところを見ると益虫なのかな？」

来た人は、昨日生徒会へ入ったばっかりの新米野郎、阿久根高貴だった。

なんで胸元露出してんだよ・・・パクリか？

『なんで胸元を露出させてるんですか？俺の真似ですか？』

「フッ！俺は生徒会の一員として生徒会長のめだかさんを見習うべきだと思ってな。だから俺もめだかさんのように胸元を露出する！！」

そう言って阿久根先輩はもっと胸元を露出させた。

「サ、サタンカッケェ！！」

そんな阿久根を見て感嘆する善吉。

なにこのカオス。

再び生徒会室の扉が開く。

「みんな。今回も目安箱に投書があったぞ。」

次はめだかが、投書を持ってきた。

『今回はどんな内容だ？』

「善吉。開くんだ。」

「わーってるよっと。えーっとなになに・・・・・『手紙の代筆をお願いしたい』だそうだ。」

今回も俺の出番はなさそうだな。
え？なぜかって？

そんなの決まっているじゃないか。

俺字汚いから！！

『めだか。今回は俺の出番はなさそうなんで帰らせてもらおう。』

「ふむ？何故だ？」

俺の言葉を聴いて善吉が「ああ！」と声を上げる。

「めだかちゃん。こいつ字がめっちゃ汚いんだよ。こいつのノート見たら「暗号！？」って思ったからな。」

『なんだよわりぃか？字が汚かったら悪いか？字は汚くても気持ちがこもっていればいいんだよそれで。』

めだかは少し考えたあと、「ふむ。」と声を洩らした。

「仕方ない。最近疲れているようだしな。今日は帰っていいだろう。」

よっしゃぁぁぁ！

帰って寝よう！！

「そのかわり今度私と一緒に字の練習をしよう。」

『お断りいたします。』

☆★☆★☆★

『さ～て帰りコンビニでも寄って行こうかな。』

「や、やめてください・・・・・」

「い～じゃん少しくらいよ～」

俺が帰りにコンビニよろうとのんきに歩いていると、路地から嫌がる女の人の声とヤンキーっぽい人の声が聞こえた。

ん？前にもこんなことあったような気がするぞ？

ていうかここ最近こういうこと多発している気がする・・・・

え、何そのコナ〇君状態。

まぁ、でも見逃すのも味が悪いよな。

と、いうことで。

『行ってみよう、やってみよう。』

そして俺は声が聞こえた路地を目指した。

第十六話　『第六感はよく当たる』

前回のあらすじ？

翼斗「俺人助けたらこう言うんだ・・・『通りすがりの、成金野郎さ！』ってな！！」

☆★☆★☆★

どうも、翼斗っす。

いや～今日も平和だね～～

「なんだ貴様？その女を助けようようってか？」

「火火火！飛んで火に入る夏の虫ってか！？」

平和だね（笑）

なぜこうなったかというと・・・・まぁ、ひらたく言えば前回のあらすじ。

回想中・・・・・

『！逝くしかねぇ！！』

『おいやめろお前ら！！襲うなら男を襲え！！』

回想終わり・・・・

っていうわけ。

あの後のシーンとした雰囲気は正直死ねる。

「お前・・・やめておけ。どうせ返り討ちにされるだけだ。」

リーダーっぽい人がそう言う。

『残念ながら俺は効かん坊でね。それに、一つ間違ってる。やられるのはおm「オラァァァ！！」せめて全部言わせて～！！』

俺のかっこいいセリフ（自称）を遮られたのでちょっとイラついた。

まぁ、金属バットをもって跳びかかってきたよ、うん。

『うお危な！』

それを俺は普通に避ける。

大したスピードじゃなかったしな。

「馬鹿か、お前。数では俺らが有利なんだ。全員で襲いかかればいい話だろ。」

そうリーダー？さんが言うと俺等の前に居た人たちがじりじりと近寄ってくる。

数は・・・・１０以上居るか。

この人を守りながら戦うのは無理だな・・・

なので・・・・

『逃げるが勝ち！！』

俺は女の人の手を取って逃げ出した。

「な！？まちやがれ！」

数秒遅れてヤンキー達も俺の跡を追う。

逃げ切れる逃げ切れないの前にここは狭い。

とりあえず路地からでるか・・・

☆★☆★☆★

結構走ったな。
そろそろ女の人を逃がさないと・・・・

『さぁ。あなたはここで逃げてください。』

「あ、ありがとうございます！」

女の人が俺に礼をして逃げて行った。

よし、なんとか女の人を無事に逃がせたな。

あとは・・・・・

おしおきだな。

☆★☆★☆★

俺は今さっき居た路地に居る。

あの変な奴らも一緒にだ。

「火火火！！わざわざ戻ってくるとは！！」

「・・・・・やれ。」

リーダー？の指示によって、１０数人がいきなり襲いかかってきた。

残念だな。お前らじゃ俺の足元にも及ばん。

俺は頭の中であれを思い浮かべる。

そして次の瞬間、俺はあいつらの視界から『消えていた』

「何！？消えた！？」

「どういうことだ！」

ヤンキーが混乱している間に、あいつらの後ろに移動し、

『せあっ！』

「がぁっ！！」

一人を思いっきり殴った。

・・・・結構な音したな。俺そんなに強くなってたのか。

「何だ！？何が起きてる！？」

目の前で仲間が突然やられ、ますます混乱するヤンキー。

なぜ、俺の姿が奴らから消えたのか、

答えは簡単。

俺の異常、『完璧限定（オールオーバー）』を使ったまで。

『完璧限定（オールオーバー）』は相手の異常をコピーし、まるで最初から持っていたように十全に使うことができる。

それで日之影先輩の異常をコピーした。

一発で敵を倒す方法もあったんだがな・・・・

『さ～て、悪いことする不良さんには正義の鉄槌を。』

☆★☆★☆★

俺は血に染まった拳をふるった。

『ハッ！』

最後の一人が俺のパンチを受け、地に沈んだ。

・・・・・・終わりか。

俺は異常を解除した。

『ん～・・・・・・』

ちょっとやりすぎたかな。

いや。こんくらいでちょうどいいだろう。

あ、もちろん死なない程度どころか1週間で治る程度の怪我にしてます。

『さ～て帰るか。』

夕飯を作ろうではないか。

今日は何にしようか。

それにしてもいいことした後は気持ちがいい。

「待て！」

『ん？』

そこには不良？っていうか暴走族の頭(ヘッド)的な人がこっちを見ていた。

「俺らは喧嘩に負けた。」

え・・・

なんか嫌な予感する・・・・

俺の第六感が悲鳴を上げている・・・・

「だから俺らの頭はこれからお前だ。」

『ハ？』

「だから、俺らはこれからお前の舎弟ってことだ。」

マジ？（・・？

俺ただ困っている人を助けただけなんだけど。

ていうか俺不良でもなんでもない健全な男子高校生なんだけど。

「「「「「「これからよろしくお願いします！！！」」」」」

頭以外の人が全員頭を下げて言った。

ちなみに話を聞くと、あいつらは暴走族の「レッドサターン」だそうだ。

・・・・・・ネーミングセンス悪っ！！！

・・・・・ということで。俺これから頭っす。

・・・・・・何故こうなった。

第十七話　『何事も効率が大事』（前書き）

作者「まえがきタァァァァイム！！」

翼斗「わー（棒）」

作者「今回はお知らせがいっぱいあるんだぜいぜいぜい！！」

翼斗「どうでもいいけどテンション高すぎ。」

作者「まず一つ目！今回の話まで日にちがあいたのは作者が風邪ひいたから！」

翼斗「はい作者の健康管理のせいですね。」

作者「そして二つ目！感想を書いてくれたしょうゆさしさん、リョウタさん！ありがとうございます！」

翼斗「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ！」

作者「最後に三つ目！！お気に入り１００突破したぜぇぇぇぇ！！！」

翼斗「本当ありがとっす！」

作者「ということでこれからも応援よろしくお願いします！」

第十七話　『何事も効率が大事』

前回のあらすじ？

翼斗「アンパーンチ☆」

☆★☆★☆★

朝。

早速だが俺は朝から忙しかった。

正月の神社並みに。

なぜなら・・・

『・・・・くそが～～～！多いんだよ！！』

前回を思い出してほしい。

そう、俺はレッド・・・・・なんだっけ？

まぁいい。レッドなんちゃらの頭になったんだ。

あいつら全員で２０人って言ってたなぁ・・・・・

とりあえず頭だからとか言われて俺の携帯に全員の番号入れたんだ。

まぁそこまではいい。

そこまでは。

今更何で頭になっちまったんじゃぁぁぁぁぁぁぁい！！って嘆いても何も変わらんし。

問題は次だ。

ためしに全員の電話番号が全て入っているか確かめてみたんだ。

すると・・・

『ふざけんなよ！！なんで全員の名字が「か」からはじまるんだよ！』

「か」行に全員の名前が入ってた。

『くそっ。データ重くなったじゃねえか・・・・全く。』

・・・・・まぁ終わったことで悩んでいてもしょうがねぇ。

遅刻すると面倒だし学校行こう。

とりあえず携帯しまって準備速攻でして玄関の扉を開けた。

「「「「「「おはようございます！！」」」」」」

開けるとむさ苦しい男軍団。

俺は無言でその扉を閉めた。

『んー、なんだ。俺は出ていくタイミングをミスったんだな。そうだ、そうに違いない。』

無理やり自分にそう言い聞かせ、念の為目をゴシゴシこすって再び扉を開けた。

ｎｅｘｔ　ｔｒｙ！

「「「「「「おはようございます！！アニキ！！」」」」」」

やっぱり夢じゃなかったみたいだよ。やったね、たえちゃん。

ほら今の大きな声で近所の人出てきたじゃん・・・・・

早くも変な目で見られてるし・・・・

俺の評判バイバイ・・・・

『なぁおまえら（笑顔）』

「「「「「「へイ！なんでしょう！？」」」」」」

『全員帰れ。（笑顔）』

「「「「「「・・・・・・・・へイ。」」」」」」

とりあえずイライラしたんで笑顔で帰れって行ってやった。

そう言うとみんなが俺に背中を向け悲しそうに帰っていく。

・・・・いんやいんや、俺なんも悪いことしてない。

だって俺玄関の前に来てた不審者追い払っただけだもん。

・・・・っていうかそろそろ学校いかねぇとマジやばい！

『よし行こう。』

「「「「「「アニキ！！焼そばパン買ってきましたぁ！」」」」」」

俺が改めて行こうとすると遥か後方からあいつらが走ってきた。

やべぇ！！

めっちゃカオスだぞこの光景！！

こんな奴らと一緒にいたくない！！

『さよなライオン！！』

俺はおそらく生まれてきて一番の速さで走った。

走ってる途中に思った。

・・・・俺こんなに足速かったんだ。

☆★☆★☆★

『疲れた・・・・・』

ｉｎ学校。

俺は席についてレッドなんちゃら全員に「もう玄関で待つな」というメールを送る偉大な作業を終えた。

『こんなに疲れたのは初めてなんだヨー、だれかご褒美くれヨー。』

「やっほー♪翼斗ー♪」

・・・このタイミングでは一番会いたくないやつダントツのＮｏ．１がきやがった。

え？めんどいから。

『不知火。居てもいいが俺に近寄るな。俺は群れない孤高の一匹狼だ。』

「言ってること見事に矛盾してるね♪」

『む、本当だ。』

俺としたことが。

「おう翼斗。おはよう。」

ここでまさにナイスタイミングで善吉が登校してくる。

よし、こいつを擦り付けよう！！

『善吉。この不知火サンがお前と漬物談義したいだってよ。』

「「なに馬鹿なこといって（るの？）（るんだ？）」」

チッ、話題のチョイスをミスったか。

「ていうか翼斗。お前めっちゃやつれてねぇ？」

「あーわかるー♪アタシも最初見た時ネギみたいだったもん♪」

『いや不知火それはない。いやそれがさー、２０人にメール送ってたんだよ・・・・・』

俺の言葉を訊くと、善吉がちょっとひいた。

「なんでだよ・・・・・・・」

「全く意味不明だね♪」

ったく貴様ら・・・・・・俺の苦労も知らないで・・・・・

『なめんなよ！！俺一人ずつがんばって送信したんだぞ！！このつらさがお前にわかるか！！』

「馬鹿だな、こいつ。」

「うん♪一斉送信使えばよかったのにね♪」

なん・・・・だと。

そんな便利な機能がこの携帯には搭載されていたのか！！

・・・くそっ、無駄な時間の浪費。

『・・・・・っあもう！今日は寝る！！』

「『今日は』じゃなくて『今日も』でしょ？アヒャヒャ♪」

『黙らっしゃい！！俺はもう寝るんじゃ！！』

キーンコーンカーンコーン

俺はチャイムと同時に眠りについた。

☆★☆★☆★

「・・・・・・・・起きて！！」

『・・・・・なんだよ・・・・・』

そんな声が聞こえた気がした。

そして俺はゆっくりと目を開ける。

『っ！！』

そこには見たことない世界が広がっていた。

第十七話　『何事も効率が大事』（後書き）

翼斗「え、なに？まさかの異世界行っちゃったってこと？」

作者「バカ、アホ、クズ、ゴミ、死ね。」

翼斗「バカって言った方が馬鹿なんだぞ！！馬鹿！！」

善吉「アホな会話だな・・・・」

第十八話　『知らない人からは物をもらわない』

前回のあらすじ？

翼斗「特に何もなかったＺＥ☆ただ俺が寝ただけ☆」

☆★☆★☆★

「起きて！」

そんな声が聞こえたようなきがしたので、俺は目を開ける。

『はいはい起きますよーっと・・・・』

起きた俺の目には、見たことない白い世界が広がっていた。

『どこだここ・・・・・』

確か俺は・・・・・ネタｗｗｗ

『まさか俺は永眠したのか？それだったらすげぇ俺アホだなｗｗ』

「いや、そんなことはないよ。人は死んだら無の世界へ行くのさ。つまりまだ翼斗君は死んでいないさ。」

『！！』

俺が振り向くと知らない少女が居た。

すまん、少女よりもぎりぎり美女かな。中学生っぽいし。

ていうか誰だこの人・・・・・

っていうか死んでいないってことはここは俺の夢の中なはずだ。

こいつはどうやってここへ入った！？

「その通り。ここは君の夢の中さ。」

『・・・・・・』

こいつ・・・・・心を読むのか？

最近の女はこわいな。

『お前・・・・どうやってここへ入った？』

「簡単なことさ。僕の持つささやかなスキル『腑罪証明（アリバイブロック）』を使ったまで。このスキルのおかげで僕はいつでも好きな時に好きな場所にいられるのさ。」

なるほどな。

こいつも異常か・・・。

『まぁいいや。そんなことよりお前は何しに来た？わざわざ俺の夢の中まで侵入しちゃってさ。俺に何かようか？』

「なぁに。たいした様じゃないさ。」

こういう場合はたいてい面倒くさいことをいうんだよな。

「がんばってる翼斗君の為にちょっとした贈り物をしようと思ってね。」

『なにをくれるんだ？お菓子でもくれるのか？』

「君に僕のスキルを一つあげよう。」

・・・・・ってことはさっき言った『腑罪証明（アリバイブロック）』ってやつをくれるのか？

「残念だけどそれはあげないよ。僕のお気に入りだからね。」

また心を読みやがった。

個人のプライバシーがあるんだぞ。

少しは自重しやがれ。

「君にあげるのは『幻想実現(ドリームアウト)』というスキルさ。」

ドリームアウト？

「このスキルは自分が考えた異常(スキル)を実際に『作って』自分のスキルとして『使う』ことができる
」

・・・何そのチート。

このスキルがあればどんどん自分の異常が増えるじゃないか。

「だが一つ注意だ。」

そう目の前の女は俺の顔の目の前へ近づいて言った。

「一度使ったスキルはもう『無くす』ことはできない。つまりどんどん増えていく。そしてスキルを一つ作るごとに君の寿命は1年ずつ減っていく。つまりスキルを作りすぎれば一気にあの世行きさ。」

『つまり考えて使えってことか。』

「そういうことさ。」

だが一つ疑問だ。

『なぁお前。なんで俺にこんなことをするんだ？自分の貴重なスキルだろ？』

「なぁに僕のスキルは何京個あるんだ。ひとつくらい痛くもかゆくもないさ。」

な、何京個！！！？
こいつ人間か！？

「ただ、スキルを一つ上げる代わりにお願いがあるんだよね。」

ホレキタ。

「これから起こる出来事を一つも欠かさず『見て』ほしいんだ。」

『見る』？

それにこれから起きる出来事ってなんだ？

『そんなことをしてもお前の得がないだろ？』

「楽しいじゃないか。それに君が見てるものは僕の『欲視力（パラサイトシーイング）』というスキルで見ることができるからね。」

なんだと・・・・・・

つまり俺が風呂で自分の体を見たらあいつにみられることと同じか！？

畜生俺のプライバシーが・・・・・・

「まぁ関係のないところでは見ないようにするよ。プライバシーもあるしね。」

ふぅ、俺の身体は守られた。

「それじゃぁスキルをあげるよ。」

『おう。』

そういうと目の前の女はずんずんと俺へと近づいてくる。

『ちょっと待て！お前は何をするつもりだ！？』

「？何って先ほど言った通りスキルを上げるだけだけど？」

『なら近づくことはないだろうが！』

「近づかなきゃできないんだよ。」

う～む、それじゃぁ仕方ないか。

「それじゃぁ準備はいいかい？」

俺の顔の目の前へ再び顔を移動させ、眼の前の女は訊いた。

『お、おう。』

そういうと・・・・・

だんだんと彼女の顔が近づいてーーーーー

「ンッ」

『むぐっ！』

俺の唇と、彼女の唇が重なった。

いわゆるキスだね、うん。

畜生俺のファーストキスがこんなわけわかんねぇ女だなんて・・・・

「・・・・ぷはっ。それじゃぁ確かに今の『口写し（リップサービス）』で渡したよ。君の新しいスキル」

そうか。じゃぁそろそろ起きるか。

『どうやって夢からさめればいいんだ？』

「君が念じればいいだけさ。」

そうか。じゃぁ起きるか・・・・・・とその前にと・・・・

『おい！！お前の名前は？』

「・・・・そういえば行って無かったね。僕は安心院なじみ。ただ平等なだけの人外だよ。」

全く意味がわからないんだが・・・

『俺の自己紹介は・・・・必要あるか？』

「ないよ。榛原翼斗君。」

さっきから思っていたがなんでこいつは俺の名前知ってんだ？

・・・・まぁいい。どうせなんか使ったんだろうし。

『まぁいいか。それじゃぁな。』

「うん。また会えたら会おう。」

「また会うことになるだろうけどね。」

そして、俺の意識は再び闇へと沈んだ。

☆★☆★☆★

「・・・・斗！おい翼斗！」

『ムグッ・・・・・』

んとここは・・・・・・

目の前には普通の教室の景色だった。

「えらいぐっすりだったなお前。」

『夢を見たからな。』

「夢？どんな夢だ？」

夢だといいがな。

あの出来事は。

『なぁに、ただ善吉がピーーしてピーーーされてピーーーーなことになっただけだ。』

「・・・何を言っているのかわからないがすげぇ気になる。」

第十九話　『異常のご利用は計画的に行いましょう』

前回のあらすじ？

翼斗「俺のた～いせつなファーストキスが・・・・・」

☆★☆★☆★

さて。今はあの出来事（わからない人は前の話を見てね☆　ｂｙ翼斗）の一日後である。

なにやら騒がしいが今ここはどこで何が起きているかというと・・・・

「働いた者は喰っていい！これより部活動対抗水中運動会を開催する！！」

めだかが大きく開始宣言をすると、会場が大きく湧き上がった。

・・・・・どうしてこうなった。

『（遠い目）』

「なぁ翼斗・・・・ってうお！翼斗お前今人生の辛さを痛感したような目してたぞ！」

『そう見える？・・・いやそれにしても人生とは上手くいかないものだねうん。』

善吉に耳元で大きな声を出されたので、やっと脳が覚醒した。

え～となんでこうなったんだっけ・・・・

さぁさかのぼろうか・・・・

～翼斗回想タイム～

『うぃーす。』

そう。俺は心地よい睡眠を終えて生徒会室に向かったんだ。

きた瞬間めだかは言った。

「なんだ翼斗か。」

『それが副会長に対する態度か生徒会長。』

入った瞬間めだかに辛辣な言葉をかけられたが、睡眠をフルパワー充電した俺には痛くも痒くもない。

そして扉が開いたことに気がついたのか、さっきまで奥で花へ水をやっていた善吉が振り向く。

「お、誰か来たか・・・・なんだ翼斗か。」

『お前もか善吉。なんだはやめろなんだは。お前たちにとっては何気ない一言かもしれねぇけどな、その一言で苦しんでいる人もいるかもしれねぇんだぞ。』

「誰とはいわねぇんだな。」

と俺が必死に説明をしていると、急にめだかの顔が険しくなった。

「それはそうと翼斗。・・・・・・・何があった？」

『どういう意味でしょうか生徒会長さん。』

「翼斗にそう呼ばれると背中がむずむずするから普通によべ。いや、なんだかこの前と雰囲気が変わった気がしたんだが・・・・私の気

のせいか？」

『そうそう気のせい。この年でボケんのは早いぞめだか。』

さすがめだかだ。新しい異常（アブノーマル）をもらったことを感じ取ってやがる。

この事は誰にも言わないようにしよう。

『しいていうなら・・・・あ、そうか・・・・頭になったからかぁ・・・』

「頭？」

俺の表情が一気に変わった（プラス方面ではないのは確か）のに二人は気付くと、興味津津そうに俺に訊く。

『聞いてくれますか・・・・・僕のとても悲しいお話を・・・・・』

そこで俺は話した。

あの『本当にあったまさか！な話』をな。

「なるほど。そういうことか。大変だったな翼斗。」

『なんだか心配してくれんのは嬉しいんだけどすげぇいらつく。』

それもめだかがニヤニヤしながら言っているからだね、うん。

「だからお前朝携帯と格闘してたのか。」

『知られざる真実です。その真実を解き明かした貴方にはよくとくんマスコットをあげよう。』

「いらねぇよ。」

むぐ、徹夜で作ってないよくとくんマスコットを善吉が拒否しやがった。

『ひどいね、まぁないんだけどね。』

「よかったな。綿の無駄遣いにならなくてすんだぞ。」

『・・・くそぅ、善吉の優しさが身にしみる。』

と、話していると、不意に生徒会室の扉が開いた。

「いやすいません。遅れましたためだかさん。」

ここでやっと阿久根先輩登場。

「気にするな。そんなことより嬉しいことに目安箱に二つも投書があった。それを解決しよう。」

～回想終わり～

そう。解決しようって話になったんだよ。

そしたら『部費をあげないと・・・爆破しちゃうよ？』ってやつと『プール使われてないんだけど・・・教育委員会に訴えるよ？』ていうやつがあったんだよ。

注　この話はちょっとどころか結構翼斗によって編集されております。

『そして水中運動会ね・・・・』

「何一人でぶつぶつ言ってんだ翼斗。」

『もう一度聞こう善吉。　どうしてこうなった？　」

「ちっ、近寄るんじゃねぇ！！なんだその言い方！こえーーーよ！！」

俺が善吉に音もなく忍び寄って顔の目の前で言うと、善吉は身震いして俺の近くから離れた。

ちなみに、近づくときの擬音はニュルン、だな。

「えー第一種目は水中玉入れです。」

司会の人がそう言った。

さて、司会の後ろに不知火が見えるのは気のせいだろうか？

・・・・・まぁいいか。

とにかくこの種目は俺らの圧勝だろう。

「よーい始め！！」

俺はそういわれると同時に水の中にもぐった。

隣を見るとめだかも潜っていた。

あいつ水泳得意な口か？

『なにをするつもりだ？』

何をするのか見たかったので水から顔をだした。

『さ～てめだかは何・・・・っていうか何あいつら水から出てんだよ！』

周りを見渡してみるとちゃっかり善吉と阿久根先輩がプールから出てた。

何この格差社会。働かざる者食うべからずってさっきめだか言っただろ。

といいつつ、めんどいから俺も出ることにしよう。

それに乗じてプールから出ようとすると、俺の真横の水がいきなり、爆ぜた・・・ような轟音をだした。

そしてそこからめだかが出てくる。

そしてーーーーー

Ｉｔ　ｉｓ　ダンク！！

「な、なーんと生徒会チーム一気に２０ポイント獲得！！」

え～と分かりずらかったと思うんで簡単に説明。

めだかが水から出てきて大量の玉を集めて投げてそして入れた。

『人間かあいつ・・・・・』

本当にそう思った。

お、けどこれはーーーー

楽しくなってきた。

俺も早速新しい異常（アブノーマル）の試し打ちならぬ試し使いするかな！

『いくぜっ！』

俺は瞬時に水中へ潜り全ての玉を集めた。あ、ちゃんと敵のまで移動して全部ね。

そんな俺を見てみんなは呆然としている。

『これで全部だな・・・・』

そう思った俺は水から出てそして・・・・

『うおらぁぁ！夢のスラムダァンク！！』

思いっきりジャンプした。

そしてダンクを決めた。

「せっ、生徒会チーム今度は５０ポイント獲得・・・・・・・」

今度はギャラリーも呆然としている。

ちなみに驚いているのは点数ではない。

俺のしたことだ。

考えても見ろ。

ただの人間が水中で息継ぎもせずに全ての玉を集められるか？

ただの人間が水中からジャンプしてダンクできるか？

答えは簡単。

作ったのさ。新しい異常（アブノーマル）を。

まず一つ目の異常は・・・・・

名前は・・・・・『不必要（オブノット）』でいいか。

こいつは人間に必要な物・・・・・たとえば栄養とか酸素とかを無視できる。

二つ目は・・・・『解放（アンロック）』。

こいつは俺の身体能力を倍、３倍、４倍と自由に変更できる。

いいねぇ。なんだか楽しいな。

だが考えて使わないとな。

「ここで全ての玉がなくなりましたので競技を終了させていただきます。」

「一位は生徒会！７０ポイントでダントツです！二位は・・・・」

「翼斗貴様・・・・・・」

やり遂げて水中から出るとめだかから奇異な視線で見られる。

それを俺は笑ってやりすごした。

『・・・・・ハッ！まぁ細かいことは気にすんな！これが終わったら色々聞いてやるよ！』

「・・・・・わかった。」

ともかく、第一種目は俺等の完封勝利。

さぁて、次の種目はなぁにかな・・・

第二十話　『言ったことには責任を持とう』

前回のあらすじ？

翼斗「テレーン！（ＣＭの音）ご利用は計画的に！！」

☆★☆★☆★

「増額部費争奪！部活動対抗水中運動会！第二回戦は水中二人三脚です！！」

司会の人が大きな声で叫ぶ。

うるせぇ。少しは自重しろぼけ。

「よし。こっちは善吉と阿久根2年生を出そう。」

めだかが勝手に選手を指名。俺の出番はない。ｏｒｚ

暇になる～何をすればいいんだ～い♪

「それでは選手は整列してください！！」

とりあえずがんばれるように善吉にエールでも送るか。

『がんばれ善吉！優勝しないと焼くからな。それはもう蒲焼なんて相手にもならない程度まで。』

「冗談に聞こえねーよ！まぁ負けねぇようにがんばってくらぁ！！」

俺のエール？を訊いて善吉はニカッ！と笑い、それから俺とハイタッチした。

そして、善吉と阿久根先輩はプールの中へと入って行った。

「なーんや黒神ちゃん。二回戦は見学かいな。」

そこへ何故か鍋島先輩登場。

音もなく隣に来るとかマジ怖い。

「・・・・私ばかりが出張っては団体戦の意味があるまい。貴様も同じ考えではないのか？鍋島３年生！」

「ククク！まぁ後輩にも出番やらんとねー。」

構図は←こう。

鍋島先輩　　俺　　めだか

俺を挟んでの会話はやめてもらえるかね。

気まずいんだよ。せめて場所変えてくれ。

「いや～それにしても・・・・やっぱりそうだったか翼斗クン。」

急に俺の話題へと鍋島先輩は変える。

・・・これは異常のことなんだろうね。まぁここは誤魔化すか。

すぐばれると思うけど。

『・・・・・なんのことですか？』

「とぼけないほうがいいでー！さっきの競技の1分近くの間息継ぎの一つもせずに球を全て集める！水中からジャンプしてダンク！どれも常人にできる技じゃあらへんよなー！」

『・・・いや、そうとは限らん。できるやつがいるかもしれん。（ジーッ』

俺はめだかを横目で見ながら言う。

「・・・なんで私の方を見ているのだ？さすがに私もできんぞ。」

「まぁ安心せぇや！異常だろうと翼斗クンは翼斗クンや。心配せん

でいいで！」

否定はさせてくれないのですね・・・

「しっかしとんでもない連中が参加したもんやなー。」

「・・・・・なんの話だ？」

「とぼけなさんな。競泳部のトビウオ三人衆やん。」

そう。さっきの競技で競泳部は俺らよりも早く、誰にも気づかれずに２０ポイント取っていた。

当然、タダものじゃない。

「ククク！実際厄介やでーあいつら！ゼニの為ならホンマなんでもしよるからな！ホンマ何を考えているかわからへんし、何が居たいんかもわからへんねー。」

「別にわかってもらおーなんて思っていないよあたし達は。」

おそらくご本人さん登場。

お〇くろさん歌ってないのに。

お呼びでないお呼びで。

「でも何したいかは教えてあげるよ。あたし達はね、札束のプールを作りたいんだ。」

『・・・そんなことする暇あったら普通に金使えよ。果てしなく無駄だと思うんだが？』

「お前に何がわかるっ！！」

急に声を張り上げた競泳部の人が、キッ！と俺を睨む。

「お前に何がわかる！何もしらず、ただ普通で幸福な暮らしをしていたお前にっ！私の何がわかるっていうんだぁ！！！」

『・・・ほぉ、つまりお前は俺よりも不幸な暮らしをしていた、そう言いてぇのか？』

全く、いらいらする。

「その通りだよ！お前如きに、私の何ｇ『うぬぼれんじゃねぇよくそ女ァ（アマ）！！！』っ！！」

俺の大声が、プール内に大きく響き渡る。

『・・・すまん、取り乱しすぎた。今の事は忘れてくれ。』

「・・・っ、とにかく私たちはこの大会で優勝して、また札束のプールへと一歩近づく。」

『言ってろ。ひねりつぶしてやんよ。』

そうこうしてる間に、善吉たちの競技が終わった。

「優勝は競泳部！２位は陸上部！３位は生徒会となりました！」

善吉と阿久根先輩が、悔しそうな顔をしながら戻ってくる。

『何やってんだ馬鹿善吉！優勝できなくなったらどうすんだ！！』

「うるせぇ馬鹿じゃねぇ！ていうか何でお前そんなにやる気だしてんだよ！！」

『むかつく奴がいたんだよ！そいつらに優勝させるくらいなら俺等が優勝する！！』

「そうかよ！じゃぁ次翼斗行けよ！そんだけ言うんだったら1位取るんだろ！！」

『ああ任せろ！！大差でぶっちぎってやるよ！！』

パチィィン！と先ほどよりも大きいハイタッチを善吉と交わし、プールの中へ入る。

「三回戦はうなぎつかみどりでーす！それでは、スタートです！！」

そして、プールの中へとぬるぬるしたうなぎが放たれる。

「なんだこれ！！ぬるぬるして捕まえにくい！！」

「くっ！いらいらする！」

みんなはうなぎのぬるぬると地味なすばしっこさに苦戦している。

『こんなもん俺にかかれば簡単だ。匠にかかればな。』

「ほぉー、どうするんや翼斗クン？」

いつの間にか後ろへ居た鍋島先輩が声を洩らす。

・・・ていうかいつの間にいたんだ？この人は超能力者じゃなかろうか？

『それは見てのお楽しみですよ。さて、準備運動っと。』

とりあえず残り時間少しになるまで待とう。

全く意味のない準備運動でもしてな。

「さぁ！残り時間1分を切りました！！一位は競泳部で9ポイントです！！さぁて生徒会チーム逆転できるのか！！」

・・・・・さ～てそろそろ動くか。

簡単だぜこんなもん。

『絶対言語』を使えばな。

絶対言語は人間だけじゃなく全ての生物に効く。

だからこうすればすぐ終わる。

ザブッ！

「おっとここで生徒会チーム初めての動き！！なんと翼斗選手水へ潜った！！何をするつもりだ！！？」

『不必要(オブノット)』使ってるから酸素はいらない。
だがこれをやると口の中に水が入って来て非常に気持ち悪い。
・・・優勝するには、努力はおしまねぇ！やるしかねぇ！
こんなことの為に異常作りたくねぇしな。

俺は水中で、うなぎへとこう呼びかけた。

『壺の中に入れ』

水の中だから人間には聞こえない。
だから当然壺に入るのはうなぎだけ。

「な、なぁーんと生徒会チームの中に勝手に！！うなぎが入っていきます！！」

まぁできればこんなことの為に異常使いたくないがな。

「ここでタイムアップです！順位は一位が２４ポイントで生徒会！

！二位が１３ポイントで競泳部！！三位が９ポイントで柔道部です！！！」

ほら、言った通りぶっちぎりじゃねぇか。

お前らなんかに負けるかよ競泳部、優勝は俺等だ！！

第二十一話　『女の恨みは恐ろしい』

前回のあらすじ？

翼斗「キャァァァァァシャベッタァァァァァ！！！」

☆★☆★☆★

「部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑ってもこれで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは果たしてどのクラブとなるのでしょうーか！！」

司会の人が次の種目を言う。

三人・・・めだか、善吉、阿久根先輩。あ、俺余る。

「では解説の不知火さんルール説明をお願いします！」

「はいはーい！この世に知らぬことなし！一文字流不知火ちゃんでーっす！」

不知火がルール説明を始める。

「ま、構えなくてもフツーの騎馬戦だよ。ハチマキの奪い合い！ハチマキ取られたり騎馬が崩れて水中に落ちたりしたら失格です☆」

・・・・不知火が考えたことだしどうせ裏がありそうだな。

「たっだし～！今のままじゃ下位チームに望みがなさすぎなので、ここでクイズ番組的な救済ルール！集めたハチマキの数ではなく質で獲得ポイントを決定！上位チームのハチマキほど高くポイントを設定します！」

・・・これ俺達生徒会と競泳部戦わせるためのルールじゃね？

いや、競泳部どころか全てのチームに狙われるね。

さすが不知火！ひどいルールを考えやがる！！

「大好きだぜ不知火ーーーー！！」

「イエー！あたしもあたしが大好きー！」

『さすが不知火！！頭いい！！エグイ！！ひどい！！』

「イエーイ！！どれも褒め言葉だよーー！！！」

俺と善吉の言葉を訊いて笑顔になる不知火。

・・・後ろからなんかどす黒い空気が流れてきてる、大丈夫かねこれ。

「それではラストバトル！位置についてよぉーい・・・」

「どんっ！！」

司会の人の開始の合図とともに、最後の種目が始まった。

そしてめだか達は速攻で競泳部と組み合う。

「おっと早速組み合った！生徒会！そして競泳部！」

「これは互角でしょうか不知火さん？」

「んー、つーか足場の問題だね。ただの腕力ならお嬢様の方が圧倒的なんだけど、騎馬を二人で組んでるからね。上手に組まないとバランスは相当不安定なんだよ。これに関しちゃ水中とか関係なくチームワークでは競泳部が一歩リードって感じかな。」

「って私は見たんだけど、翼斗はどう思うー☆」

『大正解だ、生徒会は善吉と阿久根さん仲悪いからなー。結構争って足場が安定しなくなったり最悪の場合崩壊する恐れだってあるからな。ま、上にめだかが居るからそんなこと無いと思うけど。』

俺は実況席の後ろの席に座り、不知火のおかしを食べながら言った。

「そうですかー！貴重なご意見ありがとうございます！・・・あれ

？あなたいつの間に入りました！？」

『つい１０秒ほど前。』

俺はせんべい（不知火の）を食べながら返す。

む、このせんべい旨いな。

「あそこからここまでこんな時間じゃ来れませんよ！？」

『まぁ気にすんな。人には隠された力がある・・・俺はそれを使役したまでだ。何にも変な部分はない。不正はなかった。』

ちなみに俺はどうやって来たかというと・・・・

『幻想実現（ドリームアウト）』でなじみの『腑罪証明（アリバイブロック）』コピーした。

本当は『完璧限定（オールオーバー）』でやろうとおもったんだがなぜかできん。

・・・・おそらくあいつの何かの異常が働いてんだろ。

「あー！私たちがあーだこーだやってるうちに生徒会！黒神めだか

！ここで突き飛ばされたーーーーっ！！騎馬も無残に崩れ！これは勝負あったかーーーー！？」

めだかがいつの間にか、騎馬から振り落とされていた。

そしてめだかはそのまま水へと着水ーーーーーー

『いや。あの化物（めだか）が簡単に終わるはずがないだろ。』

「甘えたことを抜かすな！たとえ貴様が地獄のように不幸でも、そんなことが命を粗末にしていい理由になるか！！」

ーーーしなかった。

「く・・・黒神めだか生徒会長！水の！上に！立っている！！だっ

とぉぉぉーーーっ！？」

そう、めだかは水の上に立っているーーーーーように見えていた。

「あ・・・いえ違います！これは！これはぁぁ！！」

なるほど。人吉のヘルパーか。

「・・・・翼斗。誰が化物だって？」

『ぎくっ！』

めだかが急に司会席の方へ顔を向けて、いい笑顔で言う。

「帰ったら・・・・・・・まぁそれは置いておこう。そんなことよりも！
金が大切だという割に随分と高い買い物をしたものだな喜界島同級生　貴様は私の怒りを買った！」

そしてめだかは、ヘルパーの上から競泳部の騎馬へと向かって跳んだ。

「おーっとそこから更に生徒会長！跳躍し！競泳部の騎馬に飛びついたーっ！！」

「・・・・落とした財布は拾えばよいが、落とした命は拾えんぞ。貴様たちの命以上に大切なものなどありはしない！」

めだかは競泳部の女の人へと顔を近づいていきーーーー

「貴様たちが死んだら私が悲しむ！！」

唇を重ねた。

・・・いや俺にも意味わからんから訊かないでくれ、戸惑うから。

「おおおおおおっと！これは！両者同時に着水だぁーっ！！」

「うんでもその前に。お嬢様がいいこと言いながらちゃっかり競泳部のハチマキ奪ってたね♪」

『ていうか俺なぜキスしたのかわからんのだが。』

「「そこはつっこんだら負け！！」」

『・・・・・・ナイスハモリ。』

みんなが思っていることを質問してみたのだが、ナイスハモリによって答えはわからなかった。

「えー・・・この場合どういう判定になるんでしょうか？」

「どーもこーも！水中におちたら失格ってルールなんだから！浮かぶヘルパーの上はまだ水上だし！ゆえに最後の攻防は有効！！」

「で・・・では生徒会執行部は１６ポイント見事に獲得！総合得点トップですね！」

・・・さっきからハチマキをこっそり奪ってる人が見えるが言わない方がいいだろう。

ここで終了のホイッスルがなった。

「そしてここでホイッスルーッ！部活動対抗水中運動会！全競技

ここで終了でーす！！それでは超途中参加した1年1組の榛原翼斗さん！優勝チームの発表をお願いします！」

『・・・・超途中経過ってなんだ？・・・・まぁいいや。それでは発表します！！！優勝はーーー

生徒会』

歓声が巻き起こる。

『・・・・・・ではなく鍋島猫美さん率いる柔道部チームです！！』

辺りがその瞬間、シーンと静まり返った。

「やーどーもどーも！」

『はいみなさん混乱してると思うので説明します。生徒会と競泳部がなんかこうごちゃごちゃ戦ってる間にそのほかの全チームのハチマキをゲット！合計１０３ポイント分のハチマキを獲得してトップになりましたー！　セコイですね。』

「「「「「「「そ、そんなことってあり・・・・・」」」」」」」

この場にいる全ての人の気持ちが一つになった瞬間だった。

☆★☆★☆★

『ふぁー眠みー！』

だが俺は生徒会室に行かなければならない。

生徒会長に呼ばれたからな。

いや、副会長だから当たり前だけどね。

中からなんかがやがや聞こえる生徒会室の扉を開ける。

「・・・・・これから会計職を任せる喜界島同級生だ！競泳部からのレンタルなので大切に扱うように！」

「・・・・・・荒稼ぎにきました。無駄遣いしてたら売り飛ばしますからそのつもりで！」

『だれか説明しようよこの状況！！！』

思わず突っ込んでしまった。

「おおやっと来たか翼斗。」

『なんのようでっすか？まぁ副会長だからこなきゃいけないんだけどね。』

「・・・・いや。たしか昨日、化物とかいってたよな？」

『ギクッ！』

ここでめだかの雰囲気ががらりと代わる。

ん？どういう感じって・・・・プラス方面だと思うか？

「・・・・・善吉、用意しておいた縄を用意してくれ。」

「おお。」

『・・・ぅおりゃぁぁぁ！！ボルトもびっくり超スピードとうb・・・って襟掴まれてるしぃ！！』

めだかが縄をもっていい笑顔で近づいてくる。

おい、やめろっ！！

俺はまだ死にたくねェっ！！！

『ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああああああ！！！！！！』

この日。生徒会室には断末魔の叫び声が絶えなかったという。

その後、翼斗がどうなったのかは・・・・誰も知らない。

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ』（前書き）

変更、明らかになった部分もあるので見ておいた方が得！

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ』

異常（アブノーマル）

『絶対言語』

都城王土の『言葉の重み』の強化版みたいな物。今のところ回避法はない。

入切可能。

『仲間戦闘（チームロワイヤル）』

詳細不明。

『完璧限定（オールオーバー）』

触れた相手の異常、過負荷をコピーし、２００％使える。

一度触れた相手であればいつでも可能。

『幻想実現（ドリームアウト）』

自分の頭の中で考えた異常を作って使うことができる。一度作った異常は消すことができず、永遠に残る。一つ作るごとに一年寿命が減る。

安心院なじみの異常。

『不必要（オブノット）』

人間に必要な栄養、酸素などを必要無くす。

『解放（アンロック）』
自分の身体能力を倍、３倍、４倍・・・にできる。
但し４倍以上をやると肉体が崩壊する。

『腑罪証明（アリバイブロック）』
自分が居たいと思う所に自由に行ける。
安心院なじみの異常。

過負荷（マイナス）

『人能崩し（ヒューマン・ダウナー）』
詳しい能力は不明。

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ』（後書き）

とりあえずこんな感じです。

第二十二話　『誤解は恐ろしい』

前回のあらすじ？

翼斗「出番なしなんだｔｈｅｙ！」

☆★☆★☆★

『・・・・・またここかよ。何このエンカウント率の高さ。』

今はあの水中運動会から2日後の午後1時だ。

いつもなら気持ちのいい眠りでいい夢を見てるはず？なのに・・・

『まぁ、お前が居る時点でいい夢じゃないのは確かだね。』

「・・・・・・・・」

俺の目の前で笑みを浮かべながら佇んでいる女、安心院なじみによって一気に悪夢である。

「まぁそうつれないことをいうなよ。どうだい僕のあげた『幻想実現（ドリームアウト）』は？結構役に立つだろう？」

最高です！・・・・・とは言えない・・・・・プライド的に。

ただ全然やくにたってねーよ！とか言ったら無言で殺されるような気がするし。

ぎりぎりラインの返答を・・・

『・・・・・結構やくに立ってるぜ。』

「そうか、それは良かった。」

『・・・・・それで用は？』

「？それだけさ。」

それだけの為に俺の夢に来たのか。

ずうずうしい奴め。

『じゃぁいいな。それじゃぁ。』

「あ、一つ忠告しておくよ。」

『あ？』

意識を集中させてここじゃら出ようとすると、なじみに止められた。

「使いすぎに気をつけてね。」

『お前はお母さんか。』

俺はそう突っ込んで夢から覚めた。

☆★☆★☆★

『・・・・・毎回毎回あいつが出てきた時は目覚めが悪い・・・・・』

時は流れ今は放課後。

いつもなら生徒会室へ向かう時間なのだが、翼斗は何故か席から立とうとしない。

一つ気になることがあったからだ。

（あいつ帰る時になんか言ってなかったか？）

そう、夢から覚める前に口パクでなじみが何か言っていたのだ。

（なんて言ってたっけ・・・・）

翼斗は一つ一つ思い出そうとする・・・・・

（確か・・・・ふ　た　り　め　の　ぼ　く　に　な　ら　な　い　で　ね　だったかな・・・・）

（二人目の僕にならないでね？どういうことだ？）

おそらく生涯で二番目くらいに頭を悩ませているだろう。

だがふと翼斗は思った。

（今何時だ？変な悪寒がするんだが・・・）

あわてて時計を見た。

『おおう！まずいっ！！』

考えるのをやめ、翼斗は歩きながら急いで？生徒会室に向かった。

☆★☆★☆★

「・・・・いやメンバーが揃っていくのはいいんだけどよ。しっかし、なんか後から入る奴の方がいい役職についてねぇ？翼斗なんか俺と同じ時に入ったのに副会長だしよ・・・」

愚痴りながら、善吉は生徒会室に向かっていた。

「いや別に書記とか会計とかできるわけでもやりてーわけでもねーんだけどよ。けどなーんか釈然としねぇなー・・・」

と言って善吉は生徒会室のドアを開けた。

そこでは会計の喜界島もがなが着替えていた。

それも、丁度服を着ようとしていたところで、下着姿。

「あ。」

「あ。」

二人の視線が交差し、静寂。

そして数秒後、何かを殴る音が数発、生徒会室から聞こえたような。

「お金っ！お金払って！」

ひとしきり善吉を殴り、それでもまだ足りない、とでも言うようにもがなは言った。

「は？何言ってんだお前。」

「あたしのハダカ見たでしょ。だからお金払って！」

「・・・・・こんだけ人をボコボコにしといてその上金払えってか。・・・・いい性格してるな。」

あきらかにノックをしなかった善吉に非があるはずなのだが、善吉は開き直った。見てる方がすがすがしくなるくらいまで。

「カッ！やなこった！こんなトコで鍵も掛けずに着替えてる方が悪いんだよ！どいつもこいつも生徒会室を何だと思ってんだ。見たくねーもん見せられて迷惑してんのはこっちだっていうのにーーー」

といった後善吉はもがなを見ると・・・・

泣いていた。

大切なことだからもう一度、泣いていた。

それはもう、号泣レベル。

「うわーんっ！お金お金お金ーっ！お金払って！今のヒドイ発言の慰謝料も含めてお金払ってーっ！！」

「わ、分かった！ごめんごめん払うから！！」

耐えられず、善吉は財布を取り出し、そこへあった小銭を適当な数払った。

☆★☆★☆★

所変わって、食堂。

そこではニコニコ顔で物を貪り食っている不知火、イスが落ちてｏｒｚ状態で嘆いている翼斗がいた。

『ううう・・・・・もう勘弁してください・・・もうマジで死ぬって・・・俺の生活が・・・』

実はこっちでもお金を払っている人が、一名。

ただ、善吉とは決定的に違うのが、桁。

「だぁーめ♪まだまだ食べるよー♪あー、これもう十個追加でー♪」

『ぎゃぁぁぁぁぁ！！悪夢なら覚めてくれぇ！！！』

今日だけで、翼斗の財布から諭吉さんが３枚ほど消えた。

『・・・・・・・グスッ』

あの後、３０分食堂で翼斗は泣いていた・・・・

嘘泣きでも、半泣きでもなく、本当に心から泣いていた。

『もうだめだ俺は。今月の生活費の全てが消えた。』

実際、リアルにあのお金は生活費だった。

一応翼斗は財布を確認ーーーーーー

十円玉が、５枚。

一円玉が、１６枚。

計、６６円也。

『・・・・もうこうなったらめだかに土下座して金貸してもらうしかねぇ・・・・俺が生き残る道はそれしかない。』

そして生徒会室の前についた。

（お願いしますめだかさん！か、後生ですめだかさんのどちらかだな。）

と考えながら扉を開けようとした。すると中から・・・・

「お・・・お前に惚れてしまった　からっ！ちゅーするぞ！！」

（ン？ナンカキコエタヨーナ・・・・・）

『気の所為だろ・・・・・』

と思い、翼斗は扉を開けた

そこには善吉が倒れていて、その上にもがなが乗っかっているという、誤解されてもおかしくない状況だった。

『あ・・・・・・・あ・・・・・・・・』

「！翼斗・・・・・いやちがうんだ！これは・・・・・」

必死に善吉は誤解を晴らそうとするが、翼斗には全く聞こえていない。

『いやぁぁぁぁ！！！善吉が真昼間から生徒会室で女の人とイチャイチャしてるぅぅぅぅ！！！！！！』

そういうと、翼斗は全速力で生徒会室から出て、どこからともなく走り去って行った。

「翼斗ぉぉぉぉぉぉぉぁあああ！！！俺の人生終わったァァァァ！！！！！」

善吉の声が響き渡った。

後日。

誤解を晴らすために、善吉が奮闘したのは、別の話。

第二十三話　『人を見た眼でだけで判断しない』

前回のあらすじ？

翼斗「善吉が男になった・・・・・・」

善吉「誤解を招くようなこと言うな！！！」

☆★☆★☆★

『ん・・・・・・』

俺は目を覚ます。

『今何時だっけか・・・』

そしてすぐに時計を確認。

時計は午前１０時、を刻んでいた。

（まだ１０時か、もうひと眠りするかな・・・・）

なぜこんなにゆっくりなのかというと理由は簡単。

今日日曜日。

Ｉｔ　ｉｓ　国民の休日。

『ハァ～やっぱり休日っていいぜ。日曜日を作ってくれてありがとう神様。俺、神様いないと思ってたけど信じるわ。』

と言い、俺は再び眠りについた・・・・・・

筈だった。だが一つの着信音に邪魔された。

たーのしーいー♪
なーかまーがー♪
ポポポポーン♪

？　着信音です。

季節外れの着信音に邪魔され、しぶしぶ目を開ける。

『・・・・・・・・・ハァ～』

俺はこの着信音に設定した奴を思い出し、ため息を吐く。
いや、『奴ら』か。

『さて、出ようか出ないか。俺的にはもう答えは一つなんだが。』

今俺の中では天使と悪魔が争っている。

天使「無視しちゃおうよ！」

悪魔「グェへへへ・・・・・無視しちまえよ！！」

『どっちも悪魔じゃねぇか！これじゃぁ選択肢もくそもねぇよ！！』

さて、マジでどうしようか・・・・

（よし。ここはあえて・・・・・・）

（無視する！）

あえてじゃないのは気にしないでくれ。

だが良心が痛んだ為、俺は電話に出た。

？　×良心が痛んだ。

○繰り返される着信音のリピートがうざかった。

『ただいま持ち主は留守にしております。ピー、という音の後に用件をお伝えください。』

「翼斗か！？少々どころか面倒なことになった・・・・・あと声翼斗だから絶対に騙されない自信あるんだが。」

『何があった？金城。・・・もう少し練習する必要があるな。電話のお留守番サービス。』

こいつの名前は金城銀二（かねしろぎんじ）。レッドサターンのナンバー2だ。

ちなみにこいつの名前を聞いた俺の第一声が、

『金か銀どちらかにしろや！！』

だ。全く。金と銀とか相いれない存在だろ普通。

ちなみに、敬語じゃないのは俺がやめろって言ったから。

だってむずがゆいんだもの。

「只今対抗している暴走族『ブルーアウト』と絶賛ケンカ中だ。」

『レッドの次はブルーかよ！？』

おそらくみんなが思ったであろうことを俺は突っ込んだ。

「とにかく、今佐藤ビルの近くの路地でやってる！来てくれ！相手が御指名だ！！」

『・・・・・暇だったらな。』

と俺はいい、電話を切る。

『まぁ、暇なんだが。』

俺は上着を羽織ってそこに向かった。

☆★☆★☆★

一回迷ったが。無事についた。

「オラオラァ！やっちまぇ！！」

「返りうちだ！ボッコボコにしてやれぇ！！」

唐突に思ったことを一つ。

（これにまざりたくねぇ！！）

だがそんなわけにもいかないので、俺は出て行った。

ああ人生って思うどおりにいかないもんだね。

『は～いみなさ～ん～来たよ～空気を読まない変な頭が来たよ～』

畜生眠い。

奴らがいなければ寝れたのに・・・・・

「「「「「「アニキィ！！」」」」」

「なに！？こいつがレッドサターンの頭か・・・・・」

「随分弱そうな奴じゃねぇか・・・・頭行かなくていいですよ・・・・」

「馬鹿なことをいうな。」

全部聞こえてるー♪
よし♪

全員ただでは帰さん♪特に弱そう、って言った奴ボッコボコ！

「お前が頭か。俺はブルーアウトのかしｒゲフォ！！」

俺は『解放（アンロック）』で倍にして出てきた相手（おそらく一番上のやつ）を思いっきり殴った。

派手な音を立てて相手が壁に激突ーーーーーではなくめり込む。

『・・・ッチ。いまいちだな。いつもはもうちょっとめり込むんだが・・・寝起きは調子が出ないぜ。』

「貴様ァ！よくも頭ｗ「お前さっき弱そうって言った奴だな」ぐふお！！」

俺は先ほど弱そう、と言った腐れど畜生変態坊主野郎へドロップキックを繰り出し、そいつもめり込ませた。

「く、くそがぁ！！」

敵の一人が金属バットをもって俺に襲いかかる。

だが俺はバットが自分に当たる前に身体能力を3倍にしてバットを砕いた。

「ナニィ！？こいつバットを砕きやがった！？」

「「「「「こいつ強いっ！！」」」」」

『今頃かよっ！ということで「こいつ強い」って言った奴全員血祭りね。あ、手加減はーーーーしねぇ！！』

俺はそう言うと同時に動き、まず身体能力を倍にして手前の奴を思いっきり蹴った。

次に奥にいる１０人ほどの腹を思いっきり殴り、

最後に全員を壁に向かって蹴り、全員壁にめりこませた。

その間、およそ7秒。

ワオ。全世界がびっくり。

「「「「「「「・・・・・・・」」」」」」」

見方でさえも唖然としていた。

『ったく、おいお前ら行くぞ。こんなくだらないことをする暇があったら勉強しろボケ。』

「「「「「「「ハ、ハイッ！！！！」」」」」」」

と行って俺等はこの場をさった。

ちなみに行ったところはゲームセンターで、ゲーム大戦が繰り広げられたのは別の話。

え？俺？

一番だけど何か（ドヤ

第二十四話　『後ろにご注意』

前回のあらすじ？

翼斗「俺は平和的にケンカを成敗した。」

金城「まず成敗って言ってる時点で平和的じゃないから。」

☆★☆★☆★

『・・・・・・・・ハァ・・・・・・』

俺はため息を吐きながら学校を目指している。
その理由は・・・・・・

実は今日は学校に三日ぶりの登校だ。
まず一日目はご存じのとおり、『ブルーアウト』との抗争だ。
そして二日目は・・・・

「翼斗大変だ！次は『イエローバックス』が攻めてきた！」

『信号機かお前らは！？』

というわけだｗｗ

ご乱神な俺は相手を速攻で殲滅。

ちなみに三日目も・・・・・

「翼斗。次は『グリーンキル』が攻めてきやがった！」

『もういいよぉ！！』

それ全てを俺は泣きながら解決していったというわけだ。

『・・・・・・・ウッ・・・・・・』

（泣きたい・・・・・）

俺は心の中で泣きながらも学校を目指した。

☆★☆★☆★

『寝よう・・・・・できれば永遠に寝よう・・・・・・もう覚めなくてもいいや・・・・』

と言い、俺が眠りにつこうとすると・・・・

「おお！翼斗じゃねぇか！今日は学校来たか！」

善吉が俺が登校してきている事に驚いたのか近寄ってくる。

俺はそんな善吉へと抱きついた。

『善吉ィーー！さみしかったよー！！』

「ええいよるな触るな俺から離れろうっとおしい！」

なんだか善吉の声が超なつかしい。

くそっ、涙が出そうだ・・・

『それでどうだ？俺が居なかった間に何かあったか？』

「そりゃもちろん。風紀委員会の奴が来たり、手錠にはめられたり・・・・」

『何があった！？』

まあ一つ目は大方服装を注意されたんだろう。

だが二つ目なんだ！？服装だけで逮捕されるのか！？

「いや～それがさ・・・・・・」

善吉から事の経緯をきいた。

『なるほど・・・・事故ねぇ。事故。』

「そういうことだ。」

「翼斗じゃん♪今日は学校に来たんだ♪」

俺らが話してる途中に不知火が入ってきた。

『おう不知火！二日ぶり！今ならなんかおごってもいい！・・気がする。』

「ホント！？じゃぁお昼にラーメンを１０個と餃子『ごめんなさい。』えー？だめなのー？」

『また今度にしてくれ。俺が死んだらいくらでも奢ってやる、俺の保険金でな。俺保険入ってないけど。』

☆★☆★☆★

そしてなんやかんやで放課後なんだｔｈｅｙ。

俺と善吉は生徒会室のドアを開けた。

「翼斗。久しぶりだな。といっても二日ぶりだが。」

『ああ・・・・・めだかの声がなつかしい・・・・・』

地味に俺は感動していた。

「それにしても翼斗、なんで休んだんだ？」

・・・・なんか自分の口から話すと泣いてしまうような気がする。そういえばめだかは推理が得意だったような・・・

『なぁめだか。お前推理得意だったよな？』

「得意というほどではない。」

・・・・・・得意なんだな。

『それじゃぁこのキーワードから答えを導き出してくれ。『楽しい仲間』『抗争』だ。』

「・・・・・翼斗大変だったな。」

１０秒悩んだ後にめだかは言った。

『実際何度も心が折れかけた。いや折れた。』

「え？なに俺さっぱりわからないんだけど？」

『「自分で考えろ善吉。」』

「ぐ！なんでそこだけハモる・・・・・」

ここで生徒会室の扉が開き、阿久根先輩ともがながが入ってくる。

「すいませんめだかさん。遅れました。」

「・・・・・・・」

「よし。全員そろったな。それでは早速やってもらいたいことがある。善吉は2階廊下の壊れたところの補修、阿久根2年生は1回の窓拭き、喜界島同級生はポスターの張り替え、翼斗は図書室の本入れ替えだ。」

・・・・・あれ？俺の依頼だけなんか変じゃね？

あきらかに生徒会の仕事じゃないような・・

『おいめだか！俺の仕事は図書委員会の奴がやればいいじゃねぇか！』

「本の数が多すぎて人手が足りないそうだ。」

『むぐ！』

・・・・まぁ仕方ないか。

「じゃぁめだかちゃんは何をするんだ？」

「私は音楽室の苦情処理だ。」

『ああ。あの爆音大音量か。』

めだかいわく、音楽室の防音設備にガタがきているらしく、完全に防音しきれていないらしい。

「よし！それじゃぁみんな！生徒会を執行しよう！」

「はい！」

「うん！」

「あぁ！」

『サーイエッサー！』

☆★☆★☆★

『あ～暇だ～！』

俺は図書の仕事を終え、廊下で簡単に言うと暇していた。
ちなみに『解放（アンロック）』使ってやったため、所要時間は3分だ。

『・・・・・保健室行って寝ようかな・・・・・』

などと言っていると・・・・・

ダッダッダッダーダダーダーダダー♪
ダッダッダッダーダダーダッダダー♪

ダース○イダーの着信音がかかってきた。

（んーと確かこの着信音は・・・・・めだかか。）

と思い、俺は電話に出た。

『もしもし、今めだかの後ろにいるんだが。』

「・・・・気持ち悪いことを言うな。」

『すまん。一回やってみたかったそのネタ。』

・・・・とか言ってる場合じゃねぇ。
実はかかって来て最初に思ったことがある。

あいつ走ってねぇ！？
だってなんか微かに風を切る音が聞こえるんだもの。

『んで、なんかようか？』

「簡潔に言おう、気をつけてくれ。風紀委員会の刺客がお前を狙っている。」

ああなるほど。
俺は疑問の一つが解決した。
その疑問とは、

『なるほど。最初から誰かに見られてると思ったのは気のせいじゃなかったか。』

めだかと話していると、不意に後ろに気配、そして洗い息遣いが聞こえたので俺は素早く振り向く。

そこにはトンファーをもった奴が居た。

「気付かれた！何故だ！？何故だ！？・・・・殺せば済む話か。」

『・・・・トンファーとは現実離れな物をもってきたもんだな。』

「どうした翼斗。まさか早速か？」

「殺そう。殺そう。」

そのトンファーをもった奴は俺に向かって走り、トンファーを振り

かぶった。

『その通りさっと。』

俺はその攻撃をかわしながら答えた。

「かわされた。かわされた。・・・・・殺そう。」

『お前の思考がわからねぇな。いい精神科知ってるんだが。』

「とりあえず翼斗なら大丈夫だろう。私はほかの3人を助けに行こう。」

『・・・なんか差別されている気がするんだが・・・』

俺は相手の連続攻撃をすべてよけながら聞いた。

「さっきから攻撃を避けてる音が聞こえるからな。」

『そうか。まぁがんばれ。』

「・・・・・言われなくてもがんばる。」

めだかはそう言って電話を切った。

「死ね。死ね。死ね。」

『攻撃がワンパターンすぎるんだよお前は。次右からだろ？』

と言いながら俺は全ての攻撃を避けた。

「かわされる。かわされる。どうしよう・・・・・殺そう。」

『さっきからうざいなお前。俺がお前を調教してやろう。』

いいね、腕が鳴る。

第二十五話　『密室爆殺』

前回のあらすじ？

翼斗「ストーカー。」

☆★☆★☆★

ダーダーダーダッダダー♪

俺がなんか武器もった刺客さんと戦ってしばらくしてから、ていうか1分後、再びめだかからの着信。

・・・まさかもう全員ぶったおしましたーとか言うなよ。

『あーい、こちらパトロール。』

「翼斗。こっちは終わって生徒会室に居る。そっちは？」

『知りたくなかった新事実・・・いやさ、俺はまだ戦っているぜ。』

そう。こっちの戦いはまだ続いている。

それもそのはず、俺は一回も攻撃していないのだから。

「翼斗貴様、楽しんでおるな？」

『ん？♪なにが？♪』

「・・・・まぁいい。早く来てくれよ。」

『了解です。お嬢さん♪』

そう言って俺は電話を切った。

いや～楽しいね～い♪

『さ～てどうしよっかな～』

「ハァ、ハァ、ハァ、こ、ッ殺す。」

相手はずっと動きっぱなしだったため結構疲れている。

ん？俺？全く。

３日間ずっと不良達と戦ってたんだぞこっちは。

『よし。それそろ攻撃するかな。』

俺が攻撃しようとしたら・・・・

てーてーてーてーてーてーてーてーてーてー♪

知る人ぞ知る太鼓〇達人のお菓子刑事という曲が流れた。

無論、着信音である。別におかしいところはみじんもない。

『これは確か不知火だったな。』

相手の突きをかわしながら電話に出た。

『どうした不知火。空腹か？残念ながらおかけになった番号は現在お払いできませんだぞ。』

「アヒャヒャ♪アタシはいつも空腹だよー♪それにはなっから奢ってもらうならそちらへ行ってますよー♪」

『ですよねー。』

まぁ、とりあえず奢らなくてよかったのは感謝感謝。

『で、なんのようでぇすか？』

「いやーそれほどのことじゃないんだよー♪ただ、風紀委員長が生徒会室に入って行ったからー、翼斗に一応伝えなきゃってぇー♪」

『なに！？』

確か風紀委員長は・・・・・・１３組の雲仙冥利！

くっそ厄介な奴め。

『わかった！不知火！今度なんかおごってやる！お手柔らかにお願いいたしますぅ！』

と言って俺は電話を切った。

『早く行かねぇと・・・・・こいつをどうにかしねぇとな。』

つまりこいつは俺を倒そうとした風紀委員会の刺客ね・・・

・・・・いいこと思いついた♪

『おい。』

「こ、殺す！」

『ちょっと幽体離脱したみたいな感じになるけどよ、我慢してね♪』

俺は満面の笑みでそいつにそう告げた。

☆★☆★☆★

～善吉ｓｉｄｅ～

「いやーお見事お見事！１年以上そのテクでやってきたけどタネを見抜いたのはテメーが初めてだぜ黒神！」

俺が生徒会のみんな（翼斗以外）だけと話していただけなんだが・・

・

不意に風紀委員長が俺等の後ろにいた。

「もちろんただのスーパーボールじゃ話になんねーから素材に気を使ったりなんだり武器になるようそれなりの改良は施してあるがね。
ま、でも正体が割れたらそれで終わりな子供だましだよ。言うなら手品みてーなもんだ。」

そう行って風紀委員長は持っているスーパーボールを床にばらまいた。

そんな風紀委員長を見て喜界島は顔をしかめて、

「・・・・・・何このヒネてそーな子供。全然可愛くないんだけど。」

あろうことか馬鹿にしやがった！

（喜界島さん空気読んでぇ！！）

俺は心の中でそう言う。

そしてふと、扉をたたく音が聞こえた。

「？誰だテメェ。」

「う、雲仙さん、伝えたいことが・・・・」

風紀委員長が扉へ向かって呼びかけると、外から人の声が聞こえた。

・・・俺はこの声の主を知らない。

「ああ、榛原翼斗を倒しに行かせた奴か。」

何！？
ってことは翼斗はやられたのか！？

風紀委員長・・・もう呼び捨てでいいや、雲仙冥利は扉のカギを開けた。

扉が開き、外からトンファーを持った人が入ってくる。

「お前が来たつーことは、榛原翼斗は無事に倒せたんだな？」

「それが・・・・」

そこで言葉を詰まらせる。

そして、次の瞬間、

「うおりゃぁぁぁぁぁ！！」

トンファーをもった奴が雲仙へと跳びかかった。

！？どういうことだ？こいつらは仲間じゃなかったのか？

「何ィ！？なんの真似だ！？」

雲仙も予想していなかったらしく、一瞬ひるんだが、そいつを蹴り飛ばす。

「ぐへぇ！！」

そいつは壁に激突し、動かなくなった。

「何だったんだ・・・・・・」

俺は全く意味がわからなかった。

「・・・・・なるほど。お前の仕業かァ！榛原翼斗！！」

「やっぱりな。」

雲仙が扉の外へと呼びかける。

めだかちゃんは最初っからわかっていたような口で言う。

『あーバレちまいましたか・・・・』

と言って張本人の翼斗が扉から出てきた。

～善吉ｓｉｄｅｏｕｔ～

☆★☆★☆★

『すんまそーん、遅れたわ。』

とてつもなくな。

「今のも翼斗の仕業か？」

『正解でーす。』

善吉が訊いてきたので、俺は肯定で答える。

触れた他人を操作する。それが俺の異常、『仲間戦闘（チームロワイヤル）』だ。

「・・・・・・それで、なんの用だ雲仙2年生。」

めだかが本題だ、と言わんばかりに雲仙先輩（一応）に訊く。

「おいおいつれねぇな！用がなくちゃきちゃいえねぇってのかい？」

窓のカギを閉めながら雲仙先輩は言った。

（なぜカギを閉める必要がある・・・・・）

「まぁ仲良くしようぜ黒神1年生。それと榛原翼斗！オレ達は怪物同士で、化物どうしで、黒神に至っては似た者同士なんだからよぉ！」

そう言いながら雲仙先輩は移動していく。

「いや実際テメーが入学してきた時から思っちゃいたんだよ。テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなぁ！」

今度はドアのカギを閉めながら言った。

「・・・でも、左右逆なんだろう？」

「おうよ。そっくりだから相容れねぇ。」

なんでこいつこんなこと言いだすんだ？

そして何故カギをしめる必要がある？

まるで露骨に時間稼ぎや密室を作り出そうとしてるような・・・・・・・まさか！？

『めだかぁ！俺等の足元に散らばっているのはスーパーボールじゃねぇ！火薬玉だ！！！』

「なに！！？」

「おっとバレたかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！手品下手すぎ！だがまぁ遅かったな！仕込みはギリギリ終わってる！」

と言ってマッチを取り出す雲仙先輩。

「密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすまないよ。」

「そうだ！子供っぽい脅しはやめろ！！」

ともがなと阿久根先輩が言う。

（・・・・なんとか最悪の事態は避けないと・・・・・）

と思った俺は口パクでめだかに言った。

≪めだか！お前は火薬玉をなんとかしろ！俺はあいつらを守る！≫

≪わかった≫

「テメーらニュースとか見てねぇのか？だっせぇな。最近のガキは何考えてっかわかんねーんだぜ？」

なんとかこいつらを守る方法を考えねぇと・・・・・・

「どーするよ黒神。こっから見事俺を改心させるんだろ？それともやめてくださいってお願いしてみるか？」

「・・・・やめてくだ「おせぇよボケ。」」

めだかがお願いする前に、雲仙先輩はマッチへと火を点け、それを火薬玉へーーー

そして少し遅れ、生徒会室から天地を揺るがすような爆音が、響きわたった。

第二十六話　『正しくあろうと』

前回のあらすじ？

翼斗「ドゴォォォン！！！！！」

善吉「全くわからん！」

☆★☆★☆★

～雲仙ｓｉｄｅ～

ボゴッ！

俺は乗っかっていた木を思いっきり蹴った。

「・・・・ケッ！風紀委員会特服『白虎（スノーホワイト）』。ダンプにはねられてもへっちゃらだっつー触れ込みの対圧繊維で縫製された最新科学の産物だ。だが動きづらいのが難点だな！」

（これか改良が必要だな・・・・・）

「・・・・・しかし、それにしても思ったより被害が小せえな。そりゃ校舎全壊とまではいかなくても。この辺一体消えて無くなってもよかったはずなんだが・・・・ん？」

俺は床に落ちてある火薬玉を手に取った。

（な！？不発弾・・・・？いやオレが管理してんだぜ？それはありえねぇ。・・・・じゃぁ？）

俺は先ほどのことを思い出す。

（ああなるほどな。あの女手近にあった花瓶の水をブチ撒けて、着火直前に火薬玉をいくつか濡らしやがったのか。）

「火ィつける前に水びたしにされちゃー不発にもなるわな。」

そして俺は割れた窓の異変に気付く。

「なるほど。爆発で割れた場合はこんな割れ方はしねぇ。爆破の瞬間に蹴りだされた火薬玉も結構あるってわけか。」

（ていうかあの瞬間にこれだけ動けるとか、やっぱり黒神は化物だな！）

「けどまぁこんなことは焼け石に水・・・・・・　　！！！！！」

煙が晴れた先に現れたのは、ボロボロの黒神と、ほぼ無傷の3人、そして血だらけの榛原翼斗が居た。

「な、ナニィ・・・・・！？」

（四人とも無事だと！？いやそんなことよりも！なぜあの三人は全然ケガをしてねぇ！？なぜ榛原翼斗だけがそんな大けがしてやがる！？どういうことだ！？こっちだってそれなりに命張ったんだぜ！？）

「黒神！！テメー一体何をした！？」

「・・・・・私は何もしてないさ。ただ耐えただけだ。」

（か、簡単に言ってくれるぜ・・・・・そんなこと常人にはできねぇ！）

「・・・・翼斗、大丈夫か？尋常じゃない血の量だが。」

『・・・・・・・・・ああ。』

「榛原翼斗！！お前一体何をした！！？」

『・・・・・簡単なことだ。三人の怪我や痛みを全て俺が引き受け、俺が耐えただけ。』

「んな！？それもお前の能力なのか！！？」

『・・・・・・・はい。『痛吸収（ペインドレイン）』と『解放（アンロック）』です。』

（こいつ何個能力持ってんだ！！？マジで化物か！？）

「ケケケ！！やっぱりおめぇらは化物だ！いやそれにしてもお前らの聖者っぷり！気持ち悪いーっ！」

『・・・・・・・・』

「・・・・・・・・」

「ケケケ！そんであれだろ？この期に及んでもどうせ黒神は争う理由なんかねーって言うんだろ？仲間もオレも傷つけずに済んで一件落着！めでたしめでたしハッピーエンドってことになるんだよなー！」

「うるさい」

「！！」

「・・・・・哀れなことだ。貴様もかつては人の善性を信仰する心優しき美少年だったに決まっている。情状酌量に値するだけのきっかけがあってそのような残虐無比な性格を帯びてしまったとしか考えられん。

しかし！！！！！だからと言って！！私は貴様を許さない！！！！！！！！」

「！！！！」

思わず俺は後ろにとびのいた。

（な、ビビらされた！？オレが？睨まれただけで！凄まれただけで！思わずとびのいたってのか！？）

「雲仙二年生貴様の言うとおりだ。私と貴様はそっくりだよ。私も貴様と同じで、自分を正しいと思ったことなど、一度もない。

もっといい方法はなかったか。

ちゃんと他人の役に立てているか。

起こりうる全ての可能性を考えたか。

誰かの悲しみを見落としていないか。
気付かぬうちに易きに流れていないか。
人を助けることに慣れてしまっていないか。
いつだって迷っているし、いつだって怖い。

私は正しくなんかない。ただ、正しくあろうとしてるだけだ！！」

「？わかんねーよ何言ってんだか。おんなじじゃねーかそんなの。」

「わからんか？私には貴様の言うような大層な信念などないと言っているのだ。
少なくとも！友達を危険な目に遭わせてまで貫きたい信念など私にはない！」

～雲仙ｓｉｄｅｏｕｔ～

「うう・・・・・・・・・・」

お、起きたか。

『お、気付いたかお前ら。』

「おう翼斗・・・・・・ってお前大丈夫か！？血だらけだぞ！？」

『大丈夫だと言えばうそになるし、大丈夫じゃないと言えば嘘になる。』

「じゃぁどういえばいいんだ！？」

「・・・・・ありがとう翼斗クン。」

おお阿久根さん気付いたか。

「はぁ？どういうことだ、じゃなくてですか？」

・・・・・善吉、鈍い。

「気付かないのかい人吉クン。所詮虫だな。おそらく翼斗クンはなんらかの能力を使って俺たちを助けてくれたんだよ。だって俺達無傷だろ？」

「・・・・・そういえばそうだな。そうなのか翼斗？」

『さぁどうだか。』

そんなことよりめだか本気で怒ってんな。
怒りがこっちまで伝わってくる。

「私の聖者っぷりが気に入らないんだって？雲仙二年生。
いいだろうならばがっかりさせてやろう！私が怒りにまかせて暴れてしまうような、ただのくだらない人間だということを教えてやろう！！！」

「人吉クン、めだかさんがあの状態になるのはいつ以来だ？」

「中一の夏休み以来ですよ。だから三年ぶりですか。」

あの状態ってなんだ？・・・・・あの状態か。

「そうかい。そうだな。俺もあの頃はめだかさんのことを、血も涙

もない理想主義者だと思っていたよ。」

「・・・・・黒神めだかの真骨頂、その？、『乱神モード』！こうなったら俺でも止められねーよ。雲仙お前終わったぜ。」

・・・・善吉の言うとおりだ。あいつにもう勝機はねぇ。

「・・・ケケケ！！人のコト勝手に終わらせてんじゃねーぞ、ボケ！！！！！」

そういうと雲仙はスーパーボールを構えて突っ込む。

「乱神だろーが魔神だろーが、火山の前じゃ消し炭だぜ！！！」

バカだ。

するとめだかが雲仙を思いっきり殴った。

バゴッ！！！！！！！！！！！！

「ガ、ガハッ！」

まぁそりゃ血もでるわな。

「ダンプにはねられてもへっちゃらな制服だって？それも聞いて安心した。つまり三発までなら大丈夫ということだよな。私が本気で殴っても！！！！！！！」

第二十七話　『やり過ぎだ』（前書き）

翼斗「感想を書いてくださったＡＡＡさん・・・・・・・

ありが１０！」

翼斗「早速そこにかかれてあった意見に返答するＹｏ！」

翼斗「書かれてた意見は・・・・「ていうかぶっちゃけ寿命を延ばす異常を作ればいんじゃね？」です。」

作者「い、いや～実はこれについては最初からわかってたんだよ！でもそうしてしまえばばんばん翼斗が能力作って無双状態になるからやめたんです！」

翼斗「・・・・・・・まぁそれもそうだな。・・・・で、裏の理由は？」

作者「異常書くの多すぎてめんどくなる。」

翼斗「そういうことか・・・・・」

作者「と、ということで寿命を延ばす異常は作りません！」

翼斗「あとその感想に悪い点で遅いって書いてあったんだが。」

作者「それは作者の更新スピードが遅いってこと？」

翼斗「いや違う。俺の考えではたぶん「話の進むスピード」が遅いってことか？」

作者「なるほど。もう少しで３０なのにまだ風紀委員会だもな・・・・」

翼斗「一体マイナス編は何話になることやら・・・・」

作者「さ、さぁそれでは本編です！」

翼斗「話終わりにしやがった！と、とにかく！感想を書いてくださったＡＡＡさんありがとうございます！」

第二十七話　『やり過ぎだ』

前回のあらすじ？

翼斗「めだかがピー！になった。」

☆★☆★☆★

ドゴォォン！！！！

雲仙は壁に叩きつけられた。

・・・・て言うか今の音パンチじゃでないよな。

「たいしてダメージがあるとは思えんがそのまま立ちあがれないふりをしておけ。今ならまだ許してやれるかもしれん。」

「・・・・・ケケケ、冗ー談！痛くもかゆくもねーっつーの！ていうかノーダメージだよボケ！」

みえっぱりだな・・・・・

まぁ血だらけで立ってる俺に言われたくないだろうが。

「そうか、あくまでも私と戦うか。私も同じ気持ちだがならば私の理性が残っているうちに忠告しておこう。

私はさまざまな格闘技の指南を受けているが、その技術を一切使わず！私はただの衝動的な怒りにまかせて暴力に訴え、人間ではなく獣のように貴様を撃つ！」

「・・・・・ケッ！いいだろう！テメーが獣のように戦うのなら！オレは人間のように戦ってやる！正義は必ず勝つんだよ！」

そう雲仙がいうと同時にめだかはパンチを繰り出した。

「ぐ、ぐふぅ！」

何故避けない！？今のはそんなに速いスピードじゃなかったはずだ！

「・・・・どうやら何か企んでいるらしいな。しかしまぁとどめを刺さずにいられる気分でもない。」

「めっ・・・・・めだかちゃんっ！」

「・・・・・私の主義に巻き込んで悪かったな貴様たち。あとで腕章を返してくれ。これからは私一人でやっていくことにするよ。」

「！！」

・・・・・ていうか俺の出番なくねぇ？

まぁ今はそんなことを言ってる場合ではないな・・・

「私を校舎内に誘い込むのが貴様の策か？だとすれば小賢しい小細工だな。」

「ハッ・・！ナメてんじゃねぇぞ黒神！俺は十三組で一年以上生き延びてきてんだ。入学してたがが数か月のテメーとは違うんだよ！」

そういうと雲仙はスーパーボールを投げつける。

「攻撃される理由はもうあんだろ！それでもオラ！避けれるもんなら避けてみろ！」

「全方位からの弾幕攻撃か。ふむ確かに避けるのは難しそうだな・・・・だが！」

めだかはガードもせずスーパーボールの中を進んでいく。

「最初から喰らうと我慢できないことはない！私の主義と貴様の正義！これで決着だ雲仙二年生！！」

めだかがパンチを繰り出す。

すると雲仙が笑った。

「ケ！確かに決着のようだぜ。テメーの負けだよ黒神めだか！」

するとそのパンチが途中で止まる。

『・・・・・・なるほど。糸か。それもただの糸じゃないな。』

「その通り！俺がさっき投げたのは火薬玉じゃねぇ！オレの最後の切り札『鋼糸玉（ストリングボール）』だ！お前に絡まってんのは俺の服を作ってるのと同じ素材で作った『アリアドネ』だ！

一本で五トンの重量をつりさげれるアホみていな技術だ！ほどけやしねぇ！」

・・・・・馬鹿だなあいつ。

「ふむ。ならばもう一度言おう」

こんなのでめだかを止められるわけねぇだろ。

「小賢しい小細工だな！貴様はこの程度か！！！！」

「人間の知恵が！技術が！この程度なはずがあるまい！」

めだかは血が出るのもかまわず雲仙の方で向かっていく。

「なっ！何やってんだテメェ！その糸の強度は刃物とかわんねぇんだぞ！八つ裂きになりてぇのかテメェ！」

「糸で私は縛れない。
網で私は捕えられない。
八つ裂きにならすでにされている。
雲仙冥利！！貴様は私の心を切り裂いた！！」

ゴゴゴゴゴ・・・・・・

校舎が揺れる。

「なっ・・・・なんだこりゃぁ・・・・！？一体何が起きてやがる・・・・！？」

「貴様の糸がいかに頑丈であろうと、その糸を結んだ校舎の方はそうではあるまい。身動きがとれんというほどでは実はないぞ。」

「はぁ！！？ふざけんなコラ！そんなの校舎を引きずって歩くようなもんじゃねぇか！」

「私は生徒会長だぞ！校舎の一つや二つ、動かせんわけがなかろうが！！！」

☆★☆★☆★

「なにあれ？一体何が起こってるの？」

「決まってんだろ。めだかちゃんが怒ってんだよ。」

『もがな、阿久根先輩。おそらくこの先も周りを巻き込んでいくだろうぜ。』

「翼斗の言うとおりだ。引き際があるとするならたぶんここだぜ。これ以上巻き込まれたくないんなら今が生徒会の辞め時だ。」

「「！！」」

☆★☆★☆★

「情けねぇ限りだが、オレにはもう何も残っちゃいねぇ。だがな黒神、それでも俺はお前に負けていないんだ。
なぜならオレはちっとも改心してねぇ！これはお前にとっちゃぁ敗北だろ？
テメーは確かにオレより強い。だがだからといってオレは信念を曲げねぇ。オレは明日からもかわらずこう言い続けるぜ。オレは人間が大嫌いだ！！」

「そうか。私は人間が大好きだ。貴様は改心しなくていいよ。貴様に明日は来ないからな！」

そして、めだかの拳が降り下ろされた。

はずだった。

「やめろめだかちゃん。やり過ぎだ。」

拳が振り下ろされる前に、俺と3人がめだかを止めた。

「離せ貴様たち。巻き込まれたいのか。」

「うんそうだよ。あたし達は黒神さんに、巻き込まれたいんだ！」

「めだかさんになんと言われようと、俺達は生徒会をやめません。」

『今まで散々巻き込んでおいてそれはねぇだろうよ。ここまできたんだ、最後までついてってやるよ！』

「・・・・・めだかちゃん。

俺達はもう二度と、お前を一人にはしないよ。」

善吉がそういうと、めだかが元に戻った。

「雲仙二年生。

貴様、生徒会に入らないか？」

「・・・・・・・あ？」

「もとより副会長には私に敵対的なものについてほしかったのだ。不知火には断られてしまったが。」

・・・・あれ？
今の話ちょっとおかしくね？

『・・・・ちょっと待てめだか。副会長は俺だ。ハッ！まさか！これで俺は解放される・・・・・』

（よっしゃぁ！！！！！！）

と喜びに浸っていると・・・・・

「何を言っている翼斗。さっきついていくって言ったじゃないか。」

『ハ？ダッテ副会長ニハイラナイカッテ・・・・・』

「知らないのか翼斗。副会長は二人までいいんだぞ。」

俺の中の時が止まった。

『・・・・・・・・・・つかの間の喜び乙です。俺。』

「ふっざけんな！！！オレは風紀委員長だぞ！？誰とでも仲良くできると思ってんじゃねーよボケ！！」

「・・・・そうか残念だ。」

そういうとめだかは歩いていく。どこかへ。

「ちょ・・・めだかさんどちらへ！？」

「病院に決まっておろう。からだがボロボロだからな。」

「「えええええっ！？」」

あ、そういえば・・・・・・・

『俺血がドボドボ出てたんだった・・・・・・』

ドサッ

「「翼斗！！！」」

俺は倒れ、意識を失った。

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

「雲仙くんがしばらく戦線離脱ですか。困りましたねぇ。『十三組の十三人』は一人でも欠けたらダメなのに。このままでは私の計画が破綻してしまいますよ。どうすればいいと思います？袖ちゃん。」

「どーもこーも！別に悩む必要なんかないって。おじいちゃん。いやさ、箱庭学園理事長不知火袴総帥！」

「困った時は迷わず選ばず、目安箱に投書すればいいんだよ。」

第二十八話　『実はもう一人』（前書き）

報告です。
翼斗の『筋肉倍化（アップボディ）』を名前を変えて『解放（アンロック）』にしました。
理由は単純にこっちの方がかっこいいからです。

第二十八話　『実はもう一人』

前回のあらすじ？

翼斗「俺が病院に逝った。」

☆★☆★☆★

『んっ・・・・・・・』

目覚めたらそこは天国・・・・・・・・ではなく病院だ。

「おお起きたか翼斗！！」

『善吉・・・・・あれから何日たった？』

「2日だ。お前は2日も寝っぱなしだ。」

そんな寝てたのか俺・・・・・

ていうか病院の人びっくりしただろうぜ。

血だらけの人が来たんだし。

『・・・・よし。じゃぁ体にも問題ないし帰るか。』

「ああ。ちゃんと病院の人にも挨拶しておけよ。じゃぁおれはこれで。」

『じゃぁなー！！』

善吉が病室から出る。

『さて・・・・・

寝るか。』

ということで俺はもう一度眠りについた。

☆★☆★☆★

～？side～

「雲仙君との小競り合いは大変でしたね黒神さん。理事会も彼の正義(すぎ)には手を焼いてたものですから正直言って助かりましたよ。箱庭学園理事長として正式にお礼を言わせてください。」

今めだかが居る場所は理事長室で、理事長の不知火袴と話をしている。

「礼には全く及びませんよ不知火理事長。それより私としてはお孫さんの制御をお願いしたいですな。」

ちなみにお孫さん＝不知火半袖だ。

「ははは、無茶を言わないでくださいよ。袖ちゃんをコントロールできる人間なんて精々、君の幼馴染の人吉くんくらいでしょう。」

「・・・確かに。」

「・・・さて、それでは本題に入りましょうか。目安箱に投書してまで君に足を運んでもらったのはほかでもありません。

実は雲仙君は風紀委員長としての活動とは別に私のプロジェクトに参加してくれていましてね、ただ彼は今度のことでしばらく静養しなくてはなりません。そこで黒神さんに彼の代役をつとめていただきたいのです。」

「プロジェクト・・・・・ですか？」

「ええ。私は便宜上、それを『フラスコ計画』と呼んでいます。」

「フラスコ計画・・・・・」

「黒神さん、君はどうして自分が優秀なのか・・・・疑問に思ったことはありませんか？」

「質問の意味をはかりかねますね、それよりも私は自分を優秀だと思ったことはありません。」

「ははは、謙遜することはありませんよ。君は明らかに異常なんですから！
足さばきで分身する。
フルマラソンを二時間フラットで駆け抜ける。
獰猛な獣をひとにらみで屈服させる。
関数計算を暗算でする。　ｅｔｃ・・・・
どれひとつとっても人間には到底不可能な行いです。」

「どれもこれも私がした努力の結果にすぎません。」

「そうですね。優秀な人間ほど己が優秀さを努力や運や環境のせいにしたがるものです。まるでいいわけでもするみたいにね。
では黒神さん。ここでひとつ老人の実験に付き合っていただけませんか。」

そう袴は言うとグラスに入ったサイコロを取り出した。

「サイコロ・・・・・これをどすればいいんですか？」

「簡単です。ただ振るだけでいいです。どうかお願いします。」

「・・・・わかりました。そこまで言うなら・・・・・」

めだかはサイコロを振った。
すると・・・・・

一列に積み重なった！！

「すみません、昔からこうなんです。私がサイコロをまとめて振るとなぜか、こんな風に積み重なってしまうのです。」

「・・・・いえ、それでいいんです。それでこそ・・・君を誘う意味がある！」

「そうですか。残念ですが、その話はお断りさせていただきます。私は見知らぬ他人の役に立つため生まれてきました。私のささやかな能力の裏打ちはそれで十分です。それでは失礼します。」

そう言うとめだかは理事長室から出て行った。

「・・・やれやれ、断られてしまいましたか。しかし強い子だ。強い強い、強すぎて弱点が丸わかりですね。

で、君たちはどう思いました？」

するとさっきまで誰もいなかった椅子の後ろに、突如として6人の人が現れた！

「僕には理事長が言うほど大した奴には見えませんでしたけどね。サイコロ占いの結果には驚かされましたが。彼女、僕たちがここにいるのにも気づいた様子はありませんでしたし。」

宗像形。三年十三組所属。血液型ＡＢ型。験体名『枯れた樹海（ラストカーペット）』

「いやぁ俺の見たところ気付いた上で無視してたっつー感じだぜぇ、

ありゃ。とりあえず五回くらい殺してみようとしたけど全部失敗しちゃったもん。」

高千穂仕種。三年十三組所属。血液型ＡＢ型。験体名『棘毛布（ハードラッピング）』

「いずれにしてもあの子が雲仙くんに勝てたのはただのマグレだと私は思うよ、まぁでも私は好きだよ。ああいう子。」

古賀いたみ。二年十三組所属。血液型ＡＢ型。験体名『骨折り指切り（ベストペイン）』

「私は意見を有しない。思うことなど何もない。」

名瀬夭歌。二年十三組所属。血液型ＡＢ型。験体名『黒い包帯（ブラックホワイト）』

「いいんじゃない？あれなら人数合わせくらいにはなるでしょ。結局ボクと王土がいればそれでフラスコ計画はなりたつんだし。」

行橋未造。三年十三組所属。血液型ＡＢ型。験体名『狭き門（ラビットラビリンス）』

「うむ。あれだけの美貌だ。俺の視界に存在することを許してやってもよかろう。」

都城王土。三年十三組所属。血液型ＡＢ型。験体名『創帝（クリエイト）』

「ふふふ。いやはや君たちにかかっちゃぁ化物生徒会長も形無しですねぇ。」

「だけど理事長さん。誘いはつれなく断れちゃったじゃん。どーすんの？」

「心配はいりませんよ古賀さん。実はもう一人候補が居ます。」

そう言うと王土は笑った。

「フッ。大体は想像付いている。榛原翼斗だろう？」

「！！！」

なぜか王土が名前を言った瞬間、いたみは驚愕した。

「その通りですよ。でも何故貴方が知っているのですか？」

「実は一度前に会ってな・・・・・おそらくあいつなら心配いらないだろう。」

「嘘・・・・なんで・・・・・・」

いたみはまだ驚愕している。

「それじゃぁ行きましょう。」

「待て。」

袴が理事長室へ向かおうとするのを王土が止めた。

「行くのならば理事長一人で行った方がいい。その方が身のためだ。」

「どういうことですか？」

「まず病院に居るのだから目立つ。それよりも下手したら話を始める前に気配に気づいて全部ダメになってしまうかもしれん。」

「なるほど。それじゃぁ私一人で行きましょう。」

袴が理事長室を出た。

「・・・・・・・・」

「古賀ちゃん。俺達も地下に戻るぞ。」

呆然としてるいたみに話しかける名瀬。

「え・・・・・・あぁうん。」

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

ドガシャァ！！！！

めだかが鉄球で殴られて倒れる。

「5642124132657766564342985784 5

4 3 1 ・ ・ ・ ・ ・ 2 3 5 4 ! 「

第二十八話　『実はもう一人』（後書き）

さて・・・・気付いたでしょうか・・・・・・
あることに・・・・・・

第二十九話　『どんな結果が出ても』（前書き）

いつの間にかＰＶ１５００００超えてました！
みなさんありがとうございます！

第二十九話　『どんな結果が出ても』

前回のあらすじ？

翼斗「２３４２２７４５９８７０３・・・・（フラスコなんだかがなんちゃら・・・）」

☆★☆★☆★

『さぁ～て帰る準備でもすっか。』

十分な睡眠をとった俺は帰る準備をしようとしていた。

「おや。ちょうど退院するタイミングのようですね。」

『？』

声がした方向を振り向いて見るとお爺さん。うんお爺さんが居た。

（７０代くらいかな・・・・・）

『あの・・・・どちらさまですか？』

慣れない敬語を使って聞く。

「私は不知火袴。箱庭学園の理事長です。」

（理事長か・・・・なんの様だ？）

不知火・・・・・って名字どこかで聞いたような・・・・・

あ！あのブラックホール（半袖）のおじいちゃんか！！

『これはこれは我が親友不知火半袖の祖父か、じゃなくてですか。』

「どうやら敬語に慣れていないようですね。無理して使わなくていいですよ。」

『いえいえ。それじゃぁ俺のプライドがゆるさないんで。

・・・それで、なんの用ですか？』

「たいした用じゃないんですよ。ただ、貴方にあるお願いがありましてね。」

お願い？なんで俺に？そんなめんどいのめだかに言えよ。

『それはどんな計画なんですか？』

「ええ。私は便宜上、それを『フラスコ計画』と呼んでいます。」

そう言って理事長は、フラスコ計画の説明を始めた。

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

「４１３６（お前）、１６３７３５６４１？（最強って何だと思う？）」

めだかを鉄球を使って攻撃した雲仙冥加が言った。

「１２４１５３２５８６５８７１６０８５１２（仮にこの世で一番強い奴がいたとして）、６８８７４６４７１８４１８６４６４５２２？（そいつが食中毒で死んだら料理を作ったコックが最強なのか？）」

「・・・あの子一体何て言ってんだ？」

「さぁ？なんか数字を呟いているみたいだけど・・・・」

当然、普通の人には理解できない。

「・・・６７６８１６８７１６８７１６８１７８６（・・・しかし弟をリタイヤさせたというから期待していたのだが）、９９７７８９３７６９４２７４３１２４３６（こんなものか黒神めだか）」

そう言って冥加は立ち去ろうとする。

だが・・・

「５３８（待て）」

「！！」

冥加及びその場に居るほとんどの人間が驚愕した。めだかが冥加と同じ方法でしゃべったのだから。

「８９８６７５７６５３？４４４４６７９２３２４５１９０６９３３？（貴様一体何者だ？私のクラスメイトだと？雲仙二年生の姉君だと？」

「・・・４６４７（ほほう）５６３２４９８５６３２３２１４６７（私の言葉をこれだけのやりとりで解読したのか）３２５４６６６５４３８７４２４（そんなことができるのは弟だけだと思っていたがな。）

４６７６５２３５９９６７４４４、３１２６７８６４３５７８６４５３２１５４（それにしても良く立ち上がれたものだ、いやそれよりもお前はなぜ避けなかった？おそらく余裕で避けれるだろう？）」

「６５７５４３５２４２５４２３３５４５７（貴様から攻撃を受ける理由がない）９９９（ゆえに）３２５２３５１２３３・・・１１４！（避ける理由が・・・ない！）」

「お・・・おい生徒会長なんかフラフラしてきてんぞ！」

「当たり前だろ！鉄球で頭どつかれたんだぞ！？立ち上がれる方がどうかしてる！」

「・・・８９４７５２３０９１（そうかならば）」

冥加は鉄球を構えると、

「２１４８７２１４！！（もう一発喰らっておけ！！）

めだかに向かって投げた。

ゴッ！！！

「ぐっ・・・・ふぅぅ！」

めだかは今回も避けず、体に激突する。

「・・・２１４８７２１４（もう一発だ。）」

そう言って再び冥加はめだかに鉄球を投げる。

「うわっ！また避けねー！まだ避けねー！今度は無事じゃぁすまねぇぞ！！」

誰もが最悪の事態を予想し、目をそむける。

そして、鉄球はめだかに、

当たらなかった。

なぜなら。

「アホゥ、攻撃される理由がないんやったら避けんかい。」

鍋島猫美が助けたからである。正確には、めだかを持ち上げて横にずらしただけだが。

「お・・・・おお、鍋島さんだ・・・」

「「「「「鍋島さんだぁぁぁぁ！！！」」」」」

「俺達の鍋島さん！！鍋島猫美が現れた！！」

「反則王鍋島！今日は俺達にどんな卑怯を見せてくれるのかぁ！？」

「クククッ☆登場しただけで騒ぎすぎやっちゅーねん☆」

「・・・・・大した人気だな鍋島三年生。」

助けられたことなのか、めだかは顔をそむける。

「いやいや支持率９８％の黒神ちゃんには敵わへんよ☆」

「６８７８７５４６５４１２４５３３３３（おい邪魔をするな十一組（スペシャル））、６７８９９６４３１２８６３６（これは十三組（アブノーマル）の問題だ、お前には関係ない）」

「ククク！何ゆーとるかさっぱりわからへんけど、言いたいことはわかるでー。

ざけんなや！！！大好きな友達がボコられとんのに関係ないわけあるかい！！！！！

ククックッ♪なーんちゃって☆」

そう言うと猫美は制服を脱ぐ。

「事情は知らんけど、要するに女子同士の可愛い喧嘩やろ？やったらウチも混ぜたりーや♪ウチの柔道見せたるわ！」

「６８８６５４３６９７６５８９０１？（弟から聞いて知っているぞ、お前、鍋島猫美だろう？）５７８８７６５４３３２３５７１２３４！（柔道（スペシャル）に投げられるほどに私は軽（アブノーマル）くないぞ！）」

鉄球を猫美へ投げつける。

だが、

スパァァン！！

鉄球が当たるより前に、猫美のパンチが顔にヒットした。

「？？」

「え・・・・あれ？な・・・・なっなっ・・・・・」

「殴ったぁぁぁ！！！！！！柔道なのに殴ったぁ！！いきなり反則！ぱねーー！さすが俺達のあこがれ猫美さん！！」

「まぁ厳密には反則じゃないがな☆

どうや？ウチのパンチは？石頭や鉄球ほどやのーても、ウチの拳もなかなかの堅さやろ？

柔道やから柔らかいとは限らへん！手堅く勝たせてもらうでぁ天才（アブノーマル）！！」

「・・・５７７８６４（いいだろう）、４６７６４５３７９８４２２６７８３４３（お前の軽薄さは私にとって許しがたい）５６８９９７４５３４６７３３！（私は軽い相手を重く潰す！）」

☆★☆★☆★

『なるほど・・・つまり雲仙が居なくなって計画に支障がでるから、代わりに入ってほしい・・・っと？』

「えぇ、そういうことです。」

丁度話が終わりました。本当のことを言うと半分も理解できていません。

「忘れていました。この話を断るか断らないかの前に、翼斗君にはあるテストに参加してほしいのです。」

そういうと理事長はグラスに入ったサイコロを取り出した。

『これを振ればいいんですか？』

「ええ。」

『よいしょっと』

俺は荷物をもって立ち上がる。

『あ、え～とどんな結果が出ても俺は話に乗りません。』

「そうですか・・・・残念です。」

翼斗はサイコロを振った。

『・・・・それでは失礼します。』

俺は病室から出た。

病室には、全てが真ん中から真っ二つに割れたサイコロが転がっていた。

第三十話　『こんな危ねぇもん』

前回のあらすじ？

翼斗「だが断る。」

☆★☆★☆★

『退屈ＤＡ－♪退屈ＤＡ－♪』

理事長の話を断った俺は学園の１階に居た。

暇だが。

『なんかおもしろいこと起きないかなー♪』

「おい聞いたか！！？３年教室前で反則王鍋島さんと誰かが闘りあってるってよ！！」

起きたよ、おもしろいこと。

『行くしかねぇだろ！ということでＬｅｔ’ｓ　ｇｏ！』

早速俺はそこに向かった。

「おっ・・・おおおおおお！鍋島県名物料理狸の寝入り！ずっるーっ！！」

相当おもしろいことになってました。

「クククッ！言うたやろ？どつかれた程度で気絶できるほど柔（やわ）な鍛え方してへんわ。」

ていうかどういう状況？

「４・・・・（おっ・・・・）４１３６・・・３４３４・・・（お前・・・ふざけ・・・）」

「あームリムリムリ！こんな風に同じ側の襟と袖を取られたら柔道ではまず振りきれんことになってるーーねんで！！」

ゴッ！！

鍋島先輩が一本背負いを決める。

「・・・・・いやでもあれって片襟・片袖ルールにひっかかるから・・・・」

「その通り。６秒で反則を取られる組手だよ。」

あそこにめだかいんじゃん。

よし状況を聞いてこよう。

『・・・・・なぁこれどういう状況？』

「！！翼斗いつの間に！？」

いや『腑罪証明（アリバイブロック）』使っただけ・・・・

「体は大丈夫なのか！？」

『おーよ。おかげさんで完璧～。それでどういう状況？』

「簡単に言うとあれは雲仙二年生の姉君でいきなり鉄球でどつかれてその時に鍋島三年生が助けに来て今に至る。」

『・・・大変だったな。なんか色々な意味で。』

って話してるうちに鍋島先輩はもう相手の後ろを取っていた。

「おい黒神。あのコ今卑怯者とか叫んでるだろ？」

「？なんだ屋久島三年生、貴様も奴の言葉がわかるのか？」

ああ。この人って競泳部の人か。

「いいや全くわからんよ。ただ鍋島と戦った奴はみんなそういうのさ。

鍋島猫美の勝利への執念は『反則』だってなーー」

ドゴッ！！！

鍋島先輩は裏投げを決めた。

「う、裏投げ！！」

「決まったぁぁぁ！！！！」

これはさすがに立ち上がれんだろう。

「７・・・・・（ま・・・・・）７７８・・・・・（まだだ・・・・・・）」

あいつなかなかやるな。あれを喰らって立ち上がるとは。

・・・・・・あいつと闘りたくなった。

『・・・・鍋島先輩。ここは俺に譲ってくれませんか？』

「おおなんや翼斗クン。いたんかいな。何故や？」

『なんか無性にあいつと闘りたくなりました。』

「・・・・・・・仕方ないわなぁ。」

『ありがとうございます。』

そう言って俺は前に出る。

「６５７・・・・・（貴様・・・・・・）２３４２９８？（何者だ？）５２７４１８４７５５６。（ノーマルなんかに用はない。）」

はぁ。めんどくせぇしゃべり方しやがって。

『６７８３４５６（どうも初めまして）１６４１４６８４９５７８

３８（１年１組の榛原翼斗と言います。）』

「「「！！！！」」」

ほとんどの人がびっくりしているが・・・・そんなにすごいことなのか？

ちょっと考えたらわかったが。

「６８４９４２２８９・・・・（異常(アブノーマル)なら話は別だ・・・・）」

そう言うといきなり鉄球を投げつけてきた。

俺はそれを・・・・

『ダメだろ？女の子がこんな危ねぇもん振り回しちゃぁ。』

ドゴッ！！！！！

「「「「「「「！！！！！！！！！」」」」」」」

『解放(アンロック)』で２倍にして砕いた。

『それに重いもんを振り回したあとは体ががら空きになる。』
俺は3倍にして懐にとびこむ。
そして、
『うおりゃぁぁぁ！！！！』
死なない程度に加減をして思いっきり殴る。
「4・・・・・446！（が・・・・・はっ！）」
・・・・・骨が折れた感触がしたな。
相手は吹っ飛びそのまま意識を失った。
『・・・・・・・ふぅ。』
「大丈夫か翼斗。今すごい音がしたぞ・・・・」
心配そうにめだかが聞く。
『だいじょーぶ。死なない程度に加減はした。』
「相変わらず容赦ないな～」
相変わらずとはなんだ。
『鍋島先輩、俺闘うの見るの始めてですよね？』
「さぁ？どうかなー☆」

・・・・駄目だ。俺にはこのテンションについていけない。

『じゃぁ俺、俺の超スーパー大親友、人吉善吉に会ってくるんで。』

「あ！逃げたな♪」

『やだな・・・・・・それじゃぁめだか後でな。』

「ん？ああ。」

ちなみに俺が後でなって言ったのは、

またすぐ会う気がした。

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

善吉は不知火と一緒にめだかを探していた。

「・・・・あ～もう！どこ行ったんだよめだかちゃん！！雲仙先輩からの伝言伝えなきゃならねぇのに！」

「イライラすると体に悪いよ♪」

「うるせー！！じゃぁお前も探すの手伝え！！」

「やだよアタシは！だってアタシは親友が困っているのを指をくわえてみるのが好きなんだもの♪」

「不知火・・・・お前・・・・・・」

その時、突然現れた。

「お前達、黒神めだかの同胞と見る。偉大なる俺がお前たちに質問をしてくれよう。謹んで答えることを許すぞ。目安箱（めだかボックス）とやらが何処にあるか、俺に教えてよい。」

『十三組の十三人』の『創帝（クリエイト）』こと、都城王土が。

第三十一話　『俺の幼馴染に』

前回のあらすじ？

翼斗「俺のあだ名が『鉄球破壊者（クラッシャー）』になった・・・・」

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

突然現れた。都城王土が。

当然、こんな面倒くさい事に巻き込まれたくないからだろう、不知火はいつのまにかいなくなっていた。

「おいお前、俺を前にいつまで立っているつもりだ？」

そう言うと、王土はこう口にした。

「『跪け。』」

「！？」

善吉が勝手に跪く。

（えっ・・・！？なんだこれ！？体が勝手に・・・！？動かない！まるで！ちっとも！微動だにしねぇ！！）

「ふむ、よい姿勢だ。どうやら貴様には奴隷の才能があるようだな。さぁ俺に目安箱の場所を教えるがよい。」

善吉はこの状態を変えようと力を込める。

だがその行為は無駄だということを思い知らされる。

「無駄な革命はやめなよ。人吉くん。都城王士の真骨頂その？『言葉の重み』。王の圧政（ことば）には誰も逆らうことができないんだからね！」

木の陰から現れた行橋未造によって。

「なんだついてきていたのか行橋。姿を見せるまで俺に気取らせないとはすばらしい。褒めて遣わす。

が、しかしお喋りが過ぎるようだぞ。俺は既に君臨している。今更その存在を語られるまでもない。」

「えへ！そう言うなよ。ボクはお前の語り部なんだからーー。そんなことよりさっきから王士！さっきからずっと、

尾行（つけ）られてるぜ。」

『ギ、ギクゥ！！』

校舎の陰から誰かの声が聞こえた。

「・・・・なるほど。そういうことか。道理でさっきから人の視線を感じると思ったがーー。出てこい。お前なのはわかってる。　榛原翼斗。」

そう王土に言われると、翼斗はこう言って出てきた。

『あまり俺の友達をいじめないでくださいよ王様。殺しますよ。』

☆★☆★☆★

～翼斗ｓｉｄｅ～

まぁそういうのはもちろん冗談だが。

『お～い善吉く～ん～、生きているか～。』

言いながら俺は善吉の顔をペチペチたたく。

「うるせぇ！！いいから助けろ！！！！」

『あ～ダメだよ善吉く～ん、人にばっかり頼ってたら～。』

「お前のテンションうざっ！！！」

え～とこれどうやって助けるんだ・・・・

と俺が悩んでいると。

「ふ～ん君が翼斗くんか！」

『すいませんが貴方は誰だ？じゃなくてですか？』

「僕は行橋未造！ただの十三組の異常（アブノーマル）さ！」

たぶんこいつも理事長が言ってた十三組の十三人の一人か。

「フッ。会いたかったぞ榛原翼斗！」

『俺は会いたくなかったがな。二度と。』

あ、これ本音ね。

「まず小手調べだーーーー『跪け。』」

善吉がさっきと同じく跪くが俺はなんのこともなく立っている。

「・・・・・じゃぁ次は『平伏せ。』」

王様の命令に俺はこう返した。

『お前が平伏せ。』

「！！？」

王土が平伏す。

「お、王土っ！・・・・・なるほど。理事長がほしがるわけだ。」

「・・・・ふんっ。」

わずか3秒で王土は立ちあがる。

『おお！俺の『絶対言語』を喰らっておいてすぐに立ちあがるとは！さすが王様です。

そんな王様に一つ教えましょう。さっきから・・・・

真似（コピ）られていますよ。』

「なんで言うんだ翼斗。」

さっきから後ろにめだか居るの見えたからな。

「めっ、めだかちゃん！」

「貴様を探してみれば随分な場面に遭遇してしまったものだ善吉よ。不知火以外なら誰に懐こうと貴様の自由だが、しかしどうだ、私をさしおいて男に跪くとはあまりにつれないのではないか？」

『俺の事は突っ込まないのね・・・・』

「翼斗はもうあきらめてる。」

心にグサっとくるぜそのセリフ。

「・・・・どうやら目安箱を探す手間が省けたようだな。黒神めだ

か。だが俺を前にその尊大な態度はいただけん。　『平伏せ。』
」

「！！！！！！」

めだかが平伏す。
なんか助けたくなってきたがどうやって助ければいいのかわからん。

「さて黒神。俺が誰だかわかるだろ？」

「・・・・先程理事長室で見かけたな。フラスコ計画とやらの参加者か。」

「そうか。やはり気付いていたか。ならば話は早い。」

「その時、俺はお前に惚れた。一目惚れだ！
俺はこれ以上なくお前を見初めた。妻として俺に付き従うことを許そう！」

そう言うと王土はめだかの唇を自分の唇に近付けていき・・・・

「え・・・・？あ・・・・」

「うぉぉ！！！」

唇が触れ合う前に善吉が動いた。

「めだかちゃんに・・・・・・・俺の幼馴染に何しようとしてんだこの王野郎！！！！！」

善吉が蹴りを当てようとする。

「ほう？立ち上がるか。なるほど大した革命だが、しかし王の恋路を邪魔しようとは無粋な男よ。

その罪、万死に値ーーーーー」

王土が全てを言い終わる前に、未造が善吉をつかんでいた。

だが、王土に降りかかる攻撃を全て防いだわけではない。

『余所見してちゃ危ないですよ、王様。』

「！！なに！？」

バゴッ！！！！！！

「ぐっ！！！」

王土が振り返る前に、俺は蹴りを喰らわした。

だがなんの異常も使っていないので、当然少ししか吹っ飛ばない。

「・・・・・・まさか貴様も邪魔するとはな。」

『もちろん。目の前でキスなんかしようとしたら邪魔するでしょ普通。』

「・・・・・まぁよい。いずれ貴様と戦うことになるだろうからな。」

そう言うと王土は手紙を取り出した。

「興が削がれた。黒神、その投書を読んでおけ。デートの誘いだーー。日時と場所が書いてある。その時改めてじっくりと互いを語り合おうじゃないか。」

「・・・乙女の唇を奪おうとしておいて随分な言い草だなっ！貴様と語り合うことなど何もない！」

「意地をはるな。お前も雲仙冥利には感じるところがあっただろう？偉大なる俺はそれ以上だぞ。」

「っ！！」

「異常側（こちらがわ）に来い黒神めだか。くだらん連中（ノーマル）のために己が存在を消耗するな。お前は他人の為ではなく、俺の為に生れてきたのだ！」

そう言って、王土と未造は立ち去った。

「・・・なぁめだかちゃん。俺で動けたんだ。めだかちゃんも本当は動けたんじゃねーか？」

「さて、どうであろうな。今まで口づけをしてことはたくさんあってもされたことはなかったから、経験してみたいと思ったのも確かだが。」

「・・・あっそ。じゃー邪魔しちまって悪かったな。」

『え？何？めだかってキス魔だったの？』

「なんだ、貴様もして欲しいｎ『全力でお断りさせていただきます。』ふむ、残念だ。」

俺のファーストキスは死守する！！

・・・・・・・あぁ俺のファーストはもう奪われたわ。

「しかし、やっぱりフラスコ計画がどうやらという前に今の私にはバージョンアップが不可欠らしい。」

「バージョンアップっつってもどうすんだよ？修行でもすんのか？」

修行って・・・・・・ドラ〇ンボールの〇空じゃあるまいしｗｗ

「うむ。まぁそんなところだ。実はこれから兄貴を訪ねてみようと思っておる。」

「ハァ！！？あの人に会いに行くのか！？お前が？自分から！？」

「うむ。だから貴様を探しておったのだ。一緒に来てくれ善吉よ。私はあの男と二人きりでは絶対に会いたくないのだ！！！」

『ふ～ん大変だなお前ら。じゃぁがんばれよ修行。』

俺は立ち去ろうとする・・・・が。

二人に腕つかまれた。

『なんだこの手は！なんだその目は！俺は絶対に行かねぇぞ！』

なんか面倒くさいことになりそうだし絶対にやだ！！

「心配するな。引きずって連れていく。善吉。そっちの腕をもっていてくれ。」

「了解。」

『ちょっ！まっ！！やめろぉぉぉぉぉ！！！！！！！』

こうして俺は半ば強引に連れて行かれた。

第三十二話　『レベル１００まで』

前回のあらすじ？

翼斗「拉致された・・・・・」

☆★☆★☆★

『あ～もう駄目だ・・・・色々な意味で。人生とか人権とかが。』

「安心しろ。翼斗の人生はもう真っ暗だし、人権はない。」

『なにそのひどい扱い！？』

只今絶賛拉致され中だ。

「翼斗、気にしちゃダメだ。めだかちゃんは真黒さんに会うということでいらついているだけだ。」

『誰その人？』

率直な疑問だ。

「めだかちゃんの実兄、黒神真黒さんだ。・・・・ついたぞ。ここが真黒さんが居る旧校舎だ。」

そこには幽霊屋敷と言われたらたぶん信じるであるだろう建物があ

った。
外観がボロボロなどではなく、なんか、濁ってる。空気とかなんかが。
「ちなみにここは『軍艦塔(ゴーストバベル)』と呼ばれているらしい・・・」
あ～絶対行きたくねぇ～
『・・・・・俺は入らんぞめd「「よし行こう。」」あ～確かに人権も糞もねぇ～わ。』
☆★☆★☆★
「ついてしまった・・・・・」
めだかがこんだけ落ちこむって・・・・どんな兄貴なんだ？
「めだかちゃん、笑顔。笑顔だぞ。」
「わ、わかっている・・・・」
そしてめだかは扉を開けた。
「やぁやぁよく来てくれたね、ようこそだ！一年ぶりだぞ愛しの妹めだかちゃん！」
扉を開けるとその部屋にはめだか、めだか、めだか！！とにかくな

んかこう・・・・・あれな物が・・・
写真、ビデオ、フィギュア!?ぬいぐるみ!?どうやって手に入れたんだ・・・・

「まったくもう!僕がこの軍艦塔(ゴーストバベル)に住み込みで働いていることを知りながら随分と遅い挨拶じゃないか!お前は昔からお兄ちゃんに対する礼儀がなってないんだよ。僕はめだかちゃんのことをこんなに愛しているというのにね!」

・・・・・・ああ。めだかが嫌がる理由がわかった気がする。
ちなみに当のめだかはめっちゃ嫌がってる。

「ご、ご無沙汰しておりますお兄様。挨拶が遅くなってしまったことをめだかは本当に申し訳なく思っております。でもお兄様も少しは実家にお顔を出されたらいかがですか?お父様もお母様も大変心を痛めてらっしゃいますよ?」

めっちゃ無理してるし。

「お父様?お母様?そんな奴らは知らないね。」

真黒さんはめだかに近づいていき・・・・

「お兄ちゃんにはただ一人、妹(おまえ)がいればそれでいい。」

抱きしめた。

ドゴッ!!!

がその直後、めだかが乱神モードになって殴った。

「一瞬！めだかちゃんが一瞬で簡単に乱神モードに！！」

『死んだんじゃねーかあの人！！』

いや、リアルで。

「ふむふむなるほど。弱くなったねめだかちゃん。

全体的に筋肉量が落ちている、なまけている証拠だ。

筋肉の質も中学一年生の頃の半分以下だな。

頭部に擦過傷があるみたいだけど、昔だったらそんな傷は３０分もあれば完治しただろう。

拳を振りぬく時に左脇腹をかばったよね。あばら骨でも痛めているのかい？

肌ツヤから見うに睡眠もまるで足りていない。

身長が伸びているのに体重が変わっていないぞ。栄養管理がおろそかになっていると見える。

生徒会長になって忙しいんだろうけどめだかちゃん、自己療養がちょっぴりお粗末になっているんじゃないかい？」

抱きしめてパンチされただけでそこまで見抜いた！？

なるほど、この人も異常（アブノーマル）だ。

「あはは！それに比べて善吉くんは随分鍛えているみたいだねー。その筋肉は触らなくても見ればわかる！がんばっているみたいじゃないか善吉くん！」

・・・なんで褒められてんのに落ち込んでんだ？

「・・・そこに居る君も筋肉はあるようだね、そして・・・・・・・異常だ。名前は？」

・・・・俺のことを一発で見分けるとか・・・・すごすぎる。

『・・・・副会長の榛原翼斗です。よろしくお願いします。めだかのお兄さん。』

「副会長さんか！こちらこそ妹のめだかがいつもお世話になってるね。」

「ゴホン！！でわお兄様。本題に入ります。
めだかはすっかりなまってしまいました。ですからここに来たのです。今の私より強くなりたい、お兄様。めだかを鍛えなおしてください！！」

「・・・めだかちゃんがそこまで言うならｏｋだよ。」

あっさりｏｋ。

「もっともそれだけが用件というわけでもありません。お兄様にひとつ質問したいことがあるのです。　フラスコ計画について、お兄様が知っている限りのことを教えていただきたい。」

なるほど。それが二つ目の理由か。

「・・・・・・フラスコ計画？なにそれ？理科の実験か何かかな？」

「とぼけないでくださいお兄様。身体に聞かなきゃいけなくなる。」

それって拷m・・・・ゲフンゲフン！！

「・・・・・・めだかちゃんってゲームとかしないよね？」

「・・・・・は？」

「いやまぁ聞いてよ僕はＲＰＧとか大好きでさ、どんなヘボいキャラもレベル１００まで育てないと気が済まないんだよ。お前と違ってなんのスキルも持ち合わせていない僕にしてみれば他人をマックスまで育てるのが楽しくて仕方ないんだ。だから人為的に天才を作り出そうとするフラスコ計画は、僕が熱中するにはうってつけのゲームだった。」

「お察しの通り僕はかつて『十三組の十三人（サーティン・パーティ）の一員だった。マルチプレーヤーとしての能力を高く評価されてね。もっともメンバーとソリが合わなくなってすぐに辞めちゃったんだけどね？」

そう言うと真黒さんは上着を脱いだ。

そこには手術痕があった。

「腎臓一個、
左側の肺、
心筋の二割、
動脈五本、
静脈三本、
肝臓の半分、
胃の四分の三。
それがフラスコ計画を抜ける為に僕が提供した代償(サンプル)だ。」

「「『・・・・・・・・・っ！！』」」

「おっと！筋違いの同情や逆恨みはやめろよ三人とも。僕は納得してこうなったんだしこの結果にも満足している。この世の地獄を見れたんだ、内臓を全て失くしても鑑賞料としては安いくらいだよ。」

・・・・・・・
言葉が出ないぜ。

「そんなわけでね、だから僕はフラスコ計画の内情を少なからず知っている。だけど、めだかちゃんには絶対に教えない。お前に僕と同じ目に遭ってほしくないからね！だけど僕はお前にそれ以外の全てを教えよう。止めても無駄なことはわかっているからお前をレベル１００まで育て上げてやろう！妹育成のシュミレーションゲームだ！」

「もちろん僕は変態だから意味もなく身体をべたべた触りまくったりするぞ！そんな僕の特訓に果たしてついて来れるかな黒神めだか！！」

「・・・よろしいでしょうお兄様！お礼にめだかはあなたを更生さ

せて真人間にしてみせましょう！！」

お、いい雰囲気。
これは俺は修行しなくてもいいな　↑フラグ

「しかしめだかちゃん都城とのデートは明日の朝だろ？たった一晩でレベルマックスになれるもんなのか？」

『そうだ。さすがに時間が少なすぎると思うが・・・』

「おいおい何を他人事みたいに言ってるんだい善吉くん、翼斗くん。君たちも一緒にがんばるんだよ？」

「『・・・・・は？』」

う・そ・だ・ろ・・・・・・

「善吉くん、きみがどれほど鍛えてきたのかは見ればわかる。昔、心ないことを言って悪かったね。よくぞ挫けずずっとめだかちゃんのそばに居てくれた。一緒に強くなってこれからも僕の大切な妹を守ってやっておくれよ。翼斗くんも。」

くっ・・・・断れねェ・・・・・

「カッ！仕方ねーなぁまったく！真黒さんがそこまで言うんだったら付き合ってやるよめだかちゃん！」

『・・・・・・・はいわかりましたよ！！！付き合えばいいんでしょ付き合えば！！！』

「本当はお前も参加したかったんじゃねぇか翼斗？」

何おう！・・・・・・まぁそうだが。

『・・・・・・うるせぇＢＡ☆ＫＡ。』

「い、いらつく・・・・・」

「それじゃぁ早速特訓を始めようかな。黒神真黒プロデュース！化物マネージメントのコーナー！まずはコースを選択してくれ。

Ａコースはありとあらゆる苦痛を全身で経験する悪魔も泣き叫ぶようなハードトレーニングでしかも効果と命を保障できない。

Ｂコースは寝て起きたら最強になってる。

さて、どっちのコースがお望みだい？」

こんなもん・・・迷うまでもないだろ。

『迷うまでもねぇ！！！Ｂコーｓ「「Ａコース！！」」・・・Ａコース。』

こうして、修行が始まった。

第三十三話　『全く状況が』

前回のあらすじ？

翼斗「俺の基本的人権が無くなった・・・・・」

☆★☆★☆★

～？side～

十二時間後の七月十五日の午前六時。

都城王土はそこでめだかが来るのを待っていた。

「・・・・地球は俺にとって小さすぎる。太陽でようやく偉大なる俺に匹敵しよう。だから俺はこうして欠かさず日の出を眺める。立ち昇る太陽を見つめることで都城王土という己の姿を確認するのだ。

待ち合わせにこんな早朝を指定したのはそのためだ、黒神めだか。俺の妻になるものとしてお前に太陽（おれ）の姿を見てほしくてな。」

と言って王土は後ろを振り返る。

「なるほど。貴様は意外とロマンチックな男なのだな。尊大ながらも女の扱いを心得ているではないか。

だがすまんな。私には鏡を見る暇も、身だしなみを整える余裕もなかったよ。」

そこには、ボロボロのめだかと善吉と、そして翼斗が居た。

～？ｓｉｄｅｏｕｔ～

「・・・・・ふむ。定刻丁度に到着するその几帳面さに免じて身なりについては大目に見よう。しかし男連れというのはさすがに容『あ～長くなりそうなんでもういいです。』偉大なる俺の言葉を遮るとは、榛原翼斗、きさまには仕置きが必要だな。」

なんか本当に眠かったので俺は王土の言葉を途中で遮った。

「生憎、女としてここに来たつもりはない。私は生徒会長として来たのだ。

『十三組の十三人（サーティン・パーティ）』の一人都城王土。フラスコ計画の概要を教えてもらおうか。」

「・・・強気な女だな。ますます俺の好みだよ。しかしそれもまず王に対する礼儀あってこその話だ。まずはとりあえず、『跪け。』」

「「！！」」

王土の『言葉の重み』に耐えた二人。あ、ちなみに俺は、

『あ～今日の晩ご飯何にしようかな・・・・』

献立考えてた。

「・・・・ほう？王の圧政（ことば）に逆らうとはおもしろい。まぁ一人は完全に無視してるがな。なにやら生意気に鍛えてきたようだな。今度は本気で言こう。『平伏せ。』」

「「嫌だ！！」」

善吉とめだかは言葉でも反発して平伏すのを防いだ。

再びちなみに俺は、

『餃子いいかもな・・・・でもダンボール入ってたらどうしよう？まぁそんなことないと思うが。』

まだ献立考えてた。

そんな俺達を見て王土は笑った。

「・・・・・ふはっ！これは驚いたな。王の圧政（ことば）に表立って逆らえるものなどこの学園に五人いるかいないかだぞ？」

「そうか。ではこれで七人になったな。縁起のいい数だおめでたい。・・・・・あ、そういえば翼斗もいたな。これじゃぁ八人だ。縁起の悪い数の九じゃなくてよかった。
なに、変態で優秀で変態なコーチの下で徹夜しただけだ。」

「変態・・・？ああ！黒神というその名字！お前さては黒神真黒の妹か！
なるほど。魔法使いと異名をとったあいつならば、一晩という時間は猫を虎にするのに十分過ぎる。

で、それがどうした？」

「「！！！」」

突如、王土の雰囲気が変わった。
まぁそんなこと知らんが。

「勘違いするなよ。『言葉の重み』など俺にとっては必殺技でもなければ真骨頂でもない。圧政が通じんならば暴力を振るうまで！女を屈服させるのに荒っぽい手段を取りたくないが、言葉が成立しない以上それもやむなしだ。」

「・・・・・ふざけんな！」

王土の手がめだかに届く前に、善吉はめだかを庇った。

「何が話し合いだこの王野郎！お前の言葉は全部ただの命令じゃねーか！お前なんかめだかちゃんに指一本触らせねーよ！！」

おおかっこいい！！・・・・いやまじめに。

よしじゃぁめだかを助ける手伝いでもするか。

『あ、王土先輩！・・・・・いや王土。善吉に触れたら俺がお前を潰すから。』

俺は笑顔でそう言った。

「・・・昨日といい今日といいとにかくお前は俺の恋路を邪魔するのだな。まったく無粋な男だよヒトキチ。お前は一体黒神のなんなのだ？踏み潰されんうちに俺の王道（みち）からどくがいいーー」

・・・俺の事は突っ込まんのね。

「うるせぇ！俺の名前は人吉善吉！黒神めだかの幼馴染だ！！！」

ドゴッ！！！

そう言って善吉は王土を屋上の外へ蹴り落とした。

「そんなとこから落下するようなタマじゃねぇだろ、とっとと戻ってこい！お前が俺の名前を覚えるまで蹴り続けてやるぜ！！」

だが王土の返事はなし。

善吉、まさか・・・・・・

「・・・・人吉くん。こんな高い場所で暴れちゃだめだよ。」

『人殺しは犯罪だよ人吉くん。ほらちゃんと警察に自首しなきゃ。』

「なんかふたりとも呼び方がよそよそしくなってる！翼斗の言ってることは違う！！・・・・たぶん。

だって今完全にバトルパート突入な空気だったじゃん！おい！大丈夫か都城先輩ーーーー」

善吉は下を見る。

「なるほど。いい蹴りだ。避ける気にならなかったよヒトキチ。しかし愚民（ノーマル）ごときが王の身を案じるなど無礼であるぞ。」

そこには、壁に立っている王士が居た。

「言ったはずだな。地球は俺にとって小さすぎる。地球の重力では偉大なる俺を縛ることができないのだ。

というのはもちろん冗談であり、こんなものは足の握力で壁にしがみつき、腹筋で上体を起こしているだけに過ぎない。訓練すｒ――――――」

ここで俺の意識がブラックアウトした。

え？何故かってそれは

寝たから。

☆★☆★☆★

『・・・・・ふぁ～よく寝た・・・・・』

目を覚ました俺が見たのは、いや聞いたのは、

「生徒会長権限を発動させるぞ善吉と翼斗。フラスコ計画を今日中に叩き潰す！！！」

『どういう状況だ～～！！！！』

寝ていて全く状況がわからない俺であった。

第三十四話　『適当に』（前書き）

作者「しょうゆさしさん感想ありがとうございます！」

翼斗「俺の影の薄さに気付いてくれてありがとう・・・」

作者「そしてＰＶ２００００００アクセス突破！！」

翼斗「これからも異常で過負荷で普通な男をよろしく！！」

第三十四話　『適当に』

前回のあらすじ？

翼斗「寝てもバレなかった・・・・・・」

☆★☆★☆★

『なんだこりゃぁ・・・・・』

生徒会室に戻った俺等が見た物は、投書で溢れた目安箱だった。

「・・・こりゃひどいな。苦情にせよ陳情にせよ、ぜーんぶ十三組がらみの投書じゃねーか。」

『仕方ねーよ。全員フラスコ計画の空きを手に入れる為に必死になってるからな。』

「これまで学園に来てさえいなかった十三組生が一斉に登校してきたのだ。どうしたって混乱は避けられん。」

「カッ！風紀委員も今大わらわらしいぜ？鬼瀬が珍しく愚痴ってたわ。」

それは相当だな。あいつが怒るとは。

「ふん。確かに制服改造については言うまでもなく、十三組生はい

ながらにして風紀を乱すような生徒ばっかりだからな。」
『いや。制服改造を進んでやっている生徒会長に言われたかねーと思うが。』
「翼斗。今更突っ込んでも遅い。」
もうちょっと早く言えば良かった。
「こりゃやっぱ火元を絶つしか方法がねーか。早めにケリつけねーとまずもって通常授業ができねーよ。」
「元より私はそのつもりだ。ちゃんと先生の許可もとったし！今から早速時計台地下の研究施設とやらに向かうぞ。善吉！翼斗！」
そう言ってめだかはいきなり制服を脱いだ。
「バッカ！！！」
善吉はあわてて目をそらす。
ちなみに俺は普通に見てる。
今エロ！って思った奴・・・・・・・・・・歯ァ喰いしばれ。
「・・・・向かうぞはいーけどよ、阿久根先輩と喜界島はどうする？誘っとかなくていいのか？」
『え、なに？俺もう強制？』
「今回の任務では少なからず肉弾戦が含まれそうだからな。阿久根

書記と喜界島会計には向くまいよ。肉弾戦はお前の得意分野だろう、翼斗。」

『俺そんなサイ○人じゃねーし！！！』

畜生やっぱり人権ねぇ・・・・・

「通常業務を放棄するわけにはいかんし、二人にはそっちを担当してもらおう。

それでは！目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！！」

こうして俺等は、時計台地下を目指して行った。

・・・行くときに不知火の髪が見えた気がしたが、気のせいだろう。気のせいと信じよう。

☆★☆★☆★

「「いらっしゃいませ。」」

『いやレストランじゃあるまいし。』

現在地時計台地下の扉の前だ。

そこになんか居た。

おそらく双子だ。似てるし。

だが似すぎてキモイ。

「生徒会執行部会長職、黒神めだかだ。貴様たち、フラスコ計画ーー『十三組の十三人（サーティン・パーティ）』のメンバーか？」

「いやいや僕たちはただの門番さ。」

「「ただの普通の異端児（アブノーマル）さ。」」

「無視して素通りして行ってくれて構わないよ。」

「「ただし勿論、この『拒絶の扉』を通ることができたらだけど☆」」

うっわ～～～めんどくせぇキャラ～～～！

「見ての通りだ。この扉を開けるには６桁の暗証番号を正しく入力しなければならない。一度に通れるのは一人ずつ！一人通るごとに番号は変更される！

通れる確率は百万分の一！百万人に一人しか通さない！ゆえに拒絶の扉！！」

「つまり、『十三組の十三人（サーティン・パーティ）』に相応しいものだけが！ここを通れるというわけだな。」

「「そういうことさ。」」

『マジ？じゃぁちょっとやってみよう。』

俺は拒絶の扉に近づき、適当に浮かんだ番号を入力していく。

（え～と３の・・・・・８の・・・・・９の・・・・）

なんかあの双子こっちニヤニヤして見てるし。

「当然！開けられるはずがｎ『開いたぞ。』そうでしょう！やっぱり・・・ってええ！！！！！！」

『いや適当に浮かんだ数字うっただけだから。めだか、先行ってるぞ。』

「ああ。すぐ行く。」

俺が扉の中に入ると、扉がすぐしまった。

扉がしまる前に、あの双子の一人が

「なるほど。理事長が欲しがるのも納得のモルモットだ！」

と言ったのを聞こえた。

『・・・・・ムカツク。』

☆★☆★☆★

めだかの次にもがな、その次に善吉と阿久根先輩が入ってきた。

『いつの間にか二人増えてるのは気にしないとして・・・・善吉、どうやって入った？』

「・・・・・阿久根先輩が扉破壊した。」

な、なんと・・・・

『ブッ！アハハハハハハハハハ！！！！さすが！！！かっけぇ～！！！』

俺は大爆笑した。

「・・・それにしても見たところまた扉だな。今度はなんの扉だ？」

「見ての通りなんの工夫もないエレベーターの扉だよ。フラスコ計画の最深部にして最新部ーーー地下十三階までの直通さ。」

「「ただし今度は６桁の暗証番号なんて温泉温度の関門じゃないぜ。」」

俺はこっそりと扉に近づき、適当にうってみた。

『どれどれ・・・・・』

「キーボード入力による漢字かな交じり文字制限なしの暗号を入力しなければ、そのエレベーターは稼働しな『使えるぞ。』そうそう、無理無理・・・・ってまた！！？？」

『いやだから適当ににうかんできたやつううっただけの話だって。』

「バ・・・・バカな・・・・こんな簡単に・・・・・」

いやこれ本当の話。

『どうするめだか？エレベーターで行くか？』

「いや。ここは階段で行こう。私たちは視察に来たのだ。最深部だけを見学するような横着はすまい。フラスコ計画の全貌をあますことなくじっくりと見させてもらう！！！」

『そうかい。じゃぁ行くか。』

俺等は階段を下り、まずは地下一階を目指した。

第三十五話　『俺に殴られてから』

前回のあらすじ？

翼斗「人間やればできるってことを痛感した。」

☆★☆★☆★

『・・・・・あれ？さっきもここ見たような・・・・・』

ここは地下一階。簡単に言うと俺等は・・・・

「・・・・やはりな。どうも私たちはさっきから同じルートをぐるぐる回っているようだぞ。」

迷ってます。

「え・・・？そんな馬鹿な・・・？」

「あ！でもあそこの壁の亀裂、見覚えがある！」

「クスクス！その通りだよ！君たちは今回っていて、君たちは今迷っているのさ！この地下一階フロアｈ『あ～迷宮ってことだな。よしわかった。』せ・・・・せめて全部言わせてくれよ！！」

なんかあの双子のキャラといい、色々むかついたので途中で再び話を遮った。

「・・・・ていうかお前らなんでついてきてんの？」

『職務サボっちゃいかんぜ坊や。』

「「君たちが扉ブッ壊したから門番（ぼくたち）の仕事が無くなったんだろーが！！僕たちも中に入るのは初めてなんだよ！！」」

『いや君たちじゃなくて一部の人たちだから。』

俺は壊してない。
壊せないこともないが壊してない。

「どうするめだかちゃん？迷路って確か攻略法があるんだよな？」

「左手法があるがここは・・・・・喜界島会計。ここはあの手で行こう。」

「え・・・・あ、どの手？」

「こないだ二人で遊園地に行った時迷路アトラクションで使ったあの手だよ。」

「ああ、あの手！」

「「『お前ら二人で遊園地とか行ってんの！？』」」

いいな～遊園地。
俺は子供時代が『あれ』だったから行ったことはない。

『俺も逝きたかったぜ・・・・』

「翼斗。今更だがそれ字違う。」

「でも黒神さん。あれあとでこっぴどく怒られちゃったんだけど・・・・」

「構わん。私が許す。やれ。」

「・・・うん。わかった。じゃぁーーーー」

そう言ってもがなは息を大きく吸い込む。

・・・・うん？吸い込む？

まさか・・・・やべぇ！！

耳をふさごうとしたが遅かった。

「あん！！！！！！！！！！！！！！」

もがながとてつもなく大きい声をだした。

当然そばで聞いていた俺の耳は・・・・

『・・・・・善吉。俺は先に逝く。』

バタッ！

「よ・・・・翼斗～～～！！！！！！」

こうなるわけです（＾Ｏ＾）／

「フーッ。」

「な、ななな・・・・なんちゅう声を出すんだお前は！！！！」

「見ろ！！！翼斗が旅立ったじゃねぇか！！！」

『ガ、ガハァ・・・・・・』

「・・・・・うむ。そう怒鳴るな貴様たち。後翼斗はほっとけば生き返る。ザオリクを使わずともな。」

なにその悲しい発言！

「今のでこのフロアの構造は概ね把握できた。ついて来い！最短距離で階段まで行くぞ！」

「「は・・・・はぁ？」」

『・・・・ソナーの原理だ。音の反射で・・・・めだかは迷路を把握したってことだ。』

「よ、翼斗！本当に生き返った・・・・」

「何をしている貴様たち。とっとと階段に行くぞ。」

俺等は階段を目指して歩き始めた。

だが・・・・

「トレビアン！ここ最初のフロアだからいろんな奴が通って行くんだけどよ。そんな方法で迷路をクリアした奴はいなかったぜ！」

「「「「『！！』」」」」

後ろに突然男が現れ、俺達はすばやく後ろを振り向いた。

「ただまぁ階段まで最短距離で行くとかつれねーこと言うなよ。あ！俺三年十三組の高千穂ってんだけど！」

ダッ！

高千穂が言い終わると同時に、善吉と阿久根先輩が殴りかかった。

だがそれを

「「！？」」

驚いた表情を少しも見せず高千穂は避けていた。

「折角視察に来たんだ、ゆっくり見学して行けや。理事長からもオマエラを歓迎するよう言われてんだよ！」

「歓迎？実験の間違いであろう。貴様の顔にも見覚えがあるぞ。理事長室で私にちょっかいを出そうとしていた男だな。」

「ちょっかい？ちょっかいっつーのはもしかしてこういうことかい？」

そう言った高千穂の手には、さっきまでめだかがつけていたメガネと髪留めが握られていた。

「改めて自己紹介させてもらうぜ黒神めだか。『十三組の十三人「サーティン・パーティ」』、棘毛布（ハードラッピング）の高千穂仕種。戦闘科学担当だ。ここを通りたくば俺に実験（たお）されてからにしろ！」

・・・・闘（や）ってみたいな・・・・

『・・・・めだか。ここは俺がやる。』

「だ、だが・・・・・」

『やるっつってんだろ。いいからやらせろ。』

「・・・・わ、わかった。たが一つだけ。絶対に負けるなよ！」

『任せろ。』

そう言って俺は前に出る。

「なんだ？黒神じゃなくて榛原翼斗か。」

『ご存じでしたか、初めまして。箱庭学園副会長の榛原翼斗です。めだかと戦いたければ・・・・・・俺に殴（ボコ）られてからにしろ！』

第三十六話　『これじゃぁ』（前書き）

翼斗「Ｋａｖａｌｌｅｒｉｓｔさん！感想ありがとう！」

作者「みなさんに楽しんでもらうために作者はがんばってます！」

翼斗「そうか。じゃぁもっとがんばれ。」

作者「・・・・・がんばる。」

第三十六話　『これじゃぁ』

前回のあらすじ？

翼斗「うおおおお！！！！！戦闘民族の血が騒ぐぜぇぇぇ！！！！」

☆★☆★☆★

高千穂は突然、首からネックレスにかかったＵＳＢメモリを取りだした。

「まずは教えといてやるぜ榛原。このネックストラップの先についてるＵＳＢメモリ、このちっぽけな記録媒体にフラスコ計画における俺のこれまでの研究データが全て詰まっている。」

・・・なぜ持ってきた？

馬鹿かこの人。

「なるほど。つまり私たちがそれを力ずくで奪い取れば、私たちの目標は十三分の一、達成されるってことだな。」

「そういうこと。」

「よし翼斗。そいつをｔ『力ずくで奪えってことでしょ？わかりましたよ。』そうか、ならいい。」

奪うねぇ・・・・・

どうしようか。

「榛原、力ずくが簡単だと思っていたのなら大間違いだ！」
高千穂がいわゆるボクシングのスタイルで構える。
『わかってますよそんなこと。』
俺は適当に構える。
『さ～て楽しみますか。』

どう来る・・・・・
相手はボクシングのスタイルを取っているがボクシングとは限らない。
案外蹴りとか・・・・・
と思った瞬間、高千穂が動いた。
バゴッ！！
『がっ！！』
思った通り蹴りを使ってきた。
しかも真空飛び膝蹴りだ。
「おおーっと言ってなかったっけ？俺の戦闘スタイルはボクシングじゃねぇ。キックボクシングだ！」
『やはりな。そうだと思ったさ！！』

俺はパンチを繰り出すが、簡単に避けられる。

（ん？なんか違和感が・・・・まぁいいか。目的は達成した。）

『ほいほいＵＳＢメモリゲット～！』

「なぁ！？いつの間に！？」

さっきパンチした時にこっそりと取っておいた。

『だがこれは～・・・・・いらん！！！』

「「「「！？」」」」

そう言うと俺はメモリを地面に思いっきり投げ、踏み潰した。

「な、何してるんだ翼斗！？」

『１５ＧＢなんかにフラスコ計画の全てが入るわけないだろ。おそらくこれはフェイク。そうでしょう高千穂先輩！！』

「ほぉ！よく気付いたな！確かにこれは偽物！そして本物はここにある１２８ＧＢのものだ。」

そう言って高千穂はポケットから取り出す。

『なるほど・・・・それです・・・・かっ！！』

言い終わると同時に高千穂の懐に飛び込み、蹴りを決める。

いや、決まっていない。

高千穂はそれを軽々避けた。

（・・・やはりな！）

俺は違和感の正体がやっとわかった。

『なるほど。高千穂先輩の異常（アブノーマル）は、『反射神経』・・・ですね？』

見ると、高千穂先輩は全く考えて動いていねぇ。

考えないで攻撃をよける・・・・・つまり反射神経だ。

「・・・ハッ！さすがは理事長が認める男だ！こんなに早く見抜くなんてな！

その通り！俺は生まれつき異常な反射神経の持ち主でなーーー言うならば自動操縦（オートパイロット）の戦闘機（コンバットマシーン）だ！！どんな機関銃を搭載していようと！操縦桿握ってるお前じゃ撃墜できっこねーんだよ！」

『・・・・機関銃ならな。こっちは地球を使う。』

「ハァ！？お前何いってんだ・・・・・ガァ！！！！」

俺は相手の頭上に蹴りを入れる。

「・・・・あれ？避け・・・・ない？」

善吉が思わず言う。

『そらよっと！！！』

「ガハァ！！！！！」

再び懐に飛び込み、パンチを決める。
その後もパンチを腹に連打する。

「ガハァ！！！！グハァ！！！！！」

「あれ？反応できていない？」

「いや違うぞ善吉。」

めだかが善吉の言葉を否定する。

（さすがめだかだ・・・もう気付くなんてな。）

「どういうことだめだかちゃん？」

「反応ではなく、反射だ。それによくよく見ると少しではあるが、
高千穂三年生の体が避けようと動いている。」

そう。全く動いていないわけではなく、少しではあるが避けようと
動いているのだ。

『御名答めだかちゃん～！』

さすがにびっくり。
ここまで早く気付くとは。

「くっ・・・・・そ！体が・・・・・重い・・・・・・・」

『・・・高千穂先輩、これが俺の異常（アブノーマル）、『重力加減（グラビティアース）』、です。この能力は相手にかかる重力や、自分にかかる重力を自由に変えることができます。』

作ったZE☆
『幻想実現（ドリームアウト）』で。

『これじゃぁ避けれませんよね・・・・・』

「くっ・・・・そっ！！」

俺は『解放（アンロック）』を使う。

『2倍・・・・・・3倍・・・・・・・・・・・・4倍！！！！！！！！！！』

ドゴッ！！！！！！！！！！！！！！！

俺は4倍の力で腹に思いっきり一撃を叩き込んだ。

第三十六話　『これじゃぁ』（後書き）

今回は全然うまくかけなかった・・・・・

どうも戦闘はうまくかけん・・・・

第三十七話　『またやりましょうね』（前書き）

作者「しょうゆさしさん、感想ありがとうございます！」

翼斗「マジ嬉しいっす！」

作者「それにしても翼斗さ、しょうゆさしさんの言うとおり寿命の事とか全然気にせずバンバン作るよね。」

翼斗「いや俺も気にしてるって！これでも自粛してる・・・・・自粛しなかったらやばい数になってたよ！？」

作者「これは作者的にもありがたい。」

翼斗「まぁいざとなった時は・・・・・・

死なない異常つくろ♪」

作者「せこ！！」

第三十七話　『またやりましょうね』

前回のあらすじ？

翼斗「４００パーセント！！！！！！！！！！」

？　わかる人だけこのネタはわかります。

☆★☆★☆★

『ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・』

さすがに４倍はやりすぎた・・・・・・

ていうかメモリ壊しちゃった！

『・・・・すまん。壊しちゃった♪』

「・・・・・・・」

めだかが無言で俺に近づく・・・・・・

そして・・・・

『げふぅ！！』

ゴキャゴキャ！！

アッパーをかました。

ていうか今骨折れた音したよね（・・？

『はにふんだほはぁ！（なにすんだコラァ！）』

あ、やっぱあごの骨折れてる。

「・・・・加減はｓ『ひはほ。ふぁーんほは（したよ。ちゃーんとな。）』・・・・そうか。」

「それじゃぁ次の階に行こうぜめだかちゃん。」

「そうだな。」

（ん！？よし！！顎はずれてただけだ！！）

幸い！？骨は折れていなかった。

だが心は折れた。

「何している翼斗、おいていくぞ。」

『ん？あぁすまん。』

俺は自力で顎を直し、めだかの所に向かった。

だがその前に止まり、高千穂に向かって言った。

『またやりましょうね。高千穂先輩。』

「・・・・・・フン。」

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

壊れた『拒絶の扉』の前には一人の男が立っていた。

「・・・やれやれ、こりゃぁ阿久根くんの仕業だな。荒っぽい真似をするもんだよ全くね！」

そう言うと男は瓦礫の中から電子錠を取り出し、数字を打ち込む。

「さて、地下に潜るのも一年ぶりか。別に懐かしくもないや。」

そして男は地下へ入って行った。

電子錠には、『ＯＰＥＮ』とかかれていた。

☆★☆★☆★

『う～ん綺麗な景色だ。』

地下二階の扉を開けると、そこには和風の家と庭が広がっていた。

「・・・え？あれ、なにこれ？」

善吉が思わず口をもらす。

『なにこれ？ってこれは庭と家だろ。』

なぜそんなこともわからん。

「知ってるわ！！俺が言いたいのは何故地下二階に屋外みたいな景色が広がってんのかっていうことだ！」

『・・・・実は地下二階は屋外ｄ「もういい。お前に聞いたのがまちがいだった。」じゃぁなんだっていうんだよ！？』

「しらねぇよ！！だからお前に聞いたんだろうが！」

「・・・・これは一種のビオトープだな。迷路に続いての実験施設というわけだ。目的は不明だが、これもフラスコ計画の一端なのであろう。ほれ、天井を見てみろ、ちゃんと屋内だぞ。気圧や光量を調節して屋外を再現しておるのだ。」

・・・・・ビオトープってなに（・・？

「・・・それがわかっているなら。早く後ろの扉を閉めてくれないかな。」

俺達の横で、水やりをしている男が言った。

「扉を開けっ放しにされたら空調が乱れる。環境を一定に保つためにこれで結構苦労しているんだよ。」

「それは気付かなかった。」

素早く阿久根先輩が扉を閉める。

「ところで、貴様も『十三組の十三人［サーティン・パーティ］』のメンバーか？」

「そうだよ。三年十三組、宗像形だ。理事長から聞いている。君たちが施設を視察に来た生徒会執行部なんだろう？
だけど見ての通り、僕は今作業中で君たちの相手をしれる暇はないんだ。悪いけどこのフロアの視察は後回しにしてくれないかい？」

・・・・なんか妙だな。

『あなたは俺達を邪魔したりしないんですか？』

「ああ。僕は争いが嫌いだしね。」

「ふむ。まぁそういうことならこの階は素通りさせてもらうか。」

俺達が地下三階への階段を目指そうと後ろを向いた。

その瞬間、宗像は日本刀を取り出し、なんのためらいもなくめだかを頸動脈から切った。

第三十八話　『殺されたくらいじゃ』（前書き）

翼斗「Ｋａｖａｌｌｅｒｉｓｔさん。感想どうもありがとう！」

作者「Ｋａｖａｌｌｅｒｉｓｔさんの言うとおり無双だな・・・・・」

翼斗「いいのか？ここは一回負けさせてからパワーアップするというシナリオを・・・・（ブツブツ）」

作者「大丈夫！俺の頭の中にはすごいおもしろいかもしれないシナリオがアップロードされてるぜ！」

翼斗「それは楽しみだ。」

第三十八話　『殺されたくらいじゃ』

前回のあらすじ？

翼斗「めだかが・・・・めだかが・・・・・・パックリ。」

☆★☆★☆★

スパッ！！！

「めっ！めだかちゃん！！！！」

生徒会メンバーは真っ青な顔をしていた。　一人を除いて。

当の宗像は・・・・

「ん？あれれ、へぇ。避けるんだ。避けれないんじゃなくて避けないってデータだったのに。」

そう。めだかはぎりぎりで避けていた。

だが俺はふと疑問に思った。

（それにしても、今までのめだかだったらあれを避けれずスパン！だったはずだ・・・・何故避けれたんだ？）

ふと俺はさっきの戦いを思い出す。

（なるほど。高千穂先輩の異常（アブノーマル）は『自動操縦（オートパイロット）』、つまりさっきの俺

等の戦いを見て何かつかんだということか。）

以上。０．３秒の思考終了。

「なっ・・・なっ・・・・ななな、なんだこいつ！？」

「ああ！驚かせてしまってすまないね。どこから日本刀を出したのか不思議なんだろう？」

すると、宗像の制服のあらゆる部分から、人を殺すための『凶器』が複数出てきた。

「ご覧の通り僕は暗器使いでさ、制服中（からだじゅう）のあちこちに武器や凶器を隠し持っているんだよ。」

いやそこじゃないだろ。

あいつらが言っているのは躊躇いなくめだかの頸動脈を狙って切った事だろうたぶん。

「・・・私たちの相手をしている暇はないのではなかったのか？宗像三年生。」

『そうだぜ。自分で言った言葉くらい自分で責任とらねぇと。』

「まぁそれもそうだね。でも、そう言って信用させた方が殺しやすそうだったからね。僕は高千穂と違って闘う人間じゃないからさ、僕は殺す人間だ。」

「殺すって・・・・何言ってんだお前？」

「別に驚くことはないよ。当然のことさ。」
お前らに聞いてねぇ。似た物兄弟さん。
「「彼は人殺しのテクに異常(アブノーマル)なほど長けた、指名手配中の殺人犯なんだから。」」
「「「!?」」」
『!!??』
殺人犯だと・・・?
それじゃぁまるで・・・・・・『あいつ』じゃねぇか・・・・・・!?
でも不自然だな。
結構人を殺してきたのなら当然殺し方もうまくなる。
大体何故あいつは『刀』を使った?
それだったら『金槌』とか使った方が殺しやすいと思うが。振り下ろせば一発だし。
あ、でもめだか鉄球にも耐えてた。
「・・・僕は理由なき殺人者じゃない。僕は理由ありきの殺人者だ。
僕は今作業中だ。だから殺す。
君たちの相手をしてる暇はない。だから殺す。
君たちの邪魔はしない。だから殺す。
僕は争いが嫌いだ。だから殺す。
黒神さんをメンバーに引き入れるつもりはない。だから殺す。
今日はとてもいい天気だ。だから殺す。

楽しみにしていた映画の封切りが近い。だから殺す。
昼ごはんがおいしかった。だから殺す。
携帯電話の電池が切れそうだ。だから殺す。
昨日の夜はいい夢を見た。だから殺す。
特に何もない。だから殺す。

・・・全ての道がローマに通じるよう、僕にとっては全ての現象が殺人につうじるだけなんだよ。」

これって会話成立してんのか？
俺は全く意味わからんが。

「・・・下がっておれ貴様たち、こやつの相手は私がすｒ「駄目だよーんめだかちゃん！君は力を残しておかなくちゃ！！」！！！！？？？」

突如現れた何故の変態（黒神真黒）がめだかに抱きついてからものの１秒、めだかは乱神モードになって真黒を殴り飛ばした。

「殺人犯に続き変態とは・・・・すさまじき層の厚さだな『十三組の十三人［サーティン・パーティ］』！」

いや違う違う。色んな意味で。

「・・・・で、真黒さんがどうしてここにーーーー」

「愚問だな善吉くん。妹あるところに兄ありさ。妹ががんばっている姿を見に来ない兄は兄じゃない！」

・・・くそ！なんかかっこいい・・・・・

「・・・だったら僕の相手は誰がしてくれるんだい？僕は誰を殺せばいい？」

「やー宗像くん久しぶり！僕の事覚えてる？変態でおなじみ！魔法使いの黒神真黒だよーん！」

・・・さすが。自分で変態っていってる。

「覚えているさ。僕に暗器を教えてくれたのはお前だからな。暗器（これ）のおかげで僕は恐ろしき人殺しから、おぞましき人殺しになれたよ。」

はいしつもーん！！
おぞましきってどういう意味？
教えて誰か＞（｜　｜）＜

「ところで！君の相手を誰がしてくれるかだっけ？心配しなくてもそんなことは決まっているよ。・・・・・行けるね？善吉くん。」

「はい。行けます！！」

「んっ！よく言った！」

・・・まぁ善吉なら心配いらんだろ。強くなったし。

「・・・待ってくださいお兄様！ここはやはり私が行くべきーーー」

「おいおいめだかちゃん。べきとかお堅いことを言わず、たまには黙って甘えてあげてもいいんじゃないかい？」

『・・・そうだぜ。それにお前は下の階の為に余力を残しとかねーと。』

「信じてやりなさい。十三年間絶えることなく！化物（おまえ）の隣にいた男だよ。」

善吉は制服の上着を脱ぎ、構える。

「女子をかばって前に出るなんてきみはきっと優しい子なんだね。とても仲良くなれそうな気がする。だから殺す。」

「やってみろ限界野郎。俺は殺されたくらいじゃ死なねーよ！！」

第三十九話　『男を見せるのは』（前書き）

作者「スマン♪風邪引いて更新遅れた♪」

翼斗「それはお前の体調管理がわるいからだね。」

作者「ごもっともでござんす・・・・・」

翼斗「作者が寝込んでる間に感想書いてくださったみなさん、ありがとうございます！」

作者「これからもこの小説を・・・・

作者&翼斗「「ヨロシク！！」」

第三十九話　『男を見せるのは』

前回のあらすじ？

翼斗「俺が全く入れない話スタート！！」

☆★☆★☆★

～？ｓｉｄｅ～

「体面上、一応こういう台詞を言っておいた方がいいのかな？
ここを通りたくば僕に実験（ころ）されてからにしろ。」

「俺は別にこんなとこ通りたくなんかねーよ。ただ通したい意地があるだけだ。」

さて、なぜ翼斗ｓｉｄｅでないのか、という質問だが、当の翼斗はみなさんのご想像どおり・・・

『ｚｚｚ・・・・・・』

こうであります（＾Ｏ＾）／

すると宗像は刀を取り出し、善吉に向ける。

「使え。見たところきみは手ぶらじゃないか。僕はたくさん持っているから貸してあげるよ。」

「カッ！遠慮しますよ宗像先輩。俺はこうみえてデリケートな草食系男子でね。人を傷つける武器は肌に合わないんですよ。」

「・・・・・そうか。残念だなぁ。」

宗像はあきらめて刀を向けるのをやめ、握る。

「さてと！じゃぁどうやって君の命を殺そうかな。ま、とりあえず太刀で試してみるーーーーーかなっ！」

ヒュッ！！

宗像は剣を振り下ろす。

だが、

ガッ！！

善吉のパンチにより、天井へ弾き飛ばされる。

「・・・へぇ。太刀じゃぁ君の命は殺せないみたいだね。・・・・じゃぁ多刀（これ）だ。」

宗像は袖の中から多くの太刀を取り出し、善吉に振り下ろす。

ガッ！！
ガッ！！
ガキン！！
ガッ！！

が、その全てが善吉の蹴りや拳によって天井に飛ばされる。

「うおおおおおっ！なんだあの画！宗像先輩の斬撃を全て受けきってやがる！」

「気持ち悪い！あの一年刃物が怖くねぇのか！」

「あはは！本当デリケートな闘い方をするよね善吉くんは。どれほどたくさんの刃物を有していようとも一度に使える数は限られている。だからそれを順番に迎撃する。作戦としては一見真っ当ではあるけどさ。ミスの一つも許されない上に酷く気長な、千日手みたいな闘い方だ☆」

「やるじゃないか一年一組くん。どうやら多刀（これ）じゃぁ君の命は殺せないみたいだね。

じゃぁ鈍器（これ）だ。」

宗像は今度はハンマーを二つ取り出す。

「・・・・！！シティハンターの相棒かよアンタ・・・！！」

・・・ちなみに作者はシティハンター知らん。

「・・・真黒さん。確かに宗像先輩の暗器の手際には感動すら覚えますが、武器の扱い自体はどうやら素人ですよね。」

そう。宗像は武器を使っているが、動きが単調だし、あきらかに動きが遅いのだ。

「うん。そうだよー☆さすが阿久根くん。よく気付いたね！」

「なぜその辺は鍛えてあげなかったんですか？」

「うーん。出来る限りのフォローはしてあげたんだけど、あいにく宗像くんはそっち方面の才能はなくってさ。だけどそれでいいんだよ。」

宗像はハンマーをもち、善吉に飛びかかる。

「彼は戦士じゃなくて、人殺しなんだから。」

そして振り下ろす。

「っ！！」

だが今度は、手で受け止めた。

「・・・なるほど。」

そして宗像はなんの躊躇いもなく、武器を地に捨てる。

「ほらね。思い入れがないからああやってあっさり武器を捨てられるだろう？」

「・・・なるほど。」

阿久根が真黒の言葉に納得する。

「ふむ。よし。大体把握できたよ一年一組くん。ちょっと待たせてしまったけれど、ようやくきみの殺害方法がわかった。

きみの命を殺す武器は、狼牙棒（これ）だ。」

宗像は、長さは十分。重さもあり、棘がたくさんついていて殺害方法としては有ともいえるが無ともいえる、狼牙棒を選んだ。

「これなら弾くこともできないし止めることもできないよね。この長さなら僕のノロさも十分カバーできるだろうしさ。」

「え、えーっと宗像先輩。それをお借りするってありですか？」

「・・・・・・・・・なしだ。」

そして狼牙棒を振り下ろした。

すると善吉は素早く服を脱ぎ、当たるより前に巻きつけた。

「だったら仕方ないですね。肌に合う服(やっ)で防御させてもらうとしますか！」

ダッ！

ドゴッ！！

素早く善吉は手を離し、宗像に蹴りを喰らわす。

「やったぁ！人吉の勝ちだね！」

「いや！やってないね。むしろやってしまったという感じだよ。今ので決められなかったのは最悪と言っていい。」

「そうか。狼牙棒(これ)でもきみの命は殺せないのか。

じゃぁ拳銃(これ)だ。」

宗像は二丁の拳銃を取り出し、善吉に向ける。

「S&Wマグナム44

と

デザートイーグルの二丁拳銃。身も蓋もないほど逸脱した圧倒的な殺害方法(アブノーマル)、男を見せるのはここからだぜ善吉くん！」

そして、乾いた銃声の音が、地下二階に響き渡った。

第四十話　『僕はまだ』（前書き）

タイトル変えました！！

第四十話　『僕はまだ』

前回のあらすじ？

翼斗「おれ空気ｗｗ」

☆★☆★☆★

ダッ！！

銃口を向けられたと同時に善吉はもう動いていた。

そして・・・

「死ね。」

ダン！！

弾丸が撃たれた直後に身体をそらして避けた。

そして宗像に近づき、

「！！」

手を蹴り飛ばして銃を離れさせ、

ガララララ

ガッシャ

銃を分解した。

「別に何も心得ちゃいねーよ。本を読んで仕組みを理解し、日夜モデルガンで練習してるだけだ。
こううことともあろうかとな！！」

善吉は蹴りをだすが、避けられる。

「なるほど。二丁拳銃（これ）でもきみの命は殺せないのか。じゃぁ多丁（これ）ーーーーーだ。」

ガッ！！

善吉は宗像が拳銃を大量に取りだしたと同時に近づき、蹴り飛ばした。

「・・・人吉くんが足技を多用し始めましたね。」

「うん。もったいぶっていられるような局面でもないだろうしね。
サバット！善吉くんのベーシックな格闘スタイルだ。」

「路上喧嘩（ストリートファイト）を源流とする足技が特徴的なフランスの格闘技ですよね。」

「そう。善吉くんは色々な格闘技には手を出しているみたいだけど、極めるならサバットしかなかったんだろうな。
なにせ恐ろしく現実的だ。外靴での戦闘を前提とした格闘技なんてサバットをおいてほかにはないからね！」

「それにしてもーーーーー拳銃を相手に一歩も引かない人吉くん

の姿勢は明らかに常軌を逸しています。あれはあれで十分に異常ですよ。」

阿久根の見解に、真黒はまじめな表情に変わる。

「それは違うよ阿久根くん。そんな言葉で片付けられちゃ善吉くんが報われない。

僕がついつい善吉くんに肩入れしちゃうのは、彼がどこにでもいる普通の男の子だからなんだよ。

異常（アブノーマル）でもなく特別（スペシャル）でもない。あの子は普通（ノーマル）の男の子だ。

普通に弱くて。

普通に怖がりで。

普通にがんばって。

普通に悔しがり。

普通に人を好きになり。

普通に誰かを守りたいと思っている。

だから普通に恰好いいのさ。

きみ達はあきらめた事も挫折したこともないだろう？それはとても素晴らしいことだ。

だけど善吉くんのように、いつだってあきらめながら！いつだって挫折しながら！それでも奮起して戦うものも同じくらい素晴らしいと僕は思うんだよ。」

「・・・・・・」

真黒の話に、なんだか納得のいかないという風な顔をする阿久根。

「そうか。多丁（これ）拳銃でも、きみの命は殺せないのか。

じゃぁ手榴弾(これ)だ。」

手榴弾を出し、善吉の前に投げる。

「ぐぅ・・・・・しかし爆弾なら・・・・・
雲仙先輩とのバトルで勉強済みだ！！」

手榴弾を蹴飛ばし、池の中に入れる。

ドゴォォン！！！！

「いい加減にしろよお前！戦争でもしてるつもりか！？争いは何も生まねーぞ！！」

「いいよ何も生まれなくても。全てを殺せればそれでいい。
だが胸を撫で下ろせ。僕の暗器はロケット砲［これ］で終わりだ。」

ロケット砲を構え、善吉の方へ向ける。

「当然みんな死んじゃうだろうけど知ったことか。後ろの仲間ともども、消え失せろ！！」

「くっ、う、ぐぐぐ、こっこっ、怖えじゃねーか馬鹿野郎！！」

ドゴッ！！

うまく信管や爆発の位置を避けて、善吉は蹴りでロケット砲を壊した。

「よしっ！これで相手の武器は出尽くしたよ！これで終わりだよね！」

「ところがまだなんだよなーこれが！彼は暗器使いである以前に人殺しなんだから！
彼にとって基本、武器は重たくて仕方なかったはずなんだ。
だから全ての武器を手放した今、彼はもうノロくないよ。」

シュン！！

善吉の目の前から消える宗像。

「なに！？」

「暗器はもう終わりだけど、殺人(ぼく)はまだ終わらないよーーーー」

そして善吉の背後に回り込み、頸動脈に爪を突き刺すーーーーーーより前に。

ドゴォ！！！！

善吉が振り返り、宗像の頭上に蹴りをくらわせた。

「いいや、終わりだよ。お前は既に限界だ。」

ドガァァン

宗像は吹き飛ばされ、動かなくなった。

「・・・えっと。今度こそ『やった』でいいんだよね？」

「うん！いいよ。実に申し分ない。
普通の人間による、普通の勝利だ！」

「・・・・・・」

みんなが喜んでいる中、めだかだけは違う表情をしていた。

「ん？どうしたんだいめだかちゃん。ふて腐れた顔をしちゃって。善吉くんの勝利が嬉しくないのかい？守られる立場はやっぱり不満かな？」

「いえお兄様。そううことではなくーーーー」

グササッ！！

「・・・・・・・・・・・・え？」

刹那。善吉の背中に5本の刀が突き刺さった。
その後ろでは、宗像が立ちあがっていた。

「暗殺。やっと気を緩めてくれたね。敵の言葉を疑う練習はしてこなかったのかい？僕はまだ手持ちの武器を半分も使っていないよ。」

「あーーー・・・・・忘れてましたねそーいやぁ。」

「善吉いいいいいいいいいいいいいっ！！！！」

ドサッ！

善吉は血を吐き、地面に倒れた。

第四十一話　『よくもめだかちゃんを』（前書き）

作者「前書きタァァァァァイムゥ！！」

翼斗「イエー！ドンドンパフパフー！！」

作者「感想を書いてくださったしょうゆさしさん、Ｋａｖａｌｌｅｒｉｓｔさん。ありがとうございます。」

翼斗「ていうかこの二人のいうとおり俺出番でぇなｗｗ」

作者「仕方ないんだよ・・・・・起きてても解説にちょっぴり加わるだけになってしまうなら・・・・・もういいかなぁ。と。」

翼斗「俺可哀そう！！！」

作者「安心しろ。次からはどんどん出ていく予定だ！！」

翼斗「いいのか？期待しちゃうぜ？」

作者「ｏｋさ。」

第四十一話　『よくもめだかちゃんを』

前回のあらすじ？

翼斗「グササッ！」

☆★☆★☆★

「僕に言わせればみんな大きな勘違いをしている。自分だけは死ないとか自分の大切な人が死ぬなんてありえないとか。そんな絵空事をサンタさんみたいに信じてる。

実際は命なんて　こうもたやすく散るのにさ。」

ガクッ

倒れている善吉を見て膝から崩れ落ちるめだか。

「・・・・・・・・善吉、ぜんきちぃ・・・・・・」

「うわあああああああああああああああん！！！！！うわあああああああああああああん！！！」

「・・・・・・・・きみは人が死んだら人目もはばからずに泣くのかい。それはとても羨ましい感性だね。

殺したくなってくる。」

宗像が発する殺気に、身構える阿久根ともがな。

「・・・きみ達はめだかちゃんを連れてもう帰りなさい。この場は僕が引き受けよう。

どうやら僕は責任を取らなくちゃいけないみたいだしね。」

生徒会の前に出る真黒。

「責任？魔法使いーーーそれは普通（ノーマル）を僕に立ち向かわせた責任かな？

それともあるいは、フラスコ計画の現状（いま）を立案した責任かな？」

「「！？」」

宗像の言葉に、驚く阿久根ともがな。

「被害者面するなよ黒神真黒。お前こそがだれよりも異常（アブノーマル）なんだから。一年前！お前が理事長に余計な助言（ごと）を吹き込んでいなければ、あの子は死なずに済んだーーーーーー」

宗像の言葉はそこで止まった。

なぜなら、後ろで善吉が立ちあがり、殺気を発しているからだ。

「！！」

「あー・・・畜生。ウニになった気分だぜ。人を傷つける武器は肌に合わねーっってんのに、お肌が荒れちまったじゃねーかよ限界野郎！」

「よくもめだかちゃんを泣かせたな！！」

「・・・善吉。善吉、善吉、善吉、善吉、善吉・・・・」

「わかってんよ!!!」

「・・・・・・よしておけよ。その様じゃ立っているのがやっとだろう。折角助かった命だ、大切にしろ。」

「あれ?おかしなこというじゃねーか人殺し（アブノーマル）。そのセリフまるで殺したくないみたいに聞こえるぜ?」

「・・・・・・・世迷言をほざくなノーマル。

殺すぞ。」

バッ!!

身体のあちこちから、色々な種類の武器を大量にだす宗像。

「・・・・・・めだかちゃーん。ここらでひとつ俺にがんばれって言ってくれねーか?」

「!!・・・・・・・・・がんばれ!!!!!!!」

「がんばる!!!!!!!!!」

ドンッ!!!!!!

右足を思いっきり地面にたたきつける善吉。

グラグラグラ・・・・・

善吉の震脚によって、地下二階が揺れる。

「・・・ふぅん。大した震脚だね、地震が起きたと思ったよ。だけどその程度じゃ僕は倒せないな。」

「倒せるさ。確かに俺は立っているのがやっとだけれど、しかしこうして立っているだけで、俺はお前を倒せるんだ。」

「？それはどういう意味ーーーーーー」

グサササッ！！！！！

「！！！！！」

天井に刺さっていた刀剣が宗像へ突き刺さる。

「ぐっ・・・・・この刀剣は・・・・・っ！？」

「さっき天井に突き刺しておいたお前の刃物だよ。それを今の震脚で揺り落としたんだ。つまり、俺なりの暗器って奴だな！！！
　こんなこともあろうかと！！無理してあの高さまで蹴りあげといてよかったぜ！！」

「・・・だからってこんなの考えすぎーーーーー否、怖がりすぎだろ、君は。」

「生憎俺には、怖がりくらいしか取り柄がないもんでね。ま、お互い肌荒れには気をつけましょうや宗像先輩ーーーーー」

全てを言い終わり、倒れる善吉。

ポフッ

それを、真黒によって支えられる。

「よくがんばったね善吉くん。」

「・・・・・・はい。がんばりました！」

「・・・・・・・・・さて、勝ったはいいけど彼はどうする？指名手配中の大量殺人犯。さすがに警察に突き出すしかなさそうだがーーーーー」

「あー、その心配は御無用ですよ阿久根先輩。」

「『だってその人、大量殺人犯じゃないですもん。』」

「「「「！？」」」」

丁度いいタイミングで、翼斗が起きる。

☆★☆★☆★

「おー起きたか翼斗。」

『ああ。全く状況がつかめないが。』

いやつかめてる。善吉が勝った。それだけで十分。

「どういうことだい人吉くん、翼斗くん。」

「・・・・つまりさ、殺す方法(テク)に精通してしてるってことはつまり、殺さない方法(テク)にも精通しているってことだろ。実際あれだけの凶器を振り回して人間(おれ)を殺さないほうが難しいぜ。

振り返ってみればこの人は、最初から俺を殺さないことに躍起になっているようだった。

こんなに串刺し、めった刺しにされてるのに、俺が生きているのがいい証拠だろ。」

「え・・・・？つまり殺人衝動(アブノーマル)とかも全部嘘・・・・・？」

「・・・僕の殺人衝動は本当だよ。人間を見ると、殺したくなるのも本当だ。だけど僕は、それをずっと我慢してきたのさ。だって人間は、殺したら死んじゃうじゃないか。

だから僕は殺人者を名乗り、派手に凶器を振り回し、派手に殺意を振りまくんだ。そうすればみんな殺される前に逃げていくからね。僕は人殺しにならなくて済む。」

なるほど。なんだか可哀想な人生だ。

やばい・・・・・・涙でそう。俺こーゆうの弱いんだよ～↑

我慢だ我慢。

「・・・しかし危険な真似をするよね人吉くん、刀剣の雨を降らせ

るなんて。きみこそ人殺しになるつもりかい？」

「カッ！！殺さない方法（テク）に精通してるってことはつまり、殺されない方法（テク）にも精通してるってことだろ。そこはあんたの異常者（アブノーマル）とやらを信用したんだよ。」

「信用か。そんなのされたことなかったな。
やっぱりきみとはとても仲良くなれそうな気がするよ。人吉くん、きみは僕と友達になってくれるかい？」

「・・・あのなー、今更何言ってんだよあんたは。殺すつもりがあろとなかろうと！あんたと俺は命がけで戦ったんだぜ？

つまり俺達はもう友達じゃねーかよ。そんなよそよそしいことを言われたら傷つくぜ！」

そう言って手を差し出す善吉。

そして、握手をかわした。

うん。いい。感動。いやまじで。

「・・・・・ところで翼斗はなんでわかったんだ？」

『あー俺か？んー確証ねーんだけどな。大量殺人者だろ？だから血の匂いがべっとり身体にしみついてると俺は思うのよ。だけどこいつからはその匂いがしなかった。だからさ。』

「なるほどな。」

『・・・・・あいつみたいにな。』

最後の方は小さな声で言った。

「ん？なんか言ったか翼斗？」

『うるせぇ♪背中殴るぞコラァ♪』

ポコポコ

俺は軽く善吉の背中をたたく。

「いてぇいてぇ！！！！！いやマジだって！！！！ぐぉお刀が食い込む～！！！！！！」

『よし次の階行くか。』

「お前は鬼かぁ！？」

まぁとりあえず、これで地下二階クリアだ。

第四十二話　『だけど悪いが』

前回のあらすじ？

翼斗「善吉がぽぽぽぽぽーんして友達増えた。」

☆★☆★☆★

さて、俺等は今、地下三階に居る・・・・・・んだよな？

なのに・・・・・

ゴリラ！！

キリン！！！

トォォォラァァァァ！！！！！！！

『動物園かここはぁ！！！！！』

などの動物が多数いるのであります。

「ぜ・・・・善吉！しっ、しっしっしっしっしし、しさっ、視察視察視察！！」

「そうだな。突っ立っててもしょうがねぇし、とりあえず見て回るか。」

ダダダダ！！

善吉がそう言うと、めだかがうれしそうに走って行った。

え？なぜこんなに嬉しそうにしてるかって？

キーワード？　動物避け。

キーワード？　今までナッシング！！

このキーワードを用いれば簡単さ。

「ほらみんな遅いぞ！！さ！喜界島会計もこっちこっち！」

「・・・・・・」

次のもがなが言った言葉が、この場の空気を最悪にした。

「私どーぶつきらい。行くなら一人で見に行けば？」

ピシッ

めだかの心にひびが入った音が聞こえた気がする。

「〜〜〜〜〜〜〜っ！」

めだかはパンダを指さす。

「白黒模様が気持ち悪い。媚びたメイクを見てるよう。」

「〜〜〜〜〜〜〜っ！」

今度はコアラ。

「なんか灰色だしぬいぐるみチック。生き物みたいな気がしない。」

「〜〜〜〜〜〜〜〜っ！！！！！！」

最後にゾウとキリンだ。

「首が長いとか鼻が長いとか、キャラ付け受け狙いっぽくてすごく嫌。」

全て撃沈。

「・・・・・・・・・フッ。」

めだかは鼻で笑うともがなの近くに行き、

そして、

ぐぎぎぎぎぎ・・・・・

いわゆる、押し合いみたいな状況になる。どちらも目が真剣(マジ)だ。

「おい！さっきまで仲良かった女子がくだらねーことで喧嘩を始めたぞ！誰か止めろ！！」

『じゃぁお前行け。俺等が言ったら5秒後にただの肉塊になるからな。』

「「どういうことそれ！！！？」」

「・・・・そんなことより善吉くん。少しおかしいと思わないかい？」

「ええまあ。気付いてますよ。

ここにいる動物たちは、めだかちゃんをまったく怖がっていません。

よっぽどよく躾けられてるのか、薬品でも使われてるのか、いずれにしても異常です。」

『おいさっさと行けなんだか兄弟。行かないと俺がお前を肉塊にするぞ。』

「「何故！？」」

ぐぎぎぎ・・・・

「おめぇら少し静かにしろぉぉ！！！！」

善吉の悲痛な叫びが響き渡った。

～？ｓｉｄｅ～

阿久根は一人で調べていた。
この地下三階のことを。

「・・・・・・・・」

「やっほー高貴くん。ちょっくら俺とトークしよーぜ。」

「！？」

丁度曲がったところで名瀬夭歌と出会う。

「おおっと！大きな声を立てねーでくれよ。俺はお前と二人きりで話してーんだからよ。えーっと！どうだ？自己紹介は必要か？」

「・・・いや、必要ないよ。きみのことなら知っているし覚えているよ。
なにせ元クラスメイトだからね。十一組（スペシャル）から十三組（アブノーマル）に移籍になった変わり種！二年十三組　名瀬夭歌さん！
『十三組の十三人［サーティン・パーティ］』と聞いた時にピンと来たし、この悪趣味な動物園を見たときに確信したよ。『十三人（パーティ）』のなかに君が含まれているだろうとね。」

「ハハ！柔道界の王子様に覚えていてもらえて光栄だな。だったらかったりー前置きは抜きだ。手っ取り早くいこう。高貴くん俺と取引しようぜ。」

「・・・・・・・・取引？」

「話は簡単だよ。お前らもう帰ってくれねーか？いやーーーいっそこの学園から出て行ってくれよ。
俺達の研究の邪魔なんだ。」

「・・・・・・・」

「もちろんタダとは言わねーさ。黒神のことは諦めるよう俺が話をつけてやるし、お前らの転校手続きも俺が取ってやるーーーどこの名門校でも逆指名しな、そこで好きなだけ生徒会を執行してろや。
これ以上後輩に怪我させたくねーだろ？俺達も怪我したくねーし、折角の人生だ、お互い感知せずに行こうぜ。」

「・・・・・・・去年と別条のない勝手な言い分だね。名瀬さん。」

阿久根は迷う余地も見せずこう即答した。

「だけど悪いが感知させてもらうよ。俺達は箱庭学園の生徒会執行部なんだから！！」

「ふーん。」

刹那。古賀いたみが現れ、阿久根の首におそらく鋼鉄の糸をかける。

「なっ・・・・・・！？」

阿久根が気付いた時にはもう遅く。

ブツンッ

第四十三話　『私がいくらでも』

前回のあらすじ？

翼斗「視察視察！！」

☆★☆★☆★

中学時代、阿久根高貴は不良(わる)かった。

規律(コト)であろうと
器物(モノ)であろうと
人物(ヒト)であろうと

区別なく壊してのける阿久根のことを地元で知らないものはおらず、彼は教師陣はおろか警察でさえ手がつけられない札付きだった。

とは言え、彼は何も目につく全て破壊対象としているわけはなかった。

実は彼はある男から言われるがままに、破壊行動を行っていたのである。

『ねぇ高貴ちゃん。』『新入生に黒神めだかって可愛い子がいるんだけど』『知ってる？』

『ああいうおてんばな子は』『僕たちの平和な学園にはふさわしく

ないんじゃないかなあ』

「・・・・・・知りませんけど、生徒会長のあんたがそう言うならそうなんでしょうぜ。
球磨川さん。」

1年1組の教室。

まだ授業中の教室の扉を開け、

ドゴッ！！！

阿久根は黒神めだかを鉄パイプで殴った。

「きゃあああああっ！！くっ・・・・黒神さんっ！！」

「保健室に・・・・・・いや救急車を呼べっ！！！」

このように、与えられた任務(はかい)を着実にこなす彼は、畏怖と侮蔑を込めてこう呼ばれていた。

破壊臣。

この頃の彼はいつも苛々していて、なんであれ破壊活動を行えば少

しだけスカっとする。
そんな自分をイケていると思っていたし、
新入生　黒神めだかも彼にとってはストレス発散の対象でしかなかった。

しかし、

次の日、黒神めだかは包帯を巻いて登校してきた。

（あれ・・・？登校してきやがった。人間を壊し損ねるとは我ながら珍しいぜ、髪の毛が邪魔だったのかな。でもま、壊れなかったのならそれもまたよしだ。）

（どうせ壊しなおすだけだし。）

ドゴッ！！！

阿久根はまた鉄パイプでめだかを殴った。

「球磨川さんが目をつけるだけあって、そこそこ根性のある女だったな。だけど、これで終わりだ。」

だけどこれでは、終わらなかった。

翌日も黒神めだかは、平気な顔をして遅刻もせずに登校してきたのだった。

翌々日も、

その次の日も、その次の日も、

阿久根がいくら壊そうと、彼女はまるで意にも介さなかった。

中学一年の頃の黒神めだかが『全盛期』と呼ばれるのはこの辺りの出来事に由来する。

『破壊臣』阿久根でも壊せない金剛石のごとき女子として、皮肉にも彼女は名を上げていくのだった。

そしてそれは同時に、『破壊臣』の凋落をも意味していた。

女の子一人壊せない破壊臣のことを、恐れる生徒はもういなかった。

その気運に乗って学校中にくすぶっていた反阿久根の生徒をまとめ上げたのは、

間違った中学デビューを目論んで若干グレかかっていた頃の人吉善吉である。

「俺の幼馴染を散々なぶってくれたことについて、何か言うことはありますか阿久根先輩？」

「ねーよ。俺には何もねーんだ。」

「・・・・・・・・・あっそ。」

善吉がパンチをくりだすーーーーーーー

「やめんか馬鹿者！！」

その拳が当たる前に、めだかの『黒神ローリングソバット』が善吉の顔に炸裂した。

「貴様たち、ここで一体何をしている。
たとえどんな理由があろうとも！弱いものいじめは許さんぞ！！」

無抵抗も避けないのも当たり前だった。
彼女は阿久根の不良（わる）さも破壊（こわ）さも、全く問題にしていなかったのである。

「阿久根高貴！
貴様もかつては弱いものを慈しむ優しき心の所有者だったに決まっている。
比類なき恐怖に満ちた幼年時代を過ごしたがゆえにそのような壊し屋になってしまったとしか考えられん。
安心しろ！貴様が人間らしい心を取り戻すまで、貴様の破壊衝動に私がいくらでも付き合っている！！」

見当違いもいいところだった。
阿久根にはそんなわかりやすい理由なんてなんもない。

大した理由もなく道を踏み外し、
大した信念もなく周囲を傷つけ、
大した目的もなく苛々していた。

あるがままに生きて
なすがままに暮らし
言われるがままに壊してきた。
それが阿久根高貴の人生だった。

だからこそ、

「・・・悪いな黒神。俺には何にもねーんだ。だから・・・・・・

だからお前が、俺の何かになってくれ・・・・・・」

破壊臣は、改心した。

その改心こそが新入生・黒神めだかと、生徒会長・球磨川禊の対決の火種となるのだが、

それはまた別のおはなしーーーーー

「ぐっ・・・・！」

阿久根はいたみの攻撃をぎりぎり腕で防いでいた。

（走馬灯！今のが！今のが走馬灯か！！）

「ひゅうううう～！真上からの不意打ちをガードするとかさっす

が高貴くん！抱っかれてぇ～～～～っ！けどま、一瞬気が逸らせりゃそれで十分なんだわ。」

ピッ

ガララララ！

天歌がスイッチを押すと、非常用のシャッターが降り、簡単にあっちと分断された。

「こうして戦闘パートに入ったことだし、やっぱ自己紹介はしておいてやるよ。

俺は二年十三組『黒い包帯［ブラックホワイト］』の名瀬天歌。フラスコ計画の今季統括を任されてやってる。」

「私は私で二年十三組『骨折り指切り［ベストペイン］』の古賀いたみー！可愛い名瀬ちゃんの可愛い大親友だよーんっ！」

「フラスコ計画の統括って・・・・」

「さてさて高貴くん。お前をこうやって孤立させたのには理由がある。

俺が見るところたぶんお前がもっとも！黒神めだかによって変えられた人間だからだ！！」

「・・・・・・・・」

「人間を完成させるというフラスコ計画の目的においてお前以上のサンプルはいねーよ。

変える黒神より！変わらない人吉より！俺はお前に興味があるねぇ旧破壊臣！！」

ピッ

天歌が再びスイッチを押すと、動物が入っているガラスが開き、動物が出てきた。

「んじゃまーとくとご覧じろ！名瀬ちゃん古賀ちゃんの、わくわく実験動物ラァーンド！！！」

第四十四話　『最悪な状況で』（前書き）

ゲンさん、しょうゆさしさん、ウルフガイさん、感想ありがとうございます。

ウルフガイさんの言うとおりなるべく今回から、なるべく主人公が関わらないところはカットさせていただきます。

第四十四話　『最悪な状況で』

前回のあらすじ？

翼斗「俺は動物園より水族館派だ。」

☆★☆★☆★

ガンッ！！

善吉は非常シャッターを思いっきり蹴りつける。

「くっそなんだこの頑丈なシャッター！微動だにしねぇ！！エヴァンゲリ○ンでも格納してんのかこの施設は！！」

そこへ、フロアを一通り見てきた真黒さんが戻ってくる。

「善吉くーん。フロア一周してきたけどやっぱり阿久根くんはどこにもいなかったよ。」

「カッ！つーことはやっぱこん中に閉じ込められたってわけですか！どっかの女子二人が喧嘩してる間に、どっかの女子二人が喧嘩してる間に！どっかの女子二人が喧嘩している間に！！」

「おい、どこかで女子二人が喧嘩しておったらしいぞ。」

「ふーん、どうしてみんな私たちみたいに仲良くできないんだろう

ね？」

いやいや、お前らお前ら。

『おいどーしてくれんだ。お前らが止めに行かねーからめんどーなことになったじゃねぇか。』

「「僕たちのせい！？」」

『いやそれ以外考えられねーだろ普通。』

「「何故！？」」

「うるせぇお前らっ！」

少々怒り気味で善吉が俺等を注意する。

「大体善吉、貴様は一体何をイラついておるのだ？」

「あ？」

「だってそうであろう。私たちのうち誰かというならまだしも、孤立させられたのは阿久根書記だぞ？

・・・・・・翼斗がなればよかったのに（ボソッ）」

うわすげぇ小さな声でいいやがった。

『・・・・・・聞こえてますよー。』

「ゆえにまったくもって心配いらぬ。あやつは貴様よりも、私より

も、誰よりも強いのだからな！」

『はい無視ですねわかります。』

みなさん、僕にはこんなに素晴らしい友達ができたよ・・・・・

「向き不向きはともかくとして、こと破壊（せんとう）となればあの男に勝てる者など存在せんよ。」

「・・・・・・・」

善吉がまだ納得いかない顔をする。

「だからそれより己の周囲気を配れ。この状況、閉じ込められたのは案外私たちの方かも知れんぞーーー」

「それじゃぁとりあえず次の階に進まないかい？ここで待っててもしかたないし。」

真黒さんが結構いい案をだす。

「それがいいな。阿久根書記は絶対、大丈夫であろう。」

「・・・・・わかったよ。」

『じゃぁ俺は残るわ。』

「何故だ？」

『真黒さんってフロア自体はしっかり調べてませんよね？もしかし

たらなにか仕掛けがあるかもしれんしな。俺が調べておこうと思って。』

「・・・わかった。頼むぞ翼斗。」

『頼まれちゃいます。』

☆★☆★☆★

『・・・・・仕掛けのしの字もねぇ・・・・・』

只今5分経過。

『・・・・・・・』

只今１０分経過。

『くそがぁぁぁ！！』

１５分捜索したが、成果なし。

（どうやら何もねぇようだしな。めだかの所へ向かうか。）

と思い階段を降りようとしたが、ここで一つの考えが浮かぶ。

（『解放（アンロック）』使えばいんじゃね？）

・・・・・・・・・

何故俺はこんな簡単なことに気付かなかったんだろう？

さて、実行の時だが、気になることがある。

実はさっき・・・・

ドゴォォン！！！！

という轟音が聞こえたのだ（＾Ｏ＾）／

・・・・・・・・・

んなこと考えてる暇ねぇ！！！！

『よし3倍で充分だろ。』

そう言い俺は力を溜める。

『ハァァァァ・・・・・・3ば・・・・・・』

殴ろうとした瞬間、再び一つの考えが浮かぶ。

（いや『腑罪証明（アリバイブロック）』使えば一発だろ。）

・・・・・・いやそうだが。

だがそんなこと言ったら一番下の階行けば一発などときりがない。

・・・ということで。

『うぉぉぉぉ！！！！3ばぁぁぁぁぁぁぁぁい！！！！！！！』

ドゴォォォォン！！！！！！

シャッターが壊れる。

『よぉ阿久根先輩。助けにきｔ・・・・・』

俺は一歩踏み出そうとしたのだが、ここであることに気づく。

（あれ？足場は？）

さて、推理してみよう。

足場、無い。

俺、歩こうとする。

足場、無い。

＝落ちる。

計算完了である。

『うわぁぁぁぁ！！！！！！何故足場がね～～！！！！！！！！』

ヒュウーーーン

落ちている途中で阿久根先輩を発見。

（お！阿久根先輩発見！）

「よ・・・・翼斗くん！？」

『先輩。助けにきｔ「ライダージャーンプ・・・・・ってええ！！！？？」』

突然、下から女の子がジャンプして現れる。

その女の子は、コンクリを拳で破壊した後である。

簡単に言うと、『〇龍拳』。

さて、その女の子の真上には俺。

当然、

ドゴォォ！！

『げふぅ！！！』

俺は殴り飛ばされるわけです（＾Ｏ＾）／

ドゴ！！

『ぐふぅ！』

しかもそのまま壁に激突。

「やっぱり・・・・・・翼斗くんだ・・・・・」

殴った後に、女の子が言った。

（ん？この声、その容姿、まさか・・・・）

『まさか・・・・・・いたみか？』

そう俺が言うと、相手の表情が嬉しいような、悲しいような、そんな顔に変わる。

「うん。」

再会してしまった。

幼い頃の最高の友達、古賀いたみと。

敵どおしという、最悪な状況で。

第四十四話　『最悪な状況で』（後書き）

急展開すぎるｗｗ

第四十五話　『僕は変態だ』（前書き）

今回かなり見づらいです。
過去書くの苦手だな・・・・

第四十五話　『僕は変態だ』

前回のあらすじ？

翼斗「落下＝再会。」

☆★☆★☆★

さぁ、俺といたみの関係を説明するためには俺の『過去』を知らなくてはならねぇ。

ということで、俺の過去を話そうと思う。異議あり？知るかんなこと。

それじゃぁ話そうか。波乱万丈な俺、榛原翼斗の過去をな。

俺が生まれたと同時に、父が死んだ。
昨日まで元気だった父が、翌日には心不全というあきらかにおかしい死因だ。

そして、俺が生まれたと同時に、母に不幸な出来事が襲い始める。

会社でリストラされ、
ひったくりの被害に会い、
空き巣に入られ、
全治一カ月の怪我を負い、
さらに詐欺に会い多額の借金を負うというひどいありさまだ。

周りは「あの子のせいだわ」などと噂を立てていたが、母はそんなことも気にせず、俺を愛情込めて育ててくれた。

そんな崖っぷちの時に出会ったのが、古賀いたみだ。

「私隣に引っ越してきた古賀いたみっていうのー！よろしくねー！」
いたみは、俺が五歳の時隣に引っ越してきた。
俺等はすぐ仲良くなり、いつも一緒に居るようになった・・・・
そして、いたみと出会ってから一年後の六歳の時から、

異常（アブノーマル）が開花し始めた。
始めはただ2ケタの足し算をやっただけだ。
「この子は将来頭のいい子になるわ」と母は喜んでいた。
だが、3ケタの引き算、掛け算、割り算とどんどん難しくなっていくうちに、母の眼は変わっていった。
気味悪がる目へと。
さらに、ある出来事があってからは、母はもう俺を構わなくなっていた。
それは、母の知り合いにだっこしようとしたとき。
七歳、もうだっこなどされる歳ではない。だから俺はだっこした男

に向かってこう言った。

『やめろ』と。

そう言うと男は怯え、ゆっくりと俺をおろした。

そんな俺を、母は気味悪い目で見ていた。

そして開花してから2年後、俺の家にあの男たちがきて、俺が連れて行かれた。

母が俺に隠れて瞳先生とやらに相談しているのはわかっていたが、それがなぜこうなったのか、あの男たちが誰なのかは後々知ることになる。

☆★☆★☆★

「どうして・・・？翼斗くんはあの人達に連れて行かれたはずじゃぁ・・・・？」

『まぁいつか話すさ。』

話すの超めんどいしな。

「・・・まぁいいや。それで翼斗くんも私と戦うの？」

『・・・・うんにゃ。さすがに二対一は卑怯だと思うので遠慮しときまっせ。任せましたよ、阿久根先輩。』

「・・・任されたくないな・・・・」

さすがにいたみとは戦いたくない。

「それじゃぁ待たせてごめんね阿久根くん！次はお別れの挨拶だよ！」

そう言うといたみは天井に立ち、キックを阿久根にくりだすーーーーそれを阿久根先輩は、

ボギンッ！！！

足を素早く掴み、足の骨を砕いた。

「きゃぁぁぁぁ！！！！！！！」

「膝十字固めっ・・・！？おいおい！いくら寝技が得意っつっても その技は現代柔道じゃぁ禁じ手中の禁じ手のはずじゃぁーーーーーあああそっか。お前鍋島先輩の直系でもあるんだったな。

しかし残酷だな高貴くん。古賀ちゃんが改造人間だと見るや絞め技から関節技に切り替えて、躊躇なく破壊かよ。こんなことをやるなんて黒神は思ったほどお前を変えてねーのかな？」

改造人間・・・・・！！

そうかいたみは改造人間なのか！これで異常側に居る理由が分かった。

「・・・・いいや。確かに俺は変わったよ。昔は人間を壊せばスカっとしたもんだけどね、今はただただ気分が悪いよ。」

『そんなことより治療してやれよ。さすがに親友がもがいているのを見るのはさすがに心が痛い。』

俺は親友を強調して言った。

「治療？んなもん必要ねーよ。俺の大親友を馬鹿にすると許さねーぞ。」

包帯を巻いた女（名前知らん）は大親友を強調して言った。

・・・うん。こいつとは話が合いそうな気がする。

「？何を言ってるんだきみは。その大親友の骨が砕けた音が聞こえなかったのーーー」

「ライダーチョーップ！！」

ボゴッ！！

突如、立ちあがったいたみに肩にチョップを受ける阿久根先輩。そこにはほぼ無傷のいたみが居た。

「ぐあああ！！！」

「骨が砕けた音なら聞こえたよ。だけどな高貴くん。改造人間古賀ちゃんは複雑骨折程度なら十秒もありゃ治るんだよ。」

「じゅ・・・・十秒！？」

『ほお。それはすごい。』

改造でそこまでできるのか。

・・・・・俺も改造してもらおうかな。

う・・・いかんいかん。落ちつけ俺のM！！

「どーする名瀬ちゃん。まだ続けるー？」

『もちろんさぁ！』

「翼斗くんに聞いてない！！」

くそ・・・・ド○ルドの真似したのに突っ込んでくれない・・・・

「あーいやもういいや古賀ちゃん。見てーもんはもう見れたし、高貴くんを使っての実験はおしまいにしようぜ。

『黒神めだかによって変えられた阿久根高貴は名瀬夭歌によって改造(かえ)られた古賀いたみに手も足も出ませんでした』それが面白くもねぇ実験結果だーーーー」

「あはは！そう結論を急ぐなよ名瀬ちゃんとやら！実験に焦りは禁物だぜ？」

いつの間にか名瀬の後ろに居た真黒さんが、名瀬の・・・・・ス、スカートをめくりながら言う。

「なっ・・・真黒さんっ・・・・・！？」

『何!?見えなかった・・・・!これが奴の力だというのか!?』

「こっ・・・・こらぁーっ!!
名瀬ちゃんに何してんだこの野郎ーっ!!」

ドゴッ!!

「おおっと!」

ド◯クエ的に言うならば、

いたみは怒った!

いたみの改心の一撃!!

勇者真黒は避けた。

みたいな感じ。

「おいおい何を怒っているんだい?可愛い女の子に会ったら何はともあれスカートをめくらなきゃ失礼じゃないか!」

『マジですか!じゃぁ今度いたみのスカートもめくげぼふぁ!!!』

刹那、俺をいたみが思いっきり殴る。

「長い間合わないうちに翼斗くんが変態になってしまった・・・・・」

『変態?失礼なこれは健全なる男子の切実なる願ごぼぉ!!!』

追撃を受ける俺。

「ちょっと静かにして・・・・（怒）」

『これが久しぶりに会った親友にする行動だろうか・・・・・』

「黒神真黒ーーーフラスコ計画前統括者！狙い澄ましたような男だと都城先輩からは聞いていたけど、あの王属には珍しいそのものズバリな表現だったな。

一人でここに居るのは大方地下三階の実験動物を見て俺の事が気になったからだろ？自分の後任であるこの俺のことがよ！」

「・・・やれやれこれは困ったもんだ。名瀬ちゃんとやら！そりゃぁ誤解もはなはだしい自意識過剰だよ。

僕は変態だ。パンツをはいた女子がいるならどこにだって現れる！！」

第四十六話　『古賀ちゃんの親友であろうと』

前回のあらすじ？

翼斗「変態、降臨！！」

☆★☆★☆★

「ノーマルであろうとアブノーマルであろうと僕の前に立つ女子は四つのものを奪われる。
まず『目を奪われ』」

『ほうほう。』

「『ブラジャーを奪われ』」

『なるほど。』

「『パンツを奪われ』ーーー」

『そして・・・・？』

「そして最後に『心を奪われる』。異常にして変態！僕こそが箱庭学園旧校舎管理人黒神真黒だ！」

『さすが真黒さん！この変態！だがそこにしびれるあっこがれるぅ～！！』

「・・・・どうしよう名瀬ちゃん、本気で気持ち悪い。」

そういたみは気持ち悪そうな顔をして言った。

「・・・・・お目にかかれて光栄だぜ黒神先輩。しかし、あんたは妹にしか興味のない変態だと聞いていたがな。」

「うん？王土くんがそう言ったのかな？あはは！その情報は正しいけれど正確じゃないね。
　僕は全ての女子を自分の妹だと思っている！！」

『いやさすがにそれはない。』

うんさすがに欲張り過ぎ。

「・・・・・ブラはめんどくせーからつけてねえよ。だからこうやって腕で支えてんだ。」

そう、出会ってからほとんどずっと、名瀬は腕を組んでいた。

「・・・・・・・・」

その言葉を聞くと真黒さんは、

バッターン！

「真黒さんが失神した！」

『純情すぎだろこの人！よくそれで変態名乗っていれたな！？』

倒れた。

「ケッ！あんた俺の前任者らしーけどよ、奇抜な言動で精神的に優位に立とうなんて手が古いぜ。
あんたが俺より上なのは、年齢(とし)だけだよ。」

そう言うと名瀬は真黒さんを睨みつけた。

「・・・・・あはは、こりゃー頼もしい後輩が育っているみたいだね。名瀬ちゃんだっけ？」

「名瀬夭歌。フラスコ計画『現』統括だ。」

「へーいい名前だね。じゃぁ現統括ちゃん、きみが本当に僕より上なのか確認してあげるよ。
そしてもしもきみが僕より下だったなら！ノーブラというのが本当かどうかも確認させてもらう！！」

「何言ってんだこの人！！」

『さすが変態！自分にしか得が無いことを言う！！』

「・・・・・いいだろう、ありえねー話だが。あんたが俺より上ならばストリップでも何でもして、好きなだけ確認させてやるさ。」

・・・・・・・・・なぜ？

「オッケー勝負成立だ、じゃ！

休憩終了だ、バトル再開！阿久根くんがんばって！」

「えっ！？あなたが戦うんじゃないんですか！？」

『普通に考えて真黒さんがいたみに勝てる確率ほぼ０％。』

「翼斗くんの言うとおり。それに阿久根くんは僕の助けはいらないだろう？きみは中学三年生の時点で、僕のテストをクリアしているんだからさ！」

「い、いや、しかし真黒さんーー」

阿久根先輩が全て言い終わる前に、いたみが動いた。

「！！しまっ・・・・」

「名瀬ちゃんのヌードがかかっちゃったからね。もう手加減はできないよ！」

そう言うといたみは太ももで阿久根先輩の頭を掴み、そのまま倒した。

「そんかし！きみの得意な寝技で勝負してあげるから、堪忍しちゃって頂戴！！」

いたみは太ももで頭を圧迫する。

「ぐぐっ・・・！！！」

（さて、俺の出番はなさそうだし、めだかと合流して下へ行くかな。）

おそらくたぶんきっと、阿久根先輩は大丈夫であろう。

そう思って俺は階段の方へ足を進める・・・・

プスリッ

その音とともに背中に鈍い痛みが走る。

『っ！！』

振り向くとそこには、

「悪りぃな。俺は古賀ちゃんの親友であろうと手加減するつもりはねぇぜ。」

手に持った注射器を俺に刺している名瀬夭歌が居た。

『っ・・・・くそっ！！』

ガッ！！

俺は名瀬を蹴り飛ばす。

『はっ・・・・はっ・・・・てめぇ、俺に何をした！？』

くそ、視界がかすんできやがった・・・

「なぁに、入れたのは薬だよ。『ノーマライズ・リキッド』！異常（アブノーマル）の異常を『病気』とみなした異常殺しのワクチンさ、それに大量の睡眠薬も入れてある。」

『く・・・・そ・・・・・が・・・・・・・』

「ゆっくり眠りな。その頃には全て終わっているとおもうがな。」

バタッ！

その名瀬の言葉を最後に、俺の意識は闇へ沈んだ。

第四十七話　『表情は笑っていても』

前回のあらすじ？

翼斗「俺寝てばっかだな・・・・・・」

☆★☆★☆★

『いやまたお前か。』

「ひどいなぁ翼斗くん。本当は会いた『それはないから安心しろ。』」

さて、前回俺は寝た。
つまり夢の中だ。
そしてまた安心院なじみが出てきた。

『んで、なんでお前は俺が絶体絶命の時に限って出てくんだ？』

「理由は一つ、僕は傍観者だからだよ。」

『うんいらつく。』

こういう見てるだけの人俺大嫌い。

「でもここに来れたのは好都合じゃないかい？考えを整理できるしね。」

・・・・・それもそうだ。よし整理しよう。

俺のいる場所：夢の中。

何故ここに来た？：名瀬になんか注入された。

なんかってなに？：え～と確かノーマなんだかリキッド＆睡眠薬だな。

俺これからどうする？：・・・・・・どうしよう？

『ん？そういえば・・・・』

『あれ』があったじゃないか。

便利な『あれ』が。

『そういえばなじみ、『腑罪証明（アリバイブロック）』ってここでも使えんのか？』

「もちろん。好きな時に好きな場所に行くことができるよ。」

問題解決。

え？何故かって？

答えは簡単。

此処(ゆめのなか)から現実へ戻ればオッケー！

『どうも。それじゃぁも「よくよく考えてみたかい？」は？』

「『行くタイミング』だよ。早すぎたら余計面倒なことにならないかい？遅すぎたらそれはそれでアウト。本当にこのタイミングで会っているかい？」

確かにそうだ。

『よし、此処から現実の様子って見えるか？』

「答えはＮｏ。」

『畜生不便！！』

「造ればいいじゃないか。異常(アブノーマル)を。」

『むぐ！』

確かにそうすれば簡単だ。

だが・・・・・・・

使えば寿命減ってく。

どんどん増えてく。

とりあえず今の寿命を知りたい。

『俺の今の寿命は見れるか？』

「もちろん。『死目視(デッドサーチ)』を使えばね。」

それってデス○ートの死神の・・・・・げふんげふん!!

『それで俺の寿命は?』

ゴニョゴニョ

なじみが俺に耳打ちで教える。

『うそ・・・・・俺もともとそんな寿命少なかったのかよ〜〜〜!!!!!』

詳しくは言えないが、実はもう・・・・

２０切ってる。

『これは寿命を増やす異常を考えなくては。』

とにかく今は造らなきゃ・・・・

う～ん名前は『目撃者(ウィットネス)』でいいか。
能力は自分の好きな場所を視ることができる・・・・っと。

・・・作ってるときに思った。

これあれば覗き放題じゃね？
う・・・いかんいかん！！
煩悩退散！！

『さてさて今の状況は・・・・・』
見てみると・・・
『っ！！やべ早く起きねぇと！！』
覆面をとった名瀬が真黒さんに注射してた。
『悪ぃなじみ！！世話になった！！』
「それじゃぁがんばってね～～」

笑顔でなじみは手を振っていた。
その時俺は気付いた。
なじみの表情は笑っていても、目は笑っていないことを。
☆★☆★☆★
ドガァッ！！！！
起きた俺を迎えてくれたのは破壊音だった。
「さて、気のせいかと思ったが確認に駆けつけたぞ。黒神くじらという素敵な名前が聞こえた場所はここかな？」
『ん～うるさい。』
いやマジで。
俺破壊された壁の真横に居たんだけど。
「なんだ翼斗、お前また寝ていたのか？」

『今回は被害者。』

「馬鹿な！？たったの１０分で起きれるような睡眠薬の量じゃなかった！」

少々焦り気味に名瀬が言った。

「あ、くじ姉だ。」

『さて、どうしようかなぁ・・・・』

第四十七話　『表情は笑っていても』（後書き）

テスト期間に入りました。

なので更新速度が超がた落ちすると思います。

でも一週間に一回は更新できるように努力したいとおもいます。

第四十八話　『なんとかしなくちゃな』

前回のあらすじ？

翼斗「眠りフラグ回避完了！！」

☆★☆★☆★

「あ、くじ姉だ。」

覆面をはずした名瀬夭歌に向かってめだかは言った。

『え？なに？めだかと名瀬って兄弟なの？』

いやほら名字も違うし・・・

「私が間違えるはずがない。あの人は黒神くじら。私の姉だ。」

『確かによくよく見れば似てるな・・・・・』

髪の色とか・・・・・

「気をつけてくださいめだかさん！彼女は自分の記憶を消しています！！

真黒さんも彼女にやられました！彼女はもうあなたの実姉黒神くじらではなく！『十三組の十三人［サーティン・パーティ］』の名瀬夭歌です！！」

・・・・なるほど。どおりでさっきから真黒さんが苦しんでいるわけだ。

「・・・・・・と私の愛すべき友人が言っているのですが、確かですかお姉さま？」

「イッエース！確かだよ。邪魔にしかならねぇ昔の幸福（トラウマ）な記憶は俺の中から完全に消去してある。だからお前のことは全くわからねぇ、だがこれだけは言えるぜ。

俺はお前の敵で、お前は俺の敵だ。」

バチィィン！！

めだかが持っていた扇子で名瀬を叩く。

「名瀬ちゃん！！」

ダッ！！

いたみがめだかに殴りかかろうとするが、

『ハッ！！！』

バキィィ！！

拳が届く前に俺がいたみを殴った。

『・・・二対一は卑怯じゃなかろうか？古賀いたみさんよ。』

「うんそうだね。・・・それでも私は名瀬ちゃんを助ける！！」

『・・・ハッ！じゃぁ・・・・・・

「『力づくで進む（め）！！』」

『はぁ・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・』

「はぁ・・・はぁ・・・・」

力は五分五分だった。

あ、もちろん俺『解放（アンロック）』で倍にしてるよ？

使わなかったらもうおじゃんだもん。

『どうだ？諦める気にはなったか？』

「だれがっ！」

ダッ！！

『ぐっ！』

いたみのパンチを俺が止め、

「んっ！」

俺のパンチをいたみが止めた。

いわゆる力比べの状況だ。

「そういえば翼斗くんはどうやって戻ってきたの！？」

押し合いの状態のままいたみが言った。

『んっと！『ある奴』に協力してもらったんだよ！！』

「『ある奴』ってだれっ！」

『今度教えるよ・・・・・っと！』

『解放（アンロック）』を3倍にし、一気に引っ張る。

「わわわっ！」

『しまいだっと！！』

腹に向かってパンチをくりだすが、いたみはそこから、

「んんんっ！！」

『ガハッ！！』

一回転し、俺の顔に蹴りを浴びせる。

当然、人間技じゃない。

『・・・忘れてたぁ・・・・改造人間だったな。』

「これはまだジャブだよ・・・・」
俺は次の攻撃に備え、集中する。だが、

「わかりました。私が実験台になりましょう。」

『ハァ！？』

突如聞こえためだかの声によって、集中力が切れてしまった。
そして俺は後ろを振り返る。

『ちょっと待てめだか。じゃぁ俺は今まで何をしてたんだ・・・・・・
あ、まずっ。』

あわててていたみの方を向くと、もう俺の懐にはいっていた。

『ちょっと待って！タイムタイム！』

「またないよーんと！！」

ドゴッ！！！

『グッ！！！』

いたみは渾身の力で、俺の腹を殴った。

『いー危なかったぁー（汗）』

「う、うそ・・・・効いてない・・・・・」

俺は直前で『解放（アンロック）』を４倍にしていた。
おかげで拳は腹に留まったままだ。

『いやいや、実は効いてるって。ポーカーフェイスなだけで。・・・・・そんなことよりもっ！』

「わっ！！」

俺は手をすばやくつかみ、押す。
いたみがよろけたところに、

『オラァァァ！！！！』

ボゴォ！！

タックルを決めた。

当然、いたみは吹っ飛び、壁に叩きつけられた。

『改造人間だし大丈夫だろ。さてそんなことよりもこっちを・・・・・』

「ところでここはどこで、私は誰で、何のために生まれてきた？」

『・・・・なんとかしなくちゃな。』

俺は大きいため息を吐いた。

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ　?』

異常（アブノーマル）

『絶対言語』

都城王土の『言葉の重み』の強化版みたいな物。今のところ回避法はない。

入切可能。

『仲間戦闘（チームロワイヤル）』

相手の意識に入り込み、その人間を操作できる。

ただし、一度触った相手にしか使えない。

『完璧限定（オールオーバー）』

触れた相手の異常、過負荷をコピーし、２００％使える。

一度触れた相手の異常や過負荷であればいつでも可能。

た

『幻想実現（ドリームアウト）』

自分の頭の中で考えた異常を作って使うことができる。

ただし、一度作った異常は消すことができず、永遠に残る。一つ作るごとに一年寿命が減る。

安心院なじみの異常。

『不必要（オブノット）』

人間に必要な栄養、酸素などを必要無くすことができる。

『解放（アンロック）』

自分の身体能力を倍、３倍、４倍・・・にできる。

但し４倍以上をやると肉体が崩壊する。

『腑罪証明（アリバイブロック）』

自分が居たいと思う所に自由に行ける。

安心院なじみの異常。

『痛吸収（ペインドレイン）』

他者の痛み・傷を自分に引き受けることができる。

『重力加減（グラビティアース）』

相手にかかる重力を自由に変えることができる。

『目撃者（ウィットネス）』

自分の好きな場所を好きな時に見ることができる。

過負荷（マイナス）

以下ネタバレ注意！！

『人能崩し（ヒューマン・ダウナー）』

自分の視線の先にいる人間の五感・痛覚・異常、過負荷を自由に無くしたり復元させたりすることができる。

第四十九話　『悲痛な叫びが』（前書き）

テスト終わりました！！

なので今までどおりに更新できると思います！！

第四十九話　『悲痛な叫びが』

前回のあらすじ？

翼斗「記憶喪失？何それおいしいの？」

☆★☆★☆★

さて、わからない人もいるだろうから今の状況を説明しよう。

めだかは自分で注射器をさして、

「ところでここはどこで、私は誰で、何のために生まれてきた？」

こうなった（＾Ｏ＾）／

うん、ＢＡ☆ＫＡだね。

「めだかさん！しっかりしてください！俺です！わかりますよね！？」

「・・・・うむ。ちゃんと覚えているぞ。

十島くん・・・・・・だよな？」

『おおー正解ー（棒）』

「フフン！」

「フフン！じゃありません！！正解じゃないし！！」

・・・阿久根先輩ツッコミＧＪ。

『あ、もちろん俺は覚えているよな？』

「もちろん。

榛原翼斗。」

『そうそう！はいばらぁ・・・・・・・・・・ってなんで覚えてる

コイツゥ！！！？』

どういうことだ！？

教えてくれ稲川さ～ん！！！

「・・・真黒さん！たがが注射一本でこんなことがありえるんですか！？」

「いや、記憶を消すこと自体は簡単なんだよ。問題は、どの程度まで記憶を消されたのかということなんだが・・・・」

ボギンッ！！！

突如、その音とともに俺の右腕に鈍い痛みが走る。

『があっ！！！』

後ろを振り返ると、いたみが俺の右腕を折っていた。

「も・・・もう一本！！」

そう言っていたみは俺の左腕に手を伸ばすーーーー

『そうはいくかゴラァ！！』

俺は『重力加減（グラビティアース）』で相手の重力を１０倍にする。

「えっ！？体が・・・」

『くぅ！！』

『解放（アンロック）』で倍にしてる殴る。

『はぁ全く・・・いたみの回復が羨ましいぜぇ・・・・』

「あげないよ♪」

『クッソ・・・速ぇ・・・・・』

いたみは俺に高速で近づくーーー

俺は『重力加減（グラビティアース）』を使おうとするがーーーー

プスッ

知っている痛みが首を襲う。

『くっそ・・・ノーマライズリキッドかぁ・・・・』

案の定、後ろには注射器を俺に刺している名瀬が居た。

「名瀬ちゃんＧＪ！！」

いたみがパンチをだし、俺が左手で止めるが、

ドゴォォ！！

効き腕じゃない上に異常封じられてるため、押し負けて吹き飛ばされる。

『くそがぁ・・・もう・・・・やめ・・・・』

目の前で記憶を失っためだかが、真黒さんが、阿久根先輩が傷つけられていく。

「・・・・もーいーよ古賀ちゃん、十分だやめてやれ。かわいそーで見てられねーよ。」

「うんそーだね。私も弱い者いじめしてるみたいでさすがに気が咎めてきちゃったよ。

あの雲仙くんをやっつけた娘だしさー、ひょっとしたらとか期待しちゃったけどま、でも私たちにかかったらこんな程度だろうね。」

「・・・・・ッ！卑怯にも薬で弱らせておいて好き『阿久根先輩ッ、おそらく異常はもう戻っていますよっ・・・・』え！？どういうことだい翼斗くん！？」

『俺のときだってものの数分で解けたんですから、もう戻っていますよ。』

だが異常が戻っているはずならなぜめだかが手も足も出ない？

「榛原翼斗の言うとおり、異常はもう戻っている。つまり黒神めだかはアブノーマル状態でもガス欠状態の古賀ちゃんに負けたってことだ。つまり、俺達はみんな勘違いしてたのさ。
どいつもこいつも黒神めだかの絢爛豪華な異常性にばかり目を奪われていたが、むしろ重要視すべきはその異常性を支えていた人格だったんだ、いやーーーー『心』と呼んだ方がいいのかな。」

『そんなことはどうでもいい。俺達の負けだ。早くめだかを離してやってくれ。』

「そーはいかねーさ。そこまでわかった以上、もう一個試さなきゃならないことがあんだろ。

黒神めだかの身体に別人格をブチ込めば一体どうなるのかっつー実験さ。」

べ、別人格をぶちこむぅ！？
そんなことできる奴いるわけねーだろ！！

「別人格・・・・！？馬鹿なそんなことはさすがに不可能だ！」

「フツーはな。だけどあの人がいるだろ？あんたが現役時代コンビ組んでた、『人心支配』の能力（アブノーマル）の使い手がよー！」

「・・・・・・・ッ！都城・・・・・王土っ・・・・！！」

・・・あの王野郎かよ・・・！

「そうときまれば善は急げだ。ばいばーい大好きなお兄ちゃん☆」

そう言って二人はめだかをもって大穴へ飛び込んだ。

『くそがぁ！待て！！』

俺はぼろぼろのからだを引きずり、飛び込もうとするがーーー

「やめろ翼斗くん！この穴は地下六階まで直結してる！ぼろぼろの翼斗くんが落ちたらただじゃすまないぞ！！」

『・・・・・・ッ！くそがぁぁぁぁ！！！！！！！』

俺の悲痛な叫びが、地下四階に響き渡った。

第五十話　『足りないのは』（前書き）

作者「おかげさまでこの小説も５０話！！」

翼斗「しかもいつの間にかＰＶ４０００００突破してるし・・・」

作者「いただけない点もあると思いますがなるべく直していくので、」

翼斗「これからも『異常で過負荷で普通な男』を、」

二人「「よろしく！！」」

第五十話　『足りないのは』

前回のあらすじ？

翼斗「俺よくあんなでかい声でたよな・・・・」

☆★☆★☆★

『う～んなぜ俺は勝てないんだ？何が足りない？』

只今あの死闘的な戦いから数分後、

「う～んそうだね・・・」

俺は夢の中で、皆さんおなじみの安心院なじみにアドバイスをいただこうとしていた。

本当なら俺のプライドが許さないんだが、あれだけ悔しい負け方をすれば意外とプライドなんてどうでも良くなる。

あ、ちなみに相談を受けられた本人、なじみは、

「あ、それと、僕の事はなじみ先生と呼びなさい。」

『あれなんか違う！？』

ノリノリである。

「おそらく翼斗君に足りないのは・・・・・・・僕が思うに『残酷さ』かな・・・・・」

『はぁ？』

「だいたいさっきの勝負だって『重力加減（グラビティアース）』を最初っから使って『解放（アンロック）』で４倍にすれば一気に決まったはずだぜ。」

『・・・・・そう言われれば・・・・・』

確かになじみの言うとおり、そうすれば簡単に決まる。
いやぶっちゃけた話、『絶対言語』使えばすぐ乙った。

「それに翼斗君、君自分が造った異常覚えてる？」

『ぎ、ぎくぅ！！』

正直な所、あんまり覚えていない。
『不必要（オブノット）』とか空気。

「ほら。覚えていないだろう？つまり君は全ての異常を有効に使えていないのさ。」

・・・・これもなじみが正しすぎる。

『なるほど。やはり俺に足りないのは『残酷さ』と『異常を有効に使うこと』だ。ありがとうなじみ。あ、いやなじみ先生。いい勉強

になった気がした。』

「・・・・気がしたなんだ・・・・・」

「そうだ。」

俺が脳内で戦略を考えているとなじみが言った。

「新しい異常上げよっか？」

えっ軽っ。

『・・・どんなやつかわからんから聞いてから決める。』

「う～んと簡単に説明すると、隕石を願った場所に衝突させｒ『いるかゴラァ！！！そんなもん使ったら全てなくなるわ！！』・・・残念。」

しかも使った本人も死ぬだろ絶対。

「・・・じゃぁ他のにしよう。」

『いや俺的には遠慮したいとこなんだが・・・・』

「いや次のはまともだぜ。・・・・・・・・・こんなの。」

・・・・・こんな異常があるのか？
これがあれば全てが思いのままだぞ・・・・

『・・・本当にあるのか？そんなチートの塊みたいな異常が。』

「けど代償なしで使えるわけじゃない。一回使うたびに異常がポン！さ。」

『それは俺にとってはありがたい。かなりヤバい気がするがヨコセ。』

「交換成立。」

・・・・うん？

『ちょっとまてぇぇぇぇぇぃ！！！！』

「なんだい？何か問題でも？」

俺に近づきながらなじみが言う。

『いや今回もキスで渡すのは知ってる。もう既にあきらめた。ａｌｒｅａｄｙだ。』

「じゃぁ問題ないじゃないか。」

そう言ってなじみは唇を重ねようとするーーーーー

『あー待て待て待て！！その前にお前さっき何て言った？』

「じゃぁ問題ないじゃないか。」

『いやその前。』

「交換成立。」

『それそれ！！！』

その言葉に問題アリだ。

『お前は交換と言った。』

「言ったよ。」

『・・・交換ってこっちからも何かあげなきゃいけねえだろうがぁぁぁぁ！！！』

「あ、言葉の選択ミスだね。交渉にすればよかった。」

『・・・本当に選択ミスだけか？』

俺の脳裏にあの時のなじみの表情が浮かぶ。

「・・・本当にそれだけだよ。それにどっちみちセカンドキスいただくし。」

『セカンドキス言うな！結構恥ずかしいんだぞバカヤロウ！！』

「クススッ」

くそこいつ楽しんでやがる！

『・・・するなら早くしてくれ。俺の心臓がやばい。』

「もうちょっとからかいたかったけれどわかったよ。」

そして俺となじみは、唇を重ねたーーーー

ちなみに何の異常をもらったかは、まだ秘密だバカヤロウ。

帰る前に、此処で新しい異常を造った。

監修：なじみ先生だ。

名前は『排出（ドローブ）』だ。

こいつは自分の受けた痛みと傷を相手に移す。

しかも人数制限はなく、自分の受けた傷を全員に移すことだって可能だ。

つまり、『痛吸収（ペインドレイン）』と合わせて使えば相当な、いやほぼ無敵のコンボになる。

そして帰る時になじみはまた、『あの表情』で手を振っていた。

☆★☆★☆★

目を覚ますと、阿久根先輩と善吉が言いあいをしていた。

「なにぃっ！逃げるだって！？正気で言っているのか人吉くん！！」

「逃げるとは言ってねーですよ。一旦退いて『いやそれを巷では逃げるって言うんだぞ善吉。』そ、それはそうだが・・・」

『・・・で、なんで逃げるんだ？』

「ッ！なんで逃げる必要があるんだ人吉くん！」

「・・・周りを見てください阿久根先輩！！俺はボロボロ！あんたもボロボロ！真黒さんと翼斗までボロボロだ！

古賀先輩と名瀬先輩を含めないにしても『十三人（パーティ）』はあと八人も残っているんですよ！？それを全部喜界島と翼斗に押しつける気ですか！？」

『ちょいまち。俺を含めるな。俺、ボロボロ。』

「・・・・・それを全部翼斗に押しつける気ですか！？」

『二度言うなゴラァ！！しかも俺だけになってる！？』

善吉。君は鬼か？

「・・・ケッ！相変わらずだなテメーらは！この戦況でも助けることばっかりで！ちょっとは助けてもらおうとか思わねーのかよ？」

『おっ。』

「なっ・・！？なんであんた達がここに・・・！？」

「なんでって・・・・随分不愉快な物言いですね人吉くん！」

「いやなに大事な後輩が困ってるゆーて不知火ちゃんに教えてもーて、急いで駆け付けたっちゅーねん。」

「６７５４３、４６９０７４３６７。」

「俺とか的にはあれか？そんな弱い奴らに負けた覚えはない。お前たちを倒すのはこの俺だーーーか？」

「それを言ったら僕たちは全員生徒会に負けてるだろ。普通に友達を助けたいでいいんだよ。」

「ケケケ！まあ理由とか御託とかいーだろうが！まずはカッチョヨク登場シーンを決めさせろや。」

「「「「「「負け犬軍団参上！！！」」」」」」

『・・・・・ネーミングセンス悪っ。』

第五十話　『足りないのは』（後書き）

まだ書きたいですけどきりがいいので今日はここで終わります。

第五十一話　『反撃開始だ』

前回のあらすじ？

翼斗「ネーミングはちゃんと考えた方がいいぜ。」

☆★☆★☆★

「「「「「「負け犬軍団参上！！！！」」」」」」

ピンチの俺達を助けに来てくれたのは、鬼瀬、鍋島先輩、高千穂先輩、宗像先輩、雲仙姉、雲仙の見たことある顔触れ達だった。

『いやもうちょっと名前考えようぜ。『負け犬軍団』ってｗｗ』

「・・・翼斗くん。そこは突っ込んではいけない気がするのだが・・・・」

そこにつっこむのが翼斗クオリティ！！

『で、負け犬の方々が一体何しに来たんですか？』

まぁ助けに来た以外ないが。

「おい榛原翼斗。お前はオブラートに包むということを学べ。」

「なぁに翼斗クン。あなた方がピンチだというからわざわざ助けに来たねん。不知火ちゃんから教えてもうてなー。」

鍋島先輩の言葉に俺と善吉は驚愕する。

「不知火・・・・・あの不知火が！？」

『あの『胃袋・ｔｈｅ・ブラックホール』の不知火が俺達の為に学園中を駆け回って助けを求めてくれたってのか！？』

「「いや、ツイッターで。」」

「はぁ！？ツイッター！？」

鬼瀬と鍋島先輩が声をそろえて言う。

俺は早速ツイッターをチェック。

『本当だぜ善吉。『生徒会ピンチ。メンバー損なう。』って書かれてる。』

「なうの使い方間違ってるきがする～！！」

『いやそこよりも何でツイッターでやっといてこんだけしかこねぇんだよ。支持率９８％なのに。』

ツイッターやっといて何６人って！？

『大体お前らが来なくても解決している。』

「はぁ？どういうことだ？」

雲仙が首をかしげながら聞く。

『俺が今から十三階行って奪還してくる。まぁいわゆるテレポート使ってな。』

「７８４６３７７３８４６２５３７４９（そういえば私と戦う前もいきなり現れたな）」

「なに！？それ本当か姉ちゃん！」

「３７７２５６７１９１７（私が嘘を言う訳ないだろう。）」

『というわけでちょっくら行ってくるわ。』

俺は『腑罪証明(アリバイブロック)』を使い行こうとするーーーー

「翼斗。頼んだ。」

行く前に善吉にそう言われる。

『任せろ。』

俺はそう返した。

よし、完了。ここか十三階。よしめだかを探ｓ・・・・・・

「『十三組の十三人［サーティン・パーティ］』・・・・『裏の六人［プラスシックス］』！！！」

そこには明らかに裏ボス的なやつが六人ーーーーー居た。

『あ、やばっ。』

「え？」

「ああ？」

「うん？」

「？」

「・・・・・・」

「誰だ？」

「誰でしょう？」

当然、全員に気付かれた。

さぁここで脳内討論会〜〜〜！！

この状況への対処法は３つ。

１　全員なぎ倒してヤンよ！！

と

２　見事全員をスルーしめだかだけを助けそして逃げる。

と

３　逃亡。

だ。

〜只今討論中。しばらくお待ちください〜

結果が出た。

結果はーーーーー

『どうも皆さん。簡潔に言うと、

俺等の生徒会長返せこの野郎！！！！！！！！！！』

俺はもう逃げることをやめた。

さぁ、反撃開始だ。

第五十二話　『とりあえず敵として』（前書き）

これ書きながら思ったことがある・・・・

軍規と破魔矢の異常わからん！！

第五十二話　『とりあえず敵として』

前回のあらすじ？

翼斗「逃げない・逃げ出さない・逃亡しない！これが俺の三原則！！」

☆★☆★☆★

『俺等の生徒会長返せこの野郎！！！』

ダッ！！

そう行ったと同時に縛り付けられているめだかの所に向かおうとするーーーだが、

「あっそう！」

突如俺の背後から延びた髪が襲いかかる。

『うおこえぇｗｗ』

俺はそれを『完璧限定（オールオーバー）』でコピーした『自動操縦（オートパイロット）』で避ける。

「さて、追撃ーーーと言いたいところだが、とりあえず敵として

挨拶は大事だと思うんだよ。
・・・ということで自己紹介だ。」

「糸島軍規だ。仲良くしてね。」

「湯前音眼だよ。仲良くしてね。」

「百町破魔矢なる者です。仲良くしてね。」

「筑前優鳥・・・らしいんだ。仲良くしてね。」

「鶴御崎山海という。仲良くしてね。」

「上峰書子と申します。仲良くしてね。」

「とりあえず私たちも。古賀いたみだよ。」

「・・・・名瀬夭歌。」

『それじゃぁこっちもだな。副会長、榛原翼斗だ。お前らと仲良くする気は・・・・・ねぇ!!』

ダッ!!

俺はおそらくリーダー格であろう糸島軍規の後ろに『腑罪証明(アリバイブロック)』で移動し、『解放(アンロック)』で倍にしたパンチを喰らわせるーーーーーー

「かー！悲しいこと言うねぇ！・・・それじゃぁしょうがねぇな・・・・」

その拳は、軽々と軍規の手に止められていた。

（こうも軽々と止められると心にくるねぇ・・・・）

「それじゃぁ副会長！俺等と殺(あそ)んでくれや！！」

『やなこった！！』

軍規の重力を『重力加減(グラビティアース)』で3倍にし、動きを止める。

「うおっ！やるなぁ！！」

『なめんなごらぁ！！』

ドゴォォ！！！

3倍にし、思いっきり軍規を殴る。

「かー！きくきく～！」

（これは一筋縄ではいかねえな・・・・）

だが忘れてはならないのは、敵は裏の六人と、古賀&名瀬が居ることである。

そしてしばらくすればそこに、都城王土と行橋未造も加わることだろう。

（早めに終わらせねぇと・・・）

「敵の前で考えこととは随分余裕だね翼斗くん！！」

いたみが俺の腹を狙い蹴りを入れてくる。

『止まれ』

俺は『絶対言語』でいたみにそう言った。

「んぐぅ・・・・」

『改造人間だし手加減は・・・・・・・・・ｎｏだ！！！』

ドゴォォ！！

「んっ！！！」

３倍にしたパンチを当てる。

『もういっちょう！！』

重力を４倍にして吹っ飛ばないようにし、そこに２、３発と次々パンチを喰らわせていく。

ドゴン！！ドゴォォン！！！

「がっ！！ぐぅ！！！ごほっ！！！」

『がぁっ！！！』

最後の一発を喰らわせようと力を貯めていたときに、右腕に痛み＆熱が伝わる。

そこには指を俺の右腕にめり込ませていた山海がいた。

右腕は、どろどろに溶けていた。

『がぁっ・・・離せゴラァ！！』

ボコッ！！！

俺は４倍にし、左手で後ろにパンチをするーーーーが、そこには山

海ではなく、俺のパンチが腹を貫通している音眼が居た。

「わー、やられちゃったー（棒）」

『・・・ハッ。こいつら人間かよ・・・・』

人間限界まで追いつめられると笑みが出るというが、全くその通り。

「おいおいまだやる気かよ。これ以上やると本気で・・・・・・・・死ぬぜ？」

軍規がそう言う。

俺は不敵に笑い、こう言った。

『もちろん。だがこれじゃぁきついんでな。ハンデだと思って全員・・・・・・俺と同じ状況になってくれや！！！！』

俺は『排出（ドローブ）』を使った。

つまり、全員の右腕が今、溶けた。

「な・・・・なにこれ！？どういうこと！？」

パニック状態になったいたみが言う。

「ほぉ・・・・面白い異常（のうりょく）だ！！」

何故か軍規はテンションアップ！

『さぁて、第2ラウンドと行こうや！！』

「ふむ。なにやらおもしろいことをしているな。俺も混ぜろ。」
後ろにある階段からそう声が聞こえた。
『・・・定員オーバーですよ。王様。』
俺は後ろを見ず、そう言った。
☆★☆★☆★
～？ｓｉｄｅ～
阿久根によって壊された『拒絶の扉』。その前に二人の男が来ていた。
「・・・なぁ。俺等は何をしようとしてるんだ？」
『なにって理事長室が何処にあるのかを聞きにいくんじゃないか。』
「それじゃあこんな深そうな階段降りていくよりほかの生徒に聞いた方が早ぇじゃねぇか！！」
『だって、もう下校時刻だよ。』『そんなに生徒なんているはずないじゃないか。』
「・・・・・それもそうだ。」

『そうだろう。』『だから、ここを降りて行くのが一番得策なんだよ。』

「そう信じるか。」

『それじゃぁ行こう。紅軌くん。』

「だからくんはいらねえっていってんだろ。球磨川。」

そう言って二人は、地下へと続く階段を下りて行ったーーーーーー

第五十二話　『とりあえず敵として』（後書き）

オリキャラ登場だぜぇ！！！

第五十三話　『なんて展開は』

前回のあらすじ？

翼斗「都城ＫＹ。」

☆★☆★☆★

（さて、どうしたもんか・・・・）

ただいま俺が戦ってる相手、

裏の六人

いたみ＆名瀬コンビ

空気を読まずしてきた都城王土

９人。

・・・・多すぎねぇ？

だがやるしかないのが厳しい現実である。

『うぉら！！！』

ドゴォ！！！

１　２　６

||

「ぐぅ！！」

腕の溶けた痛みに悶えている軍規を3倍で蹴飛ばした。

「『平伏せ』」

王土がそう言うがその言葉は聞かず、かわりに、

『『平伏せ』』

俺が王土を平伏させる。

「っ・・・・！」

優鳥の髪が突然のび、俺を捕まえようとするが、

『無駄だ。』

コピーした『自動操縦（オートパイロット）』で軽く避ける。

（くそきりがねぇ・・・・・）

合計9人もいる為敵がどんどん移り変わって出てくる。
その状況はマジで敗北寸前。
それでも俺は戦いを有利に進めていた。
だが・・・・

めんどうくさい。

（仕方ねえな・・・・裏の手を使ってさっさと帰ろう。）

そして俺は裏の手を使った。

『動くな』

『絶対言語』を使い、９人の身動きを不能にする。
そう、裏の手とは動けなくしてる間にめだかを奪い逃走するという卑怯極まりない作戦である！！！

「こいつこんなこともできんのかよ！化物か！？」

「俺としたことが・・・うっかりしていて忘れていた・・・・」

軍規と王土がそう言う。

『それじゃぁイタダキマス。』

そう言い俺は気を失っているめだかを担ぐ。

「・・・・まっ、待て！！！！！」

王土が焦り気味に言う。

『待ちませんよーっと。それじゃぁみなさんｓ・・・・・』

ここまで行った時に俺は一つの違和感が頭をよぎる。

（こいつ軽すぎないか！？）
その疑問が浮かんだ時にはもう遅く。

「・・・よくやった。行橋。」
「礼にはおよばないよ。エヘヘ！」
行橋未造の声が、気を失っているはずのめだかから聞こえた。

瞬間。腕に3度目の痛みが走る。
『んぐっ！ノォマァラァイズリキィッドォかぁ・・・！！！』
そう。それは翼斗の知っているノーマライズリキッドが、めだかに変装していた未造によって投与された。

【ノーマライズリキッド思いだせない人はこの作品を読み返してみてね！　ｂｙ翼斗】

（おいおい、変装までできんのかよ。お前らこそ化物じゃねぇか・・・・）

俺は心の中でそう洩らす。

「・・・名瀬ちゃん。翼斗くんどうする？」

『がっ・・・・』

俺の首を掴みながらいたみは言う。

「ん。そうせだからそいつも都城先輩に洗脳してもらおうぜ。」

「うんわかった。とりあえず意識は奪わないとね。」

完全に俺の敗北だ・・・・

いたみのパンチが俺の意識を奪った。

『・・・なんて展開は予測済みなんだよ！！！！』

ドゴン！！！！！

パンチが当たる前に、俺はいたみを5倍の力で蹴り飛ばした。

「ぐふぅ！！！！！」

当然。４倍の力を超えたため、

『がぁっ！！！！』

ボキボキボキッ！！！！

俺の脚の骨は全て折れた。

「何故だ・・・・ノーマライズリキッドは効いているはず・・・・・！？」

名瀬が驚いた顔でそう洩らす。

『バカヤローが。俺がそれを何回投薬されたと思ってるんだ？』

「だが対策なんて立てられるはずが・・・・・・！？」

『・・・新しい異常を造らせてもらった。』

「「「「「「「「「！！！！」」」」」」」」」」」

俺が言ったその言葉に、その場に居た全員が驚きを隠せなかった。

第五十四話　『この借りは』（前書き）

作者「ついに・・・・・・・

５００００００アクセス突破です！！！！！」

翼斗「こんな駄文をこんなに見てくれて・・・・ありがとう！！！」

作者「そして５０万アクセスを記念し、何か番外編みたいなのをやりたいと思います。」

翼斗「要望などがあればどしどし言ってくれ。」

第五十四話　『この借りは』

前回のあらすじ？

翼斗「2度あることは3度あるって本当なんだな・・・・」

☆★☆★☆★

「異常を・・・・造っただと！？そんなことができるはずが・・・・！？」

フラスコ計画の責任者、名瀬がそう言う。

『それができるんだよ。異常を造る異常。それが俺の『幻想実現（ドリームアウト）』なんだからな。』

ちなみに造った異常は『異変治療（オートドクター）』だ。

こいつは自分の体に起こった異変を1秒とかからず瞬時に治療できる。

適用するのは毒や薬など。傷や痛みは治療できねぇ。

「そんな異常、俺等の努力を無駄にするようなもんじゃねーか・・・・」

名瀬の言うとおり、幻想（こいつ）実現があればおそらくフラスコ計画は完成する。

色々異常を造りまくって、完璧な人間にすればいいんだからな。

「・・・そんな異常の存在、認められねえ・・・・・・古賀ちゃん！！榛原翼斗を始末しろ！！！」

「・・・友達なんだけど・・・・仕方ないよね。翼斗くん覚悟！！」

いたみが俺の所へ高速で近づき、今までのように胴などではなく、首を落としにかかってくる。

『もう覚悟はとっくにできてる！殺さないように意識を沈めてやんよ！！』

俺は攻撃に備え、構えをとる。

だがその時、

グサッ！！

「んんっ！！！」

突如いたみの方に日本刀が刺さった。

『日本刀・・・・まさか！！！』

「榛原翼斗ぉ！！離れてろ！！！」

階段から居ないはずの雲仙冥利の声が聞こえ、俺は急いでその場から離れた。

その瞬間、

ドドドドド！！！！！！！

宗像形による機関銃の乱射が、裏の六人、名瀬＆いたみ＆王土＆行橋に放たれた。

『何しに来たんだよお前ら！！』

「あそこでずっと突っ立ってるより、下の階目指した方が早いだろ。」

『畜生正論・・・・』

善吉の言葉は１００％、正論だった。

「・・・くそが。やっぱり全然喰らってねえ・・・・」

煙が晴れた後に見えたのは、血まみれの奴ら・・・・・・・ではなく、壁にのみ銃痕があり、他の奴らは無傷、という状況だった。

「クス！なんだもうおしまいですかあ？私はまだまだ、食べたりませんけど。」

書子が口を開くと、そこには全ての銃の弾が収まっていた。

「おい榛原翼斗。お前俺等と六人（あいつら）だけ移動させれねーか？」

冥利が俺にそう聞いてくる。

無論。

『余裕。だが時間が必要。』

「どれくらいだ？」

『う～ん３０秒あれば足りる。』

「大分きついが・・・・・やるしかねえか！！！」

『頼みます。』

「あっそう！そんなに時間が稼げる？」

どうやら聞こえていたらしい優鳥が髪を伸ばして5人を縛る。

「うっわ容赦ねーなー！いきなり『髪々の黄昏［トリック・オア・トリートメント］』かよ！」

「チャンチャン♪5秒も持った無かったね！」

「いーやこれから持つのさ。」

ドゴン！！！

『自動操縦（オートパイロット）』で避けていた仕種がパンチを優鳥に喰らわす。

ほとんどきいていなかったが、髪が緩んだその瞬間を見逃さず、

スパン！！！

宗像が日本刀で髪を切った。

「そぉら！！！」

冥利がスーパーボールを使い、攻撃する。

だがそのスーパーボールが相手に当たる前に、

バクン！！

書子によってそのスーパーボールは口に収まった。

「口に物が入っている今なら含めないよね。」

ドドドドド！！！！

再び宗像による機関銃の乱射が六人を襲う。

「やっｔ・・・・・・てない！！」

針音の喜びもつかの間、再び銃弾は全て消えていた。

『充分！！！！』

俺はその間に新しく造った異常を発動。

『対象を選択、糸島軍規、湯前音眼、百町破魔矢、筑前優鳥、鶴御崎山海、上峰書子、鬼瀬針音、鍋島猫美、高千穂仕種、宗像形、雲仙冥加、雲仙冥利。この１２人を地下６階へ移動（ワープ）！！！』

俺は意識を集中させるーーーー

『『腑罪免除(アリバイブレイク)』！！！！！』

瞬間、選択した12人が光に包まれーーーーー消えた。

『さぁて！！邪魔者達は消えたし、まぁず・・・・・』

ドゴン！！！

俺は階段の横の壁を3倍で破壊した。

そこには、我らが生徒会長。めだかが眠っていた。

「うっ・・・・ううん・・・・・」

おそらく破壊音で、めだかが目覚めた。

「「「め、めだか（黒神）ちゃん！！（さん）」」」

三人が慌ててめだかの拘束具を外す。

「ふむ。どうやら私が眠っていた間に、すごく大変なことがあったようだな。・・・・・すまなかった。」

「「「気にすんな（しないでください）」」」

『・・・この借りは高くつくぜ？』

「ふむ。お前たちの絆には感服したよ。まさか本当に黒神を助けるとはな。・・・・・では黒神めだか。そろそろ俺達も下校したいし、最後の実験（たたかい）を始めようぞ。」

「よかろう。フラスコ計画を叩きつぶし、そして貴様らを幸せにしてやろう！」

ＩＦその壱　『俺は一度も』（前書き）

５０万アクセス突破記念番外編みたいなものです。

これはもし翼斗がフラスコ計画にノリノリで参加していたらーーーーというｉｆです。

ＩＦその壱　『俺は一度も』

この物語は、闇へ葬られたフラスコ計画のもう一つのお話である。

☆★☆★☆★

「・・・以上が、フラスコ計画の需要です。」

不知火袴は、俺にフラスコ計画の需要を全て話した。

『つまり、人為的に天才を作り出すから実験台（モルモット）になれや。ということとか。』

「・・・簡潔に言えばそう言うことです。そしてまず加わるか加わらないか、の話の前に、翼斗くんにある実験をしてもらいたいんですよ。」

そう言うと袴は、グラスに入ったサイコロを取り出す。

『何ですかこれ？普通のサイコロ・・・・のように見えますけど。』

「その通り。タネも仕掛けもない普通のサイコロです。」

『これをどうするんですか？』

「振ってください。」

・・・あれ随分簡単な気が・・・・？

『・・・・・へ？』

「何も考えなくていいんです。ただ翼斗くんはコレを振る。それで君が異常かそうでないかがわかります。」

サイコロなんて生涯一回も振ったことが無い気が・・・・

『俺好みでシンプルだねぇ。よしじゃぁ振りますよ。』

コロコロコロとサイコロが転がる。

そして示した数字は・・・・

「・・・これはすごい。」

サイコロが全て6個に割れ、全てが表を向いている。

「間違いありません。あなたは充分ーーーーいえ充分すぎるほどの異常です。」

・・・これは素直に喜んでいいんだろうか。

「それで・・・・どうします？フラスコ計画に入りますか？」

答えはもう決まっている。

答えはーーーーー

Ｙｅｓだ。

『もちろん。微力ながらお手伝いさせていただきますよ。』

俺が予想もしない返答をしたのか、袴は眼を開き驚いている。

「・・・何故ですか？何故入ろうと思ったんですか？」

『何故、ですか・・・・。まぁしいて言うなら、

オモシロソウ・・・・だからですね。』

「それにこっちに入ったら生徒会方と敵どおしになってしまいますよ？」

『・・・知りませんよそんなこと。』

俺は冷たく言った。

『俺は一度も仲間になるなんて言ってない。ただ副会長になる、っ

て言っただけ。それなのにあっちが勝手に『仲間』と思っているだけだ。敵どおしになるなど、俺にとってはどーでもいい。・・・いや、むしろラッキーかもな。』

「？」

俺の言葉に袴は首をかしげる。

『だって敵どおしだぞ？あの黒神（バケモノ）と本気で戦りあえるんだぜ？こんなにおもしろくて楽しいことなんてありはしない！！』

「・・・なるほど。やはりあなたは・・・・・・・・・・・・・・異常中の異常です。

それでは改めて榛原翼斗君。あなたはフラスコ計画へ加入しますか？」

『もちろん。』

俺と袴は堅い握手をかわした。

こうして俺はフラスコ計画へ加入した。

『裏の六人［プラスシックス］』の闇の七番目、『狂乱の神［マッドゴッド］』として。

☆★☆★☆★

めだか達に、「修行しに行くぞ」と言われたが、俺はそれを軽く断り、新しくもらった自分の階へ向かった。

『ここが俺の階か・・・・』

もらった階は、以前雲仙冥利が使っていた階ーーーー十一階である。

『それにしても球技場って・・・・・・・どういうことだよ雲仙先輩。』

何故に球技場・・・・

『さぁ～て。これからこの階を俺好みに改造でもしようかな。』

俺はフロアの改造を頼みに、地下十一階をあとにした。

ＩＦその壱　『俺は一度も』（後書き）

験体名『狂乱の神［マッドゴッド］』・・・・・・

なんだか厨二っぽい・・・・

感想いつでもおまちしています。

ＩＦその弐　『一つ忠告だ』（前書き）

お久しぶりです！

５０万アクセス突破記念番外編その２です。

注　めだかが居るのはさらわれる前にめだかが記憶を高速で取り戻して撃退したからです。

ＩＦその弐　『一つ忠告だ』

「・・・宗像くんが破れました。それも普通（ノーマル）の善吉くんにね。」

突如袴から告げられた知らせ。それは善吉が宗像を倒したという到底信じられない内容だった。

『マジかよ・・・』

「・・・彼らは少々侮れなくなっているようです。戦う時には・・・気をつけてくださいね。」

『わぁーとるよ。へましたりはしねぇさ。』

「期待していますよ。それじゃぁ、・・・『狂乱の神［マッドゴッド］』。」

そう言って袴は電話を切った。

『・・・気をつけろって言われたってよぉー、どう対処すればいい

んだよー（棒）』

ちなみに異常はもうたっっっっっくさん造ってある。

ほとんど対策はばっちりだ。

これといって特にやることもない。

『・・・しゃぁーねーな。それじゃぁちょっと・・・・・・・・・・

寝るか。』

そして俺は疲れをいやすため眠りに入った。

あいつら俺に会ったらどんな顔すんだろうな・・・

楽しみだ。

☆★☆★☆★

「なぁめだかちゃん。あと『十三人（パーティ）』は何人残っているんだ？」

下の階へと続く階段を降りながら善吉がめだかに聞いた。

「・・・高千穂三年生と宗像三年生、古賀二年生とお姉様、それに裏の六人とは会ったな・・・・

残りは・・・行橋三年生と都城三年生と誰かだな。」

「次は確か・・・・・十一階でしたね。」

「十一階・・・・・・」

阿久根の十一階と言う言葉に、めだかは頭に手を当て、なにやら考え込む。

「どうしたんだめだかちゃん。」

「・・・いや、高千穂三年生と宗像三年生とお姉さまが言っていた事を思い出してな。」

☆★☆★☆★

「一つ忠告しておいてやるよ。十一階に居る奴とは戦うな。」

戦いの後、高千穂はめだか達に言った。

「ハァ？どういうことですか。」

「戦っても無駄ってことだよ。お前らにははなっから勝ち目はねえ。」

「・・・どういうことだ高千穂三年生。」

「・・・俺が言えるのはここまでさ。後はほかの奴にでも聞いてくれ。」

高千穂はそこで口を閉ざした。

「一つ忠告だ。十一階に居る奴とは戦わないほうがいいよ。」

「・・・高千穂先輩も言ってたな。どういうことですか宗像先輩。」

戦いの後、高千穂のように宗像はそう言った。

「十二人(ぼくたち)が束になっても勝てなかったんだ、君たちに勝ち目があるとは思えない。」

「どのような人ですか？」

宗像の言葉を聞いためだかは問う。

「・・・・・・正真正銘の、化物だよ。」

「一つ忠告。この下へ進むってんならやめた方がいいぜ。上に行ってエレベーターで十三階へ行ったほうがいい。」

「・・・十一階にいる奴とは戦うなってことですねお姉さま。」

めだかの言葉にくじらは不機嫌そうな顔を見せる。

「・・・なんだ、知ってたのかよ。じゃぁ説明はいらねえな。」

「教えてくださいお姉さま。その人とは何者なんですか？」

「・・・お前らの知っている奴だよ。俺はそれ以上は言えねー。いつどこで見てるかわかんねーからな。あいつ。」

「本当。奇想天外だよね。・・・・・・でもそういうところが・・・・・」

そして古賀は顔を赤くする。

「・・・ちっ、あいつ後で実験動物（モルモット）にしてやる・・・」

「な、なぜちゃん！！それはさすがに可哀想だよ！！」

「とにかくだ。生きたい、もしくはフラスコ計画をぶっ潰したいんなら、エレベーターを使え。」

最後にくじらはそう言った。

☆★☆★☆★

「・・・そうとう強いってことか・・・・」

善吉がそう洩らす。

「どうしますめだかさん。引き返しますか？」

「・・・いや。このまま行く。私たちはフラスコ計画を潰しに来たんだ。それならばどっちみち戦わなきゃいけない相手だろう。」

「そっ・・・それもそうですが・・・」

めだかの言葉に、阿久根は納得いかないような顔をする。

「それに、今戻ったら相当な時間ロスになる。裏の六人と戦っている雲仙二年生達の努力を無駄にするわけにはいかない。」

「・・・わかりました。」

阿久根は渋々了解する。

「・・・なんじゃこりゃぁ！沼？」

階段を下りた先に待っていたのは、床が濁った水で満たされ、不気味な雰囲気が漂っている地下十一階だった。

「ちょっと不気味・・・・」

喜界島がおもわずそう洩らす。

ポツッ、と善吉の鼻に一つの滴が落ちる。

「「「「？」」」」

全員がその音にきづき、上を向くと、

「雨だ・・・・・」

透き通った色ではなく、濁った色の雨が降る。

『濁った水の沼、淀んだ空気、そして濁った雨。戦うに相応しい場

所じゃねぇか？』

その声は、みんなのよく知っている人物の声だった。

「「「「！！」」」」

『それじゃぁまず自己紹介から。『十三組の十三人［サーティン・パーティ］』の『裏の六人［プラスシックス］』の闇の七番目、『狂乱の神［マッドゴッド］』の榛原翼斗だ。仲良くしてね。』

そこには副会長の、榛原翼斗がいた。

ＩＦその参　『土壇場で』（前書き）

５０万ＰＶ記念番外編その３です！

だんだんと話の流れが浮かばなくなってきた・・・・

ＩＦその参　『土壇場で』

「よ・・・翼斗なのか・・・・」

『おいおい、自己紹介はさっきしたからもうしねえぞ。』

善吉が恐る恐る俺に確認を取る。

「ッ・・・！！なんでだ翼斗！なんで・・・！」

『なんでってそりゃぁ・・・・・・・なんとなくだよ。』

「・・・まじめに答えろよ・・・！」

『うん？まじめにこたえたつもりなんだが？』

「ふざけんな！！！」

善吉が俺に怒号を浴びせる。

『怒りすぎだぞ善吉。カルシウムをもっとたくさんとろうぜ。』

「これが怒らずにいられるか！！なんで俺等を裏切ったんだｙ『善吉こそふざけんなよ！』ッ・・！！」

俺の声に少しびびる善吉。

『裏切る以前に、俺はお前らの仲間じゃねぇんだよ！仲良しごっこはお前らでしてればいいだろうが！』

「っ・・・・じゃぁなんで！なんで生徒会に入ったんだよ！！？」

『・・・俺は人からの誘いは断れねェんだよ。めだかに誘われたから入った。それだけだ。』

「・・・っ。」

善吉はほとんど諦めの声を洩らした。

「・・・それで翼斗。なんでフラスコ計画に参加した？」

めだかが俺にそう問う。

『まぁひまだったし、なんかおもしろそうだったから・・・・・とかでいいか？』

「ッ！！！」

俺の返答が気に入らなかったのか、善吉は眼に見えてキれる。

だがめだかは善吉とは大半の、冷静の状態で聞いてきた。

「どうしても戦わなきゃいけないのか？」

『Ｓｕｒｅ．そうじゃねぇと下にはいかせねぇ。ここでリタイアだ。』

「・・・そうか。」

めだかは残念そうな顔をする。

「・・・めだかちゃん。ここは俺がやる。」

善吉がそう言い、めだかの前に立つ。

「駄目だ、やはりここは私が行くべきーーー「いいや俺が行く！！」

・・・怪我だけはするなよ。」

言っても無駄だと判断したのか、めだかはあきらめて善吉にそう言った。

「大丈夫だ。ちょっとばかし殴って目ぇ覚まさせるだけだ！！！」

そう言って善吉は俺の目の前に立った。

『無理はしなくていいんだぜ善吉。俺は全員でもかまわないぜ？』

「ぬかせぇ！今すぐぶん殴ってお前の目を覚まさせてやる！！！」

『・・・できるもんなら。』

先に動いたのは善吉だった。

「だりゃぁぁぁ！！！」

即座に地を蹴り、蹴りをくらわすーーーー

『ハァ・・・・『跪け』。』

少々どころかほとんど手加減して『絶対言語』を使う。

ドゴォ！！！

「んぐぅ！！！」

善吉が俺に跪くーーーーーはずだったが、

「はぁぁぁあああああ！！！！！」

ググググ・・・

『っ！！』

必死に力を堪え、俺の『絶対言語』に逆らう。

「はぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！！！！！」

そして、俺の絶対言語を破った。

（超手加減してたとはいえここまで強くなってるとは・・・・少々あなどっていた）

『強くなったな善吉。』

「っ！！！」

ドゴッ！！！

いつの間にか『腑罪証明（アリバイブロック）』で後ろに居た俺に3倍した蹴りをくらわせられる。

（きまっ・・・・・てない！？）

勝利を確信した俺の目に映ったのは、膝を付きながらも立ちあがる善吉の姿だった。

「まだ終わってない・・・・戦いはこれからだぞ・・・・」

『・・・戦いになるといいがな。』

「がぁああっ！！」

ドゴォ！！！

おそらく数十発目であるだろう3倍のパンチをくらわす。

（これで終わりーーーーーまだ立つのか！？）

だが善吉はまた、立ちあがっていた。

「善吉！！もういい！！後は私がｙ「俺はよくねぇんだよ！！」」

善吉のボロボロの姿をみるのが嫌になったのか、めだかが静止をかける。

だがその言葉が言い終わる前に、善吉は言葉を遮った。

「いいから最後までやらせてくれ・・・・・」

善吉のその言葉に、めだか達は何も言えなくなる。

『・・・なんかこれ以上聞いてると良心が痛みそうなんでな。・・・次で決めさせてもらう！！！！』

俺は力を貯めるーーーー

そして『腑罪証明（アリバイブロック）』で善吉の後ろに跳ぶ。

『これで最後だ！！！！よぉぉぉぉんばぁぁぁぁい！！！！！！』

「がああああああああ！！！！！」

『解放（アンロック）』で４倍にした拳を善吉に、振り下ろした。

はずだった。

だが振り下ろされたその場所に、善吉はいなかった。

『なにっ！？』

その時、俺の背中に強い衝撃が走った。

『ぐぁぁっ！！！！！！』

バキバキバキィ！！

俺の背中が悲鳴を上げる。

バチバチィ！！！！

（これはっ！？電気ぃ！！？？まさかぁ・・・！）

後ろを振り向くと、そこには、

『おいおい・・・土壇場で異常が開花するとかやめてくれよ・・・・』

電撃を纏った善吉が立っていた。

ＩＦその参　『土壇場で』（後書き）

善吉まさかの異常開花！！！

感想いつでもお待ちしています。

第五十五話　『赤く』（前書き）

脳内会議が行われた結果、交互に投稿することにしました。

注　なんの下りかわからん人は活動報告を見ろあぶしゃぁぁ！！！

第五十五話　『赤く』

前回のあらすじ？

翼斗「俺チートほど強くないよね？」

☆★☆★☆★

「黒神めだか。先入観を捨て、周りをもう一度よく見渡してみろ。」

説明が超遅れた。

十三階の特徴は・・・

スパコン。

寒い。

の二つだ（＾Ｏ＾）／

「一面に広がるこの圧巻な光景。これがフラスコ計画だ。

お前はみんなを幸せにすると言ったな。だがお前がフラスコ計画

を潰せば！フラスコ計画に従事し、人生をかけている多くの人々は不幸になるーーーーーそれにお前はフラスコ計画のメリットについて考えたことがあるか？」

「・・・・・」

王士の言葉に、めだかは沈黙する。

「『努力することもなく、悩むこともなく、誰かに相談することもなく、完全に完成された完全な人間に誰でもなれる。』そんなすばらしいことができるフラスコ計画が完成したならばどれだけの幸福が生まれるのか。お前はちゃんと考えたことがあるのか？」

『だがそのフラスコ計画が完成すれば、箱庭学園のみんなが犠牲になるんだろ？』

「犠牲を出したくないのなら、犠牲を出さない方法を考えればいいだろう。黒神、貴様の頭脳をもってな。・・・これが最後の勧誘だ。黒神・・・・いや生徒会。俺達の仲間になれ。」

・・・犠牲を出さずみんな幸せになる。めだかの目指していた目標じゃねぇか。

『どうするんだめだか？・・・・もちろん俺等はお前に従うぜ？』

「・・・・・・」

さぁ、どんな決断を下す？

「厚意から出た提案だと思うが、しかし、根本的なところが間違っていると私は思う。」

「ほう。フラスコ計画のどこが間違っていると言う？」

「『完全な人間』なんて作れっこないんだよ。」

「っ！！」

めだかの言葉に、いたみは歯を食いしばるーーー

「たとえ完全な人間が作れたとしてもーーーー『不完全さ』が欠けてしまう以上、それはもう完全とは言えないだろう？私はそういう人間（マイナス）を、かつて一人だけ知っているーーーーーつまり。完全な人間なんて作れっこない。貴様たちが見てるのは悪夢なんだよ。」

・・・確かに

これだけたくさんの異常を持っているおれでさえ、完全じゃないんだからな。

「っ・・・！黙って聞いてりゃあ一年生がごちゃごちゃうるさいなぁ！！正論吐かないと人を否定することもできないんかよ！ようするに私たちがずっとやってきたことは全て無駄って言いたいんでしょ！？」

「いや、そうとは言っていな・・・・」

「だって結論的に言えばそういうことでしょ！？フラスコ計画の全否定は改造人間である私の全否定だ！！絶対に許せない！！やっぱり動けなくなるまでもう一回叩きのめしてやる！！！」

そう言っていたみが拳を振り上げる。

「・・・しかし古賀よ。お前じゃ黒神を倒すのは無理だよ。」

「何言ってるんですか王土さん！！私は一度こいつに勝っていますしーーー！！王土さんだって戦いが得意なタイプじゃないでしょう！？」

「・・・いや。偉大な俺の異常（アブノーマル）は、もう一つある。」

次の瞬間、王土の手はいたみを貫いていた。

☆★☆★☆★

ー何が起きた？ー

俺の親友、古賀いたみが貫かれたーーー

ー誰に？ー

『十三人（パーティ）』の都城王土にーーーー

ーお前はどうしたい？ー

俺は・・・・俺は都城王土を絶対に許さない！！ーーー

ーもう一度聞く。お前はどうする？ー

殺す。殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺してやる。

そして、俺の心の中が赤く染まった。

第五十六話　『絶望を』

前回のあらすじ？

翼斗「レッド！！」

☆★☆★☆★

『みィやァこォのォじょオオオオオッッッ！！！！！！！！！！』

俺の中で、何かが切れる音がした。

「よく・・・・・・くっ！！」

めだかが俺に近づこうとするが、殺気によって近づくことができず、いたみを背負って退く

『ガァァァァッッ！！！！！』

「っ！」

俺の発する殺気に耐えきれず、王土が顔をしかめる。

『・・・いいだろう！どうしても死にてェらしいなぁ！！じゃぁ見せてヤンよ！！！地獄ってやつをっ！！！！！』

ーーーー新しい異常を構築。・・・・・・・・完了。

『血着（ブラッディ・エンド）』。

奴に絶望を。
奴に痛みを。
終わりなき苦痛を。

☆★☆★☆★

突如、翼斗の銀髪が深い紅に染まった。
だが同時に、眼も光の届かない朱に染まった。

「っ・・・！！なんだこれは・・・！！！」

王土が突然の翼斗の変化に理解できず、そう洩らす。

「翼斗っ・・・！一回落ちつけ！！！」

善吉の必死の問いかけも耳には届かない。

翼斗にあるのは、

『・・・殺す！！！！！！』

純粋な、殺意。

『・・・・・殺す。』

最初に動いたのは翼斗。

『腑罪証明(アリバイブロック)』で王土の後ろに移動し、
『重力加減(グラビティアース)』で重力を１００倍にし、
そして、

『こぉろぉぉぉぉす！！！！！！』

ドゴォ！！！！

拳を振り下ろした。

当然、戦闘向きではない王士はそれを避けれるはずもなく、

「ぐっあああああ！！！！」

直撃した。

「ぐっ・・・・がぁ・・・・・」

咄嗟に腕でかばったのが幸いし、王士はまだ生きていた。

だが、かばった両腕はもう原形をとどめておらず、ぐにゃぐにゃにつぶれていた。

そこへ、右腕を紅に染めた翼斗が近づく。

「ぐっ・・・・・・・・・・・・俺の負けだ。もう二度とこういうことはしない。」

『・・・・・・・・』

翼斗からの返事が無い。

「・・・古賀の命も保障する！そして俺の異常は永遠に封印する！！だから許してくれ！！！！」

『・・・・・・・』

翼斗が右腕を宙に上げるーーーーー

「やめろっ！！早まるな！！！翼斗ぉ！！！！！！！！」

そして、

『殺す。』

拳をーーーーーーーー確かに振り下ろした。

第五十七話　『俺は悪くねぇ』

前回のあらすじ？

翼斗「ヒステリア・サヴァン・・・・・ゲフンゲフン！！」

☆★☆★☆★

ドゴォォォォン！！！！！！！

部屋内に轟音が響き渡る。

『ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・・王土せんぱぁい・・・・・・』

『・・・この借りは高くつきますよ。』

翼斗の拳は、都城のすぐ横の床を破壊していた。

「・・・・・ッ」

王士は腰が抜けて立てないでいた。

『・・・・・・』

スッ

「っ！」

翼斗が何も言わず王士に手を差し伸べる。

『また戦りましょうね。』

「・・・ハッ！俺はごめんだがな。こんな化物と戦うのは。」

そう言って王士は翼斗の手を握ったーーーーーー

「ん、なんだかめんどうだな。阿久根書記スパコン全部壊しちゃえ。」

「え！？」

『いやそれだめだろ。そんなことしたら『もったいないおばけ』でるぞ。』

「ふむ。確かにそれはいかんな。」

「「「信じるの！？」」」

只今俺等の本来の目的。フラスコ計画の凍結作業をしております。

あ、そうだ一つ言い忘れてた。

今、もったないおばけのこと馬鹿にしたやつ・・・・・・・・・戸締りに気をつけろよ？

～凍結作業中～

ボコッ！！！

～凍結作業中～

「・・・・よし。これで全部だ。」

やっと全部終わった。疲れた。
そして頭が痛い。
もがなと金賭けてポーカーやったら善吉に殴られたぞこんちくしょう。

「翼斗は何もやってねぇだろうがぁ！！」

ボコッ！！！

『心を読むな善吉。お前はエスパーかなんかか？』

「全部表情にでてんだよ！」

そんなに表情でてたかな・・・・・よし今度から気をつけよう。

「全部終わったし帰ろう！！」

「それなら1階まで直通のエレベーターがある。それで行こう。」

と王土が言う。

「いや。階段で行こう。」

と何故かめだかが言う。

『あ？なんでだｙ・・・・・ああなるほど。』

「どういうことだめだかちゃん？エレベーターで言った方が早いだろ。」

『馬鹿か善吉。６階で戦ってる負け組！！を見殺しにする気か？』

「ああそうだった。・・・ああそれと、期待してるようだから言うぞ。負け組を強調したことについてはつっこまん。」

くそ。善吉くんならいい突っ込みをしてくれると思ったんだが・・・・

『よろしい、ならば戦ｓ「つっこまねえええぞ！！！！！！」』

☆★☆★☆★

「次だな。地下６階は。」

階段をのぼりながらめだかが言う。

「翼斗。戦いを止めるのは頼んだぞ。」

『ヤー。』

ふと、ここで違和感が残る。

『・・・なにか変だ。』

「なにがだ翼斗？」

『気付かねぇのか？

戦いの音が全く聞こえないだろ。』

そう。戦っているはずなのに音が全く聞こえないのだ。

「もう決着ついたんじゃねぇか？」

『駄目吉め。普通戦い終わったら勝った方が俺等に加勢するために下降りてくるだろうが。』

「なるほど・・・・・・・駄目吉だけは気に入らんけど。」

『嫌な予感がする・・・・・めだか急ごう。』

「無論そのつもりd・・・・・・・ッ！！！！」

俺等の眼前に広がっていたのは、

手足が全て切断され、壁に螺子で固定されている裏の六人＆チーム負け犬だった。

「なっ・・・・・!?どういうことだよ!これ・・・・・・!?」

この状況を見た善吉が最初にそう洩らす。

『相討ちにでもなったってのか・・・・・・・?』

『いいや。相討ちじゃこうならないね。自分で自分の体を固定するなんて不可能に近い。』

「その通り。切断だってできねぇだろ。」

奥に立っている二人組が言った。

『・・・・じゃぁお前らがやったんだな？』

『おっと。勘違いするんじゃないよ。やったのは僕じゃない。』

「そうそう。俺等が来たときからもうこうなってたのさ。」

『「だから」』

「僕は悪くない。」

『俺は悪くねぇ。』

そう言って二人が振り返る。

『久しぶりだねめだかちゃん。僕だよ。』

「翼斗おっひさー・。相変わらず・・・殺したくなる顔だ。」

「く、球磨川っ・・・・・！！！」

『っ・・・・・・新庄紅軌っ！！』

そこには、かつての旧友ーーーーーいや、一緒に『あそこ』へ居た新庄紅軌がいた。

オリキャラ設定（前書き）

主の馬鹿な質問に答えてくれた皆さん、本当にありがとうございました。

オリキャラ設定

名前：新庄紅軌（しんじょうこうき）

服装・特徴：赤髪
身長は翼斗とほぼ同じ。
紅い十字架のネックレスをしている。

過去：翼斗と一緒に『あそこ』へと居た仲間であったが、
ある事件をきっかけに縁を切った。

現在：１００人を超える人を殺した大量殺人犯として、指名手配されている。

異常

『殺人衝動』
宗像と同じ異常。
人を見ると殺したくなる。

『切裂鎌（ジャック）』
紅い鎌をいつでも呼び出すことができる。

個数に制限はない。
だが、これを使うと『殺人衝動』がより激しくなる。

『刹那主義（モーメント）』
他人の『今』を一瞬だけ奪うことができる。
同じ対象物への連続使用はできない。

過負荷

『役立たず（パンデミック）』
紅軌が触った箇所を使用不能にする。触った箇所は紅軌の思いのままに動かせる。
時間がたつごとに箇所が拡大していく。

オリキャラ設定（後書き）

翼斗は紅軌の過負荷のことを知りません。

これを見る限り・・・・・・・・うん、厨二。

なお、異常にかかれている『刹那主義（モーメント）』はジャンプに連載されていた「保健室の死神」からいただきました。

第五十八話　『それよりも問題なのが』

前回のあらすじ？

翼斗「出会いと再開は突然だ。・・・・・と誰かが言っていた。」

☆★☆★☆★

『いいや違う。僕は球磨川禊じゃない。僕は双子の球磨川そｓげぶふぁ！！』

球磨川と呼ばれた奴が全て言い終わる前に、紅軌は頬を殴った。

「馬鹿なこと言ってんじゃねぇぞ球磨川。殺すぞ？あ、あと俺は本物だから安心しろよ翼斗くん～」

『っ！！』

紅軌のふざけた態度に、俺は怒りを浮かべる。

「・・・改めて周りを見渡してみれば、・・・惨劇じゃねぇか。今回は少々派手に殺しすぎたな。」

（今回は、ってことはまだ何人もの人を殺しているのかっ・・・！！！）

「頼むぜ球磨川。」

『ふぅ、いたた・・・・・。人を殴った上にこき使うとね。見損なったよ紅軌くん。』

「いいから早くやれ。マジで殺すぞ？」

『・・・わかったよ。殺されるのは嫌だしね。・・・ほいっと。』

球磨川が手を倒れた奴らにかざしていくーーーーーすると、

『ん・・・これで終わり。』

「「「っ！！！」」」

全ての怪我が、『何事もなかったように』元通りになっていた。
もちろん、無くなった腕や脚とかも元通り。

「・・・それで、何をしに来たんだ球磨川。」

さっきまで口を閉ざしていたためだかが、やっと重い口を開いた。

『ん。大丈夫だよ。君たちに会いに来たわけじゃない。強い敵が宣戦布告をしに主人公たちの所へ行く。そんな少年漫画みたいな展開、あるわけないじゃないか。』

「じゃぁ結局何しに来たんだよ。」

さっきまであった震えがやっとおさまったのか、善吉が球磨川に聞く。

『あ、そうなんだよ善吉ちゃん。僕達は今すごく困っているんだ。助けてよ！』

「僕達じゃない。俺も一緒にするな。」

『いいじゃない。紅軌くんも一緒に迷っていたじゃん。・・・校長室の場所がわからなくて。』

「俺は見取り図を見ようって言ったが？」

どうやらこの二人は校長室の場所がわからなくて悩んでいた、そうらしい。

「それじゃぁ校長室の場所を教えれば帰るんだな？」

『もちろん。男に二言はないよ。』

「待て。お前らは俺の大事な親友達を潰した。これでは普通になった俺も、友の復讐をしないわけにはいかんぞ。」

王土が二人にそう言う。

『うーん復讐ってそれは困るなぁー。それに潰したのは僕じゃないし。・・・だけど君の気持ちも痛いほどわかる。

だからこれでお相子ってことで。』

ズブリッ！！！！

そう言うと球磨川は、持っていた螺子で自身の頭を貫いた。

「っ！！！」

王土の顔が気持ち悪さに歪む。

『やっぱり校長室は自分で探すよ。辛いことは自分で乗り越えてこそ強くなるんだからね。行こう紅軌くん。』

「あ、待ってくれ。一応かつての旧友に挨拶をしておきたいんだよ。」

『ん。』

そう言うと紅軌が俺の所に向かってくる。

『・・・なんだ、お前に言うことなどないんだが。』

「おいおいひどいなぁ。これでも親友だろうが」

『ふざけんな。お前とはもう縁を切った。』

「そうか、それは、

残念だ。」

紅軌は高速で鎌を呼び出し、俺に切りかかった。
俺は『血着（ブラッド・ジ・エンド）』を発動し、右手で止めた。

「ハッ！！それがお前の新しい異常かァ！？紅ァ！俺好みでいい色だァ！！」

『・・・これ以上やんなら容赦しねえぞ。』

「ハッ！！安心しろォ！今日は挨拶だけだっていったろーがァ！！」

紅軌は塞がれた鎌を捨て、俺の右手を掴んだ。

「負けねぇようにしてろ。お前は俺が殺す！」

『そっくりそのまま、そのセリフを返してやんよ。』

「・・・じゃぁな！」

そして二人は、地上を目指し階段を上がって行ったーーーー

☆★☆★☆★

「・・・誰だよあいつらは？」

数分後、重くなった空気のなか夭歌が口を開いた。

「・・・一人は私の顔見知りです。もう一人は翼斗の親友だ、と。」

「黒神。あいつは何者だ？あの傷を一瞬で治しやがった、あんな奴みたことないぜ。もう一人の奴はいきなり鎌を呼び出すしよ。」

「・・・あいつらが何者か、なんてこのさいどうでもいいんですよ。それよりも問題なのが、あいつらがこの学校に何をしに来たのか、っていうことですよ。」

「翼斗。あいつは誰だ？」

めだかが俺にそう聞く。

『・・・かつての俺の親友。一言で言うならば、・・・狂った殺人鬼です。』

「つまり・・・そいつも異常ってこと？」

もがながそう言う。

『そ。確かあいつは異常を俺の知る限りでは３つ持ってます。』

「３つ！？そいつもお前と同じ化物じゃねぇか！」

（化物ーーーそんなもんだといいけどな・・・）

掴まれた俺の右腕は、掴まれた箇所だけ、黒く染まっていた。

第五十九話　『あれ』

前回のあらすじ？

翼斗「まっくろくろすけでておいでー！！」

☆★☆★☆★

『ズズズ・・・・ｚｚｚ・・・・・ｚｏｏ・・・・・ＨＡ！』

昨日は大変なことがたくさんあったというのに、とても気持ちのいい目覚めだった。
俺は起きると同時に右腕を確認する。

『ハァ・・・・・やっぱりか。』

俺の予想通り昨日は手形しか付いていなかった右腕だが、いつの間にか手の先から肘のちょい上まで深い黒に染まっていた。
当然。感覚は無し。動かない。

『紅軌（あいつ）だ。絶対に何かあると思っていたが・・・嫌な予感ってのは当たるもんだな。』

そして俺は学校へ行く準備を始める。
本当はサボりたい所だが、再び嫌な予感がする。いや学校にじゃなくて家に。
なんだが家にいたら後悔する気が・・・そしてなんか身体が震える。

『これが「武者震い」ってやつか・・・・!?』

［すいません翼斗さん。それ違う。］

聞いてはいけない作者の声が聞こえたような気がしたが、俄然無視。

『・・・っよし。学校向かう前にドラッグストアよってかなきゃな。』

手を隠す包帯を買うため、俺は行く前にドラッグストアによることを決めた。

『じゃぁ行くか。』

そして俺は家をあとにした。

☆★☆★☆★

『ふぅ～、ふぅ～、ふぅ～。』

現在地：ｍｙ　ｄｅｓｋ。

俺がこんなにも息切れしている理由。

それは、

『まさか包帯を買うのがあんなにサバイバルだとは・・・』

上述のとおり。

ドラッグストアで包帯を買おうと入った瞬間。気味悪い眼で見てくるのだ。

そう。黒く染まっている俺の右腕を見て。

そしてあの視線。ちょっと昔の記憶（トラウマ）を思い出してしまった。もちろんそれに連なる紅軌（あいつ）の事も・・・

『もう翼斗の精神力は０よ・・・ってか？』

寝たいのはやまやまだ。とても寝たい。体が睡眠を欲してる。

だが、・・・いるだろう？毎回出てくるキス魔やろうが。

そしてなんだかんだ回想してる間に、１時間目が始まった。

さて、６時間目まで持つだろうか。

☆★☆★☆★

『ＤＥＡＴＨ～♪ＤＥＡＴＨ～♪ＤＥＡＴＨ～♪』

無事耐えきった・・・いや上述の通り死んだ俺は生徒会室に向かっていた。

『それにしてもいい天気だ。あったかいし、気持ちいいし、静かだし・・・』

静かだし、と言った瞬間。

シャー、シャー、シャシャシャー

俺の言った言葉を否定するちょっとうるさいローラースケートの音が聞こえた。

距離にしてそんなに遠くない。

（むむっ！俺の危険アンテナがＭＡＸだ！我、戦場ヲ撤退スル！）

ということで、無視して生徒会室に入ることにした。

☆★☆★☆★

ガチャッ

『ウィース。』

生徒会室には、善吉、めだか、もがなの三人が居た。

『あれ阿久根先輩は？』

「なんか用があるから遅れるだとよ。・・・うん？翼斗右腕どうしたんだ？包帯してるが。」

『あ～実はさ～・・・』

紅軌(あいつ)にやられた。
そう言おうとしたが、これを言えばめだか達が心配しだしてめんどうくさいことになるんじゃないか？
と思う。

ということで、

『ホラ、都城先輩横の床破壊したやん。その時拳&腕の骨折った。』

嘘をつきます。
さて、信じるか・・・

「ハァ？お前戦い終わってからそんなそぶりちょっとも見せてなかったじゃん。」

ホレきた。
ここで返答を間違えては作戦失敗。

だが、そこでみすらないのがオレ。
ここで使うのが・・・・・異常！！・・・・の件を上手く使う。

『あの時俺『血着（ブラッド・ジ・エンド）』って異常使ったんだよ。あれって強いけどその分の疲労や傷が全部後に倍になってくるんだわ。』

「ああなるほど。」

せ　い　こ　う　し　た　！　！

俺は心の中で善吉にドヤ顔をする。

俺の勝ちだ善吉！！

「・・・なんだろう。なんだがめっちゃイライラする・・・・・・」

☆★☆★☆★

『んで、今日は何やんの？』

「ん。それを私も言いたいところだが、何分まだ阿久根書記が来ておらん。来るまでｍ「ガチャッ」ああちょうど来たか。」

超ベストなタイミングで阿久根先輩が来る。

「すいません！ちょっとそこで人吉くんの妹と会ってしまってですね！」

そこには、子供がいた。

いやマジだって！！ボケじゃなくて！！

そしてその少女を見た瞬間、善吉の顔が歪む。焦るような顔に。

「いや人吉くんもなかなかかわいい妹を持っているじゃないか。瞳ちゃんって言うんだって？」

「・・・名前は会っていますが阿久根先輩・・・・・・・・俺に妹はいません。」

それにしても・・・どこかで聞いたことがある名前だ。

「あれは俺の・・・・・・・・・・・・お母さんです。」

「「「・・・・・・・」」」

生徒会室にきまずい雰囲気が流れる。

そして、

「「「お母さんっ!!!!??????」」」

「お母さん!!」

その人吉くんのお母さんがニッコリ笑って言った。

「お久しぶりです。瞳先生。」

「やだなぁめだかちゃん。先生はもうやめてって言ってるでしょう？」

このやりとりを聞いて、俺の中の話は一つの正解に導きついた。

これは『あの』瞳先生だ。

よく母と話をしていたあの。

俺の存在がバレるとめんどうなことになりそうだ！！

『めだか。なにやら話があるようなのでな。俺はいたみのお見舞いに向かってもいいか？』

「ウーン・・・仕方ない。お見舞いは大事だしな。行ってきていいぞ。」

『わかった。じゃぁな。』

ガチャッ

そして俺は生徒会室を出た。

☆★☆★☆★

～人吉瞳ｓｉｄｅ～

「めだかちゃん。今の人は誰？」

私はめだかちゃんにそう問う。

「もしかしたら。」という考えを浮かべながら。

「ああ。あれは副会長の榛原翼斗です。・・・・どうしたのですか？」

名前を聞いて、私の考えは確信へと変わった。

やっぱり、『あれ』は『あの』翼斗くんだ。

～人吉瞳ｓｉｄｅｏｕｔ～

☆★☆★☆★

第六十話　『今日は客が』

前回のあらすじ？

翼斗「『妹＝母』の方程式が完成した。」

☆★☆★☆★

『・・・ふぅ。』

なんでこんなところで再会しちまうかな・・・

バレたか・・・？

そう思い俺は『目撃者（ウィットネス）』を使い生徒会室を見てみた。

『・・・・・・』

話を聞く限りめだか達にはバレてない。
だが、瞳先生の方は・・・・・・・OUT。
動きがそわそわしてるからな。
話さないでくれるといいけど・・・

『まぁそんなことしったこっちゃねぇ。とにかく今はバレてない。
後は野となれ山となれだ。』

ということで俺は考えることをシャットダウンし、いたみがいる軍(ゴー)
艦塔(ストバベル)に向かった。

☆★☆★☆★

ガチャッ

『ういーす。生きてるか～』

「誰に言ってるかは問わないけど大丈夫だよ！」

「当然さ。僕とくじらちゃんが治療したんだからね。」

『さすがです真黒さん。変態と呼ばれるだけのことはある。』

「いやそれほどでも。」

褒めてねえよ！？
普通変態って呼ばれたら落ち込むだろう！
・・・あ、そうだった。この人自分で変態って言ってるんだった。

「お見舞いにきてくれたの？」

『ああ。ほれ。おみやげの包帯だ。』

「もうちょっとましなものを買ってこようよ！？」

買う暇なかったし。

「そんなことより翼斗くん。腕、どうしたの？」

『いやはや。異常の使いすぎみたいだぜ。たはは・・・』

俺は力なく苦笑した。
いたみもそんな姿を見て笑っていた。
だが・・・真黒さんは険しい顔をしていた。
おそらく、バレた。

（忘れてたな・・・真黒さんの異常は『解析』だったな。）

そして真黒さんは俺に近づいてき、俺に耳打ちで話した。

「その腕、昨日の人の異常を感じるね・・・無理はしないように。」

『わーってますよ。おそらく今日は戦うことはないでしょうから、
安静ｎ「ガチャッ」』

俺の言葉を遮るように、扉が開いた。
そこには両手に包丁を持っている女の子が立っていた。

「始めましてぇ。一年一十三組の江迎怒江といいます。単刀直入に
言いますとぉ、問答無用でこの軍艦塔（ゴーストバベル）を明け渡してもらいたいんで
すよぉー。」

『・・・今日は客が多いな。』

儚くも、俺の予想は言ったそばから砕け散ることになった。

☆★☆★☆★

「瞳先生。翼斗の名前を聞いて考えるようなそぶりを見せましたが、翼斗を知っているのですか？」

めだかが、先ほどまでなにやら考え事をしていた瞳に聞いた。

「・・・ええ。知っているわ。少なくとも彼の過去はね。」

瞳のその言葉を聞くと、めだかの眼の色が少々変わった。

「教えていただけませんか？」

めだかの言葉に、瞳は首を横に振った。

「無理ね。まず彼の許可がないし。それに、・・・酷過ぎるから。」

「・・・・っ」

めだか達もこれ以上は言わず、生徒会室に静寂が訪れた。

第六十一話　『しっかりと考えて』

前回のあらすじ？

翼斗「俺の願望ってことごとく壊されるよな・・・・」

☆★☆★☆★

「マイナス・・・・」

ベッドにいるいたみがつぶやくようにそう言う。

「なんで此処が必要なのかな？」

真黒さんが江迎にそう聞く。

「ホームルームに使うだけですよぉ。安心してください。抵抗しなければ痛いことはしませんからぁー。」

「・・・そういえば自己紹介がまだだったね。僕の名前は黒神真黒。

軍艦塔管理人（ゴーストバベル）にしてフラスコ計画の元統括だ。フラスコ計画のころは「理詰めの魔法使い［チェックメイトマジシャン］」と呼ばれた男さ！！」

（（（な、名前ださいー！！！！））））

俺と名瀬といたみの心がシンクロしたのは秘密。

そんな真黒さんを見て江迎は軽く笑い、

「理詰めの魔法使いですかぁ。いいでしょう、「虹色の薔薇［レインボーローズ］」」ことこの江迎怒江に勝てますかねぇ？」

（こいつら・・・・デキル！！！（色んな意味で））

「これはこれは。問答無用と言っていたのに丁寧な自己紹介をありがとう。さぁ！君たちも高らかに名乗ろう！！」

「嫌だ！この状況では絶対に名乗りたくない！！」

「・・・・・・」

『俺は名乗ろうにも異名みたいなのねぇよ！！』

「なんだい翼斗くん。じゃぁ僕が作ってあげようかい？「混沌の騎士」みたいな。」

『ちゅうにぃーーーーー！！！！！！！！』

だんだん呆れてきた・・・

『はぁー。ともかくあいつをなんとかしないと・・・』

と言い俺は周りを見渡す。

故障中。
魔法使い。
改造。（する人）

・・・・・・・

俺は息を思いっきり吸う。
そして、

『ロクなやついねぇ～～～～～！！！！！！！！！』

と叫んだ。

「なんだい翼斗くん。僕をなめちゃぁいけないよ。僕はこれでもかつては理詰『それはもう聞いた！！！！』」

どうやら腹をくくるしかなさそうだ。

『しゃぁない。俺がいきます。戦える人俺しかいないでしょう？』

「でも君は・・・『大丈夫です。負けませんよ。』」

真黒さんが全て言う前に俺の言葉が遮った。

『さあて、待たせてすまなかったねぇ。』

「別にきにしていませんよぉ。」

『それはどうもありがと・・・・・お！！！！！』

俺はまずいつかの時に雲仙先輩から拝借しておいたスーパーボールを投げた。

「っ！！」

江迎がそれをキャッチすると同時に近づく。

『さぁてまずはぁー！！小手調べぇ！！』

そして俺は2倍にした拳を江迎に叩きこんだ。

（相手はスーパーボールを掴んでいる。つまり受け止められない。これは・・・・はいった！）

だが俺の拳は、江迎の手によって受け止められていた。

『なにぃ！？』

最初は理由が全くわからなかったが、すぐにその理由はわかった。

『っ！！！』

俺の手が、掴まれた場所から腐っていったのだ。
俺は咄嗟に手を引き、離れる。

「ああおしかったですぅー。もう少しで全部腐らせることができたのにぃー。」

ああ忘れてた。

こいつ過負荷（マイナス）・・・

「状況が分かってない方がいるので説明しますぅー。・・・・この手で触った物を腐敗させる。それが私の過負荷（マイナス）、『荒廃した腐花［ラフラフレシア］』ですぅー。」

『・・・ほぉー。なかなか便利な能力だなそりゃぁ。』

でもあまり戦闘向きではないと思うんだが・・・・そう思うのは俺だけか？

『・・・だがそれが能力だとわかれば、戦い方はある。』

そう言って俺は江迎の方に近づいていく。

「っ！！貴方馬鹿ですかぁー！」

江迎は俺の行動に驚愕しながらもさっきと同じく俺の左腕を掴んだ。

ズズズッ・・・・

どんどん腐敗が進行していく。

「・・・貴方本当に馬鹿ですかぁ？なんで何もしな『大丈夫か？』？」

『いやいや。お前の腕腐ってるから大丈夫かなと思ってさ。』

「なっ、なにを・・・・・」

俺の腐敗が治っていることに気付いた江迎はおそるおそる自分の腕を見る。

「っ！！なんでっ！！！」

『排出（ドローブ）』によって返された傷によって、江迎の腕は腐敗していた。

『はいご愁傷さまぁー。』

その瞬間に俺は江迎の下の床を４倍で砕く。

ドゴォォ！！！！

「っーーーーー！！」

『さいなら。今度は作戦をもうちょっとしっかりと考えてこい。』

そして江迎は俺の開けた穴に落ちて行った。

☆★☆★☆★

「・・・これはどういう状況ですか。」

あれから数分後に軍艦塔（ゴーストバベル）に来ためだかは言った。

『まぁ当の俺等が聞きたいんだけどな。』

「・・・・まぁ大方翼斗がやり過ぎたのだろう。」

『・・・9割あってる。』

・・・ちくせう。
なんでわかるんだこいつは。

『それはそうとマザコンの善吉くんは？』

「ああ善吉ならそのマザーとデス・レース中だ。」

デス・レースて。

『・・・なんか大変なんだなあいつも。』

ちょっとだけ善吉に同情した俺であった。

第六十一話　『しっかりと考えて』（後書き）

ちなみに、

『排出（ドローブ）』で翼斗の黒い腕（紅軌の『役立たず（パンデミック）』）が江迎に移っていない理由は、

移せるのは『傷』や『怪我』だけであって、『異常』や『過負荷』は移せないからです。

第六十二話　『彼は立派に』

前回のあらすじ？

翼斗「なんと便利なことでしょう～♪あんなに痛々しかった傷が～♪あっという間に相手に移りました～♪」

（ビ〇ォーアフター的な）

☆★☆★☆★

「「「『襲われた！？』」」」

「おう。」

「うん。相手の過負荷（マイナス）にね。」

突然帰ってきた善吉&善吉母はそう言った。

『どんなやつ？』

「う～ん・・・能力はたしか・・・物を腐らせる能力だったかな。」

『江迎怒江じゃねぇか。』

速攻で俺は突っ込んだ。

「その襲撃者の事を翼斗は知っているのか？」

「いや襲撃してないけどね。」

軽く善吉が突っ込んだ。

『いや俺の所は襲撃された。「新しい教室よこせやー！」みたいな感じで。』

「うそつけ。」

失礼な。

言葉は違うけど意味は同じだぞ。

「それで、どうしたんだ翼斗？」

『ん。普通に追い払った。』

〈・・・・・・・・・〉

生徒会室にきまずい雰囲気が流れる。

あれ？俺なんか変なこと言った？

「・・・ハァ。俺あんな苦労して追い払ったのにお前は簡単そうにいうんだな・・・」

ああ、なるほどね。

『いやちょっとは苦戦したぞ？』

「嘘つけ！お前何処にも傷ねえじゃないか！！」

うん。『排出（ドロープ）』で返したからね。

「うんまあそれはいいや・・・とにかくめだかちゃん。江迎のおか

げで相手の目的がわかったんだ。」

「なんだと！？相手の目的はなんだ！？」

善吉は息を軽く吸い込み、そしてこう言った。

「エリート全員の抹殺。」

☆★☆★☆★

善吉が相手の目的を言った後、俺等は名瀬を呼んで作戦会議をしていた。
そしてその話し合いも進んできた頃、さっきからずっと無言だっためだかが突然こう言った。

「日之影三年生を、呼ぼう。」

日之影って・・・・・

〜回想タイム〜

拳拳破ァ！！！！！！

〜回想終了〜

（ああ。あの日之影ね。）

「ああその手があったか。ていうかめだかちゃん。よく思いだしたな。」

「うむ。『空気でも腐らせる』の件で思いだしたよ。だけどあの人なら決して腐らないと思うがな。」

「「「「「・・・・・？」」」」」

一方。名瀬先輩、喜界島、阿久根先輩、善吉母、真黒さんは？マークを浮かべている。

「わからない人が数人いるようですが、実はお母さん以外は全員知っているんだぜ。なにせあの人は、箱庭学園の生徒会長だったのだから。」

「「「「！！」」」」

善吉母以外の４人がびっくりしてる。

まぁそうだわな。

たしか・・・『知られざる英雄［ミスターアンノウン］』だっけ？

それが働いているんだもんな。

「第９７代生徒会長　日之影空洞。一人で誰にも気づかれず、誰にも認識されず、彼は立派に１年間平和を守り切りました。」

思ったんだけど日之影先輩ってかわいそうだよね。
だって誰にも気づかれないんだぜ。おそらく一人・・・・
うん。俺だったら鬱になってるね。

「ということで忘れないうちに行きましょう。くじ姉、翼斗。一緒に行こう。」

「『なんで俺がいかなきゃなんねーんだよ』」

ハモった。

「その理由は後で話します。さあ行きましょう！」

「『・・・・』」

俺と名瀬は嫌な表情を浮かべながらも、めだかの後につき、日之影先輩の元へ向かった。

第六十三話　『大声で』（前書き）

更新してなかったこの期間で・・・・宿題の恐ろしさを知りました・・・・

第六十三話　『大声で』

前回のあらすじ？

翼斗「影が薄い・・・・黒子のバスうわっ！なにするやめっ！！」

☆★☆★☆★

「・・・おいおいそろそろ言ってもらおうじゃねーか黒神。なんで俺が必要なんだよ？」

教室を出て少し歩いた後、不機嫌そうに名瀬はめだかに言った。

「言葉の通りです。日之影三年生を見つける為には、お姉さまの協力が不可欠なのです。」

『おい今「お姉さまの」って言ったよな！？じゃあ俺が来た意味は！？』

これで意味はない。って言ったら殴ろうかな・・・

「翼斗は単純に面識があるようなのでな。だから連れてきた。」

面識つったって・・・・・

俺→逃げた

日之影先輩→追いかけた

・・・こう言ったら絶対鬼ごっこしてたと思われるんだけど・・・・

「で、翼斗はいつ日之影三年生に会ったのだ？」

『・・・・・拳拳破（ボソッ）』

「？聞こえなかった。翼斗もう一回言ってくれ。」

『拳拳破っ！！！』

「「・・・・・？」」

めだかと名瀬は頭に？マークを浮かべている。

あ、やばっ。
面倒くさくなる確率１００％だこれ。

何故だ！！
俺の説明のどこに意味がわからなくなる要素があったんだ！？（全部です）

～しばらくお待ちください～（翼斗説明中）

「・・・なるほどな。」

１分間における死闘の末？やっと名瀬とめだかが理解してくれた。

「とりあえずわかったことはあれだな。」

「「お前馬鹿だろ。」」

『声をそろえて言うんじゃねえよ！！』

くそぅ傷ついた・・・・
俺のハートはガラスのハートなんだぞ・・・

「翼斗。貴様のハートはせいぜいプラスチックくらいだろう。」

『心を読むんじゃねえよ！！それに酷いなお前！！』

「そうだぞ黒神。」

おっナイス名瀬先輩！！！

「プラスチックじゃなくてダンボールだろうが。」

『誰か弁護士！！！弁護士をよんでぇ！！！』

なんだろ・・・この気持ち。

俺、今無性に拳銃が欲しい・・・・

☆★☆★☆★

そうこうと話している間に、目的の教室前についた。

「ここが日之影三年生が居る教室だ。・・・よし行こう。」

めだかが教室も扉をあける。そこにはーーーー

誰もいなかった。

「ふん。なんだよいねーじゃねーか。今日は休みなんじゃねーか？」

『なんにせよいないなら俺等にできることはないな。さぁもどろうめだ・・・・』

横を見るとめだかが全身の神経を集中させてある一点を凝視していた。

「違いますお姉さま、翼斗。いないんじゃなく、見えない。私たちが認識できないのです。・・・あそこ。」

そう言ってめだかはある席を指さす。

「あそこの席に日之影三年生がいます。だから翼斗とお姉さまもあそこの席をずっと見ていてください。」

言い終わるとめだかは再び集中して凝視した。

「・・・ふーん。あそこの席、ねぇ？」

名瀬もそこの席を凝視する。

そして俺もーーーー

『・・・スーッ』

息を思いっきり吸いこむーーー？

そして、

『うわあああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！』

キーン！！！！

「「っ！！」」

大声で、叫んだ。

☆★☆★☆★

『フィー、フィー、疲れた・・・・』

俺が肩で息をしていると、ずんずんずんとめだかと名瀬が無表情で向かってくる。

『おうどうだ俺の完璧な作戦は！？俺頭いいだろ？さすがお頭が割れるようにいたいいいいい！！！！！』

俺の言葉が言い終わる前に、めだかは俺にヘッドロックをしかけてきた。

「どういうつもりだ翼斗っ！！鼓膜が破れるかと思ったわ・・！！」

「痛い痛い痛い！！！あのっ！！大声を出せば相手が異常をといてくれると思っぎゃあああああ！！！！！」

めだかがヘッドロックの力を強くする。

「それができれば苦労しないだろうが！！！それにやる前はちゃんと私たちに言え！！！」

ゴキゴキッ！

そしてとどめの一撃。

『あんぎゃあああああああ！！！！！！！！！』

「でも効いたようだぜ？」

「は？何を言っているのですかお姉さまーーー」

名瀬の指さす先には、耳を手で押さえている日之影（えいゆう）が居た。

第六十四話　『なにか勘違い』

前回のあらすじ？

翼斗「みんなも叫ぶ時は周りに迷惑をかけないようにしよう！」

☆★☆★☆★

『ホォレ見ろ！俺の作戦成功じゃねぇか！ホラあやまれ！土下座しr俺の関節がぁぁぁぁぁ！！！！！』

ものすごい勢いで俺の関節が曲げられていくぅぅぅぅぅ！！！！！

「調子に乗るな！作戦なんてすごいものじゃないだろうが！」

『ギブギブギブギブギブゥゥゥゥゥ！！！！！』

「・・・ふぅー。全く無茶しやがるぜ榛原翼斗。」

さっきまで口を閉ざしていた日之影先輩が口を開いた。

「ご迷惑をおかけしました。」

「いやいいんだよ。俺の異常を解くために大声を出す・・・・ねぇ。なかなか面白い作戦じゃねーか。」

『「面白い作戦」だけであって「いい作戦」じゃないのが残念だがな。』

「ああ。もし俺の異常が入切(オンオフ)が可能なら、最高な作戦だろうぜ。」

『お褒めにいただきありがとうございます・・・』

さて、何事もなさそうに話しているように見えるが、一つ言っておこう。

俺はまだ関節技をかけられてるからな。

慣れてきている自分が怖い。

「んで、何の用なんだ黒神。」

「・・・そうでした。実はあなたに、『知られざる英雄［ミスター

アンノウン」』と呼ばれなかった日之影空洞三年生に折り入ってお願いがあります。」

そう言ってめだかは、過負荷（マイナス）の事についての説明を始めた。

「ふぅんなるほど。つまりその過負荷（マイナス）っていう奴等に勝つために、俺の力が必要ってわけだな。」

「そうです。」

「断る。」

即座に、迅速に、日之影先輩はそう言った。

「黒神。お前なにか勘違いしてねえか？確かに俺は先代の生徒会長だ。だがそれだけなんだよ。先代と現代の生徒会長。それだけが俺と黒神の繋がりなんだよ。つまり俺が黒神を助ける理由は明確にない。」

「・・・・・」

日之影先輩のその言葉に、めだかは黙っている。

「過負荷（マイナス）なんて奴と戦うなんてとんでもない。時間の無駄だ。こんなことをするのなら進学に向けて勉強するさ。・・・じゃぁそういうことで、な。」

すると、日之影先輩は薄くなっていき、しだいに見えなくなった。

『ハァ。失敗だったな。』

「・・・失敗と言えば失敗だが・・・・」

「？どういうことだよ黒神？」

名瀬がめだかに聞く。

「言うならば、中途半端な成功だ。」

『・・・・？』

「あの人は一人で戦ってきた。そしてこれからも・・・・」

「・・・・まさかっ！？」

・・・

「そう。日之影先輩は一人で倒しに行ったのだ。」

☆★☆★☆★

『はーいそれでは。第一回過負荷会議を始めるよー。』

球磨川達は、人が誰もいない２－１３組で会議をしていた。

「会議なんて必要あんのか？そんな暇あんなら一人でも多く異常な奴らを殺した方がいいんじゃねぇか？」

『いやいや紅軌くん。話し合うことは大事だよ。作戦はきちんと立てないとね。』

２－１３組には、球磨川と紅軌しか居ず、代わりに携帯電話が二台あった。
携帯電話にはそれぞれ、不知火ちゃん、怒江ちゃんと書かれていた。

≪すいません球磨川さん。私があの襲撃を成功させていれば・・・≫

『気にすることはないよ、怒江ちゃん。場所なんてどうでもいいじゃないか。』

「気にすんな江迎。失敗は誰にだってある。次行くときは・・・・・俺も一緒に。」

江迎の言葉を、二人がカバーする。

『それで不知火ちゃん。今十三組の人は何人来ているんだい？』

≪今来ているのは、生徒会長と『知られざる英雄［ミスターアンノウン］』と呼ばれている日之影さんだけですよー♪≫

『日之影・・・・ねぇ・・・・』

≪でも安心してください球磨川さん。あの二人が手を組む可能性は皆無ですから≫

「？どういうことだ不知火ーーーー」

バギャアン！！！

轟音がなる。

紅軌は音が鳴った方向を振り向く。

そこには日之影（えいゆう）に抑えつけられている球磨川（マイナス）がいた。

『うーん。えーと・・・誰？』

「・・・・・元英雄」

第六十五話　『無理だと』

前回のあらすじ？

翼斗「ミッション・失敗・・・・・」

☆★☆★☆★

≪アヒャヒャ！だから言ったでしょー♪二人が手を組む可能性は皆無だってさー♪だってその人一人で軍隊と戦えるんですから♪≫

状況がわかったのか、不知火は笑いながら言う。

「なるほど。こいつが日之影って奴か・・・強そうだな。」

ぐぐぐ・・・

続いて日之影は、球磨川の頭を持ち身体を浮かせる。

「今から俺が１００発殴るからよー、１００発分歯を食いしばってくれや。せーの、拳破、拳破、拳拳破ァァァァ！！！！！」

そして日之影は掴んでいた手を離し、

ズガガガガ！！！！

本当に１００発殴ったのかはわからないが、日之影が眼にもとまらぬ速さで球磨川の腹を殴りつける。

ドゴォン！！

そしてその衝撃に耐えられなくなったのか、教室の黒板が壊れ、球磨川が隣の教室へ吹っ飛ぶ。

「ふん。あいかわらず黒板は脆いな。健全な高校生がわずか数発殴っただけで壊れちまうんだからな。・・・もちろん、お前はこの黒板のように脆くはないんだろ？球磨川。」

殴られた球磨川は、気絶しているのかピクリとも動かない。

・・

「このまま傍観すんのも悪くねぇと思ったが・・・さすがに惨いな。しゃあない。一応友達と言うことになってるらしいから、助けてや

っか。」

そう言って紅軌は、倒れている球磨川に向かって歩を進める日之影の前に移動した。

「ああ、貴様の事も効いたぞ。新庄紅軌・・・だったな。俺の邪魔をするのなら容赦なく攻撃するぞ。」

「ハッ。どうせ翼斗がしゃべったんだろ。容赦なく攻撃？やれるもんならやってみな。」

ダッ！

二人が同時に地を蹴る音を始まりに、殺人鬼（こうき）と英雄（ひのかげ）の戦いが始まった。

☆★☆★☆★

『なあ、日之影先輩を追わなくていいのか？一人じゃ危ないだろ。』

日之影先輩が居なくなってから数分後、俺はめだかに聞いた。

「私たちがいっても邪魔になるだけだ。」

「そこまで強いのかあの日之影先輩は・・・・・」

「ええ、強いです。おそらく私の知っている人のなかでは最強だと思います。」

最強、ねえ・・・

でもおそらく・・・

『めだか、お前はどう思う？日之影先輩は球磨川達に勝てると思うか？』

めだかは少し考える素振りを見せた後、躊躇いながらこう言った。

「日之影三年生には悪いが、無理だと思う。」

☆★☆★☆★

「ふんっ！」

日之影が思い拳を連続で紅軌にくりだす。

「よっ、ほっ、」

だがそれを紅軌はいとも簡単に避け続けた。

（榛原の言った通り、こいつは強いな・・・それに戦い慣れしてやがる。それもかなりの・・・・）

「ふぅー。なんと強く思い拳だ。当たったらひとたまりもねぇ・・・まぁ当たらなければいい話だがな。・・・さて、次は俺の番だな。」

そう言うと紅軌は、『切裂鎌（ジャック）』を使い、紅い鎌を手元に呼び出した。

（あれが言っていた鎌ねぇ。あれに当たるとやばいと聞いたが。だが・・・受け止めちまえば！！）

日之影は、紅軌が振りかざした鎌を、受け止めようと手を伸ばす。

だが・・・・

日之影は肝心なところを忘れていた。

『切裂鎌（ジャック）』は個数に制限がないということを。

紅軌は受け止められた鎌を捨て、新しい鎌を手元に呼び出す。

（！！くそっ！忘れていた！！あれは個数が無制限・・！！）

そして紅軌は高速で、持っている紅い鎌を振り下ろした。

第六十六話　『マイナス十三組の』（前書き）

台風＆ａｍｐ；前線のせいで外に出れないＺＥ☆

第六十六話　『マイナス十三組の』

前回のあらすじ？

翼斗「ザクッ！・・・いやちがうな・・・スパッ！」

☆★☆★☆★

（これが喰らったら終わりだ！後の事はいい、とにかくこいつを避けなければ・・・）

ダッ！

日之影は自分が出せる最高のスピードを出してバックステップをした。

その結果、なんとか直撃と言う最悪の結果だけは避けることができた。

「おーそれをよけんのかよ。これは俺も結構傷ついたぜ。俺が人を殺し損ねるなんてな。・・・まぁ、今から殺すから意味ないがな。」

「・・・・っ！」

今の日之影の状況を表すならば、絶体絶命。

自分は普段出さないスピードを出して足の筋肉が悲鳴を上げている。

だが相手は無傷。しかも武器がほぼ無限にあるというハンデ付き。

誰がどう見ても日之影の勝率は最初と比べて著しく下がっていたのだった。

だがそんな日之影をあざ笑うかの様に、もう一つ不幸な出来事が起きる。

『・・・・・・』

「っ！！」

そう、球磨川禊が眼を覚ましたのだ。

『・・・紅軌くん。とりあえず日之影くんは僕に任せてくれないかな。』

「はぁ～？何言ってんだよ。折角面白くなってきた所なのによ。殴られて起こったのはわかるが・・・」

そして、現在の球磨川の表情が日之影を戦慄させた。

ポロポロ・・・

そう、泣いているのだ。

「何泣いてんだお前。」

『・・・僕はずっと一人で自分の道を進んできた。例えその道が間違っているとしても誰も注意してくれなかった・・・・だから、』

そして球磨川は顔を上げ、こう言った。

『僕はずっと僕の間違いを本気で正してくれる人を待っていたんだ！！僕はやっとその人に会うことができた！！』

その球磨川の言葉に、紅軌は？マークを浮かべ、日之影はほとんどパニック状態になっていた。

（何なんだこいつ！人に殴られて泣いて笑ってやがる！！こんな気持ち悪い奴とは聞いてねえぞ！！）

『・・・でも実を言うとちょっとイラついたかな。なにせ出会い頭一発目に拳を叩き込まれたんだから。あ！でも安心してよ！君に直接危害を加えることはない！

このうっぷんはどっかの道端を歩いている僕とは全く関係ない赤の他人で晴らすからさ！』

球磨川は、涙を浮かべた満面の笑顔でそう言った。

（っ！気持ち悪ぃ・・・・！！ん！落ちつけ日之影空洞！！あいつの過負荷（マイナス）に呑まれるな・・・！）

日之影は深呼吸を一回し、冷静を取り戻す。

「無理だな。俺の異常（アブノーマル）は『知られざる英雄［ミスターアンノウン］』。誰も俺を直視できず、誰も俺を認識できない。だから俺が居なくなって数秒もすれば俺に関する記憶はすっかり忘れるだろう。」

『うんそうだね。正直に言えばもう忘れかけてるくらいだよ。「なかったこと」に関すれば僕の過負荷(マイナス)と君の異常(アブノーマル)は似た物同士だよ。』

そして球磨川は自分の体によってボロボロになった黒板に近づき、手を触れた。

『だけど僕の『大嘘付き［オールフィクション］』は、君と違って取り返しがつかない。「なかったこと」にしてしまえばそれを取り消すことができない。・・・だからこそ気をぬけないんだよ。』

「壊れた黒板」の傷を「なかったこと」にした球磨川は、両手に螺子を構えて言った。

・・・・・・・・・・

『だって油断してると『この世界そのものを』、無かったことにしてしまいそうだからね。』

「くっ！！」

球磨川がそう言った直後、日之影はこの世の全てが捻じ曲がるような感覚に襲われた。

（くそっ！何だこの全てが捻じ曲がってしまいそうな感覚・・・！

！と、とにかくこいつから離れねえと・・・！）

ダッ！

球磨川の発する奇妙な感覚に耐えられなくなった日之影が後ろに下がったとほぼ同時に、

ドゴッ！！

球磨川が突如現れた2人＋紅軌に抑えられていた。

「何しようとしてるんですか球磨川さん。あなた世界自体を「なかったこと」にするつもりですか。」

球磨川の右腕を折りながら言ったのは、二年マイナス十三組の蝶ヶ崎蛾々丸。過負荷（マイナス）は、

『不慮の事故［エンカウンター］』。

「おいおい大将。戦闘は全部あたしに譲ってくれる約束だろうが。あんまり舐めてっと・・・ブチ殺すゾ？」

球磨川の左腕を折っているのは一年マイナス十三組の志布志飛沫。
過負荷（マイナス）は
『致死武器（スカーデット）』。

「変なことすんなよ球磨川。俺に被害があったらどうすんだ。」

そして、頭を押さえつけているのは一年マイナス十三組の新庄紅軌。
過負荷（マイナス）は
『役立たず［パンデミック］』。

その面々が何食わぬ顔で球磨川を抑えつけていた。

「・・・みんな。僕を抑えつけてくれてありがとう！あやうく世界をなかったことにする所だったよ！」

そして抑えつけられていた方の球磨川が礼を言う。

そんな状況は日之影にとって理解不能であった。

「・・・お前らでも友情とかあるんだな。」

『失礼な！僕はこれでも週刊少年ジャンプの愛読者なんだぞ！

ぬるい友情。

無駄な努力。

虚しい勝利。

それが僕たちマイナス十三組のモットーだよ。』

「・・・・・」

球磨川の言葉に、日之影は何も言い返さなかった。いや、言い返せなかった。

『さぁて、四対一になっちゃったけどさ、まだ続ける？』

「・・・・・・・くそっ。」

どうやっても勝てない。

どう計算してもその結果しかないことを知った日之影は、後悔しつつも過負荷(マイナス)達の前を後にした。

第六十七話　『過負荷を造ってしまっては』

前回のあらすじ？

翼斗「無理ゲー。」

☆★☆★☆★

「私たちは日之影三年生の帰りを待つから、翼斗は先に戻っていてくれ。」

そうめだかに言われたので、俺は一足早く善吉達の所に戻ることにした。

『そういえばみんな日之影先輩の事忘れてんだよな・・・』

俺が言いたいのはこうだ。

俺はどうやって入ればいい？

おそらく入った瞬間善吉に「何処行ってた？」的なこと聞かれるだろう。

日之影先輩に会ってきた。

そう答えたらおそらく「はぁ？誰それ。」的な返答。

（真実を言って駄目なら・・・ボケるか？）

自殺してきた。みたいな。

（・・・今回は我ながらまったくおもしろくないな。）

ということで俺はそこで立ち止り、どうやって入り、いかにおもしろくボケるかを考えた。

現在地：教室前。

悩み、すごく悩み、とても長く悩み（３０秒くらい☆）、結局普通な返答にすることにした。

いやマジで。謙遜してるとかじゃなくて普通。「コンビニ行ってた。」くらいの感じだから。

そして俺は深呼吸をし、扉を開けた。

ガチャッ

「おう遅かったじゃねぇか翼斗。どこ行ってたんだ？」

ほれ来た。

『世界を救・・・トイレ行ってた。』

直前で浮かんだ精一杯のボケをしようとしたが、冷めるとまずいので普通のにした。

それにしても俺は何故緊張しているのだろう？馬鹿か？

「そうかい。それじゃぁ急いでマイナス十三組への対策を考えよう。いつ攻め込まれるかわからない。」

善吉の言うこともごもっともなので、俺はまじめに作戦会議に加わることにした。

☆★☆★☆★

めだか達がおそらく日之影先輩を連れて戻ってき、その事をめだかがみんなに話すと、

「日之影空洞？誰それ。」

こうだ。

まぁ当然異常がはたらいているわけだし、忘れるよな。

この状況をみてつくづく思う。

どうして自分は覚えているのだろう？

・・・・・・・・・・・・・・・・

「わかったよ。とにかくその日之影って人に会えばいいんだろ？わかったよ。で、どこにいるんだその先輩は？」

「もう来てる。」

話している善吉の隣へいきなり日之影先輩が現れる。

そして善吉は「思いだした！」的な顔をする。

「・・・・」

日之影先輩はまず真黒さんを見て、

「合格」

次に善吉を見て、

「不合格」

次に瞳先生。

「合格」

阿久根先輩。

「不合格」

喜界島。

「不合格」

いたみ。

「ギリ合格。しかし故障中」

そして最後に俺を見て、

「半分合格。」

そう言った。

いや半分ってなに！？

中途半端なんだけど！？

そして日之影先輩はため息を吐き、頭をポリポリ掻きながら、

「はぁ・・・参ったな。別にそこまで高望みしてたわけじゃあないんだが、こりゃあ予想以上に最悪な有様だぜ。」

突然合格やら不合格やら言われた善吉達はポカーンとしている。

「断言するぜ黒神。このメンバーでマイナス十三組に挑むのは超格安自殺ツアーを組むようなもんだ。」

それを言われためだかも、何も言い返せない。

「ましてやメンバーの中から過負荷（あいつら）と同じ感じがするなんてもってのほかだ。」

そう日之影先輩が言うとみんなは驚いた表情をして俺の方を見る。

『・・・俺を過負荷（あいつら）と一緒にしないでほしいんですが・・・』

「自分では自覚なくても奥からそういう感じがするんだよ。あいつらと同じ、心が壊れ、狂っている感じがな。」

・・・

なかなかどころかすごい鋭いなこの人。特に『心が壊れている』は大正解だ。

『あそこ』では心を壊さないと生きてけねえんだよ。

・・・

そして、その事を知っている瞳先生の表情も曇っている。

「これはなりふりかまっていられねえよなぁ・・・・」

日之影先輩は悩むそぶりを見せながら、躊躇うようにこう言った。

「凶化合宿。おまえらやってみるか？」

その言葉を聞くと、真黒さんが血相を変えていきなり立ち上がった。

「ひっ、日之影くん！それはまだこの子たちには早すぎる！！」

「ではいつやればいい？過負荷（あいつら）に全員心を壊されてしまった後か？」

凶化合宿。

真黒さんの慌てようを見るかぎりそれはとんでもなくやばいものら

しい。

だが、それをやり遂げればおそらく俺等は強くなれるだろう。

「やるもやらないもお前らの自由だ。今すぐにとはいわねえ。今晩ゆっくりとーーー「やります。」！！」

めだかが日之影の言葉を遮って、参加の意思を伝える。

「やります。」

「やります。」

「やります。」

それに続き、善吉、喜界島、阿久根先輩も参加の意思を伝える。

俺はどうしたもんかな・・・

そう考えていると日之影先輩が俺に

「この凶化合宿。榛原は不参加だ。」

俺の意思もきかず、そう言った。

『なんでですか？俺これでも根性ある方なんすけど。』

「これは危険な修行なんだ。心が壊れているお前はもしかしたら辛さに耐えきれず狂っちまうかもしれねえ。過負荷（あいつら）を倒すための修行で過負荷（マイナス）を造ってしまっては元も子もねえからな。だからお前は不参加だ。」

・・・・・・

「さて、今は1秒たりとも時間がおしい。と、いうことで今から早速凶化合宿を始めたいと思う。お前ら。ついて来てくれ。」

そして、俺以外の全員が此処から出ていった。

『・・・そんな心配いらねえのにな。』

なぜなら。

俺は、もう、とっくに、狂っているから。

第六十八話　『プランBに』

前回のあらすじ？

翼斗「俺だけ仲間はずれ・・・」

☆★☆★☆★

『・・・ハァ。』

今日は記念すべき箱庭学園の終業式。

つまり明日から夏休みだぜひゃっほおおおお！！！

・・・と、他の人が思うだろうが、この俺は違った。

なぜか？

そんなもん簡単さ。

出れないんだよ。

布団から。

『・・・どうしたもんか・・・』

それもなにも紅軌(あいつ)が置いてった『何か』のせいだ。

昨日の朝は右腕だけだった。

だが今日は・・・

ほぼ右半身全てが浸食されていた。

当然のように感覚がない。

『全くハタ迷惑なもん置いてきやがるなあいつ。とりあえず今日は学校いけねえだろ。』

ということで俺は這って移動し、電話を手に取ろうとする。

だがそこで、

ピーンポーン♪

突如インターホンの音が鳴る。

（？今６時だと言うのに誰だ？）

その正体はすぐにわかった。

「おーい翼斗くーん。居るかナー♪」

『全く紅軌くんはひどいなぁ。僕はもうちょっと寝ていたかったのに。』

「うるせえ。さっさと行動に移さねえと逃げちまうかもしれねえだろうが。あ、でも俺の過負荷(マイナス)があるから無理か。」

『ホラ言ったじゃないか。』

過負荷(あいつら)かよ・・・

こんな朝っぱらから何の用だ・・・？

「おーい翼斗くーん。起きているならここを開け・・・あ、俺の過負荷(マイナス)効いてるんだった。・・・じゃぁ球磨川。ここ開けて。」

『何でそういうめんどうくさい仕事を僕に頼むかねえ。こっちはまだ悩が覚醒してないというｎ「じゃぁぶっ殺して悩どころか身体覚まさせてやろうか？」はぁ。わかったよ。』

ガチャッ

おそらく球磨川が何かやったのだろう。扉は無情にも簡単に開いた。

「おー効いてる効いてる。どうだい調子は。」

『どうもなにもお前のせいで最悪だよ。』

「ハッ！最悪ってのは最高なことだぜ？」

『へーここが翼斗くんの部屋かぁ。へぇ、テレビが結構大きいんだね。』

何しに来たんだこいつら・・・・

「何しに来たって顔してるな。それじゃぁ俺が此処に来た理由を言おうか。

簡単にいう。お前生徒会やめろ。さもなくば死ね。」

唐突に、そう言った。

『・・・おい。大事なところ抜けてんだよ。ｗｈｙがないとわからねえぞゴラ。』

『飛ばしすぎだよ紅軌くん。翼斗くんの言うとおり、まずどうしてそうしたいのかを言わなきゃ。』

「かーめんどくせぇ～。えーっと確かなぁ・・・俺等の目的は異常(アブノーマル)を全員ぶっ殺すこと。だが一人一人ずつやるととても効率が悪い。なので俺等は生徒会のもっている「生徒総会による強制収集権」を利用することにしたのよ。でもそれをするには現生徒会の違反事項を見つけ解散請求(リコール)をして俺等新生徒会にならなきゃなんない。えーっとここまであってるか球磨川。」

『うん。ばっちりあってるよ。』

「それで、俺等は生徒会の違反事項を作ろうという話になった。ということだ。」

『・・・つまり俺が辞めれば「生徒会副会長の不在」を訴えることができるっていう訳か。』

「そーいうことだ。」

『・・・俺にやってメリットは？』

「ねえよ。」

紅軌の返答を聞き、俺は馬鹿らしくなった。

「いや、しいて言うとしたらそうだな・・・その右半身の過負荷(マイナス)。消してやんよ。

メリットそんだけかよ・・・

ていうか消してくれるっていう保証もねえし・・・・

これは答えは一つだな。

『そんなもんやると思うか？Ｎｏだ。答えはＮｏ。』

その俺の言葉を聞いて、紅軌は嫌そうな顔をする。

「・・・なぁ知ってるか翼斗。その過負荷(マイナス)は『役立たず「パンデミック」』って言ってなあ。その黒くなった箇所は俺が自由に動かせるんだ。」

『・・・・』

「しかもその広がる早さは俺が自由に変更できる。つまり俺が今速度を最速にしてその身体全体を真っ黒にすることもできる。」

『何がいいたい？』

紅軌（こいつ）はさっきから何を言ってる？

「球磨川。」

『うん。じゃぁ

プランBに移行ね。』

☆★☆★☆★

少し時は流れ、今は終業式が始まる直前。

生徒会の面々はステージの上に集まるのだが、そこに翼斗の姿はない。

めだかが壇上へ行き、終業式開始の挨拶をする。

「それでは、これより本年度一学期終業式をーーーーー開始(ふぁいひ)ふる。」

だが、後ろに球磨川が立ち、めだかの頬を引っ張っていた。

「ーーー!!くまがわっ!!」

いつの間にか球磨川がめだかの前に行って、マイクの前に立っていた。

『やっほー。箱庭学園の皆さん初めましてー!僕の名前は球磨川禊!めだかちゃんの元彼でぇーす!!』

球磨川が言い終わると同時に、体育館がざわめく。

『ーーーというのは冗談だよー!あは♪今信じた奴どんだけいるー?』

「気持ち悪くなるような嘘をぬかすな球磨川。」

『気持ち悪いとは酷いなめだかちゃん。僕ちょっとへこんだじゃないか。』

まったく酷いなぁといいながらマイクの前から移動する球磨川。

「それで、何の用だ球磨川。今この場所に上がっていいのは生徒会役員だけだぞ。」

『・・・生徒会役員、ねえ。いやいや。たいした用じゃないんだ、僕にとっては。計画の始まりにすぎないからね。』

そう言うと球磨川は文字がぴっしり書かれた紙をとりだし、めだかに見せる。

「これはーーー署名？」

『そう、署名。めだかちゃんの好きなみんなの意見って奴だよ。

『箱庭学園学校則第４５条第三項に基づき、生徒会長黒神めだか。
君に解散（リコール）請求を請求する。』

第六十九話　『本日をもって』（前書き）

いつの間にかユニークが１０万を突破していました・・・

ということで、番外編的なものをやりたいと思います。

え？まだＩＦが終わってないだろって？

・・・次で終わらせてヤンよ！！

第六十九話　『本日をもって』

前回のあらすじ？

翼斗「拉致フラグ？」

☆★☆★☆★

「でもよぉー、あの翼斗だぜ？正直に従うとは限らねえだろ。ていうか、絶対ない。俺神信じてないけど神に誓ってない。」

時は遡り、これは昨日の過負荷会議の様子。

『それもそうだよね。メリットが過負荷（マイナス）の解除だけじゃあ、翼斗くんも絶対に乗らないだろうね。・・・どうする？不知火ちゃん。』

≪・・・そのためには一つ確認でぇーす♪紅軌の『役立たず「パンデミック」』ってさぁー、身体全体までいきわたったらどうなんのー♪≫

「ん？一回だけやったことあんだが、忠実に俺の命令に従う只の人（おもちゃ）

形になったぜ。」

≪なーるほど♪≫

『へえ。紅軌くんの過負荷（マイナス）ってすごく便利なんだね。僕の『大嘘付き（オールフィクション）』と交換してもらいたいくらいだよ。』

ちなみに、此処には飛沫と蛾ヶ丸の姿はない。

「でもデメリットがあってよ・・・それやると操れんの一時間が限度なんだよ。」

≪へえー♪でも、この作戦ならそれは大した障害になりません♪≫

『もう思いついたのかい不知火ちゃん。』

≪はい。でもそんなにかっこいい事じゃないですよ♪ただ単に、翼斗を操って、副会長の退任届を提出するだけですから♪≫

「なんだ、そんだけかよ。もっとなんかないのかよ。あまり打撃がないが嫌がらせになる奴。」

≪それなら簡単に解決できますけど最高な嫌がらせがありますよ♪≫

『楽しそうな声で言うような事じゃないね。』

「うるせえ黙ってろ球磨川。・・・で、どんな内容なんだ？」

≪しばしの足止めにしかなりませんけど・・・

『退任』じゃなく、『退学』にすればいいんですよ♪≫

☆★☆★☆★

「解任（リコール）請求を請求するには、なんらかの不備が必要なはずだ。球磨川、お前は今の生徒会に何か不満があるのか？」

冷静にめだかはそう球磨川に問う。

『まぁ焦るなよめだかちゃん。もう少しで理由がわかるからーーー』

「どういうことだ球磨川ーーー」

そこまで言ったためだかは、そこで言葉を止める。

突如として此処に上がってくる理事長、不知火袴の姿が見えたからだ。

「っ！何の御用ですか理事長ーーー」

聞いているめだかの言葉に眼もくれず、袴はマイク前に移動する。

≪えー、終業式の最中だが、みんなに残念なお知らせがある≫

袴のその言葉に、全校生徒はざわめく。

≪箱庭学園生徒会副会長だった榛原翼斗くんですがーーーー

本日をもって此処、箱庭学園を去ることになりました。よって、副会長は空席となります≫

袴のその言葉に、その場が凍りついた。

そしてその言葉を聞いた球磨川は、口元を上へつり上げ、

『副会長の不在。これはあきらかに生徒会則第二条に違反しているよね。』

生徒会則第二条。生徒会長になった者は迅速に副会長・書記・会計・庶務の四職に相応しきものを選定しなければならない。という内容。

『副会長のいない今の生徒会に任せるのは不安でたまらない！そんなみんなの気持ちを考えて、僕はこの解散（リコール）請求を請求したのさ。』

「っ！なんという汚いことを・・・」

『ん？何を言っているんだい？これは勝手に翼斗くんが起こしたことじゃないか。

僕は悪くない。』

☆★☆★☆★

眼を開けると、そこは俺の部屋だった。

『・・・たしか俺は・・・家に過負荷(あいつら)がやってきて、プランBとか言われて、それから・・・』

なぜか、それ以降の記憶が全くない。

そして、何故か俺は縛られていた。

『おいおい、何鎖でしまってんだよあいつら。せめて縄にしろよ・・・』

これじゃぁ無理やりやったら家がやばいじゃねえか・・・と呟く。

そして俺は突然強烈な眠気に襲われ、そのまま眼を閉じた。

☆★☆★☆★

『今回はありがたいぜ・・・』

「うん？なんだい、君もやっと此処が好きになってきたのかい？」

安心院なじみ。お久しぶりの登場が嬉しいのかなんかテンション高い気がする。

『んで、なんで俺縛られてたの？』

「ん。それじゃあ順を追って説明しよう。」

そしてなじみは、説明を始めた。

省略！！！

『まじかよ・・・めんどくせえ事になってる・・・・』

「まぁ君のせいだね。」

オブラートに包んでほしい。

『それにしても良く覚えていたなめだか。黒箱塾？の塾則なんて。』

「本当にそうだね。僕が適当に作った塾則をうまく使うとは。さすがめだかちゃんだね。」

おい。今しれっとすごいこと言わなかったか？

まぁいい。スルースルー。

『さて、俺明日から学校どうしよう？』

「それは簡単じゃないかい？・・・袴が意地悪くなければ。」

そう。もう一回入学届を出し、受理されれば事は収まる。

『それなんだよ・・・あの性悪爺(りじちょう)が条件もなしで受理してくれると思うか？』

「いっその事ここで一生暮らすのは？」

『拒否。』

自分でもびっくりするスピードで、俺は拒否する。

『はぁ。やっぱりあの糞爺(りじちょう)に土下座するしかねえか・・・』

「それだけで許してもらえるとは思えないね・・・」

（なぜか）二人してため息を吐く。

『いやなんでお前もはくんだよ。なんか困ったことでもあんのか？・・・ま、どうせくだらない話だと思うけど。』

「いつ此処からでられるんだろう・・・・」

『大変な話しだった！？』

（俺の意識がない間大変なことがあったんだな・・・）

そんなことを思いながら俺はもう一度深くため息を吐いた。

ＩＦその肆　『あっけない形で』（前書き）

５０万ＰＶ記念ＩＦその？です！

それにしても、振り替え休日っていいよね！

ＩＦその肆　『あっけない形で』

そこには、電撃を纏った善吉が居た。

（はぁ！？異常（アブノーマル）！？そんなわけねえだろ。異（あれ）常は幼少の頃から地味に頭角を現して来てるはずじゃあ！？）

もちろん。めだかからそんな話は聞いていない。

（どういうことだ！何が起き・・・・）

そこまで考え、俺は気付いた。

・さっき、善吉は少しばかりか意識を失っていた。

・そして、俺の知ってる限りでは、例外みたいな奴が居る。

この二つのキーワードから連想されることは・・・・

（なにやってんじゃあの安心院（くそアマ）ぁぁぁぁぁ！！！！！！）

そういうことだ。

頭の中にクススッとなじみの笑い声が響く。

『・・・ハァ。相変わらず余計なことしやがるあのくそ野郎・・・じゃなかった女（アマ）・・・』

「余所見してていいのか？」

善吉の声が聞こえ、俺は即座にそこを移動する。

すると、さっきまで俺がいた場所に、地面を通して電撃が走った。

『ひゅーあっぶねぇ～。そーいやした水だったなぁ・・・』

ちなみに、さっきから生徒会軍団が黙っているのは、善吉が異常（アブノーマル）を使用しているのに唖然しているからだ。

『まぁいいか。んなこと。俺はただ楽しめればいい・・・』

そう言いながら俺は『腑罪証明（アリバイブロック）』を使い、善吉の背後に移動する。

『フッ！』

そして４倍にしたパンチを出すが、善吉に当たる直前で、

「まっ、守れっ！！」

電撃に阻まれダメージを与えることができなかった。

（・・・ていうか、こんな短時間で初めてもらった異常（アブノーマル）を使いこなせてんのも十分異常だよな。）

ま、俺が言えた事じゃねえか。と呟き、俺はそこから退く。

『どうだい善吉ィ！！始めて使う異常（アブノーマル）は！？』

「うるせえ・・・よっ！！」

そう善吉はいい、電撃をくりだす。

（だがあの異常（アブノーマル）・・・使いかってとしちゃああまりよくねえな・・・今のところ電撃うてんのと守るだけだもんな・・・）

『ワンパターンだな善吉。こんなもん簡単に避けれんぞ。』

そういいながら俺は軽々と避ける。

「そうか。それじゃぁ・・・・避けれないほどの規模だったら！？」

そう言うと善吉は手のひらを俺に向け、

「電磁砲。」

さっきとはあきらかに違う規模の電撃、いや電磁砲が手から発せられる。

（おいおい、あれじゃぁまるで超電磁砲（レールガン）じゃねえか・・・これは避けれないなっと！）

そう俺は思ったので、新しく作った異常（アブノーマル）を使うことにしよう。

『・・・・『黒ノ獄門［ブラックホール］』！！！』

すると、発せられた電磁砲が、俺の右手に吸い込まれていくーーー

（まぁちょっとした『幻想殺し［イマジンブレイカー］』だわな。）

「なぁに！？」

『さあーてもういっちょ！『狂抗突破（ハウリング）』！！！』

そして次の瞬間、俺の口から、

『キィィィィィィィィィィヤアアアアアアアアアアアアアアアアア』

超音波が発せられる。

「っぐあ！！！耳がぁ！！」

『後ろにご注意・・・ってか！？』

善吉が耳を抑え苦しんでいる間に、俺は後ろへ移動する。

『百倍、とまではいかねえが。十倍返しだ。『白ノ鬼門［ホワイトホール］』！！！』

俺の左手から、先ほど発せられた電磁砲よりも威力の高い電磁砲が

発せられた。

「っ！！甘い！！この俺に電気での攻撃は無力だぁ！！」

そして次の瞬間、電磁砲が全て善吉の体の中に吸収されていった。

『ハッ！電気での攻撃は無意味ってことだなぁ！おもしれぇ！！』

楽しくなってきた。

だがその戦いは、あっけない形で幕を閉じる。

≪PLLLLLLLLLLLLLLL・・・・≫

『んっ、ちょっとタンマ。』

こんな時に誰だ・・・着信画面を見ると画面には「理事長」と書かれていた。

『もすもーす。只今戦闘中なんすけどなんかようすか？ＯＶＥＲ。』

≪ええ、それがですね・・・少々計画が変更になりました。≫

変更？

『どこが変更になったんすか？ＯＶＥＲ。』

≪それがですね。以前から言っておいた『あの二人』が来ました。≫

ああ。あいつらか。

『やっとですか。んで？俺は何を？ＯＶＥＲ。』

≪つまり、ここで君が生徒会(かれら)を食い止める理由が無くなりました。なので、通してあげてください。≫

『ぶーっ。この埋め合わせはいつかしてくださいよ。ＯＶＥＲ。』

ＯＶＥＲしつこい？んなことしるかボケ。

≪わかっていますよ。それでは≫

≪プツン。プー、プー、プー・・・≫

『・・・ちくせう。楽しくなってきた所なのにーな。』

「終わったか？」

善吉がそう訊いてくる。

『理事長からだ。お前さん達、通っていいだとよ。』

「「「「！！」」」」

生徒会みんなが驚いている。

「・・・どういう風の吹きまわしだ。」

やっと口を開いためだかが訊いてくる。

『さぁな。だが一つだけ。俺がもうここで止める理由が無くなったってわけだ。どこでも好きなところへ行きな。』

「っ・・・・行くぞお前達。」

めだかは一瞬不服そうな顔を見せたが、全員を連れ地下へと向かった。

『ふう。さて、暇だし・・・・』

行くか。

過負荷(あいつら)の所へ。

ＩＦその肆　『あっけない形で』（後書き）

とりあえず今回のｉＦはこれで終わりです。

なんだかあっけないです・・・

続きは暇があったら書くかもしれません。

榛原翼斗と安心院なじみの異常講座～

『おい。なんだコレ。』

「いやいや。作者さんが今回出てきた異常を紹介してくれだってさ。」

『ったくなんでめんどい事を俺に任せるんだかな。ホラさっさとやんぞ。』

「僕は入ってないんだね。」

『雷神舞踏』

『これは善吉が使っていた異常だ。「使っていた」だから「持っていた」人は違う。』

「これを使えば自由に電撃をあやつることができるよ。」

『おい。スルーすんじゃねえ。・・・ではなじみ先生。この異常の持ち主は？』

「うん。僕だね。」

『よっしゃあ歯をくいしばれ。』

『黒ノ獄門［ブラックホール］』　『白ノ鬼門［ホワイトホール］』

『これは俺が新しく使った異常共だ。』

「黒の方は異常を使った攻撃を吸収することができ、白はそれを１０倍にして排出できるよ。まぁぶっちゃけ、とあるシリーズを見て

考え付いた奴だね。」

『おい。それは言ってはいけない。』

『狂抗突破［ハウリング］』

『これも新しく作ったやつだ。』

「口から超音波を発し、相手の動きを止めることができるよ。・・・

まぁそれだけだね。」

『それだけってなんだコラ。これ考えるのに俺どんだけ苦労したと

思ってんだ？』

「今回の講座はコレで終わり。」

『俺他にもたくさん作ったんだが・・・・全部使えなくて残念だぜ。

』

「それじゃぁみなさんの投稿。まってるよ。」

『なにそれ投稿って！？ていうかこの文だと次もあるみたいじゃねえか！！』

続く・・・かも？

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』（前書き）

一度書いて見たかったやつ。

・・・ていうか、明々後日テストなのに俺なにやってんだ・・・

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』

『第一回！！』

俺が叫ぶ。

「箱庭学園！！」

めだかが叫ぶ。

『「ガチンコ鬼ごっこ大会ィィィィ！！！！！！！！！！」』

「「「「「「ひゃっはあああああ！！！！！！！！」」」」」」

日曜日。午前１０時。

今、ここで長い戦いが始まろうとしている。

『よっしゃまずメンバーの確認じゃゴラァァァァ！！！』

ちなみに、俺のテンションも最高潮だ。

『まず一人目！！ただの天才じゃない天才！！何でもこなす我らが生徒会長！！黒神めだかぁぁぁ！！！！』

「「「「「「ワァァァッァ！！！！！」」」」」」

「私が目指すのは優勝。ただ一つだ！！」

『そして二人目ぇ！！天才のそばにいる凡人！！普通以外に取り柄がないやつ！！人吉善吉ぃぃぃ！！！！』

「「「「「「ワァァァァァ」」」」」」

「俺の扱い酷過ぎるだろ！心なしか声援も小さいし！！」

『では次ィィ！！』

「スルーかよ！？」

『レッドサターンのナンバー2！！最近どころか全然出番ないどころか作者に忘れられてた男！！金城銀二ぃぃぃぃ！！！！』

「「「「「え？こいつ誰？」」」」」

「俺呼ぶの間違ってるだろぉ！！ていうか俺の扱い一番ひどい！！！」

『続いてぇ！過負荷（マイナス）のリーダー的なやつ！！螺子好きな狂人！！球磨川禊ぃぃぃ！！！！』

「「「「「はぁ・・・・」」」」」

『僕も呼ぶの間違ってるね。しかも今生徒会と絶賛対立中だし。』

『そしてぇ！大量殺人鬼！！多様な異常（アブノーマル）を持つ男！！新庄紅軌ぃぃぃ！！！！』

「「「「「ぎゃあああああ！！！！」」」」」

「いやこれ一番俺が間違ってるよな。みんな悲鳴あげてるし。まぁとりあえず、優勝できなかったら全員血祭り。」

「「「「「「GYAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！」」」」」」

『それじゃあ次行くぜぇ！！』

長いので省略。

改めて参加者を確認。

黒神めだか。

人吉善吉。

阿久根高貴。

喜界島もがな。

日向。

雲仙冥利。

（古賀いたみ）。

都城王土。

名瀬夭歌。

黒神真黒。

金城銀二。

球磨川禊。

新庄紅軌。

そしてオレ。（榛原翼斗）だ。

『じゃぁ次にルール確認じゃああ！！！』

そして俺はポケットからメモを取り出す。

『まずフィールドはこの箱庭学園の敷地内。時間は３０分。それ以外は大体普通の鬼ごっこと同じだ。そして勝った者にはぁぁぁぁぁ！！！！

何でも好きなものを一つプレゼントだ！！！だがかなえられる範囲だぞ！！！「永遠の命」とか言ったら惨殺すっからな！！！『

「「「「「うおおおおおおお！！！！！」」」」」

『それじゃぁ質問タァーイム！！質問ある奴いるか！？』

「じゃぁ質問だ。」

紅軌が手を上げる。

「タッチされそうになった場合、正当防衛で殺していいんですか？」

「いいわけねえだろがあ！！！」

善吉が突っ込む。

『さすがに殺すのは駄目だが、強行突破すんのはありだ。他に！！』

「じゃぁ。」

善吉が手を上げる。

「鬼は誰がやるんだ？「逃走中」みたいにハンターに頼むのか？」

誰もが訊きたかったであろうことを善吉が訊く。

『ん？そりゃあ

俺といたみだよ。』

その場が凍りついた。

そして何秒か遅れて善吉が、

「勝てるわけねえだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

大声で突っ込みを入れた。

『何をいうんだ善吉。二人だぞ？この広い敷地内を二人だぞ？』

「そうだよ人吉。やる前に諦めるなんてみんなに失礼だよ！！」

「うるせえこの人外コンビ！！変えてくれよ！！！」

『今からルールの変更は不可だ。善吉。男なら黙って腹くくれ。他の奴らはもうくくってるぞ。』

善吉以外はもう、準備運動したり、集中したり、雑談したりとやる気まんまんである。

・・・最後のはやる気まんまんじゃないね。

「っ！・・・まぁしゃあねえか。」

善吉も諦めたようで戻り準備運動を始める。

『あ、言い忘れてた。この敷地内のどっかに逃げ切るために役立つアイテムが隠されてるからな。しかも４つ。それじゃぁがんばれよ！！

『それじゃぁ・・・・鬼ごっこ開始！！！！！！！』

午前１０時半。戦いの火ぶたが切って落とされた。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』（後書き）

うおおおお書いててすげえ楽しい！！！

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

テスト終わったあぶしゃあああ！！！

これで心おきなく書ける～～～！！！

・・・はぁ、６日後の弁論大会どうしよう・・・

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

『５８～５９～６０！！よ～し一分数え終わった！さて、動くか。』

始まってから一分、俺等は逃げる時間を与え、そして今動き出す。

「最初はどのようにして探す？翼斗くん。」

『・・・とりあえず最初俺が校庭とかの外、いたみが学園内。これでいいだろ。』

「うんそうだね。まだ最初だし。簡単に見つかるでしょ？」

１２人もいるのだ、おそらく最初の一人は簡単に見つかるだろう。

『それもそうだな。最後にいたみ、俺等はあいつらに敬意を表して・・・・

全力を持って相手しよう。』

「言われなくても！！」

『いい返事だ！よし、それじゃあ・・・・・・

行くぜ！！！』

残り時間　２９分
残り人数　１２人

☆★☆★☆★

「これは絶対負けられねえ・・・」

野球部の倉庫の後ろに隠れながら、日向は呟いた。

「と、まだ1分半しかたってねえか。」

（これで優勝して部費を１０倍にしてもらえば・・・剣道場はでかくなるし！竹刀とかもいいのに変えられる！！）

剣道部のみんなの期待にこたえる為、日向は負けられなかった。

「・・・それにしてもいやに静かだな・・・静かすぎて不気味だぜ。」

いつもは騒がしい校庭が虫の音一つ聞こえないほど静かなのだ、当然日向の声は・・・

響く。

『あ～～～～～～れえ～～～～？こんな所に人の声が聞こえるなあ～？』

「っ！！」

日向はぎくりとなり、急いで口を閉ざす。

『全く・・・静かなんだからあんまりしゃべっちゃ駄目だぜ～～？？』

「くっ・・・・・」

日向は恐る恐る後ろを見る。

『見ぃ～つけた・・・・・・・・』

倉庫の上に、翼斗が居た。

「ハ・・・アハハハハハ・・・・・・」

日向は乾いた笑いを浮かべながら前を向きなおし、

「うわぁぁぁぁぁぁ！！！！ついてね～～～～！！！！！」

校舎の方に向かって全力疾走した。

ダダダダダダダ！！

『むぁ〜てぇ〜〜〜！！』

ダダダダダダダ！！！！

そこへ翼斗が『解放（アンロック）』で身体能力を3倍にし、追う。

「はぁぁぁぁぁ！！！？？？？何だあの天然チート！！！！？？？？」

ものの数秒後、翼斗は日向に追いついた。

『切ってないけど切り捨て御免！！』

スパパァァン！！

そして眼にもとまらぬ速さでタッチした。

『一人目、確保。』

「っ！くそがあああ！！！」

日向、確保

残り人数　１１人

残り時間　２７分

☆★☆★☆★

≪ピーンポーンパーンポーン♪日向、確保。残り人数１１人≫

「どんまいだなあいつ・・・最初から見つかるとか・・・」

一年一組の自分の教室前で靴ひもを結びなおしながら、善吉は言った。

「でもこの速さで捕まえるとか・・・あいつらやばいだろ。」

これは真剣(マジ)にならないとだめだな、と善吉は呟く。

「ん？ああ、確か善吉っつったっけ？」

「？ああ！お前は・・・・」

そこにいたのは、絶賛指名手配中、日常が戦場の紅軌がいた。

「日向って奴、もう捕まったらしいな。不運に。」

「ああ、おそらく、見つかったら逃げきれないな。ここで立ち止っているのは危ない。俺等も移動しよう。」

「ああ。」

そして善吉は背中を向けて歩き出す。

紅軌はそんな善吉を見て、眼を光らせるのだったーーーー

☆★☆★☆★

「うーんまだ見つからないなぁ〜」

校舎の玄関に入り、一階をだいたい歩き終わった、いたみが言った。

「おそらくあっちも歩いているだろうから、待ち伏せとかした方がいいかもーーー」

そしていたみは、先ほど考え出した鬼畜な作戦を実行に移すため、歩きだすのだった。

☆★☆★☆★

「ケッ！まだ誰とも出会わねえな。これ結構ちょろいんじゃねぇか！？」

ポケットに手を突っ込み、ガムを食べながら冥利は言った。

「次は体育館あたり言ってみっか。あそこは広いし出口もいっぱいあるし、見つかっても逃げ切れんだろ。」

そして冥利は体育館へと歩みを進めるーーー

「静かだな・・・」

冥利の声が、体育館に響き渡る。

「さ～て、誰もいねえことだし、隠れ場所でも探すかーーーー」

そして冥利は器具庫へ向かうーーーー

だが、

「ニャハハハハ！！一人目はっけーん！！」

「なにっ！？」

突如いたみの声が聞こえる。

そしてそれと同時に蹴る音。

「っ！何処だ！？」

いたみが現れた場所は、

天井だった。

「うあっ！！忘れてたぜ・・・こいつは天井も歩けるんだった！！」

「今頃気づいても遅いよ！二人目ーーーーー」

いたみの手が延ばされ、冥利にーーーー

当たらなかった。

「くっ！！ぎっりぎっり！！」

冥利は寸前の所で身体をそらせ、ぎりぎりいたみの手を避けていた。

「えっ！？」

「うおらっ！！」

バゴッ！！

「んっ！！」

そして、空中のいたみの腹をけり、吹っ飛ばす。

「今のうちに逃げねえとーーー」

いたみが腹を抑えている間に、冥利は全速力で外へ向かう。

「逃がさないよ！」

そして少し遅れ、いたみも冥利の跡を追った。

残り時間　２５分半。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（後書き）

このペース・・・いつ終わるんだ？

まぁ、異常者ばっか集めたらこうなるか。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

番外編その？です。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

冥利は一心不乱に逃げていた。

「ケッ！さすがは改造人間ってか！？振り切るどころかスピード上げてきてやがる！！」

「絶対に捕まえる！！」

このままじゃ間違いなく耐久戦、いや、おそらくいたみが勝利するだろう。

そう思った冥利は、身体を反転させ、いたみの方を見る。

「？」

「身体に触れられなければ妨害はあり・・・つーことで！くらっとけ！！」

ポケットからスーパーボールを数個ほど取り出し、壁に向かって弾き、兆弾させる。

「ぐっ！でも改造人間の私には足止めにもならないよ！痛いけど！」

「やっぱりか・・・それじゃあ！！」

今度は大量に取り出し、床にばら撒いていく。

キキーッ！

冥利の予知していなかった行動に、いたみは止まってしまう。

「うわっ！とと！！それなら・・・」

いたみは歩いていた道の壁を走っていく。

「この時間で逃げ切らねえと・・・」

冥利がスピードを上げるが、

ドンッ

前を見ていなかったため、誰かにぶつかる。

「うおっ！すまねえ！」

『ああ、気にしなくていいよ。うん？これはよくよく見れば雲仙くんじゃないか。』

ぶつかった相手は運悪く？過負荷（マイナス）の球磨川禊だった。

「なっ！球磨川っ！」

『僕先輩なのに敬語使ってはくれないんだね・・・まぁもう慣れっこだけど。』

頭をポリポリ書きながら禊は言う。

「まぁーてぇー！！」

「やべっ！！」

後ろからいたみが迫る。

その状況を見た禊は不敵に笑い、

ズガガガ！！

「ぐあっ！！」

冥利を螺子で壁に固定した。

『うっ、雲仙くん！僕の身代わりになってくれるのかい！？君は何て優しい人なんだ！』

無論。冥利はそんなことを一言も言っていない。

『ありがとう！君の事は来週のジャンプが出るまで忘れないよ！じゃあね～！』

「っ！ゴラァ！これはずしやがれ！！」

逃げていく禊に、冥利はこう言う。

『安心していいよ。その傷は外したら『何事もなかったように』なくなるから。今度こそまたね～！』

まったく訊いてもいないことを答え、禊は走り去って行った。

ヒュー

「えっと・・・とりあえず雲仙くん・・・」

そういたみが言うと固定された冥利の肩をタッチし、

「アウト。」

「くっ！あの野郎ぉぉぉぉぉ！！！！！」

冥利の悲痛な叫びは、校舎の中によく響き渡った。

雲仙　冥利、確保

残り人数　１０人

残り時間　２４分

☆★☆★☆★

場所は変わり、校庭。

そこで、三人の男が対峙していた。

ちなみに、１対２である。

『これで終わりだ二人とも。』

まず一人目は翼斗。

何も言わなくてもわかると思うが1の方。

「・・・・・・」

そして2の方は、なんとびっくり、高貴と銀二であった。

無論、二人は初対面である。

「ふぅー。・・・俺が喰い留めます。逃げてくれ！！」

銀二の提案に、高貴は不満そうな顔を見せる。

「だが・・・・」

「このままだったら二人とも捕まる！！それに今欲しいものはねえ！」

じゃあ何で呼んだのか、そう疑問は受け付けない。

「っ・・・わかった！！」

銀二の提案を受け、高貴は走って行った。

『なかなかじゃあねえか？俺から逃げれる保証があるのか、それとも諦めたか？銀二はどっちだ？』

「どっちでもねえ。俺は最後まであきらめねえ！例え敵が翼斗だとしてもな！今までずっとそうしてきたんだ！！」

ちなみに今まで＝レッドサターンでの戦いの日々。

『オーケー！いいじゃねえか！手加減なしだぞ！！』

「勿論！！手加減あっちゃあこまるだろう！！！」

そして、二人の影が同時に動いたーーーーーー

☆★☆★☆★

「ハァ、ハァ、ハァ、」

校舎裏の木に寄りかかり、高貴は休んでいた。

「ハァ。まだ始まって少しなのにこれとは・・・」

３０分持つだろうかと高貴は苦笑しながら呟く。

「ハァ。」

後ろから声が聞こえ、高貴は急いで振り返り、半歩後ろにさがる。

「銀二！無事だったか！！」

そこに居たのは、先ほど意気投合し、仲良くなった相手銀二だった。

「うっ・・・高貴・・・・・

逃げてくれ！！」

銀二の注意も間に合わず、

高貴は銀二に羽交い締めにされる。

「なっ！？どういうことだ銀二！？」

『こういうことだ。』

先ほど銀二が居たところには、翼斗が笑いを浮かべながら立っていた。

「っ、そうか！！君は人を操れるんだった！！」

そう、翼斗は人を操ることのできる『仲間戦闘（チームロワイヤル）』を持っている。
以前、高貴たちの前で使ったことが一度あった。
『正解！！だが気付くのが遅かったな！！』
翼斗は高貴に近づき、
『阿久根先輩、確保！！』
ゆっくりとタッチした。
阿久根　高貴・金城　銀二、確保
残り人数　８人
残り時間　２１分

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ　?』（前書き）

多くなってきたので整理の為。

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ　?』

異常（アブノーマル）

『絶対言語』

都城王土の『言葉の重み』の強化版みたいな物。

どんな命令でも相手は逆らうことができない。

今のところ回避法はない。

入切可能。

『仲間戦闘（チームロワイヤル）』

相手の意識に入り込み、その人間を操作できる。

ただし、相手を操作している間自分は無防備になるので、あまり翼斗は使っていない。

相手に自分の手が触れている状態であれば、いつでも使うことが可能。

『完璧限定（オールオーバー）』

翼斗が『見た』相手の異常、過負荷をコピーし、２００％（使い手よりも十全に）使いこなすことができる。

一度『見た』ものであればいつでも可能。

『幻想実現（ドリームアウト）』

自分の頭の中で浮かべた異常を実際に自分に与えることができる。

ただし、一度作った異常は消すことができず、永遠に残る。一つ作るごとに一年寿命が減る。

安心院なじみの異常。

『不必要（オブノット）』

人間が生きる為に必要である数々のモノ（例えば酸素とか、睡眠とか、ね。）を自分には必要なくす。

なお、この異常は常時発動しており、発動してても普通に睡眠欲とか食欲とかはでる。

『解放（アンロック）』

自分の全ての身体能力を、倍、3倍、4倍・・・と自由に倍率変換することができる。

但し、4倍以上をやると自身の筋肉が運動に耐えられなくなり、なんらかの代償を及ぼす。

『腑罪証明（アリバイブロック）』

自分が『行きたい』と思い願った場所に自由に移動することができる。

安心院なじみの異常。

『痛吸収（ペインドレイン）』

他者の『受けた』傷や痛みを自分に移す。

これは、あくまで『傷や痛み』であり、『死』を移すことはできない。

『重力加減（グラビティアース）』
相手にかかる重力を自由に変換することができる。
制限はなく、どこまでも変換できる。

『目撃者（ウィットネス）』
自分が『見たい』と思った場所の光景を頭の中でみることができる。

『排出（ドローブ）』
自分の受けた痛みと傷を相手に移す。
人数に制限が無く、何人にでも移せる。
しかし、『受けた』であって『受ける』ではないので、返すには一度攻撃を受ける必要がある。

『異変治療（オートドクター）』
自分の体に起きた異変（毒・薬）を瞬時に治療できる。

『腑罪免除（アリバイブレイク）』
相手を自分が指定した場所に移動させる。
人数に制限はないが、増えれば増えるほど使うまで時間がかかる。

『血着（ブラッディ・エンド）』
自分の身体能力を１０倍に上げる。

精神が不安定な時にやると理性が崩壊する恐れがある。
肉体的な代償はないが、精神的にはものすごく疲れる。

『鏡写し(ハーモニクス)の道化』
安心院なじみの異常。
詳しい事は不明。
一度使うたびに異常が一個減る。

過負荷(マイナス)

以下ネタバレ注意!!

『人能崩し（ヒューマン・ダウナー）』

自分の視線の先にいる人間の五感・痛覚・異常、過負荷を自由に無くしたり復元させたりすることができる。

制限はなく、視線に入れさえすれば同時に何人でもすることができる。

第?話　『俺の異常&過負荷確認だ　?』（後書き）

過負荷の名前変えました！

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

その？です！

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

場所は変わり、箱庭学園内第３階。

「ハッ、ハッ、ハッ、」

そこでは、善吉が全力疾走していた。

「っ～～～まだ追ってきやがる！！」

善吉が追われている相手とは誰か。

翼斗、違う。

いたみ、違う。

それじゃぁ誰なのか。

その相手は、

「クハハハハ！！いいかげん諦めて捕まったらどうだ！？」

「誰がそんなことすっかよ！！」

赤髪の殺人鬼、新庄紅軌であった。

なぜこんなことになったのだろうか？

～時は遡る～

「俺等も移動しよう。」

「ああ」

善吉が紅軌に背を向けて歩き出す。

そんな善吉を見て紅軌は不敵に笑い、

「・・・・・フッ」

即座に『切裂鎌(ジャック)』で鎌を取り出し、切りかかった。

（これは・・・・殺(と)った！！）

「ん？なんか殺気が・・・・・・・・後ろか！？」

紅軌の只ならぬ殺気を感じとった善吉は、即座に反転し、バックステップで鎌を避ける。

「ほぉ～、これを避けるか。なかなか殺りがいがありそうじゃねえか。」

「なっ、なにすんだいきなり！！当たったら死んでただろうが！！」

「安心しろ。死ぬ時間が遅くなっただけだ。」

「全く意味わかんねえ！！！それに翼斗が「殺すのは駄目」って言ってたじゃん！！」

善吉の言うとおり、最初に翼斗は殺すのはさすがに駄目と言っていた。

「知らないのかお前？」

そう言うと紅軌は口元をつり上げ、こう言った。

「ルールってのは『破る』為にあるんだぜ？それに、過負荷（おれら）相手にルールなんぞは紙切れ同然だぞ？」

「こいつに言った俺が馬鹿だった！！」

善吉が頭を抱え叫ぶ。

「それにしたって！！殺すのに理由がないだろ！？それともなんだ！？お前は宗像先輩みたいに「殺すのが当たり前」みたいな感じなのか！？」

「何言ってんだ。俺にだってちゃんと理由があるさ。あんな殺人鬼もどきとは違ってな。」

どうも、紅軌にはちゃんと善吉を殺そうとした理由があるらしい。

「へえ、それはなんだよ？」

「・・・殺せばあとあと楽。人数も減るし、身代わりにもできる。ほら、人を一人殺すだけで一石二鳥じゃねえか。」

「・・・・・・」

善吉は悟った。

（こいつ・・・話し合いどころか常識が通用しねえ。）

ということを。

そして、善吉は一目散にそこを逃げ出した。

そして冒頭に戻る。

「馬鹿！！こんだけ走ったら鬼に見つかるかもしれねえだろうが！！」

善吉が紅軌に向かって叫ぶ。

「残念。もう見つかってる。そして追ってきてる。」

そう言う紅軌の後ろから、いたみが全速力で迫って来ていた。

「おおう！？じゃあこんなことしてる場合じゃねえだろうが！！さっさと二手にわかれんぞ！！」

「それもそうだ！！じゃあちょいとスピード上げんぞ！！」

そう言った紅軌が、スピードを上げ、善吉の隣に来る。

「もうちょいで階段だ！！うまくいけば逃げれんぞ！！」

「・・・ああそうだな。【俺だけは】確実に逃げれるな。」

善吉は紅軌の言葉に、困惑する。

「はぁ？それどういう意がはぁ！！」

善吉が言い終わる前に、紅軌は後方へ蹴り飛ばした。

いたみが居る後方へ。

「じゃあ、がんばれよ～」

「くそがあああああ！！！裏切りやがってえええ！！！」

「何言ってんだ？

もともとお前の仲間だった覚えはねえよ。」

人吉　善吉、確保。

残り人数　７人

残り時間　１９分

☆★☆★☆★

『・・・全く、誰かと思えば都城先輩じゃないですか。』

校庭で飲み物を飲みながら歩いていた翼斗と鉢合わせしたのは、都城王士だった。

「出会った鬼が貴様とはな。全く、今日の俺はついていない。」

『人を出会うと不幸になる人みたいに言わないでください。』

王土は普通に接しているが、心の中ではすごく動揺していた。

（さて、どうやって逃げ切ればいい？俺の『言葉の重み』は奴には通用しない。となると・・・）

と、なると、異常を使わない実力逃亡ｏｒ武力行使での撃退。

どっちでも容易ではない。

「さて、榛原翼斗。答えのわかっていることを訊くが・・・・『にがしませんよ』だろうな。」

逃げ切るにしても、真っ向勝負じゃ勝ち目が無い。

「そうか。残念だ。それな『余所見しててていいんですか？』っ！！」

さっきまで眼前に居た翼斗が突然消え、突如王土の後ろに現れた。

王土は少し遅れて反応し、後ろに下がる。

かろうじて、手は触れられてなかった。

（危なかった・・・もう少し遅ければ・・・・）

王土はポケットに手を入れる。

「悪いな榛原翼斗。俺だって賞品が欲しいのでな。さよならだ！！」

取り出した物体を地面へ叩きつける。

そして、辺りを轟音と光が包んだ。

そう、これは翼斗が始まる前に行っていた役立つアイテム。

Ｎｏ．１　『スタングレネード』

轟音と光で相手の視覚と聴覚を遮断する。

ただし、一回しか使えない。

王土はこれを体育館倉庫の跳び箱の中で見つけていた。

『ぐあっ！！スタングレネードか！！』

翼斗がひるんでいるすきに、王土は身を隠した。

残り時間　１７分

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

その？です。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

『くそ！どこ行きやがった！？』

見失いました（＾Ｏ＾）／

だってスタングレネード持ってるなんて予想外だったんだもの・・・・

とにかく見つけないと・・・・

そろそろ時間がヤヴァイ。

『何処だゴラァァァァ！！』

俺は全力疾走し、外のあらゆる場所を探す。

そして、人の気配。

『見つけたぞ都城せんぱ・ぁ・い・・・・』

曲がり角を曲がった先にいたのは、扇子を持ちながら歩いているめだかだった。

『みぃつけたぁぁぁぁぁ！！！！！』

「ん？翼斗じゃないか。始まってからははじめましてだな。」

『今まで何処に隠れてたんだゴラァ！！』

だって始まって13分経っているのに初めてあったんだもの・・・

「この私がこそこそ隠れていたとでもいうのか？私は普通に歩きまわっていたぞ。」

『・・・この天然チートめ。』

心の中で思ったんだが言葉に出ちまった。

「それにしても、私を見つけてから数秒経っているのに、捕まえないのか？」

『フ、愚問だな。

そんなことあるかボケェェェェェ！！！！！！！』

そう言うと同時にめだかに跳びかかる。

「やる気が出てきたな翼斗。それじゃなきゃ・・・楽しくない！！」

めだかは俺の飛びつきに驚きもせず、持っていた扇子で正確に俺の頭を一閃。

『いっ！地味にいてぇ！！』

「さて、これは鬼ごっこなのでな。逃げさせてもらおう！」

そしてめだかが背を向けて疾走。

・・・ちょっと待て。なんだあのチートの塊。

速さが俺の2倍と同等なんですけど。

『このチート女めェェェェ！！！まぁてぇぇぇぇ！！！』

俺はすばやく起き上がり、3倍でめだかを追った。

☆★☆★☆★

「・・・なんだか静かだなぁ・・・」

校舎の中で静寂の中、いたみは歩いていた。

いたみはさっきの善吉以来、まだ一人も会っていない。

「それに・・・なんか嫌な感じがするし・・・」

そう、いたみは先ほどから悪寒が止まらないのだ。

「あぁ・・・楽しそうだな翼斗くん・・・」

窓の外から、めだかを追いかけている翼斗の声が聞こえる。

「私もがんばらなきゃ！！」

そしていたみは張り切り、３階へ上がる。

「・・・これはどうコメントすればいいんだろう・・・」

3階を上がった眼前に広がったのは、冥利同様螺子で抑えつけられている王土と真黒の姿であった。

「う～んととりあえず王土さん。何故こうなりました？」

かろうじて意識があった王土に訊く。

「う・・・古賀か。球磨川禊に軽く挨拶しただけでこうだ。」

「以下同文だよ。」

なんだろう・・・哀れ。

「え！？あの過負荷(ひと)あいさつしただけでこうなるの！？」

「・・・いや、おそらく紅軌(あいつ)が関係している。」

王土はそう言った。

「とにかく、事情はちゃんと話すからさ、とりあえず外してくれないか？」

「さすがにかわいそうですし、もちろん。」

「そして、外したら見逃してくれないかな？君だってこんなことでタッチしたくないだろう？」

真黒の言葉に頭をかかえ少し悩むいたみ。

「う～ん・・・翼斗くんに言ったら怒られるだろうけど、いいですよ。」

いたみの返答に、王土と真黒はホッとする。

「それじゃあ外しますよ。」

そう言っていたみは、二人のからだに手をかける。

・・・

二人のからだに手をかける。

「「「・・・あ。」」」

都城　王士・黒神　真黒、確保

残り人数　５人

残り時間　１４分

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

その？です。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

「フハハハハ！どうした翼斗！？スピードが落ちてきているぞ！？」

追いかけっこが始まって2分も経過しているのですが・・・

あいつ全くペース落ちとらん！！！

『はぁ・・・なんだあの人外。』

（うん？よんだかい？）

頭の中でなじみの声が響く。

よんでねえよくそ女！！

いきなり頭の中で話しかけるな馬鹿！

（全くつれないなあ翼斗くんは。）

ああ、無視だ、無視。

落ちつけ俺。無心になるんだ。

あいつを追いかけることに集中するんだ。

そう心の中で言い聞かせ、俺は４倍にスピードを上げる。

「うん？早くなったじゃないか。これは私もやばいなっと！」

そういいながらちゃっかりスピード上げんな馬鹿！！

≪ＰＬＬＬＬＬＬ≫

俺のポケットの中の携帯が震える。

走りながら器用に手を入れ、着信画面を見る。

そこには「いたみ」と書かれていた。

『・・・なんだ?俺今会長さんと追いかけっこしとるんだけど。』

≪うん、実はね・・・

あの二人（紅軌＆禊）大分やっかいだよ。もう４人犠牲になってる。≫

はぁ、何やっとるんだあいつらは。

『やっぱりか・・・で、どうする？他の奴ら後回しにしてそいつ捕えるか？』

これは放っておくとめんどい事になりそうだ。

≪うん、そうしようよ。じゃぁとりあえず合流しよ。何処に行けばいい？≫

ここから両方に近い場所は・・・・

『おう。じゃぁ学園の門の前集合で。大丈夫か？』

≪・・・うん。距離は遠くないよ。≫

『そうか。それじゃあな。』

そう言って俺は通話を終了する。

『さ～てめだか。こいつは後回しだ。めんどくさい用ができたんでな。』

走りながら前方に居るめだかに伝える。

「ふむ、楽しくなってきたどころなのだが・・・・仕方ないな。」

『ああ、第一回戦はそっちの勝ちな。』

たぶん、俺が限界を超えるか『血着（ブラッディ・エンド）』使わんと追いつけなかっただろうしな。

「そうか、それじゃぁ、・・・・・またやろう。」

『もちろん。』

そして俺は身体を反転させ、校門を目指した。

・・・木に隠れながら聴いていた殺人鬼にも気づかず。

「・・・ハッ。」

☆★☆★☆★

『うおおおおおお！！ウサインボルトぉぉぉぉ！！』

自分でもびっくりするスピードで校門へ向かう。

近くに行くと、そこではもういたみが待っていた。

『悪ぃ。遅れた。』

「ううん。全然。」

『んで、誰が犠牲なったんだ?』

実を言うと、それが一番俺には気になった。

「んと、人吉と、雲仙くんと、都城先輩と、真黒さんだよ。」

『・・・これはまた個性的な。』

特に善吉が犠牲になるとは・・・

あいつどんまい。

「その中でも一番かわいそうだったの人吉だね。」

『ふむふむ。どんなやられ方でした？』

「私の目の前で球磨川に蹴飛ばされた。」

（。o。）・・・・

やばい。

かわいそう！！

『これはまずい。さらなる犠牲者が出る前に捕えねえとな。最初はどこ探す？』

「じゃぁ最初ｈ・・・っ！！」

いたみの頭めがけて、螺子が飛んでくる。

いたみはそれを驚きながらも、紙一重で避けた。

『う～んおっしっぃ～！！もうちょっとで脳みそぶちまける姿みれたのになぁ・・・』

「おいおい、ちゃんと狙えよ。罰ゲームだ。殺す。」

『全く意味がわからないよ紅軌くん！』

そこには、螺子を両手に持った球磨川と、『切裂鎌（ジャック）』を持った紅軌がいた。

『・・・これはこれは。そっちから出てくるなんてな。これ鬼ごっこだって事忘れてねえ？』

「簡単な話だ。触れれなければｏｋ。」

『シンプルだな。だがそれを実現するのって結構むずかしいんだぜ？』

「そうか？案外すぐ終わるかもな。

お前らの敗北で。」

そして俺といたみは無言で構える。

そして過負荷(あいつら)も・・・

『やってみせ。できるもんならな。』

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（後書き）

はぁ・・・

やっぱりこいつらがいるとこうなるのか。

これ鬼ごっこなのか？

リアル鬼ごっこじゃね？

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

その？です。

おそらく次かその次で完結。

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

「じゃぁ・・・やってみっか！！」

翼斗と紅軌は同時に動いた。

紅軌は高速で鎌を振り下ろす。

『うおっ速ぇ！！』

そして翼斗はそれを紙一重で避けた。

「まだまだぁ！！」

紅軌は鎌を右手に持ちかえ、左手にも鎌を展開。

「さぁ、ここからはもっと速くなるぜ？」

そして、翼斗に近づき、鎌をーーー

「私を忘れてないよね！？」

振り下ろす前に、いたみが翼斗と紅軌の間に入り込み、流れるような動きで鎌を蹴り飛ばす。

「その身体、もーらいっ！」

そして、紅軌の身体が傾いた隙に瞬時に足を地につけ、懐に入り込み、身体に手を伸ばすーーーー

「狙いは良かったな。だが・・・・」

「７０点だ！！」

紅軌は咄嗟に『切裂鎌（ジャック）』を横に居る禊に投げ飛ばす。

『鎌を使うのは初めてだなぁ。えーっとこれを振り下ろせば・・・』

そして、鎌を掴んだ禊がいたみに切りかかる。

「えっ！？そんなのってあり・・・・」

『まず一人目だね。』

『っ！！』

だが、突如禊が鎌を落とした。

いたみの後ろには、自分の手を刺している翼斗が居た。

『おおーうこれは便利。相手の動きも止めれるなんてな。』

翼斗は禊が切りかかる前に自分の手を刺し、そして『排出（ドローブ）』を使っていた。

怯んだすきにいたみが後ろへ跳ぶ。

『これはきつい・・・・こっちも触れられたら終わりとは。』

そう。紅軌には『役立たず（パンデミック）』があるため、一度触れられれば身体を支配され、ＧＡＭＥＯＶＥＲ。

実に簡単な戦いだった。

翼斗は紅軌、禊に触れれば終了。

紅軌は翼斗といたみに触れれば終了。

だが、鬼ごっこの枠を超えた、相手の手の内の読み合い。

そのため、一瞬の油断も許されない。

『今度はこっちから・・・・・行くぞ！！』

その直後、翼斗の髪が深紅に染まる。

そして同時に、紅軌と禊の重力が４倍になった。

『もらったぁぁぁ！！！』

二人の後ろにワープした翼斗は、まず紅軌の腕を掴むーーーーー

だがその時、紅軌が不敵に笑った。

「球磨川ァァァァ！！！！」

『わかっているよ！！』

そしていつの間にか、紅軌は翼斗の視界から消えていた。

『っ！どういう・・・・』

翼斗が周りを見渡すと、その所在はすぐにわかった。

紅軌は、いたみの目の前に居た。

そしていたみは紅軌に触れられており、紅軌はいたみに触れられていた。

『・・・紅軌くんと古賀さんの距離を『なかったこと』にしました。』

「さぁ。これで一対一だな。」

そして、紅軌と禊は不気味に笑った。

『おいおいマジかよ・・・それ便利すぎ。』

さっきから動けないでいる禊に翼斗は言った。

『ちょっと照れるなぁ。でも便利なんかじゃないさ。』

『それもそうかもな。さーて、

やろうか？』

翼斗がそう言うと同時に、動いた。

高速で後ろへ移動し、襖に手を伸ばす。

（さぁ！これをどうやって避ける！？）

だが、禊は避ける、いや動かなかった。

『・・・・へ？』

禊の肩を触りながら、翼斗は間抜けな声を出す。

『あー捕まっちゃったー（棒）』

禊が棒読みでそう言う。

『まぁ重力重くされたし、仕方ないよね。ごめんね紅軌くん。捕まっちゃった。』

禊が紅軌にそう言う。

「うん？まぁしゃあないだろ。負けは負けだ。」

だが翼斗の予想に反し、紅軌はあっさりと返した。

『「さて、ここから過負荷(マイナス)の見せどころだ。」』

そして禊はネジを、紅軌は鎌を取り出す。

『・・・何やってんだお前ら？もうお前らは捕まっただろ？』

翼斗が二人にそう言う。

「ああ。捕まった。」

『うん。どうしようもなくみじめに負けたさ。』

「『だけど、捕まってから攻撃しちゃだめって言ってないだろ？これからが、僕（俺）の見せ場だ（よ）』」

そう言って、過負荷(ふたり)は顔を歪ませた。

球磨川　禊・新庄　紅軌、確保。

残り人数　めだか、もがな、夭歌の三人。

残り時間　８分

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

その？です。
次で完結！！

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

翼斗は、今のこの状況が気持ち悪かった。

『うおあああああぁぁぁぁぁ！！！！！なんだこのスプラッタァァァァァ！！！！！』

「ハッハッハァ！！どうした翼斗！？速度が落ちてきているぞ！？」

「全くだ。うっかり殺しちゃうぜ？」

『駄目だよ紅軌くん。ほら、ルールでは人殺しは駄目なんだから・・・・バレないようにやらなきゃ。』

只今、翼斗は追跡＆ａｍｐ；逃走中。

どういうことかというと・・・

めだか

→追跡

翼斗
→追跡
禊&紅軌

という構図。

・・・・なにこの戦い？

『ぬぉぉぉわぁぁぁぁ！！！』

翼斗は必死の形相をしながらスピードを上げる。
これで4倍。次上げるなら『血着（ブラッディ・エンド）』を使うしかない。
だが、使うと疲労が身体に蓄積するゆえ、これで捕まえらなかった場合のリスクが大きい。
対してめだかは顔を見る限り、まだまだ余裕そうな顔。

なにこのチート。

後ろの二人は、上に同じく、まだまだ余裕そう。

あ、間違った「紅軌」は。禊は先ほどからスピードを落としている。

「さぁて！！ちょいとスピードを上げるかなぁ！！」

そう言いながら紅軌は足に力を込め、スピードを加速。

一気に翼斗の横まで移動した。

『フハ！馬鹿め！走りあいだったらこっちに分があるんだよぉ！『止まれ』。』

「ぬふぉ！」

紅軌が翼斗の『絶対言語』を訊き、急停止する。

その隙に翼斗は力を『5倍』にし、急加速。

一気にめだかとの距離を縮める。

『ぐおっ！！』

そして、現れた足の崩壊を、後ろで走っている襖に押し付けた。

『酷いとか言う反論はうけつけねぇ！！』

翼斗が空に向かって叫んだ。

「ん！？・・・これは私もそろそろやばいな。スタミナはまだあるが、スピードはもうやばい。それならば・・・」

『っ！？』

（これは・・・方向チェンジか！？）

翼斗がめだかの言葉を訊き、少し減速する。

「根競べだな！！」

『方向チェンジじゃねえのかよ！？』

力任せだった。

「何を言う！？こんなおもしろいこと真っ向勝負じゃないとおもしろくないだろう！？」

そう言いながらちゃっかりスピードが上がっていた。

『なんでスピード上がってんの！？お前もう限界とか言っただろうが！！』

「限界とは超える為にある！！！」

『うわぁぁぁぁ！！！！！』

翼斗は嘆きの声を上げた。

『くそぉ！！こうなったら多少どころかすごく汚い手でも捕まえてやらぁ！！』

「その意気だ翼斗！！がんばれ！！」

『・・・なんで俺は敵に応援されとんの。』

そう言いながら翼斗は下準備を始めるーーー

『対象を選択。新庄紅軌、球磨川禊。この2人を高速移動している黒神めだかの眼前にワープ！！』

そして、唱えた。

『腑罪免除(アリバイブレイク)！！！』

「っ！！」

そして突如、走っているめだかの眼前に紅軌と禊が現れる。

それに少し驚き、一時停止。

『ここだぁぁぁぁ！！！！』

翼斗は瞬時に『血着(ブラッディ・エンド)』を発動。

さらにそこに『解放(アンロック)』の４倍の異常の重ね使用。

そして、人間を超越した速度で、一瞬でめだかの横へ移動した。

『よぉし！これで終わりぃ・・・・・』

だが、伸ばされた手がめだかに触れることはなかった。

めだかが高く宙に舞い上がったのだ。

だが、それも今の翼斗には一時しのぎにもならない。

『そこはバァァァァッド！！！』

めだかに『重力加減（グラビティアース）』で重力を４倍にする。

当然、舞い上がってためだかに１０倍の重力だ。

落ちるスピードはすさまじい。

『落ちろぉぉぉ！！！』

辺りに、隕石でも落ちたかのような轟音が響き渡った。

「・・・・私の負けか。」

陥没した地面に伏せながら、めだかは呟いた。

『ああ。『今回は』俺の勝ちだ。』

『またやろう。』

「ああ！！」

黒神　めだか、確保。

残り人数　もがな、夭歌の二人。

残り時間　５分

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（前書き）

小説のタイトルを変更させていただきました。

理由は、活動報告をごらんください。

ついにラスト！！

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？

翼斗は、走る。

前を目指して。

目的を目指して。

・・・二人を目指して。

『どこだぁぁぁぁ！！』

めだかを捕まえてから翼斗は、少しも休まず二人を探す。

なぜなら、それには最悪な理由が二つある。

一つ目。

あの二人は手を組んでいる可能性がある。

・・・・

見事に二人だけだれとも遭遇していないのだ。

おそらく夭歌が作戦を考え、もがなが見事に実行しているのだろう。

そのため、迂闊に時間を与え過ぎると危険。

そして、やっかいなのが二つ目。

それは、

『なぜアイテムが都城先輩しか使ってないんだぁぁぁ！！』

最初に翼斗が言ったことを思い出してほしい。

≪あ、言い忘れてた。この敷地内のどっかに逃げ切るために役立つアイテムが隠されてるからな。しかも４つ。≫

≪からな。しかも４つ。≫

・・

≪しかも４つ。≫

そう。４つあるはずのアイテムが未だ１つしか使われていないのだ。

見つかっていないということも考えるが、翼斗は見つけやすい所にアイテムを隠している。

こうなれば、理由は一つ。

あいつらが、アイテムを独占している。

状況は最悪だった。

☆★☆★☆★

「ふう。もうちょっとで逃げ切れるね名瀬さん。」

「そうだな。これで俺等の願いがかなうってわけだ。」

人気が少ない軍艦塔(ゴーストバベル)で二人は行った。

そう、この軍艦塔(ゴーストバベル)も、『旧校舎』も、敷地内、ということになるのだ。

「ねえ名瀬さん。そろそろ此処もばれそうだし、移動しない？」

「・・・それもそうだな。そろそろ移動すっか。」

そう言いながら名瀬は腰を上げた。

「じゃぁ何処に行く？なるべく広いところがいいと思うんだが。」

・・

「校庭でいいと思うな。見つかったとしてもコレで対応できるし。」

もがなはアイテムを指さす。

「それじゃぁ校庭へ行くか。」

そして二人は、軍艦塔をあとにした。

残り時間　２分

☆★☆★☆★

『・・・一足遅かった・・・・・』

急いで軍艦塔へワープした翼斗だったが、一足遅く、そこはもぬけの空となっていた。

『やばいやばい！時間がもうねえ！！』

焦りながら翼斗はとりあえず、といった感じで校庭へワープ。

『さぁどうしたもんかな・・・』

「ん？」

「え？」

そこには、ちょうど二人が居た。

残り時間　1分。

☆★☆★☆★

『まぁてぇぇぇぇ！！！』

「くそっ！最後に見つかっちまったか！！」

「これでもくらって！！」

もがなは筒型の形をしたものを構え、そして発射した。

穴から、網が飛び出し、翼斗に絡まる。

Ｎｏ．２　『捕獲ネット』

穴から粘着性抜群の網が飛び出し、相手の動きを止める。

『ベタベタするぅ！！くそぉ！！まぁぁけぇぇるぅぅかぁぁ！！！』

だがそれは翼斗につうじず、引きずったまま二人を追う。

「うそぉ！！全く効かないじゃん！！」

『前方注意～』

「っ！！」

もがなの前には、先ほどまで後ろで苦しんでいた翼斗が居た。

「あぶねえ！！」

そこへ天歌が介入。

『二人ともつかまぇたぁぁぁ！！』

「くそぉぉ！！」

「仕方ない！！」

名瀬は翼斗にある物を投げた。

Ｎｏ．３　『手榴弾』

爆風で相手にダメージかつ足止め。

もちろん、死なないように改造済み。

『っ！！うおら！！』

翼斗はそれを、

遥か空高く蹴り飛ばした。

「は！？マジかあいつ！？」

残り時間　１０秒。

『くそぉぉぉ！タッチだぁぁ！！』

９秒。

天歌はそれをぎりぎり避ける。

８秒。

「まずい！！」

「名瀬さん避けて！！」

名瀬が後ろへ下がる。

７秒。

そのすきにもがなはある物を取り出す。

Ｎｏ．４　『超強力速乾接着剤』

罠に最適。

圧倒的な速さと接着力で相手をくっつける。

・・・・
もがなはそれを自分の手へつける。
６秒。
そし翼斗に跳びかかり、翼斗の足と自分の手を接着した。
５秒。
『くそぉ！邪魔くせぇ！！』
「名瀬さん！必ず逃げ切って！！」
「喜界島！！・・・ああ！必ず逃げ切る！！」
４秒。
そして天歌はスピードは遅いものの走りだす。
『っ！まぁけぇるぅかぁ！！！！喜界島もがな！！転移先後ろ！！

『腑罪免除(アリバイブレイク)ううう！！！！』

翼斗は『腑罪免除(アリバイブレイク)』を使い、もがなを後ろへ転移させる。

3秒。

そして即座に走っている夭歌の後ろへ『腑罪証明(アリバイブロック)』で移動。

2秒。

『これでおわりだぁぁぁぁぁ！！！！』

1秒。

そして伸ばされた手はーーーーー

☆★☆★☆★

ピー！という終了の音と同時に、翼斗の手は夭歌に触れていた。

「これは・・・・どっちが勝ったんだ？」

夭歌が翼斗に訊く。

翼斗は笑みを浮かべ、

『俺の負けだ。一瞬俺が遅かった。』

そう言った。

『優勝者は、名瀬夭歌。先輩、あなたですよ。』

鬼ごっこ終了。

優勝者　名瀬　夭歌。

後日、翼斗がめだかに土下座をしていた。

その理由は簡単。

夭歌の願いが、

「研究費として、１００万よこせ。」

だったからだ。

そんな翼斗を見て、夭歌は静かに笑ったーーーー

１０万ユニーク記念番外編　『ガチンコ鬼ごっこ大会』その？（後書き）

はい、優勝者は名瀬さんでございました。

さて、長く続いた番外編も無事終わりました！！

次からは本編に戻ります！！

さてこれからも『箱庭の異過者』をよろしくお願いします！！

第七十話　『条件が』（前書き）

久々本編っ！！

第七十話　『条件が』

前回のあらすじ？

翼斗「ニート。」

☆★☆★☆★

「翼斗っ！大丈夫か！？」

すぐそばから善吉の声が聞こえ、俺は目を開ける。

そこには、慌てた表情の善吉と、腕を組んでいるめだかがいた。

『うっ・・・おお・・・・ないすたいみんぐぅ・・・・』

「動くなよ、今鎖を壊すからな・・・・」

善吉が鎖を壊そうと力を込める。

だが、いくら力を込めてもびくともしなかった。

「善吉、私が壊そう。」

めだかが善吉と代わり、力を込める。

すると数秒後、バギンッという音とともに鎖は壊れた。

『くぁ・・・いってぇ・・・・』

俺は身体のあちこちに痛みを覚えながらも、ゆっくりと立ち上がった。

「さて、解放してさっそくで悪いが、何故こういうことになったのだ？」

『一応けが人へのはからいがねえのかお前は。』

そんな俺の返答に、めだかは嘲笑で返す。

「それだけ元気なら大丈夫であろう。」

『・・・まぁいいか。それじゃぁとりあえず俺の知っている限りの事を話すぜ。』

そして俺は二人に説明を始めた。

「ふむ、つまり新庄一年生の過負荷(マイナス)、『役立たず(パンデミック)』によっておそらく無理やりやられた、というわけだな。」

『うむ、ばっちり。』

やっぱりめだかは物わかりがいいな。

善吉はまだ？マークを浮かべてやがんのにすぐ理解しやがる。

「簡潔にいうと翼斗のせいってわけだな。生徒会戦挙をやるのは。」

『やめてそれ傷つく！！・・・ん？生徒会戦挙ってなんぞ？また選挙すんのか？』

俺の質問にさっきまで困惑してたらしい善吉は真剣な顔になり、こう言った。

「戦うのさ。生徒会(おれら)と過負荷(あいつら)でな。」

善吉の言葉に、俺は頭を抱え

『・・・めんどくせぇ。』

ため息を吐いた。

☆★☆★☆★

『くそ、どーしたもんか。』

学園へ急いで行き、理事長室へと向かうために廊下を歩きながら、そう呟く。

「そうだな。理事長が簡単に許すとは思えん、おそらくなんらかの条件を出してくるだろうな。」

『そうなんだよ。全く困った。』

俺とめだかはうんうんと傾く。

「ほら二人とも、そうこうしてる間に着いたぜ。」

善吉の声で立ち止り、上を見ると「理事長室」の文字。

そして再びため息。

「行こう。」

めだかは失礼します。といい扉を開ける。

それに俺と善吉も続くーーーー

さぁ、どんな条件が出てくるかーーーーーー

「ええ、いいですよ。・・・ただし二つ条件があります。」

それきた。

理事長に再び入学させてもらえないだろうか。と頼んだ所、返事はok。

だが、やっぱり条件があるとのこと。

「まず一つ目。次は十三組で入学させます。」

『まぁこれくらいは。もう普通（ノーマル）と装う理由もありませんし。』

一つ目の条件は容易く解決した。

問題は次。

「それで二つ目ですがーーー

『あそこ』で翼斗くんが体験したことを教えてくれませんか？」

第七十話　『条件が』（後書き）

ついに次回、翼斗の過去が明らかに！？

第七十一話　『終わりの始まり　序』（前書き）

とりあえずジャブ的な回。

ここから翼斗の知られざる過去へと進んでいきます。

そして、少し翼斗の過去が書かれている四十五話を編集致しました。

この話を見る前に見ることをおすすめします。

今回は、一段と読みづらいと思いますが、ご了承ください。

第七十一話　『終わりの始まり　序』

前回のあらすじ？

翼斗「土下座するしかねえ！」

☆★☆★☆★

『・・・・チッ』

俺は小さく舌打ちをする。

「どうしました？」

この爺ィ・・・

何故あそこでの事を訊いてくる・・・

何が目的だ・・・

『何故そんなに俺の過去が知りたいんですか？あなたに得も何もないはず。』

「いえいえ、実は知りたいんですよ。・・・私があれほど言ってもやめなかった馬鹿な人達が何をしたかをね。」

知ってたのか。

あいつらが実験をしていると。

『チッ、わかっていたなら何で止めなかったんだ？あの実験のせいでどれだけ子供が犠牲になったか・・・』

善吉とめだかは何の話をしているかわからないようで、首をかしげている。

「言ったでしょう。『あれほど言ってもやめなかった』と。」

つまり何だ。

この爺は俺等を助ける為に注意したとでもいうのか？

それに、こいつは注意しかしなかったんだな。

だって、『助けようとした』なんて一言も言ってない。

『・・・一つ忠告っすよ。その言葉、紅軌の前で一言でもしゃべったら・・・・・

殺されますよ。昔のように、『あいつら』のように。』

そう言いながら俺は少し殺気を込める。

そう忠告してやると理事長は少し震えながらも答えた。

「わかっていますよ。新庄くんにその話は禁句ということはね。」

「翼斗、そろそろ何の話をしているのか教えてくれないか？」

善吉が俺に訊いてくる。

『・・・後で話す。』

「それでどうします？条件を・・・受けますか？それとも・・・」

ここが悩みどころだ。

過去を話さないまま平穏にくらすか。

過去を離して過負荷（あいつら）と対峙するか。

二択。

『・・・もうちょっと考えさせてはくれませんかねぇ、まだ答えは出そうにない。』

俺の言葉を訊いたあと理事長は少し考え、

「いいでしょう。５分くらいなら待ってあげますよ。」

椅子に座りお茶を飲んだ。

そして俺も同じく座り、頭を抱える。

『・・・決めました。』

きっかり5分後、俺は理事長にそう言う。

『俺は話す。過去のしがらみを、過去の汚点を、過去の経験を。理事長、いや生徒会のみんなに話します。』

決心がついた。

俺はみんなに打ち明ける。

いつまでも止まっていたら何も始まらない。

一歩を踏み出さなければ。勇気を出さなければ。

過去の呪縛からは逃れられない。

『1時間後、ここにまた集合しましょう。めだかは生徒会と善吉の母さんを集めてくれ。』

「ちょっと待ってくれ。何で俺のお母さんを呼ぶんだ？」

『あの人も俺の過去に関係あるからだよ。』

そう言い俺は立ちあがり、出口へ向かう。

「翼斗は何処へいくんだ？」

善吉が訊く。

『ちょっとな。過去の産物を、全ての一部始終を取ってくる。』

そして俺は箱庭学園をあとにし、家を目指した。

☆★☆★☆★

『みんな、揃ったな。』

1時間後、理事長室へ集まった生徒会と理事長へ向かってそう言う。

「何が始まるの？」

もがなが俺に訊く。

『・・・これから俺の過去を話す。これは過負荷(あいつら)・・・いや、紅軌と深く関わっている話だ。みんな真剣に訊いてくれ。』

俺がこう言うと、全員の顔つきが変わった。

『・・・よし、それじゃぁ話す。

まず始めだが、俺が生まれると同時に父が死んだ。』

「「「「っ！！」」」」

めだか達が顔を驚愕に染める。

『死因は心不全。母の話によると本当に俺が生まれると同時に、部屋の外で待っていた父が倒れたらしい。昨日はすごく元気だった父がな。』

『そして、俺が生まれた後、俺の母を不幸な出来事を襲い始めた。リストラ、ひったくり、空き巣、全治一カ月の怪我、詐欺。まだまだあるが、言いだしたらきりがない。』

「まさか・・・そんな・・・」

もがなが呟く。

『そんな不幸な出来事が続いていた時、ちょうど5歳の時に、ある奴が隣に引っ越してきた。その人が・・・』

「古賀さんだね。」

阿久根先輩が答えを言った。

『そう、古賀いたみ。そして俺達は家が隣なこともあってかすぐ仲良くなった。いつも一緒にいるような仲にな。そしていたみと出会った一年後の六歳の時から、異常(アブノーマル)が開花し始めた。』

『当然、3ケタのたし算や割り算、などを六歳でやるような子供はいない。ましてや年上にやめろ。と言うような子供なんてなおさらだ。そしてその頃から、母はある医師に相談するようになったんだ。』

「・・・それが私よ。」

人吉母が静かに言った。

「彼女は言ったわ。「息子が周りとは違う。こんな子供耐えられない」と。私は何度も言ったわ。病院に来なさいと。もしかしたら治るかもしれないと。」

『瞳さんの言うとおり、母は相談していた。だが、それも限界に達し、母はある決断をした。

・・・・・・・・・・・・

息子を預けようと。いや違うな。実験体として提供しようと。』

「それは違うわっ！！」

人吉母が大声で否定する。

『何が違うんです？俺の母が俺を奴らに売った。そうでしょう？』

「・・・違うわ。あいつは売っていない。一方的に奪っただけよ。」

「私のいた病院には、強行派と穏便派がいたわ。私は穏便派。強行派はどうしたら異常を治し、さらに異常にすることができるか、を実験すべきと主張していた。だが、その意見は通らず。強行派はいらいらしていたの。」

『そこで、反対を押し切って強行手段に出たと。』

人吉母は小さくそうよ。と言った。

「あいつらは異常な子供を持って悩んでいる人に話を持ちかけた。「そんな子供手放したくありませんか？実は今実験をしていましてね。手伝ってくれる子供が足りないんですよ。」と。もちろん。金を渡すといいながら、あいつらは一銭も払っていないわ。」

善吉が小さく「・・・ひでぇ。」と言う。

『そして俺はある日、黒服の人達にさらわれた。

そしてここから、終わらない無限地獄が始まったんだ。』

第七十二話　『終わりの始まり　破』（前書き）

注　今回は結構強引なところが複数あります。

それが気に食わない、憤りなどを感じる方がいらっしゃいますなら、この話をみないことをおすすめします。

注　今回の前回のあらすじ？はおやすみです。

第七十二話　『終わりの始まり　破』

WANING

これ以上先に進むと、もう後戻りすることはできません。

それでも進みますか？

☆★☆★☆★

目が覚めると、そこは冷たい床の上だった。

目の前には、鉄格子。

床と壁はコンクリート。

もちろん、窓もなにもない。

そんな牢獄みたいな所に、翼斗は転がっていた。

『ここは・・・・どこだ・・・・』

目をこすり、今自分が見ているこの光景が現実だということがわかる。

周りを見ると、大きい、小さいと大きさがさまざまな子供が翼斗と同じように転がっていた。

「目が覚めたか。」

そこへ、一人の男が現れた。

白衣を着ていた。

そして、顔は覆面で覆われており、見えない。

だが、翼斗は目の前にいるこの男が奇妙な笑みを浮かべていることが、感覚でわかった。

男は携帯電話を取り出し、誰かに連絡をする。

「験体ＮＯ．４４が目を覚ましました。・・・はい、すぐに連れて行きます。」

連絡が終わった男は鉄格子を開け、翼斗の腕を掴む。

「さぁ、来い。」

『・・・何を・・・するんだ・・・？』

「お前が知る必要はない。」

翼斗の質問を退け、男は無理やり檻の中からだした。

「歩け。」

『・・・ハッ、これから何をするのか教えてくれたら歩いてやんよ。』

男の命令を、翼斗は挑発的な言葉で返す。

「・・・チッ、生意気なガキだ。」

『ガァ！！』

翼斗の態度にいらついたのか、男は翼斗を蹴り飛ばす。

「これ以上言うならもっと痛いことをしなきゃいけなくなる。黙って歩け。」

『・・・・くそ。』

翼斗は自分の足が微かに震えているのに気付き、歩きだした男の後ろに黙ってついていった。

☆★☆★☆★

『そして男について行ってみると、そこは手術室だった。そう、俺等は「実験」させられるために連れてこられたのさ。』

「実験って何のだ？」

善吉が俺に訊く。

翼斗は乾いた笑みを浮かべ、

『どうやれば異常を治し、至って平凡な普通な人間にできるか。そしてどうやれば人為的に異常な人間を作ることができるか、を『俺達の身体』を使って実験したのさ。』

「・・・具体的にどんな事をされたのだ？」

めだかは最初後悔していたが、意を決して質問した。

おそらく一番やばい質問を。

『訊きたいか？おそらく訊いたらここに居るやつら全員がこう言うと思うぜ。『ひどすぎる。訊くんじゃなかった。』ってな。それでもいいか？』

全員に意思を確認する。

全員に確認を取ったところ、全員うんと頷いた。

『よし、それじゃぁ準備が必要だな。・・・理事長、パソコンあります？』

「ありますよ、ちょっと待ってください。」

理事長は一旦パソコンを鳥に行くために、理事長室を出た。

「はい、どうぞ。」

理事長からパソコンを受け取り、そこにＵＳＢメモリを指す。

『奴らはこう考えた。「異常なのは遺伝子、つまりＤＮＡによるもの。それならば、異常なＤＮＡを他の人の中に入れたらどうなるだ

ろう？」と、まぁそれが主な実験だな。

だが、奴らはそこまで高度な医療機器を持っていなかった。

そこで考えたのが、異常な人間の身体の一部を違う異常な性質を持っている身体を取りかえる、

まぁ簡単に言えば、身体の一部を切断してそこに違う奴の身体の一部を縫合する、っていうことだな。『

「「「「「っ！！」」」」」

生徒会と、おそらく知らなかったであろう人吉母から驚きの声が上がる。

『まぁ、それだけでも十分恐ろしいんだが・・・・あ、これ見て吐くなよお前ら。』

そして、ＬＯＡＤＩＮＧと書いてある下の数字が、１００％になった。

『なにより恐ろしいのが、その実験は全て麻酔なしでやられる。』

≪グァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！≫

画面に幼い俺の悲鳴が上がる。

そして目の前で右腕を切断する。

その状況を見て、理事長以外全員はめをそらした。

『これは俺の右腕を切断している映像だな。まぁ、ご丁寧にあいつらはこういった風に全ての実験を映像に納めてらっしゃる。全く、ご苦労なこった。』

だが、翼斗の言葉はほとんどの人に届いていない。

なぜなら、ほとんどが目をそむけ、耳をふさいでいるからだ。

『んっと、これじゃぁ話が進まんな、消すか。』

そう言って俺は映像が流れているパソコンのＵＳＢメモリを抜く。

『まぁ、こんなことしたって無駄なんだがな。だが奴らはあきらめなかった。何度失敗を繰り返しても。より酷い内容にして繰り返した。』

「・・・っ」

めだかが歯を食いしばり、拳に力を込める。

『そして、そんな日々に俺の心は確実に壊れて行った。普通なら一日で壊れるレベルなんだが・・・・・壊れなかったのは『あいつ』のおかげだな。』

「それが・・・紅軌くん？」

人吉母が俺に恐る恐る訊く。

『ああ。実験が始まって一日目で俺と紅軌は檻の中で知り合った。紅軌の心は強く、まだ希望を捨ててはいなかった。そして何より、あいつは笑顔だった。「絶対に母さんが助けに来てくれる」と捨てられたのにまだ母を信じていた。

そんなあいつにつられ、俺の方も自然と笑顔になった。』

『まぁ、その笑顔も続いたのは一カ月程度。終わらない実験に俺等の心は壊れた。そしてあいつはそのせいで・・・・狂った。』

『そして、実験に耐え続けて五年。』

「「「「「「っ！！」」」」」」

今回はさっきのに比べ理事長も驚いた。

まぁそれもそうだ。

五年、もの長い間俺等は実験されていたのだから。

『今日の実験が終わり、檻の中でぼーっとしていた俺に紅軌が話しかけてきた。』

「なぁ、お前もうこんな生活やだろ。」

当然、嫌だったら俺は首を縦に振った。

「それじゃぁさ、ここの敵全員『ぶち殺して』、ここから逃げねえか？」

この一言から、全てが全てが終わり、始まった。

第七十二話　『終わりの始まり　破』（後書き）

もっとうまく文章を書きたいので、

できればアドバイスをくだされば嬉しいです。

第七十三話　『終わりの始まり　急』（前書き）

今回の前回のあらすじ？もお休みです。

第七十三話　『終わりの始まり　急』

『・・・・確証は？』

「？なんのだ？」

俺は脱出したい。

だが、捕まった時を考えると、恐ろしかった。

『逃げられる確証だよ。本当に俺等は捕まらずに逃げ切ることができるんだろうな？』

俺は殺すことについては何もふれなかった。

なぜなら、いくら憎くても、いくら怒りを抱いていても、

殺してしまっては、奴らと同じ存在になるんじゃないか、と、思っているから。

「ああ。俺とお前が手を組めば、怖いもんなど一つもねえよ。余裕だ余裕！！」

紅軌は無邪気な笑顔でハハハッと笑った。

『・・・少し考えさせてくれないか？気持ちの整理がしたい。』

俺の中では二つの考えがうず巻き合っていた。

紅軌を信じてみよう、という考え。

そしてもう一つが、

紅軌(こいつ)は最初ここであったばかりの奴だ。こんな奴を信用していいのだろうか、という考え。

俺は紅軌に一晩考える時間をもらい、一晩中腕を抱えて悩んだ。

次の日、俺は紅軌に向かって自分の意思を言った。

『俺はお前と手を組む。こんな腐ったとこまっぴらだ。一緒に脱出しようぜ！！』

紅軌を信じてみよう。

そういう結末を俺は出した。

「よし、それじゃぁどうやって逃げるか考えないとな。絶対に捕まらず、奴らに復讐する方法をな。」

この時、違う選択肢を選んでいれば、どうなっていたのだろうか？

あの結末は、変わっていたのだろうか？

☆★☆★☆★

俺等はその次の日の夜中を、作戦決行日にすることに決めた。

それにはちゃんと理由がある。

今、ここでは実験対象者、つまり俺等と同じ子供が何らかの死をとげているのだ。

それも連続。今日で１０人目だ。

死因は、全て出血多量。

凶器は、全て『刃のついた凶器』、ということが傷跡からわかっている。と、誰かが話していたのを聴いた。

それにより、異常な警戒態勢をはっているのだ。

普通なら、こんな時に脱走するなど何を考えている？なのだが、

普段は、檻の前に見張りが一人が立っており、夜中には普通に寝ていた。

だが今は、夜中のある程度の時間に、見張りを交代しに行くのだ。

交代の仕方は、見張りが一旦でていき、何分後に新しい見張りがくる。

つまり、新しい見張りに代わる時間、その間は無人なのだ。

作戦は、こうだ。

紅軌の異常が「鎌を呼び出す」なので、それで檻を切り裂く。

そして即座に檻を出て、逃走。

追ってきた場合は、やむを得ず切り裂く。

というシンプルな内容だ。

そして、その日の夜、俺等は見張りが居なくなった隙に、作戦を実行した。

☆★☆★☆★

『・・・というわけだ。』

「ちょっと待ってくれ。」

ここまで話終わったところで、善吉が俺に質問する。

「ていうことは無事に脱走できたんだろ？それなら何で紅軌を憎んでいるんだよ。」

善吉の質問に、みんなは「あっ！」と声を上げる。

『・・・なぁ、もし紅軌（あいつ）は俺が作戦を断ったらどういうつもりだったと思う？』

俺の突然の問いに、みんなが頭を抱える。

「おそらく一人でも実行したのではないか？」

・・・・・・・

『その通りだ。あいつはおそらく一人で実行していた、それに、一人で実行できていた。』

そう、あいつは一人でもできていた。

なんせ檻を破壊するほどの武器、鎌を持っているのだから。

『思い出して欲しい。紅軌は檻を破壊できるほどの武器を持っていた。

『それじゃぁ何故、もっと早くに脱走しなかったんだ？』

みんなが「っ！」と声を上げる。

その理由は明確。

『最初はあいつの武器はそこまで切れ味のよくない、只の鎌だったんだ、だが、あいつの武器は『血』によって、切れ味を増す。』

全員が事実に気付き、顔を青くする。

『つまり切れ味が上がったのは、紅軌が『子供らを殺した』そういう結末に行きつく。』

作戦を実行する仲間が集まったら、それ以外の奴を殺し、切れ味を上げる。

自分が生き残るために、他の奴らを蹴落とす。

あいつはそういうことを平気でしていた。

『それに、ここからは俺の考察だが、おそらく紅軌は俺を、『確実に逃げ切るための生け贄』としようとしていたんじゃないか、そう俺は考えている。』

もし、追ってが多すぎて、捕まりそうになったら？

もし、追ってがそこまで迫っていたら？

捕まる、そういう状況を想定し、紅軌は『確実に逃げ切るための生け贄』を用意していたのだ。

『そしてもう一つ、逃げ切った後、紅軌はもう一度あの中へ戻って行った。なんでだと思う？』

俺の問いに、めだかは戸惑いながらも答えた。

「・・・全員を確実に殺すため。」

☆★☆★☆★

男は鎌を振り下ろす。

グサッ、と何かが刺さる音がする。

男は『人だった』肉片を踏み潰す。

グシャリ、と肉が潰れる音がする。

「ククク・・・・フフフ・・・・・・・・

あははははははははははははははははははははははははははははははは

ははははははははは！！！！！！」

そして、狂った男の笑い声が聞こえる。

第七十四話　『終わりの始まり　終』（前書き）

今回も前回のあらすじ？はお休みです。

やっと過去終わった・・・・

第七十四話　『終わりの始まり　終』

赤く染まった地の上に、男は立っていた。

もう一人の男は、その姿を見て激昂する。

なぜなら、男の手には、尚も血を滴らせてる『生首』が握られていたから。

生首を持ち佇んでいる男は思う。

こいつはまだ俺の事を信じていたのだろうか？

激昂している男は思う。

最初に見せたあの笑顔は、偽りだったのか、と。

☆★☆★☆★

『脱走してから数日の間、俺は実の母親を探していた。だがなかなか行方は見つからない。当然、住居も越しているし、手掛かりはゼロなのに、俺は探し続けた。』

捨てられたのに、

提供したのに、

見捨てられたのに、

それでも、俺は、母親を愛していた。

「探し続けた、ってっことは、見つかったのか？それとも・・・・」

善吉が俺に訊く。

『答えは前者さ。見つかった。』

俺の答えを聴いて、生徒会メンバーが安堵の息をする。

『殺されてる現場で、俺は『母だった物』と再会したよ。その傍には、母の生首を持ちながら不気味な笑みを浮かべている紅軌がいたさ。』

その場にいた全員が、驚愕の表情を浮かべた。

☆★☆★☆★

『あ・・・・あ、どういうことだよこれ・・・・』

「ん？どうしたんだ翼斗、

・・・・・・・・・・・・・・・
この光景のどこがおかしい？」

その一言で、俺の何かが切れた。

『うわぁぁぁぁぁぁl！！』

悲鳴にも聞こえる声を上げ、紅軌に殴りかかる。

だが、あっけなく俺の拳は止められた。

そんな俺を、紅軌は笑いながら見つめている。

「おいおい、こいつはお前を『見捨てた』奴だぞ？なんでそんな奴が殺されただけで、混乱してんだよ？」

そう言って紅軌は首のない『母だったもの』を蹴り飛ばす。

『だからって！なんで殺したりしたんだよぉ！！』

そう言いながら俺は蹴りを放つ。

あきらかに避けられないほどの蹴りだったが、『今』を奪われてしまえば、避けるのは容易。

『俺の今』を奪われ、気付いたら相手は避けていた。

「ん？そりゃぁ・・・・・

なんとなく？」

紅軌のその言葉で、俺の理性は完全になくなった。

『・・・殺す。』

「あ？」

聞こえなかったのか、紅軌が訊きなおす。

『殺すって言ってんだよ下種やろぉぉぉぉぉ！！！！！』

「いいねその表情。ぞくぞくする！！もっと俺を楽しませろぉ！！！！」

そして、仲間どうしだった二人の殺し合（たたかい）いが始まった。

☆★☆★☆★

『決着は、紅軌(あいつ)の勝ち、まぁ当時の俺は戦い方なんか一つも知らなかったからな。当然だ。』

俺が話終わった後、辺りは静まり返っていた。

『そしてその後、俺は過去に区切りをつけて箱庭(ここ)に入ったつもりなんだが・・・・

まだ区切りはついていなかったみてぇだ。』

そう言って俺は目から流れ落ちていた滴を拭う。

「翼斗・・・」

めだかがなんか憐れみというか同情というかまぁそんな視線を俺に送る。

『・・・これで俺の過去は全て話し終えました、これでいいですか？理事長。』

「え、ええ。」

どうやらこれで再入学できるみたいだ、ほっ。

一時はどうなるかと思った・・・・・

そう思いながら俺は理事長室を出た。

「翼斗にそんな悲惨な過去があったとは・・・すまん。」

『刹那に忘れろ。善吉に知られるとは、一生の不覚だ。』

「ひでぇ！！」

「二人とも、早速次の庶務戦に向けての作戦会議をしよう。」

『「ああ！」』

待ってろよ紅軌

今度は負けねえ

絶対、勝つ！！

☆★☆★☆★

翼斗が過去を話しおえた頃、

和室、そこに一人の男が眠っていた。

その目から、一筋の涙が流れ落ちたーーーー

１００万アクセス記念番外編　爽快☆翼斗くんの休日（前書き）

そういえば１００万アクセス突破したな・・・・

ということで息抜きの番外編です。

まぁ本編は今シリアスですし、こういうほのぼのしたのも書きたいんですよ、はい。（本音）

それでは、１００万アクセス記念番外編、どぞ。

１００万アクセス記念番外編　爽快☆翼斗くんの休日

日曜日。

それは、おそらく全国民（全てとは限らん）がゆっくりと休んだり、羽目を外して遊べる日。

今回は、そんなとても素晴らしい日の翼斗くんの一日です。

☆★☆★☆★

８：００

翼斗の休日は爽やかな目覚めから始まるーーーーー

≪うわぁぁぁぁ！！だれか！！助けてくれ～！！やつが！！ｙ『・・・うるさい。』

なんと素晴らしい朝でしょうか。（嫌み）

翼斗はまだ半覚醒状態の脳を必死に動かし、携帯電話を取る。

あ、さっきのちなみに着信音。いや、着信ボイス。

画面には、金城（永遠にかかってくんな馬鹿野郎）と書かれていた。

翼斗はまたかよ・・・と呟く。（何のことかわからん人は第二十三話を振り返ってみてね☆ミ）

翼斗はため息を一つ吐き、嫌な顔をしながらも電話に出た。

『フィー。おーす、よーくーとーだーよ・・・・』

「・・・お前、まだ起きてなかったのかよ。」

『何をいう。休日は寝なきゃだめだろ。ｈａｖｅ　ｔｏだよｈａｖｅ　ｔｏ。』

銀二が呆れたように声を上げるが、翼斗は当然のように言い放つ。

『んで、なんだよ。また攻めてきやがった！！・・・とか言ったら顔をキ〇ィちゃんの形にしてやるからな。』

「その形怖ぇよ！！・・・まぁ、今回はそんなことじゃねえよ。」

銀二は頭に浮かべた形に恐怖しながらも、翼斗の言葉を否定する。

『じゃあなに。解散？おおやったーーー。これで俺も解放されるねうん。』

「・・・俺達の傘下に入りたいって奴らが来てんだよ。」

『・・・・・・・・・・・・・・・え？』

☆★☆★☆★

９：３０

翼斗はいつもはわずか２０分で来るところを遠回り中の遠回りをして行った。

ルート的には、隣町を通る。

とりあえず指定された空き地に来てみると、

『・・・あっ、駄目だこれ。俺こんなかに入る勇気ねえよ？』

そこには、いつもの『レッドサターン』＋１７人が居た。

はたから見れば、「俺達悪い子ちゃんでーす」の集団。

はたから見なくても、暑苦しいヤンキーな集団。

そんな集団に、翼斗は混ざりたくなかった。

「おっ！翼斗が来たぜっ！！」

銀二が声を上げると、そこに居た人たちが一斉にこっちを見る。

「あれが・・・・」「随分弱そうだが・・・・」とひそひそ話も聞

こえる。

そんな状況下に、根っからのヤンキーっていうか健全な男子高校生が耐えられるはずもなく、

『・・・・戦略的撤退。』

静かにゆっくりと後ろを向き、ものすごいスピードで走りだした。

☆★☆★☆★

１０：００

「めだかちゃん、なんだよこんな休日に呼び出しといて。」

所変わって箱庭校門前。

そこには翼斗以外の生徒会メンバーが集まっていた。

「うむ。今回集まってもらったのはほかでもない、」

めだかの言葉に、全員が息をのむ。

「・・・バッティングセンターに行こう。」

その言葉で、一気にこの場が凍りつき、全員がずっこけた。

「えーっとめだかちゃん。ちょっと聞こえなかったからもう一度言ってくれるか？」

「バッティングセンターに行こう、無論、今からだ。」

善吉が頭に手を当て、ハァーっと息を吐く。

「突然どうしたんですか？バッティングセンターに何かあるんですか？」

「実は先日野球部の練習を見学したのだが、楽しそうでな。私もやってみたいとおもったのだ。」

まさかの理由。

「・・・つまりなんだ、お前は昨日たまたま野球を見たら楽しそうだから私たちも行こう。って言いたいのか。」

「うむ。思い立ったが吉日だ。」

再び、善吉がため息を吐く。

「まぁ、俺はいいけどよ。どうせやることも何もなかったし。喜界島と阿久根先輩は？」

「私は水泳以外あんまり得意じゃないけど大丈夫だよ。」

「もちろん。」

全員一致。

「それじゃぁ行くか。」

「待つのだ善吉。」

善吉が早速出発しようとするのを、めだかが止める。

「翼斗が居ないぞ。ここは生徒会みんなで行こうじゃないか。」

「・・・でもあいつ今日は忙しいとか言ってたような。」

昨日の翼斗の言葉をめだかに言う。

「どうせ家で寝ておるのだろう。ともかく、かけてみなければわからん。」

「それじゃぁ、かけるか。」

善吉は携帯で翼斗の番号にかける。

≪PLLLLLLLL，PLLLLLLLLLL．．．．．．≫

だが、なかなか出ない。

「ほら、やっぱり寝てんじゃねえか？起こすのは悪いだｒ≪ガチャッ≫お、出た。」

善吉が切ろうとすると、その電話がつながった。

「おいｙ≪ハァ、ハァ、ハァ、もしもし・・・・ちっ！あいつら早ぇ！図体でけぇ癖に！≫・・・・」

電話の向こうからは、疲れた様子の翼斗、それにかすかに少しだけ「待てーーー！！」という声も聞こえてくる。

「・・・・すいません間違えました。」

≪ちょっと待て！！助けてくれぜｎ　ブツッ　　ツー、ツー、ツー≫

善吉は静かに間違えました、とだけ言い、静かに通話終了ボタンを押した。

「ん？なんだ？都合が悪かったのか？」

「ああ・・・・絶賛忙し中☆だったぞ。なんかあわただしかったし、おそらく近所の小学生と鬼ごっこでもしてるんだろ。いや、そうに違いない。そうだと信じたい。」

善吉はさぁ行こう。待っててもアイツは１００％来ない、といい、生徒会一行は翼斗を欠けたままバッティングセンターへ向かったーーーー

☆★☆★☆★

１１：３０

『はぁい、俺がレッドサターンのＮｏ．１の榛原っす。ああ・・・だれかＨｅｌｐ・・・・』

あの後、実に１時間３０分も逃げ続けた翼斗はついに銀二率いる捕獲隊に捕まり、イスに縛り付けられていた。

そして、只今新しい仲間となる予定の１７人にごあいさつ中。

『はい、訊きたいことは・・・・・？』

そう翼斗が訊くと、一人がおう、と手を上げた。

「弱そうなんだがよ、本当にお前ＮＯ．１なのか？」

『そうなんだよ・・・・俺弱いのにね・・・・答えはＮｏ。なぜなら今日やめるから・・・・すまん嘘です。』

なんとか自然にやめようとしたが、銀二がいい笑顔でこっちを見ていたのでやめた。

『はいほかぁ・・・・』

そう翼斗が同じ奴がまた上げた。

ほかと言ってんだろうが。

と心の中で吐く。

「俺は上となる奴の強さはこの目でみなきゃ信じねえんだよ・・・・つーわけで、これから俺と戦え。お前が負けたら・・・・そうだな、これから俺がお前らのＴＯＰだ。」

『ああ・・・・いいよ・・・・なんなら全員でもいいよ・・・・・・』

深く考えず翼斗は応える。

そんな翼斗を、１７人全員が大笑いした。

「ハッハッハッ！！！きいたかお前ら！！仮にも他の暴走族と抗争している俺等を全員相手にするだとよ！！ギャハハハハ！！！」

『もうわかったよ。これ外して金城・・・・・ちょっとストレス発散するから・・・・』

翼斗が銀二に頼んで鎖をはずしてもらい、首と手をポキポキ、と鳴らした。

「おい！！こいつマジで一人でやるつもりだぜ！！ハハハハ！！！」

『・・・金城。結果、こいつら俺等の傘下には入れん。

ここで俺のストレス発散道具にするわ。』

その数秒後、周辺に男の悲鳴が響き渡った。

☆★☆★☆★

１３：００

バッティングと昼食を済ませた生徒会は、次なる目的地をみんなで決めていた。

「ふむ、次は市民体育館はどうだ？」

「なんで運動系ばっかなんだよ！！」

善吉がすかさずめだかにつっこむ。

「それじゃぁ市民プールは？」

「こんでるだろう！そんなとこ行ったって泳げねえよたぶん！！」

「じゃぁどこがいいというんだい人吉くん。」

阿久根の言葉に、善吉は一回硬直。

そしてその後、うーんと考え出した。

「ゲーセンとかは？」

苦し紛れにだした意見、ゲームセンター。

「ゲームセンター・・・ゲームはあまり得意ではないのだが・・・・」

「お前はゲーム得意どころかしてるとこ見たことないぞ。」

あれ、こいつゲームしたことあるっけ？とまた善吉が考え出す。

高貴はこれじゃぁ一向に決まらない、とみんなに語りかけ、最終的に目的地はゲーセンとなった。

☆★☆★☆★

１５：００

『・・・疲れた。』

暇つぶしにきた公園のベンチで、自動販売機で買ったコーヒーを飲みながら翼斗は呟いた。

結局、戦った結果は言うまでもなく完勝。

相手は土下座までして舎弟になりたがってたが、全力拒否。

そして金城達を置いて一人で逃げてきたのだ。

これぞ、現実逃避。

翼斗はそうだ、と何かを思い出したように携帯を取り出す。

そして、着信履歴の中の善吉に画面をあわせる。

『そういえば何のようだったんだ？かけてみっか。』

さっきの事が気になった翼斗は、善吉の番号にかけた。

≪ＰＬＬＬＬＬ，ＰＬＬＬＬＬ．．．．．．．．ガチャッ
もしもし？≫

善吉の声が聞こえたので俺だ、と答える。

『さっき何の用だったんだ？いきなりかけてきて。』

≪ああ、めだかちゃんがいきなりバッティングセンター行こうって言いだしてな。それについてだ。≫

『・・・あいつらしいな。』

二人でうんうん、と呟く。

そして翼斗はふと、電話の後ろで聞こえる、声に気がつく。
それは、生徒会の声ではないが、聴いたことがある声だった。
『ん？なんだか騒がしいが、なんかあったのか？』
≪ああ、なんかヤンキーの一人がめだかちゃんと喜界島にナンパしてんだよ。ま、ご愁傷さまってわけだな（両方とも）≫
翼斗の第六感が働く。
・・・嫌な予感。
『なぁ、もしかしてそいつら、赤のジャケット羽織ってたりする？』
≪・・・よくわかったな翼斗。知り合いか？≫
赤のジャケット。
それはレッドサターンのメンバー全員（翼斗以外）がつけている物だった。

おおう。

『・・・・・・・』

≪ん？どうした？≫

翼斗は悟った。

（あいつら終わった。）

『善吉。ご愁傷様（笑）ｂｙ　翼斗ってヤンキーに伝えといて。』

≪はぁ？どういうことだｓ『じゃぁの。』ちょっと待ｔ　ブツッ
ツー　ツー　ツー≫

翼斗は切れた（切った）携帯電話をしまい、両手を合わせて空を見て言った。

『・・・・南無三。』

１００万アクセス記念番外編　爽快☆翼斗くんの休日（後書き）

はい、レッドサターンどんまいです。

まぁどうなったかは・・・まぁ言わなくてもわかると思います。

さて、次からは本編です。

当分こんな番外編を描くこともないでしょう（泣）

それでは、また次回。

第七十五話　『地獄の特訓』（前書き）

・・・禁書の小説始めた。

だが、更新は怠らないよう努力したいと思う！！

第七十五話　『地獄の特訓』

前回のあらすじ？

翼斗「グロありがとうございます。」

☆★☆★☆★

7月25日、庶務戦当日。

当然、俺等からは善吉が出るわけで、俺は応援に向かったのだが・・・

今、俺は時計台地下の研究施設への出入り口、『拒絶の扉』だった所にいる。

何故、こうなったかって？

・・・順を追って説明しよう。

まず、善吉の応援に行こうとする。

そして、そこで善吉とばったり遭遇。

とりあえず善吉と一緒にめだかの所へＧｏ。

善吉が扉を開けるとまさかの着替え中。

・・・・チッ、ラッキーボーイめ。

俺は善吉の影で見えんかったんだよ。

そして、めだかと（何故か善吉）が着替えるのを待つ。

出てきた瞬間、めだかにこう言われる。

「善吉の応援する暇があったら翼斗も修行すればいいのではないか？」

刺さったさ。こう、グサッと。

日之影先輩に凶化合宿を断られたばかりだと言うのに、それを言うか、と。

『・・・修行っつたって、何すればいいんだよ。バトルマンガっぽく滝に打たれても意味ないんだぜ？』

そう俺が返すと、

「鍋島三年生辺りにでも相手してもらえばいいのではないか？」

『いや、あの人と戦(やる)うと戦いじゃなくなる危険あるから。それに、俺おそらく負けないと思う。』

とめだかに即答している間、俺の頭にある考えが浮かんだんだ。

『あいつら』と戦えばいいんじゃないか？

と。

ということで、俺はわざわざ理事長の所まで彼ら一人ひとりの電話番号を聴きに行き、そして現在に至る。

『・・・さて、どんな刺激的な戦いが待っているのかなぁ～！！』

そう俺は言いながら地下を目指した。

☆★☆★☆★

『ん、始まったか。』

『目撃者（ウィットネス）』で善吉たちを見ていると、ついに庶務戦が始まった。

『それにしても、毒蛇の巣窟か。これは善吉に分が悪いな。相手は落ちても『なかったこと』にできる、それに比べて善吉は落ちればソッコーｏｕｔ。命を落とす危険が高いな・・・・っと、ついた。』

と独り言をしゃべりながら歩いていると、目的地、地下十三階へついた。

そこは前、スーパーコンピューターがたくさん置いてあったのだが、研究を凍結されたため、今は撤去され、何もない所になっている。

『さーて、もう来てるかなっと。』

と俺が周りを見渡すと、遠くに六人の人影。

とりあえずそこへ近づく。

『すまん、待たせたな。』

そう俺が言うと、その中の一人ーーーーーー『糸島軍規』は笑みを浮かべながら返す。

「家で引きこもっている『裏の六人』を全員呼ぶっつーことわ！なんかおもしれぇ事があるんだろうなぁ榛原ぁ！！」

そんな軍規の言葉を俺は口元を歪ませながら答える。

『いやさ、『あの時』俺お前の誘い断っただろ、ほら「一緒に殺んでくれや！！」って奴。

今度からはこちらから誘わせてもらおうか。『俺と一緒に殺(あそ)し合いねえか？(ば)』

俺の言葉を訊くと、六人全員が一瞬驚き、その後全員が笑い、こう言った。

「「「「「「仲良くしてね」」」」」」

『ああ、仲良く殺(あそ)ぼう！』

さぁ、地獄の特訓、『狂化合宿』の始まりだ。

第七十六話　『副会長戦二戦目』（前書き）

テストが終わった嬉しさから早く執筆。

みなさん驚いていると思うが一番驚いているのは作者だったりする・・・

第七十六話　『副会長戦二戦目』

前回のあらすじ？

翼斗「ん？剣道部の合宿へ逝ったぞ？」

☆★☆★☆★

8月15日。

今ここで一つの戦いに決着がつこうとしていた。

「なぜなら俺はいつだって！強さでも速さでもなく！拳骨一つで戦ってきたんだっ！！」

副会長戦ーーーー代理出場の日之影空洞は、力を目いっぱいこめた拳骨を、自身が立っていた鉄柱へとたたき落とした。

普通なら絶対に壊れないほどの強度をほこる鉄柱が、高校生の拳骨一撃で、見事に砕いた。

「っ！！鉄柱を折りーーーーいや砕きっ！？」

「お前の過負荷（マイナス）で押し付けられるのは自分のダメージだけなんだろう！？こちらから一方的に押し付けるだけでたとえば鉄柱のダメージを肩代わりしてやることはできないんだろ！？」

「くっ！！」

落下しながらも、日之影は空中で体制を変えていく。

「そんなお前の過負荷（マイナス）は黒神よりも完全で、球磨川よりも最低で、榛原よりも恐ろしい。だけどこれはスキルを競う戦闘ではなく、志を競う選挙だぜ？ほら、お前は覚えているか？この『狂犬落とし』のルール。」

そして日之影は、落ちながらも蝶ヶ崎の頭を掴む。

「てめぇ！！まさか自爆覚悟の引き分けねらいか！？」

「引き分け？ははっ！過負荷（おまえたち）じゃあるまいし、狙うかそんなもん。お前たちもいい加減俺達って奴がわかってねーな！ま、その辺もおいおいわかりあっていこうや！！」

そして、二人の身体が地へと、叩きつけられた。

辺りを、轟音と砂埃が舞う。

砂埃が晴れた先にいたのは、日之影に地面に抑えつけられている蝶ヶ崎と、その上にのっている日之影の姿だった。

「くそっ！落下のダメージは地面に押し付けたものの・・・」

「そうですね。ダメージの有無は勝敗には関係ありません。」

そして、長者原は、勝敗を告げた。

「一方、日之影さまは蝶ヶ崎さまの身体の上に一方的に乗っており、地面とは何の接点を持っていません。。よって副会長戦は日之影さまのの勝利です！！」

そして、辺りを歓声がつつみこんだ。

「「「「「いっつも通り！！日之影先輩の勝ちだぁぁぁ！！！」」」」」

応援していた一般生徒たちが、日之影に近づこうと走り出す。

だが、その生徒たちを選挙管理委員の人達が止めた。

「それでは一般生徒のみなさん。これより副会長戦の二回目を行いますので、即急にこの場から立ち去り願います。」

相手の副会長は、二人。

つまりもう一度、副会長戦を行わなきゃいけない。

「なお、ここで二回目も勝敗の回数へ入れてしまうと、最終的な回

数が偶数になってしまうため、こういうルールにて副会長戦の勝敗を決したいと思います。」

そして、長者原がルールの説明を始める。

「この二つの戦いを合わせて、副会長戦の結果と致します。再び現生徒会側が勝てば現生徒会側に一勝、引き分けとなれば・・・先ほどすでに一回勝っておりますが引き分け。そして新生徒会側が勝てば引き分け。という結果に致したいと思います。異論はございますでしょうか？」

長者原に、誰ひとり批判を言わない。

それもそのはず、もともと生徒会戦挙は現生徒会の不遇があってのものであり、言ってしまえば現生徒会のせいだからである。当然、不利になる。

だから、誰も批判を言わないのだ。

「・・・それでは、一般生徒の立ち去りが終了致しましたので、これより副会長戦の二回目を始めたいと思います。新生徒会側のエントリーは新庄紅軌さまでよろしいでしょうか？」

紅軌が前に出て、「ああ。」と了承の返事を返す。

「それでは、現生徒会側のエントリーは？」

この場に、榛原翼斗の姿はない。

めだかが一歩前へ出る。

「今度こそわたｓ『ちょっとまったぁぁぁぁぁぁ！！！』」

めだかが自分が出る、と長者原に告げようとしたところ、見知った男の声によって遮られた。

遥か後ろから、誰かが走ってくる人影が見える。

その人影は、榛原翼斗であった。

翼斗は一気にスピードを上げて、瞬く間にみんなの前へと到着する。

『はぁ、はぁ、はぁ、ぎ、ぎりぎりセーフだなぁおい。』

「翼斗っ！今まで何処へ行ってたのだ！！」

翼斗の今の状態は、一言で言ってしまえばぼろぼろ。

全く何をしていたのかわからない状況だった。

『いやさ、凶化合宿の参加が駄目って言われたからよ、自分で修行してたんだ。それもすんごい修行。』

「・・・修行の内容が掴めないんだが・・・」

善吉が堪らずそう言う。

『修行内容はいたって簡単。時計塔地下での『狂化合宿』よ。相手になってくれた奴らは、裏の六人（プラスシックス）。』

「「「「「！！！」」」」」

生徒会メンバーと、下で横になっている日之影が、驚きの声を上げる。

「まさか・・・・庶務戦やったときから今日までずっと？」

『そんな飲まず喰わずの本当に今まではやってねえが・・・・まぁそうなるね。』

そんな翼斗を見て、善吉が「化物か・・・・」と声を洩らす。

「もう一度訊かせていただきます、現生徒会側のエントリーは？」

『あー俺っ！榛原翼斗が出ます！！』

そして、俺のエントリーが決まったためか、眼の前に居る紅軌が顔を歪ませる。

「おいおい、そんなボロボロの状態で出たら・・・・速攻で死ぬぞ？」

『言ってろ。数分後そうなってんのはお前だからな。』

始めてみた、翼斗の挑発的な態度に、紅軌はますます笑みを深くする。

「それでは新庄さま。カードをお選びください。」

長者原が、新庄にカードの選択を迫る。

「・・・めんどいし、俺も球磨川と同じ巳でいいや。」

選ばれたカード、巳に書かれた内容を長者原が読み上げる。

「副会長戦二戦目の試合形式は、『不倒雷電』に決定致しました。
この形式も、今回我々が用意した十三の決闘法の中で、もっとも残虐なルールで行われる戦挙でございます。」

今、翼斗と紅軌の最後の戦いが、始まる。

第七十七話　『不倒雷電』

前回のあらすじ？

翼斗「激闘の予感・・・・」

☆★☆★☆★

俺達が選挙管理委員会の長者原先輩につれられてきた所は、かつて激闘を繰り広げた、時計塔であった。

『なんか見たことある場所だと思ったら此処かよ。さっきまでいたからもう来たくなかったんだが。』

「翼斗、何でもお前の都合通りに上手くいくと思うな。」

善吉の一言が、なんか胸に染みた。

『でもよ、ここでどうやってやるっていうんだ？此処って大体は俺等がフラスコ計画潰した時のまんまだろ？』

「あるフロアのみ戦挙の為に改装しております。当然事前に理事長に確認はとっております。」

『ふーん、そんじゃぁいうこたぁねえわ。』

そして俺等はどんどんと下層へと降りていくーーーー

「到着いたしました。此処が生徒会戦挙副会長戦第2回戦を行う、時計塔地下十一階でございます。」

たどり着いたそこは見事に改装されており、元の十一階の面影など

微塵も残っていなかった。

「なんだあれ・・・・」

善吉が声を洩らす先には、重厚な扉があり、その奥には一つの密閉されている部屋があった。

その部屋の周りには、機械が色々と張り巡らされている。

「ここが『不倒雷電』を行うフィールドでございます。それでは両者、前へお越しください。」

俺と紅軌が、長者原先輩の前へと歩いて移動する。

歩いて行くときに少しだけ顔が見れたが、紅軌は不敵な笑みを確かに浮かべていた。

「それでは『不倒雷電』のルール説明を致したいと思います。まずは両者、我々が用意したこの靴にお履き替え願います。」

長者原先輩から、普通の靴とさも変わらないような靴を渡される。

持ってみると、微かに従来の平凡な靴より重い。

『おお。少し重いなこれ。』

「・・・・・・」

俺と紅軌はその靴へと急いで履き替える。

「それでは改めてルール説明を行いたいと思います。まず両者の眼前に見える部屋ですが、中の部屋の床、壁、天井、扉とあらゆる箇所に高圧電流が流れています。」

「「「「っ！！」」」」

めだか、善吉、名瀬先輩、いたみが驚きの声を洩らす。

『質問だ。一口に高圧電流、といっても色々ある。具体的にはどんくらいの強さなんだ？』

「・・・具体的に言いますと、5秒ほど浴びていると確実に死にいたるレベルかと。」

『わお刺激的〜。』

つまり1秒でも確実に動きは止まる、っていうわけね。

「両者の履いておられる靴は、電流を一切流さない特殊な素材でできております。」

『立っている分は大丈夫、というわけね。』

さて、どうすれば勝ちなんだろうか？

電流をどれだけ浴びれるかの我慢比べなんて嫌だぞ俺。

「ルールは簡単でございます。この中でどちらかが3秒以上動かなくなるまで、戦い続けていただきます。制限時間は無く、降参もできません。」

『つまり、そん中で相手を普通に倒すか、高圧電流をうまく利用して気絶、または死亡させるかっていうわけね。』

「左様です。」

・・・思った以上にきつい内容なんですけど。

「ただこの『不倒雷電』には特別ルールがございまして。」

「『特別ルール？』」

俺と紅軌が声をそろえて訊く。

「はい、どちらも1回のみの3分だけ、外にいる他の役員おひとり様の手助けを用いることができます。簡潔に言いますと、助っ人、というわけでございます。」

『・・・その時は俺等はどうなるんだ？』

「はい、そのまま残っていただき、1対2という戦いになります。もちろん、ここで助っ人を使い2対2にすることも可能です。」

なるほど、助っ人をどのように使うか、が問題だな。

「助っ人の役員様はあらかじめ私におっしゃってください。」

「助っ人を使う時は？」

「私に見えるように、右手で手を上げて助っ人、とおっしゃってください。」

「了解。」

その後紅軌はすぐさま過負荷（マイナス）の所へ行ってしまう。

さて、俺も作戦会議かなんかするか。

『鬼畜な内容なんすけど。お前らの時もこんなんだったの？俺善吉の時しか知らないんだけど。』

「・・・何故俺の時の事を知っているのかはつっこまないとして、代理の名瀬先輩の時は巨大冷凍庫、お母さんの時は植物、日之影先輩のときは鉄骨からの落とし合いだ。」

『どれも体験したくないんだが・・・・』

善吉の話に、俺は身体を身震いさせる。

やっぱりね、善吉の毒蛇が一番怖いよ、うん。

「・・・とてもきつい内容だな。特に降参なし、というのがすごくきつい。」

『ん？そうか？』

「なんでそんなに楽にいられるのだ・・・・死ぬかもしれないのだぞ？」

俺の結構楽観的な態度に、めだかは首をかしげる。

『だって、勝てばいいだけの話じゃん。それに俺、

負けねぇから。絶対。』

それだけ言って、俺は長者原先輩の所へ行き、代理の人を伝える。

そして俺は扉を開け、中に入る。

『・・・おお。』

中へ入ると、途端に耳にバチバチ、という音が入る。

『これは痛そうだね。』

「おじけついたか？」

先に部屋で待っていた紅軌が不敵な笑みを浮かべ、俺に言う。

『そうだな、おじけついたわ。だから速攻で終わらせようかな・・・』

「・・・はっ！おもしれぇ！先にリタイアすんのはどっちか！決着をつけようじゃねぇか！！」

そして俺と紅軌は同時に地を、蹴った。

第七十八話　『一進一退の猛攻』（前書き）

今回は、前回のあらすじ？はお休みです。

第七十八話　『一進一退の猛攻』

榛原翼斗は、拳を。

新庄紅軌は、呼び出した鎌をそれぞれ相手へ目掛けて振り下ろす。

『よっと、』

翼斗は紅軌の鎌の振り下ろしを軽々と避け、拳を進ませる。

紅軌も翼斗の拳を避けるーーー

と、数日前ではこんな展開であっただろう。

だが、翼斗はそんな紅軌の考えを読み、

『残念。『止まれ』』

「っ！うおあ！！」

『絶対言語』によって避けるという動作自体を止める。

紅軌は当然のように避けられず、翼斗のアッパーを諸に顔面へと喰らい、鎌を落とす。

「・・・・ハァッ！！」

紅軌は即座に『絶対言語』を克服し、重心を安定させ、がら空きの翼斗の顔面へと蹴りを浴びせる。

『ぐあっ！！』

「ハッ！どうしたどうした防御が疎かになっているぜぇ！！」

怯んだ翼斗の身体へと、連続でパンチを喰らわせる。

『防御なんてするかぼけぇ！！』

翼斗は言葉の通り防御をせず、代わりに『完璧限定（オールオーバー）』で拝借した高千穂仕種『自動操縦（オートパイロット）』にて、相手の拳を避け始める。

「なにィ！？」

『お前こそ防御はどうしたぁ！！』

自分の拳が軽々と避けられている様を見て驚いている紅軌へと、蹴りを喰らわす。

狙うは、足。

『ドッヂボールじゃねーけどよ、狙うは足ィ！』

翼斗の蹴りが足へとクリーンヒットし、バランスを崩す。

『もういっちょぉ！！』

さらにそこから翼斗は即座に上へと跳び、『解放（アンロック）』にて身体能力を3倍に。

ふらついている紅軌の脳天へと、かかと落としを決めた。

『これで意識失ってくれると楽なんだがぁ！！』

「そう簡単に行くわけあるかァ！！」

かろうじて意識を保った紅軌は、『切裂鎌（ジャック）』を呼び出し、切りかかる。

（これは・・・入ったぁ！！）

滞空している翼斗には、避ける術はない、攻撃が決まったことを確信する紅軌。

だが、翼斗の姿が不意に視界から消えた。

「っ！ナニィ！！」

『油断は禁物ぅ！くらいなぁ！！』

翼斗は拳を『解放(アンロック)』で限界の４倍にし、一気に勝負にかかる。

「・・・ハッ、ざんねーん。」

紅軌がそう呟く。

次の瞬間、翼斗の身体はパンチをくりだす状態のまま静止した。

「甘めぇな！！」

その翼斗の身体へと、紅軌は鎌を振り下ろした。

☆★☆★☆★

「次元が違いすぎるだろ・・・」

善吉が呆れた、とばかりに呟く。

「全く電圧の事を気にしていないよね。」

もがなも善吉に続き。

「それにしても翼斗は随分戦闘センスが上がったな。無駄がない。」

まぁ、随分鍛えたようだから当たり前か、とめだかは付け足す。

『紅軌くんも、結構血走っているようだね。別に勝たなくてもいいのに。』

何故か球磨川も、ため息とともに呟く。

『まぁでも、この勝負の結末は二つに絞られているよね。』

「？何言ってんだ球磨川。もともと『勝ち』か、『負け』の二つだろ。」

善吉が球磨川へと突っ込む。

『いやいや善吉ちゃん。僕たちは過負荷（マイナス）だぜ？鼻から『勝ち』なんて数に入れてないに決まってるだろ。』

まぁ、今回は違うけどね、と球磨川は付け足す。

「じゃぁなんだって言うんだよ。」

『一つ目は共倒れ。つまり『ＤＲＯＷ』さ。で、もう一つなんだけど・・・・

翼斗くんの圧倒的敗北。それも感電死でね。翼斗くんが前と戦闘センスしか上がっていないのなら、この二つの結末しかあり得ないよ。』

球磨川は不気味な笑みを浮かべながら、そう善吉へと言った。

☆★☆★☆★

『ぐああっ！！』

翼斗が蹴りによって吹き飛ばされ、諸に壁の電流を身体へと受ける。

「追撃っと！」

紅軌はそんな翼斗へと瞬時に近づき、鎌を振りかざす。

『ぐっ・・・くそがぁ！！』

翼斗は鎌が当たるぎりぎりの所で、後ろへとワープした。

「んーおしい。もうちょっとで残酷に肉が切り裂かれる所が見れたってのに。まぁ、下手したらそれを俺に返されてたかもしれねぇけどな。」

『はぁ、はぁ、・・・お前何故俺の新しい異常（アブノーマル）を知っている・・・』

翼斗が紅軌にそう訊くと、紅軌はハッ、と鼻で笑い、

「別に。ただお前が過去に異常(アブノーマル)使って戦った相手や話した奴と戦い(おはなし)しただけだが？」

紅軌の笑いながらの返答を訊いて、翼斗は下衆が、と吐き捨てる。

『・・・そんなに早く負けてーなら使ってやんよ。お前が速攻で何もできず負けるようなひでー異常(アブノーマル)をな。』

「・・・おもしれぇ！！俺の期待を裏切んなよ翼斗ぉ！！」

『喰らいなぁ！なじみ直伝！！『鏡写し(ハーモニクス)の道化』ゥ！！！！』

翼斗は高らかにその異常の名前を、叫んだ。

第七十九話　『鏡へと写された道化の如く』（前書き）

今回も前回のあらすじ？はお休みなんだナー。

だってシリアス場面に気の抜ける奴かいたら変でしょ？

第七十九話　『鏡へと写された道化の如く』

『喰らいなぁ！なじみ直伝！『鏡写(ハーモニクス)しの道化』ゥ！！』

そう叫んだ翼斗を見て、紅軌は何がきても対応できるように構える。

球磨川は、見知った名前が出たことにより、困惑する。

善吉とめだかも知っているはずなのだが、わからずただただこれから起きるであろう出来事を見るために神経を目に集中させる。

と、反応は各々であった。

（何がくる・・・っ？）

と頭の中で必死に孝策していた紅軌であったが、その考えは一瞬で吹っ飛んだ。

「がっ・・！」

眼の前には確かに翼斗がいるはずなのに、『何者か』の攻撃を受けて紅軌は吹っ飛ぶ。

（まさかっ・・・今この瞬間に翼斗は動いて俺を攻撃したっていうのかっ！？）

当然、紅軌以外の面々にも、今の攻撃は見ることができなかった。

いや、『視界に入らなかった』の方が正しいであろう。

「くっ！」

紅軌は電流が流れている壁へと足をつけ、そして翼斗のいる方向へ向かって壁を蹴った。

「うおらぁっ！」

手に持った『切裂鎌（ジャック）』を構え、翼斗に向かって振り下ろす。

『・・・・』

今まさに攻撃が当たろうとしているのだが、翼斗は身体はおろか眉一つ動かず静止していた。

そして、紅軌が振り下ろした鎌が翼斗へと直撃ーーーー

「っ！またかっ！！」

する前に、紅軌は再び『何者か』の攻撃を腹部へ受け、翼斗への攻撃を強制終了せざるをえなかった。

「何が起きていやがるっ！」

紅軌は少しも翼斗から視線を動かしてはいない。

翼斗が動いたそぶりなど・・・微塵もなかった。

『それが命取りだな』

翼斗が不敵な笑みを浮かべる。

「うっ！」

こうしている間にも一発、腹部へと攻撃を受け、紅軌は怯む。

『くらえっ！！』

いつの間にか眼前にいた翼斗が紅軌の顔の下へと移動しており、『解放（アンロック）』で４倍にした攻撃を腹へと喰らった。

「うがぁっ！！」

骨が折れた感触が、拳を伝わって翼斗へと伝わる。

紅軌は力なく衝撃により吹っ飛び、そして電流が流れている壁へと激突した。

☆★☆★☆★

「なんだっ！一体何が起きているんだ！？」

善吉が目の前で繰り広げられている戦いでおきている事がわからず、声を挙げる。

「・・・・・」

『・・・ふーん・・・』

めだかは戦いを凝視しており、球磨川は何かがわかったようで納得したような声を洩らす。

「球磨川さん、一体何が起きてるんですか？」

「そうだぜ、アタシらにも教えてくれよ」

志布志と蝶ヶ崎が、事態をしるため球磨川へと訊く。

『うーん、僕もさっき気付いたことだから期待できないんだけど・・・』

球磨川は自信なさけだが、二人へと教えるように目の前を指さす。

『じっと凝視しなきゃわからないけれど、あそこ何かが高速で動いているよ』

「「「「「・・・は？」」」」」

志布志と蝶ヶ崎、それに善吉ともがなと阿久根を追加した5人が、球磨川の言った意味がわからず困惑の声を堪らず洩らす。

『いやだからさ、今紅軌くんたちが戦っているあの場所に、何かが高速で動いている、ってこと』

「・・・つまりそいつが紅軌を攻撃しているっていうのか？」

『うん、おそらくね。だって実際翼斗くんは少しも動いていないんだから、それしかないよ』

善吉の質問に、球磨川は応える。

「・・・なるほどな」

そこでやっとめだかが声を洩らし、ハァーとため息を吐く。

「・・・わかったのかめだかちゃん？」

「ああ。今何が起きていて、翼斗が何をしているのかも全てわかった」

めだかは善吉へと返答する。

「まず球磨川の言ったことだが、・・・あれは全部あっている。言った通り、あそこには高速で動いている奴がいるな。それに比べて翼斗は少しも動いちゃいない」

『ほらね。僕の言ったことは間違っていなかったでしょ？』

球磨川が自慢気に志布志と蝶ヶ崎へと言う。

「問題は動いているのがなんなのかなんだが・・・・」

めだかはそこでもう一度ため息を吐き、そして呆れた声で言った。

「あそこで動いているのは、まぎれもない『榛原翼斗』だよ」

「「「「「「「「「・・・・ハァ？」」」」」」」」」

その場にいる長者原を抜かした全員が、疑惑の声を洩らした。

☆★☆★☆★

「・・・なるほどな。動いているのは、さながらお前の分身・・・・つーことか」

電流を身体に数秒流されながらも、紅軌は叫び声一つ上げず立ち上がる。

『分身じゃない』『これは俺自身だよ』

高速で動いていた奴の動きが止まり、姿があらわになる。

その姿は、『血着（ブラッディ・エンド）』を使っている翼斗そのものだった。

『スキル一つを引き換えに自分と同じ存在を作り出す。その数は倍』

『それがこの『一鏡写しの道化《ハーモニクス』だ』

まるで、鏡へと写された道化の如く。

それは鏡が増えれば増えるほど、数が増す。

それが、『鏡写（ハーモニクス）しの道化』。

第八十話　『狂乱する男』（前書き）

なんでだぁぁぁぁぁ！

俺はとあるの小説を書いていたはずなのにいいいい！！

いつの間にか異過者に変わってルゥゥゥゥゥ！！！

・・・というわけで今年最後、どういうわけか番外編や設定を含めて１００話目の第八十話でぇす。

第八十話　『狂乱する男』

『残念ながら『鏡写しの道化（ハーモニクス）』は3分しか持たないんでね・・・・』

『これはさすがに卑怯だと俺のプライドが叫んでるんだが・・・・・・

『『本気で行かせてもらおうっ！！』』

刹那、翼斗と『翼斗』が紅軌へと向かって地を蹴る。

『はっ！』

当然、『血着（ブラッディ・エンド）』を使っている『翼斗』の方が身体能力１０倍の為、速い。

数秒で紅軌の眼前へと移動し、パンチを腹へと喰らわす。

「がァッ！！」

『もういっちょお！』

そして少々遅れ翼斗が到達し、怯んだ紅軌の身体へと追撃をする。

「・・・残念ながら、これの方が楽だったりするかもなんだぜ。」

追撃をするため、拳を振りかぶった翼斗の前へ、先ほどパンチをした『翼斗』が立ちはだかった。

『っ！』

翼斗は驚いた表情をし、慌てて拳を止めようとする。

しかし、拳を止めると、

「ッラア！どうしたどうしたホラホラァ！！」

『がぁっ！！』

『翼斗』の後ろにいる紅軌によるパンチの嵐が、翼斗へと降り注ぎ、衝撃により翼斗は軽く後方へと吹っ飛ぶ。

『あがぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！』

一瞬、『今』を奪われた『翼斗』が動き出す前に、紅軌は手で高圧電流が直も流れ続けている床へと、叩き潰した。

高圧電流が身体を流れ、しかも回避することができず苦しむ『翼斗』。

「・・・ふーん、感覚は共有じゃねぇのか。なんとも残念。」

『っくそ！』

「でもぉ・・・・・」

『解放（アンロック）』で身体能力を3倍にし、紅軌に向かっていく。

『喰らえッ！！』

そして紅軌の顔面目掛けてパンチを喰らわすーーーーーーーー

よりも先に、翼斗は顔への鈍い痛みと衝撃により吹き飛ばされた。

あきらかに、身体強化の異常（アブノーマル）を持っていない紅軌によっては、重すぎる一撃。

『ぐっ！！』

痛みに顔をしかめながらも、高貴の方を見据える翼斗。

その先には、身体が全て黒く染まりながらも、紅い光を発している『翼斗』がいた。

「・・・よく『自分との戦い』っていうが・・・全くその通りだなァ・・・・」

紅軌は不敵な笑みを顔へ浮かべながら、静かに呟いた。

☆★☆★☆★

「そういえばさ、相手の助っ人って誰なんだろうな。」

善吉がめだかへと耳打ちで訊く。

「・・・おそらく球磨川であろう。なにせ奴の『大嘘付き(オールフィクション)』は相当強力だからな。」

めだかは、球磨川がもう『大嘘付き(オールフィクション)』を使えないことを知らない。

「いや、もしかしたらあえての蝶ヶ崎先輩かも知れねえぜ。そうすればなんにせよ、相手の攻撃を防げるんだからよ。」

「ま、なんにせよ相手が助っ人を使って翼斗がヤバそうになったら私を呼べばいい・・・っ!!」

ここでめだかは、『ある事実』に気付き顔を驚愕の顔に染める。

にわかにその表情は、悲痛な表情が混じっていた。

「不味いっ！アレが出たらおそらく翼斗はっ！！」

そんなめだかの葛藤も虚しく、そして今一番聞きたくないであろう声が、届く。

「助っ人。」

顔に黒い笑みを浮かべながら右手を挙げて、紅軌は言った。

☆★☆★☆★

『ここで助っ人とは・・・どこまでも俺を追い詰めたいらしいね。』

おそらく球磨川先輩が出てくるか・・・と翼斗は思っていたのだが、思惑は大きく外れた。

出てきた人物は、志布志飛沫。

「まぁ、あの人の過負荷（マイナス）は『致死武器（スカーデット）』っていって他人の古傷を開く能力なんだがな。」

『・・・それがどうかしたか。』

助っ人として入ってきた志布志の顔も心なしか、笑っている。

「それじゃぁ、一仕事頼みますわっ！」

「任せなっ！！」

翼斗は来るべき攻撃に向け、構える。

「知ってるか？志布志の『致死武器（スカーデット）』ってなぁ・・・・」

「『致死武器(スカーデット)』っ！！」

「心。他人の触られたくねぇ過去とかの心の古傷も開けたりするんだぜ。」

『致死武器(スカーデット)』を受け、翼斗は地に膝をつく。

高圧電流が膝を伝い、身体へと流れているのだが、そのことを全く気にせず、いや気に入らず翼斗は、

『うわああ

悲痛な叫び声を、挙げた。

第八十話　『狂乱する男』（後書き）

・・・全く区切りのよくないです、はい。

まぁ、この続きは来年ということで、楽しみに待っていてください。

それでは、よいお年を。

第八十一話　『過去への誘い　≪邂逅≫』（前書き）

あけましておめでとうございます！ｗｉｎｇです！

今年初更新でございます！

さて、今回からは、翼斗の過去編に移ります。

『終わりの始まり』では大雑把に語りましたが、今回はより鮮明に、詳しく。

それでは、どうぞ。

第八十一話　『過去への誘い　≪邂逅≫』

「『致死武器（スカーデット）』っ！！」

志布志がそう言った瞬間、俺の中の何かが開く気がした。

そして次の瞬間、膨大な記憶が鮮明に俺の脳へと浮かぶ。

生まれた時。

すくすくと成長してきた時。

いたみと楽しく遊んだ時。

異常が開花した時。

見知らぬ奴らに連れ去られた時。

そして、紅軌と出会い、あの惨劇が起きた時。

思い出せ

イヤダ

思い出せ

ヤメロ

思い出せ

オレハ・・・・・

思い出せ

☆★☆★☆★

古賀とはすぐ仲良くなった、と前俺は語った。

だが、その『すぐ』に至るまで、時間が必要であったーーーー

「私隣に引っ越してきた古賀いたみっていうのー！よろしくねー！」

・・・誰だこいつは。

俺が初めて古賀いたみと会った時の思考がこれだ。

当時俺は周りの人から嫌われ者にされていたせいか、少々性格が荒くなっていた。

・・・まぁ、それも俺が生まれたとたんに母に不幸な出来事が色々あったせいだから、仕方ないとも思うけどな。

話を元に戻そう。

で、誰こいつ。

「？ねー君の名前はー！？」

俺が沈黙していることに違和感を覚えたのか、古賀は俺へと名前を訊く。

・・・どうせこいつも、数日たったら俺を蔑むだろうよ。

「・・・榛原翼斗。もうこれからは俺に話しかけないでくれ。」

そして俺は逃げるようにその場を後にした。

その場に残ったいたみは首を傾げ、不思議そうな顔をしていた。

翌日。

俺が暇つぶしに散歩に行こうとすると、待ち構えていたように家の前に古賀がいた。

「ねぇ！一緒に公園で遊ぼうよっ！」

「・・・俺に話しかけるなつったろ。」

俺はその誘いを断るどころか聞かず、そのまま古賀の近くを離れた。

何故誘いを断るのか？

・・・仲良くしていた友達が急に俺の側を離れて行くのって、すげぇ辛いんだぜ。

その翌日も、古賀は俺に話しかけてきた。

その翌日も。

そのまた翌日も。

俺はそれを非情に断り続ける。

そして、また今日もーーーー

「これからおつかいに行くんだけどよくとくんも一緒にいかない！？」

今度はおつかいか。

だんだんとこいつの誘いだす口実が楽しみになってきていた。

そして、しつこいのが嫌になったのか仕方なくなのかは知らないが、俺は思った。

少しの間だけ、少しの間だけこいつと仲良くしてみるかな。

「・・・はぁ、わかったよ。一緒に行こう！」

俺のその言葉を訊いて、いたみは一瞬驚いた顔をしたものの、すぐに表情を笑顔に変えて、

「うんっ！！」

と言った。

この少しだけ、が長い時になるのだが。

そして俺といたみは、手をつないでお店へと歩き出した。

第八十一話　『過去への誘い　≪邂逅≫』（後書き）

この『過去への誘い』編は、部分部分ごとに区切っていくので、いつもよりも短いと思いますが、ご理解のほどを。

第八十二話　『過去への誘い　≪昇華≫』（前書き）

さすがに短すぎると思ったのと、両手が止まらなかったので連続投稿。

うおおおおおおお！

鎮まれ俺の両手ぇぇぇぇ！！

第八十二話　『過去への誘い　≪昇華≫』

『うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!』

俺の脳裏に、次々と過去の出来事が浮かぶ。

堪らず俺は叫び声を挙げた。

『うぐぅ・・・・・・』

昔の出来事、それが今怒ったみたいに瞼の裏に焼きついて消えない。

そして、実験の時に与えられた激しい痛みも思い出し、身体が悲鳴を上げている。

『うっ・・・・・』

俺は・・・・・

周りと少し違うだけで・・・・・

あんな地獄を味わったのか？

それじゃぁ異常（アブノーマル）じゃなく普通（ノーマル）だったら・・・

俺は今頃どうしていたのだろうか・・？

☆★☆★☆★

それは、一つの小さな異変から始まるーーー

あれから1年経ち、俺といたみは親友、いやそれ以上と言ってもおかしくないくらい仲良くなっていた。

それは、一緒に居なきゃ家族に「どうしたの？」って言われるレベルまでだ。

そして、そんなある日。

『・・・ん？』

「？どうしたの翼斗くん？」

俺が急に声を出したことに驚いてか、いたみが俺にそう訊く。

・・・なにかがおかしいぞ。

『いやちょっとな・・・・』

俺といたみの二人は家でテレビを見ながらトランプをして遊んでいる。

テレビに映し出されているのは、知らない芸能人が地元の小学校一年生達の所へ行って勉強を教える、と言った風景。

『なぁ、いたみ。テレビに移っているあの問題さ、お前解けるか？』

「ん？どれ？」

俺はテレビを指さす。

テレビの画面に映っていた黒板に、４９＋３７と白いチョークで書かれていた。

「・・・わかんない。すごくがんばれば解けそうな気がするんだけど・・・めんどくさい。あ、翼斗くん早くスペードだしてよ！」

『おっすまん。えーとじゃぁ・・・キングでいいか。』

案の定いたみは解くことができず、そのままトランプ（ちなみにページワン中）へと視線を戻した。

「あーっ！翼斗くん前の時にページワンっていってない！反則負けねっ！！」

『はぁーっ！？そんくらい許せよ！』

「だーめっ！反則負けは負けぇー！！」

くそっ、それくらいの事許せよな。

テレビには画面が切り替わり、続いて５８＋４４と書かれていた。

『・・・１０２。』

このことを母さんに話すと、すごく喜んでくれた。

「この子の将来はえらい学者かもねーっ！」

と言って頭をなでてくれた。

そして数日後。

買い物から帰ってきた母さんの手には、何やら本が握られていた。

取りだしてみると、『足し算・引き算の基礎』という本だった。

もう一冊は、その応用編というもっと難しい本らしい。

「偉い学者になれるように今から勉強しとこうね♪」

と言いながら母さんは本を俺に渡してご飯の支度へ向かった。

この笑顔が続いたのは、長くはなかったーーーー

『・・・１０８÷４・・・・・２７。』

そして数か月後。

俺は『応用編』の問題を解き、次の『掛け算・割り算の基礎』をすっ飛ばし、応用編を解いていた。

思えば引き算の応用編から、母さんの笑っている顔をあまり見ない。

どちらかというと・・・

周りと同じ、気味悪がる目で俺を見るようになった。

・・・きっと気のせいだ。そうに違いない。

『次の問題は・・・ってもう最後かよ。つまんねーな。』

俺は手に握った鉛筆を投げ、その場へと寝っ転がった。

『・・・全く、退屈だ。』

七歳。

あれから母さんは問題集を買ってくれなくなった。

なんでだろう？

そして今、母さんの遠い親戚のおじさんが家へと遊びに来ている。

正直、うっとおしい。

飴ちゃん食べるかい？やら、

寒くないかい？やら。

七歳だと言うのにまだお子ちゃま扱いかよ。

イライラする。

ああ、この場を抜き出していたみと遊びたい。

そんな俺の心中を察したのかはしらないが、おじさんがもうお暇するよ、と言った。

・・・早く帰れ。

「それじゃぁ翼斗くん、さようなら。」

おじさんがそう言って、俺の脇の下へと手を入れて、だっこしようとした。

俺は子供扱いされた苛立ちから、おじさんへこう言い放ってしまった。

『やめろ。』

その言葉を訊くと、おじさんは急に冷や汗を絶え間なく流しながら、ゆっくりと俺を地へとおろした。

「そ、それじゃぁさようならっ・・・」

そして、逃げるように俺の家を出て行った。

母さんは、今起きた状況を見て顔を青くしている。

この時初めて、俺は、自分は周りとは違うんだ、と自覚した。

この時からだろうか、母が瞳先生とやらとしきりに電話で相談するようになったのは。

第八十三話　『過去への誘い　≪激動≫』（前書き）

俺の両手が止まらない件について。

三日連続更新なんていつぶりだ・・・？

第八十三話　『過去への誘い　≪激動≫』

≪運命の日より三日前≫

あれから二年経ち、俺は九歳になった。

普通ならもう学校へ通っている歳であろう。当然、隣のいたみもそうやって学校へ通っている。

だが、俺は通っていない、いや通わせてくれなかった。

その理由だが・・・・答えは簡単。

金がないんだよ、単に。

生活するので精いっぱいなんだから、学校に行くための金があるわけないだろうが。

母さんは仕事をがんばっているが・・・夜は瞳先生とやらと夜通しで話しているようで俺にかまう暇など少しもないらしい。

『ああ全く・・・暇だ。何か俺の度肝を抜くようなおもしれぇ事が起きねぇかな・・・』

俺は床へと寝そべりながら言った。

・・・この俺の願いが、違った形で三日後起きるなんて、思いもせずに。

≪運命の日より二日前≫

最近、母さんが瞳先生と話す時間が長くなってきている。

話す内容は知らないが・・・こんなことを呟いていた。

「もう私は育てていく自信がありませんっ！どんどん人と違っていくんですよあの子は！！」

何だろう。

母さんは俺のほかに何か育てているのだろうか。

「それでねっ！今日クラスのみんなで鬼ごっこをしたんだよ！」

『ふーん、それでどうだ？最初っから最後までボロ負け～ってか？』

「ちっ、違うもんっ！最後まで一回も捕まらなかったもん！」

いたみが俺に今日学校で有ったことを話している。

・・・いいな、楽しそうだ。

『マグレじゃね？またはクラスの人がお前の事見えなかったか。』

「どこの透明人間っ！？」

全く、退屈だ。

・・・こうやって楽しく遊べる日は、今日が最後だったーーーー

≪運命の日より一日前≫

今、家へ知らない人が来て母さんと話している。

何を話しているのかは知らないが・・・

「実は今、病院で病気にかかっている人を治すための研究をしていましてね。・・・あなたの子供がいれば、その研究も一歩前進するかもしれません。」

「・・・メリットは？私にメリットはあるんですか？」

・・・何を話しているのか断片的にしか聞こえん。

やることもないし寝るか。

俺は二階へと上がり、自分の部屋で眠りについた。

・・

「もちろんですとも。研究が成功するよう子供を提供してくれるのですから、お金はそれに似合った額を。・・・どうです？異常な貴方の子供が、何の役にも立たない貴方の子供が、病気で苦しんでいる人を助ける、社会の役に立つんですよ？」

「・・・っ」

「それに・・・貴方としても、こんな周りとは違う異常な子供を手放したかったんじゃないですか？」

「・・・少しだけ、少しだけ時間をください。」

男はわかりました、と言い、メールアドレスが書いた紙を渡し、その場を立ち去った。

そしてその数時間後、翼斗の母はある一大決心をした。

≪運命の日≫

それは、日曜日。

家でいたみと遊ぼうとした時に起こった。

家に見知らぬ男たちが現れ、俺を瞬く間に連れ去った。

最後に見たいたみの表情は、涙でゆがんだ表情だったーーーー

そして俺は、実験へと身を投じることになった。

☆
★
☆
★
☆
★

『ううっ・・・』

一日目の実験が終了した。

内容は、人差し指を切断して他の人差し指に変えて縫合する、といった内容だ。

麻酔が施されていなかったので、激しい激痛が指へと走り、俺は叫び声を上げ続けた。

・・・おかげで喉が痛い。

『まだこんな実験が続くのかよ・・・もう死にたいぜ・・・』

自分で言ってから気付いた。

痛みから、これから始まるであろう狂った実験の日々が耐えられるのなら・・・

『そうか、自殺すればいいんだ。』

俺がそう言ったあと、俺の右頬に鈍い痛みが伝わった。

『っ！』

目の前には、赤髪の少年（ていうかたぶん俺と同い年）が仁王立ちしていた。

・・・どうやら俺はこいつに叩かれたらしい。

『ってぇな、何すんだゴラ。』

「お前、さっき何て言った。」

『自殺すればいいんだって言ったろうがっ！』

そしてまた、鈍い痛みが今度は左頬に。

「あきらめんじゃねぇよ！！人が簡単に命を捨てていいのか！？いいはずがねぇだろうがっ！！」

そこには、俺とおそらく同い年で、赤髪の男が仁王立ちしていた。

これが、新庄紅軌という男との始めての出会いだった。

第八十三話　『過去への誘い　≪激動≫』（後書き）

この時の紅軌・・・なんていう修造。

第八十四話　『過去への誘い　≪開闢≫』（前書き）

はい止まらない両手の為再び連続更新～！！

あ、あと第七十二話、修正いたしました。

具体的には、実験に耐え続けたのが十年→五年へ。

へ？なぜかって？

考えても見てよ。

九歳に連れてかれたんだよ。そしたら十年たったら十九歳じゃん。

高校行くなよ。っていう結論です。

ちなみに僕もこれ見たときこの時の自分をぶん殴りたくなりました。

あほ、盛り過ぎって。

ご迷惑をおかけして、大変申し訳ございません。

それでは改めて、第八十四話です。どぞ。

第八十四話　『過去への誘い　≪開闢≫』

・・・なんだこいつは。

いたみと初めて会ったときと同じ感想になってすまないが、生憎これ以外に今の心情を表せない。

自分が先ほど何をされたのかわかってんのか？こいつ。

『・・・ってぇな、何すんだよてめぇ。』

俺が殺気を込めて目の前のこいつを睨む。

だがこいつは少しも怯むことなく、言葉をつづけた。

「何すんだよ、じゃねぇよ。お前男だろ？なら何簡単に望みを捨てようとしてるんだよ。最後まであきらめんなよ。」

『・・・チッ、だけどよ、現実を見てみろよ！俺だってあきらめたくねぇよ！でもよ！この状況下だったらあきらめるしかねぇだろう

が！！』

「この状況下？へぇ、まだここに来て一日しか経ってねぇのによ。何ここのことを全て知った気でいるんだよ。」

・・・こいつは何を言ってるんだ？

「まだ希望はあるっ！まだ一日しか経っていねぇんだ！俺等の両親だって心配して探しに来てくれるかもしんねぇ！！」

『・・・俺等は捨てられたんだぞ。両親に裏切られて。』

俺の言葉が図星だったらしく、周りのみんなは悔しさからか、拳を握り締めたりしているものがいた。

・・

いや、一人を除いて。

「・・・ククク・・・」

紅軌はその状況下で、なんと笑みを浮かべていた。

その笑みは、苦笑でもなく、失笑でもなく、それはそれは獣のように獰猛で、勇敢で、誇り高い笑みだった。

「なぁおい。何故俺等は捨てられたんだと思う？」

紅軌が笑みを浮かべながら、俺等へと問う。

「それは・・・周りとは違って、どこかがおかしいからだろうよ。」

「そうさ！ここに居る俺達は、普通の人間とは違う。いわば特別・・・いや異常（アブノーマル）なんだよ。」

知らない誰かが答えた後、すぐに紅軌は声を高めてみんなへと呼び掛ける。

「俺等を捕えている人間も普通（ノーマル）。俺等だけが異常（アブノーマル）だ。そんな異常な子供達、違った言い方をすれば優秀な子供たちが、此処へ終結しているんだぜ！」

「つまりは！異常と呼ばれた俺達が一致団結すれば！此処を出ることも不可能ではない！いや、絶対できるっ！！だからみんな！最後まで希望を捨てるなっ！！チャンスは必ずくる！！！！」

その紅軌の一言は、俺の心へと大きく響いた。

こいつ・・・異常(ばか)か？

紅軌はそう言って、誇り高く笑った。

紅軌の一喝によって、みんなの絶望が、希望へと変わったのだ。

だが、その希望が続くのは、長くない。

崩壊は、絶望は、団結は、たった一人が崩れれば、連鎖していく。

それは、実験が始まって一カ月後の、ある日のことだった。

実験も日に日に残虐さを増していき、それに伴いだんだんと身体的、精神的負担も増えて行く。

だが、そんなときもみんなで励まし合い、乗り越えてきた。

「おい、大丈夫か？」

紅軌が中へ居るある人へと声をかける。

そいつは何日前からも、様子がおかしかった。

ときどき震えだしたり、なにより手を合わせて拝んでいるのだ。

「あ・・・ああ。大丈夫だ。」

そいつがそう言ったので、紅軌はその場から立ち去る。

そして返事をしたそいつは懐へと手を入れーーーー

手術するときに使う、メスを取りだした。

それをしっかりと手に持ちーーーー

『よせっ！！早まるんじゃねぇ！！！』

胸へと、深々と突き刺した。

何度も、何度も、メスを胸へと突き刺す。

鮮血が飛び散り、そいつは地へと倒れた。

しばらくは小刻みに震えていたが、やがてぴくりとも動かなくなった。

初めての、犠牲者だった。

「・・・・っ、おいみんなっ！絶対にこいつみたいなことをするんじゃねぇぞ！！死んだら何もかも終わりだよ！！あきらめんなよ！！」

紅軌はみんなへと呼び掛ける。

だが、紅軌の願いに反して、自殺する人は着々と、増えていったーーーーーー

最初は、百人近くいた奴らも、一年後には半分の五十人。

三年後には二十人。

そして、五年後には七人まで命を断っていった。

そしてこの中には、実験での死亡者も含まれている。

だが、実験による死亡者よりも、自殺者のほうが多い。

それほど、俺達は追い詰められていた。

そして、五年目。

もはや習慣となってしまった実験を終え、俺達は無言で疲れを癒していた。

そんななか、急に紅軌が立ちあがり、俺の方へと歩いてきた。

「なぁ、翼斗。もうお前こんな生活嫌だろ。」

その髪の毛はボサボサになり、目は光を失っていた。

『・・・当然だろ。こんな実験好きな奴いるか。』

・・・・・・

「それじゃぁさ、ここの敵全員『ぶち殺して』、ここから逃げねぇか？」

それは、悪魔の救いの手か。

それともーーーーーさらなる地獄への入り口か。

第八十五話　『過去への誘い　≪片鱗≫』（前書き）

今回のサブタイトルには、深い意味があったりする。

第八十五話　『過去への誘い　≪片鱗≫』

『あがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！』

五年と実験されているが、いまいちこの痛みにはなれない。

まぁ、慣れたら慣れたでおかしい人間なんだがな。

「・・・ん？」

「どうした？」

俺を実験している奴らの一人が不思議な声を挙げ、もう一人の奴がそれに気付いたようで声をかける。

「いや、大したことじゃないんだが・・・最近目の調子が悪くてよ。どうもよくかすみやがる。」

「・・・やっぱりか。実は俺も・・・」

「は！？まじかよ・・・」

それに驚いたようで一人が驚きの声を挙げる。

・・・どうせ疲れかなんかだろうが。

「そういえばこの検体Ｎｏ．４４の担当者って、何回も変えられている気がしません？」

「そういえば確かに・・・まさか！おい！！」

そう言って一人は俺の腕へとメスを突き刺した。

『があっ！！』

「お前っ！！俺等に何かしていないだろうなっ！！」

『しっ、してねーっていうか、出来ねーよ・・・それにそんなことが出来たらとっくにお前らを殺してる。』

俺の答え方が気に入らなかったのか、再び腕に刺された。

『ぐあっ！！』

「・・・チッ、一応上に報告した方がいいのか・・・？」

「そんなことよりよ、さっさと終わらせちまおうぜ。どうせこの実験も失敗なんだからよ。」

「・・ああ、そうだな。」

そして二人はまた、実験を続けていったーーーー

『チッ、今日もまた無事に終わりましたなっと。』

「よう、おつかれ。」

俺が中でぼーっとしていると、丁度実験を終えたのか、紅軌が俺の側へと来た。

『おう・・・って、また数減ってねぇか？裕也はどうした。』

裕也、とは俺達と同じ境遇にある俺より一つ年下の男だ。

「・・・ああ、どうにも殺されたらしいぜ。」

『ああ！？またかよ・・・今日で１０人目だぜ・・・？』

今、ここでは何者かが実験対象者、つまり俺達と実験する側、つまり奴らが連続して殺されているだ。。

それも今日で9人目。対象者が5人と奴らが4人。ちょうど半分だね。

これだけ殺されているのに未だ犯人を見つけられないとはどうかしてる。

「・・・だからこそ、脱出の手段はある。」

『・・・・・』

「それで、もうそろそろ答えを訊いておきたいんだが。・・・準備にも時間が必要だしな。」

『・・・ああ、もう答えはでた。』

昨日必死に考えたさ。

そして、結論は出た。

「それで・・・？お前はどうするんだ？俺の計画に乗るのか、乗らないのか。」

『俺は・・・・・・

お前と手を組む。こんな腐ったところ真っ平だ。一緒に脱出しようぜ！！』

俺のその言葉を訊くと、紅軌はニカッと無邪気に笑って、

「ようし！それじゃぁどうやって逃げるか考えないとな。絶対に捕まらず、奴らに復讐する方法をな。」

そして俺と紅軌は今日の晩、寝ずにずっと作戦を考えていた・・・・

☆★☆★☆★

その日の夜、あまり人が通らない場所にて、実験者の一人の遺体が発見されたらしい。

これで１０人。

殺された人の担当は・・・・・

新庄紅軌。

☆★☆★☆★

次の日。

俺達は今日を作戦実行日にすることにした。

実験を終えた後の夜中。

その時に俺達は動く。

『・・・ん？』

今、また実験をするため奴らに連れられているんだが・・・・

『見たことない顔だな。担当変わったのか？』

「・・・ああ。目に誤って硫酸を浴びてしまってな。」

『は、そいつに言ってやれ、アホってな。』

「・・・生意気な口を叩くな、殺すぞ。」

『はいはいっと。』

それにしても、担当が変わるのは何回目だ？

少なくとも５回以上だと思うんだが・・・・

「それでは、検体Ｎｏ．４４の１８２５回目の実験を始める。」

そして、最後になるであろう実験が、始まったーーーーーーーー

『・・・・よし。』

「・・・・ああ。」

今、見張りが交代しに、その場を去った。

『行くか。』

「ああ。」

そして、紅軌が瞬時に『切裂鎌(ジャック)』を呼び出し、檻を切り裂いた。

作戦・・・・実行。

☆★☆★☆★

「翼斗！こっちだっ！！」

『ああっ！・・・くそぉ邪魔くせぇなぁ！！』

俺は追ってきた奴の一人の腹を蹴り、吹っ飛ばす。

『精度はいまいちっと！紅軌ぃ！後ろに二人居るぞ！！』

「ああっ！・・・喰らえッ！！！」

紅軌は鎌を追っ手の頭めがけて振り下ろした。

鮮血が、俺と紅軌の顔へと飛び散る。

だが、そんなことには構わず、俺と紅軌は走り続けた。

「はっはぁ！！俺等を捕まえられるものなら捕まえてみやがれぇ！！！」

隣に居る紅軌は・・・確かに笑っていた。

「もう少しで出口だっ！！翼斗！行けるなっ！！？」

『愚問っ！うおおおお！！！』

ここで俺は走るスピードを上げる。

紅軌もそれに負けず、スピードを上げてすぐに俺に追いついた。

出口が眼前へと迫った。

「・・・それでは、今まで俺達の事を実験(せわ)してくれてありがとうな

っ！！」

紅軌は持った鎌を、振り下ろすのでもなく、振り回すでもなく、後ろへと振り投げた。

『はぁ、はぁ、はぁ、出口だっ！！！』

そしてーーーー

『はぁ、はぁ、はぁ、何年ぶりだ・・・？日の光浴びんのは。』

「そうだな・・・・ってあり？」

『どうした？』

紅軌はポケットを必死に探している。

だが、全てを探し終えると同時に、再び入口へと歩み始めた。

『おっ、おいっ！！』

「わりぃ、ちょっと忘れ物したから、取ってくるわ。先にどっか行っててくれ！！」

『馬鹿か！？お前死ぬぞ！！』

「死なねえよ！俺は不死身だからなっ！！」

そう言って紅軌は笑う。

・・・顔に血がついているから決まらねぇ。

「さよならはいわねぇ！また会おうぜ翼斗！」

そう言って紅軌は入り口から中へと入って行った。

『・・・全く、馬鹿な奴だ。』

俺は追っ手が来るのが怖かったので、足早にその場から立ち去った。

☆★☆★☆★

「はっはぁ！！」

そう高らかに言って紅軌は鎌を振り下ろす。

・・

肉が裂ける音とつぶれる音が聞こえ、眼の前のモノは動かなくなった。

「・・・これで全部、かな？」

そう言った紅軌だが、その顔には笑みを浮かべていた。

「さてさてさて、全員殺したことだし、俺もそろそろとんずらすっか。」

そう言って紅軌は鎌を、隠れて銃で撃とうとしていた奴の方向へと振り投げた。

数秒後、肉が裂ける音とともに、紅軌の鎌が壁へと深く突き刺さった。

第八十六話　『過去への誘い　≪惨劇≫』

『はぁ、はぁ、はぁ、』

俺はただ一つの場所を目指して走っていた。

あれから、俺は自分を捨てた母親のことを調べていった。

もともと住んでいた所、母親がよく行っていた所、などしらみつぶしに。

たまに訊いた人に「どこかであったかい？」と言われたけどやりすごした。

あれから時間は過ぎていたから、成長した俺とはだれもわからなかったらしい。

何故その人を探すのか、と訊かれた時は「母の知り合いなんです。」という返答で再びやり過ごした。

そして、ついに母の手かがりが見つかった。

もともと住んでいた所からさほど遠くないところに今は住んでいるらしい。

『はぁ、もう少しぃ・・・』

そしてしばらくの間走り続けると、訊いた場所へとたどり着いた。

『はぁ、はぁ・・・ここか・・・』

そして俺はその家へと近づき、インターホンを押す。

≪ピンポーン・・・≫

だが、数秒たっても母は出てくるどころか、玄関の近くから物音さえ聞こえない。

『留守か・・・』

あきらめて帰ろうとした俺は不意に扉が目に入り、気付いた。

扉が、あいている。

『・・・おいおい、どういうことだ。』

妙な胸騒ぎを感じた俺は扉を開け、中へとはいって行った。

☆★☆★☆★

今から、ピチャッ、ピチャッと水音が聞こえる。

そして、居間であろう場所へついた。

『えっ・・・・・』

そこは、何かによって赤く染まっていた。

そしてその真中には、母、いや母だったモノの首を持って佇んでいる新庄紅軌がいた。

もう、床を濡らしている液体の正体はわかるであろう。

「おう翼斗。久しぶりだな。」

紅軌が不気味な笑みを俺へと向けながら言う。

『あ・・・・あ、どういうことだよこれ・・・・』

俺はおそるおそる紅軌へと訊く。

「ん？どうした翼斗。

・・・・・・・

この光景の、どこがおかしい？」

そして紅軌は不気味な笑みを深める。

人間一人、俺の母親を殺しておいても、さも当然のように振舞っている紅軌を見て、俺はその瞬間何かが切れた。

『うわぁぁぁぁぁぁ！！』

悲鳴にも聞こえる声を上げながら拳を持ち上げ、紅軌へと殴りかかった。

だが、その拳はあっけないほど簡単に紅軌によって止められた。

「おいおい、こいつはお前を『見捨てた』奴だぞ。殺されたって当然だろ。なんでそんな奴が殺されただけで混乱しているんだよお前。」

『確かにお前の言ったことは事実だよっ！！母さんは俺を見捨てたさ！！だからって！！なんで殺したりしたんだよぉ！！！』

目から涙を流しながら紅軌へと蹴りを放つ。

おそらく今の俺が出せる精一杯の威力とスピードを誇る蹴りであったが、『今』を奪われてしまっては、避けるのは容易。

『俺の今』を奪われ、気付いたら俺の後ろへと紅軌は回り込んでいた。

「ん？そりゃぁ・・・・・

なんとなく？」

紅軌のその言葉によって、俺の理性は完全に沈められた。

『・・・殺す。』

「あぁ？」

聞こえなかったのか、紅軌が訊きなおした。

『殺すっていってんだよ下種（ゲス）やろぉぉぉぉぉ！！！！！』

「いいねぇその表情。ぞくぞくする！！もっと俺を楽しませろよぉ！！！！」

そして、殺し合（たたかい）いが始まった。

☆★☆★☆★

『がぁっ！！』

俺はパンチを紅軌へと放つ。

「・・・ハッ、おそいおそいおそいぃ！！」

それを紅軌はいともたやすく避ける。

先ほどから、それの繰り返しであった。

ダメージはどちらも喰らっているが、あきらかに俺の方が多い。

そこで俺はある事を思いついた。

『・・・チッ、それじゃぁ・・・』

俺は先ほどと同じくパンチを紅軌へと放つ。

狙いは、顔面。

「・・・・」

紅軌が避ける動作をしようとした瞬間、俺は、

『止まれ』

「うおっ・・・がぁっ！！」

『絶対言語』を持って止まることを強制し、拳を深く深く紅軌の顔面へとめり込ませた。

俺のパンチをくらい、紅軌が吹っ飛ぶ。

「・・・ハ！それがお前の異常（アブノーマル）ねぇ！問答無用で相手を従わせる能力ねぇ！いいじゃねぇか！！」

『・・・ッ！』

紅軌の戦いを楽しむ態度に、俺は頭に血が上る。

「いいじゃない！もっともっとだぁ！！」

『・・・もうお前・・・』

俺は覚悟を決めた。

こいつを殺す。

なに、人とは容易く死ぬんだぜ？ましてや俺の『絶対言語』を使えばな。

『死ｎ「おらぁぁぁぁ！！」がっ！！』

死ね、とつぶやこうとした俺であったが、紅軌の拳によって阻められ、つぶやくことができなかった。

「・・・どうやら油断していると俺が殺されるんでなぁ！・・・・決めさせてもらう。」

紅軌は鎌を呼び出した。

やべぇ、頭がふらついてきた・・・・

「・・・じゃぁな。」

そして紅軌はその鎌をーーーーー

☆
★
☆
★
☆
★

「・・・・・」

目の前には、倒れて意識を失った翼斗。

その前には、鎌を落として呆然と立ち尽くしている紅軌がいた。

その鎌は、翼斗の体には傷一つつけてはいない。

・・・

最後、紅軌はわざと外したのだ。

そして代わりに、腹へと一番きつい一撃。それによって翼斗は意識を失った。

「・・・行くか。」

紅軌は落ちた鎌を拾い、歩きだす。

居間を出るときに一度だけ翼斗の方を振り返って、何やら悲しそうな顔をして居間をあとにした。

その紅軌の目からは、一粒の雫が流れ落ちていたことを、翼斗は知

らない。

その雫は、何故(なにゆえ)にーーーーーーーー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8683r/

箱庭の異過者

2012年1月12日20時56分発行